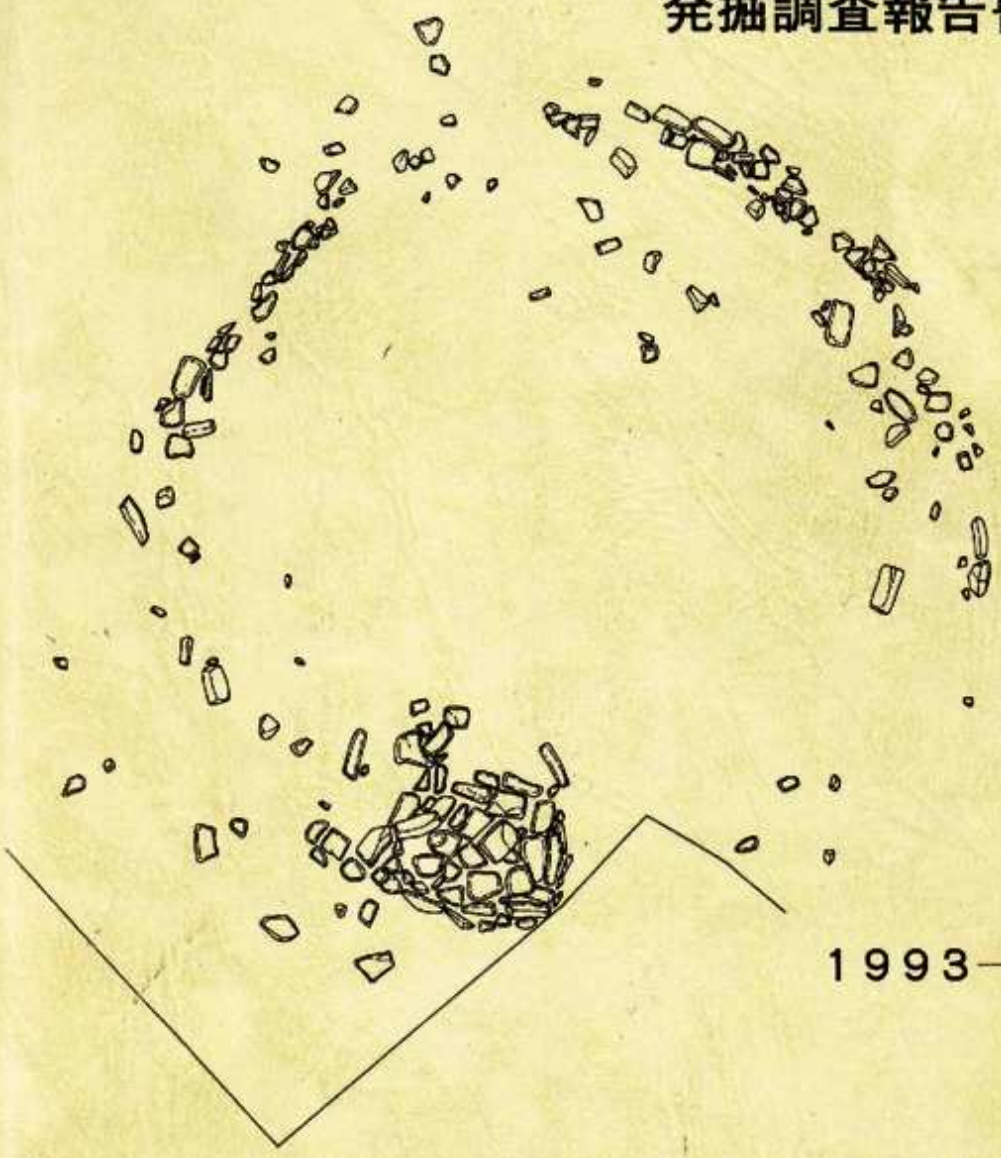
鹿角市文化財調査資料45

特別史跡

大湯環状列石

発掘調査報告書(9)



1993−3

秋田県鹿角市教育委員会

序

特別史跡大湯環状列石は我国を代表する縄文時代の遺跡であり、市民が誇れる文化遺産であります。

鹿角市教育委員会はこの貴重な文化遺産を保存し、正しく後世に継承していくために、その資料収集を目的に昭和59年より列石周辺の発掘調査を継続してまいりました。

この間、平成２年３月には周辺遺跡の大部分が特別史跡に追加指定され、３年からは追加指定地の公有化を進めております。また、平成４年３月には、「大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめるに至り、史跡整備事業を進めるための前提条件を整えつつあります。

このような状況のもと、本年度からは史跡整備のための具体的な資料の収集を目的に調査を継続することとなりました。

本年度は整備の急がれます万座環状列石北側近接地及び竪穴住居群分布予想域を対象地に調査を進めてまいりました。

調査の結果、環状配石遺構や直線状列石等、特異な遺構が検出され、多量の遺物が得られるとともに、万座環状列石北側の遺構、遺物の分布状況を明らかにすることができました。

本書は、これらの調査結果をまとめたものであります。特別史跡大湯環状列石の環境整備ばかりでなく、他地域の史跡整備の基礎資料として、また学術研究の資料として活用いただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に際し、ご指導ご協力いただきました文化庁並びに秋田県教育委員会、関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後の調査、環境整備事業につきましてもご協力を賜わりたくよろしくお願い申し上げます。

平成５年３月

鹿角市教育委員会
教育長　浅　利　　忠

例　　言

1．本報告書は、平成４年度に国・県の補助を得て実施した特別史跡大湯環状列石第９次発掘調査の報告書である。なお、同調査は史跡の環境整備計画策定のための基礎資料収集を目的に実施されたものである。

2．本調査の概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。

3．本報告書の執筆は、調査員・調査補助員が分担し、文責は各々の文末に記した。

4．資料の鑑定並びに同定等は下記のとおり依頼した。

胎土分析	奈良教育大学　教授	三　辻　利　一
土器補修材分析	岩手県立博物館　専門調査員	赤　沼　英　男
石器類石質鑑定	秋田県立十和田高等学校　教諭	鎌　田　健　一

5．土層、土器などの色調の記載には「新版・標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

6．遺物の実測・採拓・トレース等の一連の整理作業は、調査員、調査補助員が行なった。

7．本報告書に収載した図版のスケールについては、各々に示した。なお、写真図版は任意の縮尺とした。

8．本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。

9．図版で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＴ……竪穴遺構　　ＳＸ(Ｓ)……配石遺構、集石遺構

ＳＸ(Ｏ)……石囲炉　　ＳＫ……土壙　　ＳＫ(Ｔ)……Ｔピット

……遺構確認面以下の土層　　……焼土

10．発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。記して感動の意を表します。（敬称略、順不同）

加藤允彦、岡村道雄、西田健彦（文化庁記念物課）、藤本英夫（北道道文化財研究所）
佐原　眞、牛川喜幸（奈良国立文化財研究所）、中野益男（帯広畜産大学）
村越　潔（弘前大学）、小林達雄（国学院大学）、阿部義平（国立歴史民俗博物館）
富樫泰時、小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）、船木義勝（秋田県立博物館）
遠藤正夫（青森市教育委員会）、成田滋彦（青森県埋蔵文化財調査センター）
本間　　宏（福島県文化センター）、佐藤　樹（秋田県文化財保護管理指導員）
板橋範芳（大館市教育委員会）

本　文　目　次

序

例　言

本文目次

図版・ＰＬ・表目次

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地 …… 1

2．遺跡の層序 …… 2

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査に至る経過 …… 6

2．調査要項 …… 7

3．調査の方法 …… 8

4．調査の経過 …… 8

第Ⅲ章　F_3区の検出遺構と出土遺物

1．配石遺構 …… 11

2．集石遺構 …… 14

3．竪穴遺構 …… 14

4．土壙 …… 14

5．ピット …… 21

6．遺構外出土遺物

(1)　土器 …… 22

(2)　石器 …… 26

(3)　土製品 …… 36

(4)　石製品 …… 41

第Ⅳ章　D_5区の検出遺構と出土遺物

1．配石遺構

(1)　環状配石遺構 …… 43

(2)　直線状列石 …… 47

(3)　その他の配石遺構 …… 48

2．石囲炉 …… 49

3．土壙

(1)　Ｔピット …… 50

(2)　土壙 …… 51

4．竪穴住居跡 …… 52

5．遺構外出土遺物

(1)　土器 …… 56

(2)　石器 …… 64

(3)　土製品 …… 80

(4)　石製品 …… 81

第Ⅴ章　自然科学的調査

1．大湯環状列石第９次調査
出土縄文土器および
粘土の蛍光Ｘ線分析 …… 90

2．大湯環状列石出土土器
付着黒色物質の分析 …… 93

第Ⅵ章　調査のまとめ …… 95

図版・PL・表目次

図 版 目 次

第1図　遺跡の位置……1
第2図　F_3区基本層序図……3
第3図　D_5区基本層序図……4
第4図　調査区と周辺の地形……5
第5図　遺構配置図……10
第6図　第901～904号配石遺構実測図……12
第7図　第911号配石遺構実測図……13
第8図　第905号集石遺構実測図……13
第9図　第901号竪穴遺構実測図……15
第10図　第901号竪穴遺構出土遺物(1)……16
第11図　第901号竪穴遺構出土遺物(2)……17
第12図　第901～907号土壙実測図……18
第13図　第905～907号土壙出土遺物(1)……19
第14図　第905～907号土壙出土遺物……20
第15図　ピット実測図……21
第16図　完形・復元土器分布密度図……22
第17図　土器片分布密度図……22
第18図　F_3区遺構外出土土器実測図……25
第19図　石器分布密度図……26
第20図　F_3区遺構外出土石器実測図(1)……27
第21図　F_3区遺構外出土石器実測図(2)……28
第22図　F_3区遺構外出土石器実測図(3)……30
第23図　F_3区遺構外出土石器実測図(4)……31
第24図　F_3区遺構外出土石器実測図(5)……33
第25図　F_3区遺構外出土石器実測図(6)……34
第26図　F_3区遺構外出土石器実測図(7)……35
第27図　土器片利用土製品分布密度図……37
第28図　F_3区遺構外出土土製品実測図(1)……38
第29図　F_3区遺構外出土土製品実測図(2)……39
第30図　F_3区遺構外出土土製品実測図(3)……40
第31図　F_3区遺構外出土石製品実測図……42
第32図　第909号環状配石遺構周辺出土遺物……44
第33図　第909号環状配石遺構実測図……45
第34図　第910号環状配石遺構実測図……46
第35図　第910号環状配石遺構周辺出土遺物……47
第36図　第907号直線状列石実測図……48
第37図　第907号直線状列石周辺出土遺物……48
第38図　第906号配石遺構実測図……49
第39図　第908号石囲炉実測図……49
第40図　第908号石囲炉出土遺物……50
第41図　第908号Tピット実測図……50
第42図　第909号土壙実測図……51
第43図　第909号土壙出土遺物……51
第44図　第910号土壙実測図……52
第45図　第910号土壙出土遺物(1)……53
第46図　第910号土壙出土遺物(2)……54
第47図　第901号竪穴住居跡実測図……55
第48図　D_5区遺構外出土土器実測図(1)……61
第49図　D_5区遺構外出土土器実測図(2)……62
第50図　D_5区遺構外出土土器実測図(3)……63
第51図　D_5区遺構外出土石器実測図(1)……68
第52図　D_5区遺構外出土石器実測図(2)……69
第53図　D_5区遺構外出土石器実測図(3)……70
第54図　D_5区遺構外出土石器実測図(4)……71
第55図　D_5区遺構外出土石器実測図(5)……72
第56図　D_5区遺構外出土石器実測図(6)……73
第57図　D_5区遺構外出土石器実測図(7)……74
第58図　D_5区遺構外出土石器実測図(8)……75
第59図　D_5区遺構外出土石器実測図(9)……76
第60図　D_5区遺構外出土石器実測図(10)……77
第61図　D_5区遺構外出土石器実測図(11)……78
第62図　D_5区遺構外出土石器実測図(12)……79
第63図　D_5区遺構外出土土製品実測図(1)……82
第64図　D_5区遺構外出土土製品実測図(2)……83
第65図　D_5区遺構外出土土製品実測図(3)……84
第66図　D_5区遺構外出土土製品実測図(4)……85
第67図　D_5区遺構外出土石製品実測図(1)……87
第68図　D_5区遺構外出土石製品実測図(2)……88
第69図　D_5区遺構外出土石製品実測図(3)……89

第70図　分析資料採取地点……90
第71図　縄子土器及び粘土のクラスター分析…91
第72図　縄子土器及び粘土のRb—Sr分布図 …92
第73図　黒色物質のX線粉末回析図形……94
第74図　黒色物質の赤外線吸収スペクトル……94
第75図　黒色物質のメタノールークロロホルム可溶成分の赤外線吸収スペクトル…94

P L 目 次

PL 1　特別史跡大湯環状列石全景……99
PL 2　調査区全景…… 100
PL 3　第901～903号配石遺構…… 101
PL 4　第904、911号配石遺構、905号集石遺構…… 102
PL 5　第901号竪穴遺構、906、907号土壙…… 103
PL 6　第901～903号土壙…… 104
PL 7　第904～905号土壙、901号ピット…… 105
PL 8　F_3区遺物出土状況…… 106
PL 9　F_3区遺構内出土遺物…… 107
PL 10　F_3区遺構外出土土器(1)…… 108
PL 11　F_3区遺構外出土土器(2)…… 109
PL 12　F_3区遺構外出土石器(1)…… 110
PL 13　F_3区遺構外出土石器(2)…… 111
PL 14　F_3区遺構外出土石器(3)…… 112
PL 15　F_3区遺構外出土石器(4)…… 113
PL 16　F_3区遺構外出土石器(5)…… 114
PL 17　F_3区遺構外出土石器(6)…… 115
PL 18　F_3区遺構外出土土製品(1)…… 116
PL 19　F_3区遺構外出土土製品(2)…… 117
PL 20　F_3区遺構外出土石製品…… 118
PL 21　第909号環状配石遺構 …… 119
PL 22　第910号状配石遺構 …… 120
PL 23　第908号Tピット、909号土壙…… 121
PL 24　第910号土壙、901号竪穴住居跡…… 122
PL 25　D_5区遺物出土状況…… 123
PL 26　D_5区遺構内出土遺物…… 124
PL 27　D_5区遺構外出土土器(1)…… 125
PL 28　D_5区遺構外出土土器(2)…… 126
PL 29　D_5区遺構外出土土器(3)…… 127
PL 30　D_5区遺構外出土土器(4)…… 128
PL 31　D_5区遺構外出土土器(5)…… 129
PL 32　D_5区遺構外出土土器(6)…… 130
PL 33　D_5区遺構外出土土器(7)…… 131
PL 34　D_5区遺構外出土土器(8)…… 132
PL 35　D_5区遺構外出土土器(9)…… 133
PL 36　D_5区遺構外出土土器(10)…… 134
PL 37　D_5区遺構外出土石器(1)…… 135
PL 38　D_5区遺構外出土石器(2)…… 136
PL 39　D_5区遺構外出土石器(3)…… 137
PL 40　D_5区遺構外出土石器(4)…… 138
PL 41　D_5区遺構外出土石器(5)…… 139
PL 42　D_5区遺構外出土石器(6)…… 140
PL 43　D_5区遺構外出土石器(7)…… 141
PL 44　D_5区遺構外出土石器(8)…… 142
PL 45　D_5区遺構外出土石器(9)…… 143
PL 46　D_5区遺構外出土土製品(1)…… 144
PL 47　D_5区遺構外出土土製品(2)…… 145
PL 48　D_5区遺構外出土土製品(3)…… 146
PL 49　D_5区遺構外出土土製品(4)…… 147
PL 50　D_5区遺構外出土石製品(1)…… 148
PL 51　D_5区遺構外出土石製品(2)…… 149

表 目 次

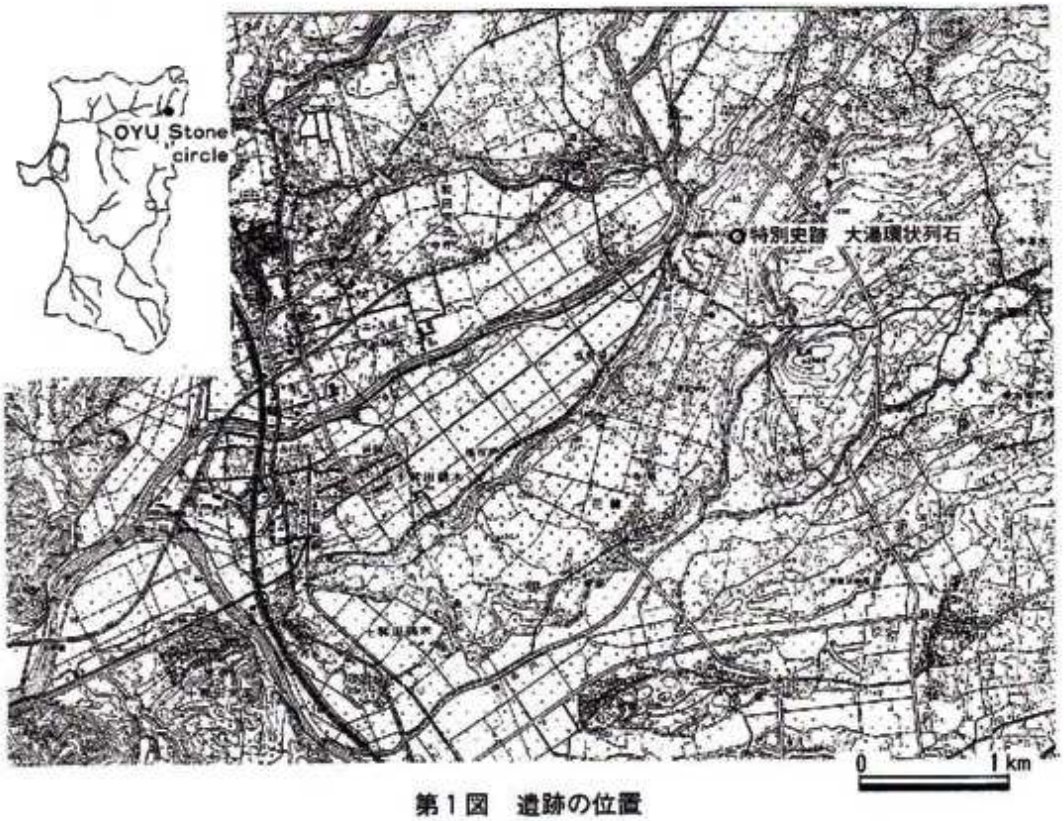
第1表　分析資料一覧表……90
第2表　分析値……91

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地

特別史跡「大湯環状列石」は、秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座、字一本木後ロに所在する。同遺跡の載る台地は、大湯川と豊真木沢川の浸食作成によって形成された南西方向へ延びる舌状台地で、その長さは5.6km、幅は0.5～1.0kmで、標高は150～190mである。遺跡は、この通称「風張台地」のほぼ中央、一本木、寺坂両集落の中間に位置し、ＪＲ花輪線十和田南駅の北東3.5km、東北縦貫自動車道十和田Ｉ・Ｃの北東3.6kmの地点にあたる。

本年度の調査区の一つであるF_3区は、万座環状列石の北北西80～130mの地区で、平成２年度調査F_2区の南南西側隣接地である。またD_5区は同列石の北24～115mの地区で、その北側はF_3区に隣接している。両調査区とも、現地表面はほぼ平坦で、標高は180～181mである。なお、F_3区は、現在普通畑として利用されている。また、D_5区は平成３年度に公有化されているが、以前は林檎畑として利用されていたところである。



第１図　遺跡の位置

2．遺跡の層序

第4～7次調査地に近接しているため、基本層序については、これらの調査地の分層、細分基準と同一のものとした。

第Ⅰ層は大湯浮石層までの堆積層で、全て耕作土である。

第Ⅱ層の大湯浮石層は、D_5区ではほぼ全域で観察されるのに対し、F_3区では耕作により攪乱され、発掘区縁（畑境）にのみ残存している。同層は粒子の粗細、色調、浮石の含有量から3層に細分されるが、Ⅱa層はにぶい黄褐色のシルト質の火山灰層、Ⅱb層は粒径1～20mmの明黄褐色浮石層、Ⅱc層は黒色土中に浮石粒を多量混入している層である。本層上面において歴史時代の竪穴住居跡が確認されている。

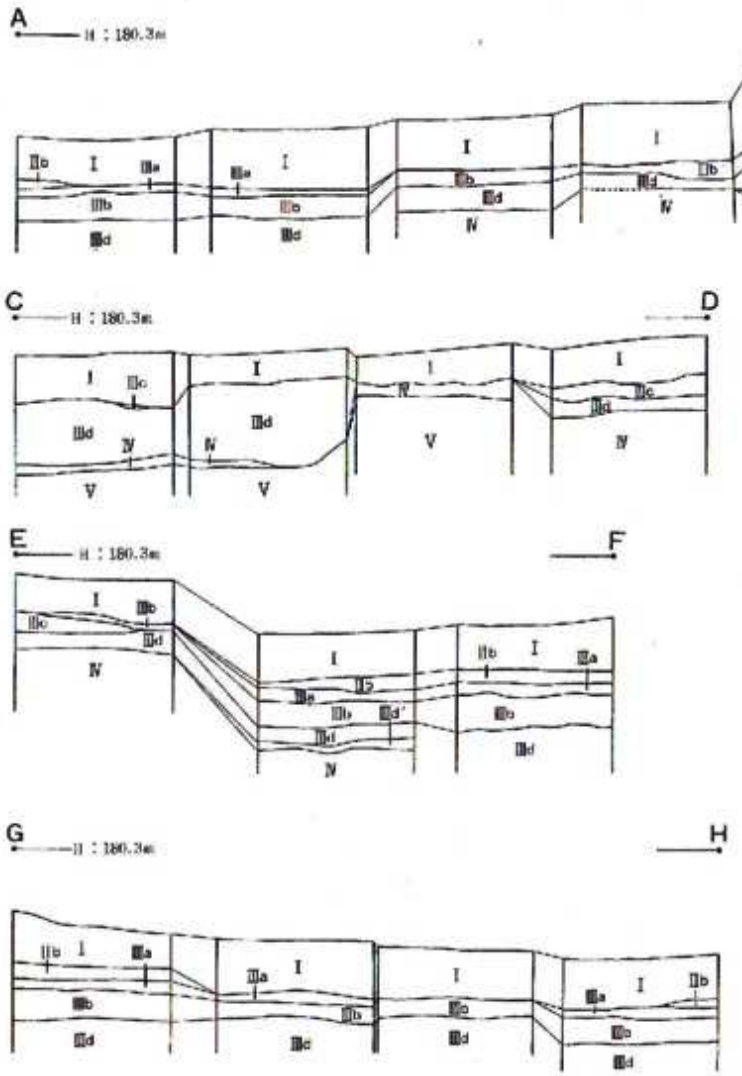
第Ⅲ層は大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土層までの層で、色調、粗密度、混入物の含有量等から5層（Ⅲa～Ⅲd′）に細分される。Ⅲa層は黒色土でほとんど混入物を含まず、他層に比べて非常に堅くしまっている。Ⅲb層も黒色土で混入物をほとんど含まないが、粗密度からⅢa層とは識別される。Ⅲc層は暗褐色土で、F_3区東端、D_5区東端部にのみ観察される。Ⅲd層、Ⅲd′層は黒褐色土で、下位火山灰を少量混入している。Ⅲd′層は小沢部分等地山の低い部分にみられる。

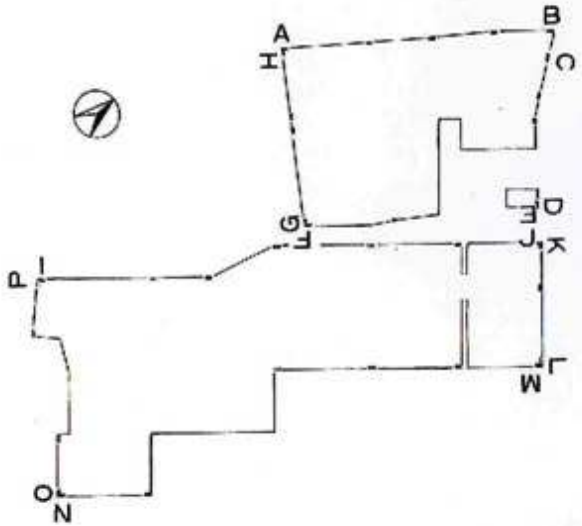
Ⅲ層は縄文時代の遺物包含層で、Ⅲb～Ⅲd層上位からの出土が多い。なお配石遺構等はⅡ～Ⅲa層で石頭を現わし、Ⅲb～Ⅲd層上位でその全容が確認されている。また縄文時代の竪穴遺構、土壙等はⅢd層上面～Ⅳ層上面で確認されている。

第Ⅳ層は地山（下位火山灰）直上の層で、暗褐色土である。若干粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は中ヶ野火山灰と考えられる黄褐色の火山灰層である。本報告書では本層をⅤ層以外に下位火山灰あるいは地山と表現している。F_3区、D_5区とも現地表面ではほとんど平坦であるが、地山面は起伏に富んでいる。なお、Tピット等の掘り込みの深い遺構は、本層下の灰白色火山灰層（鳥越火山灰層）をも掘り込んでいる。

（秋元信夫）



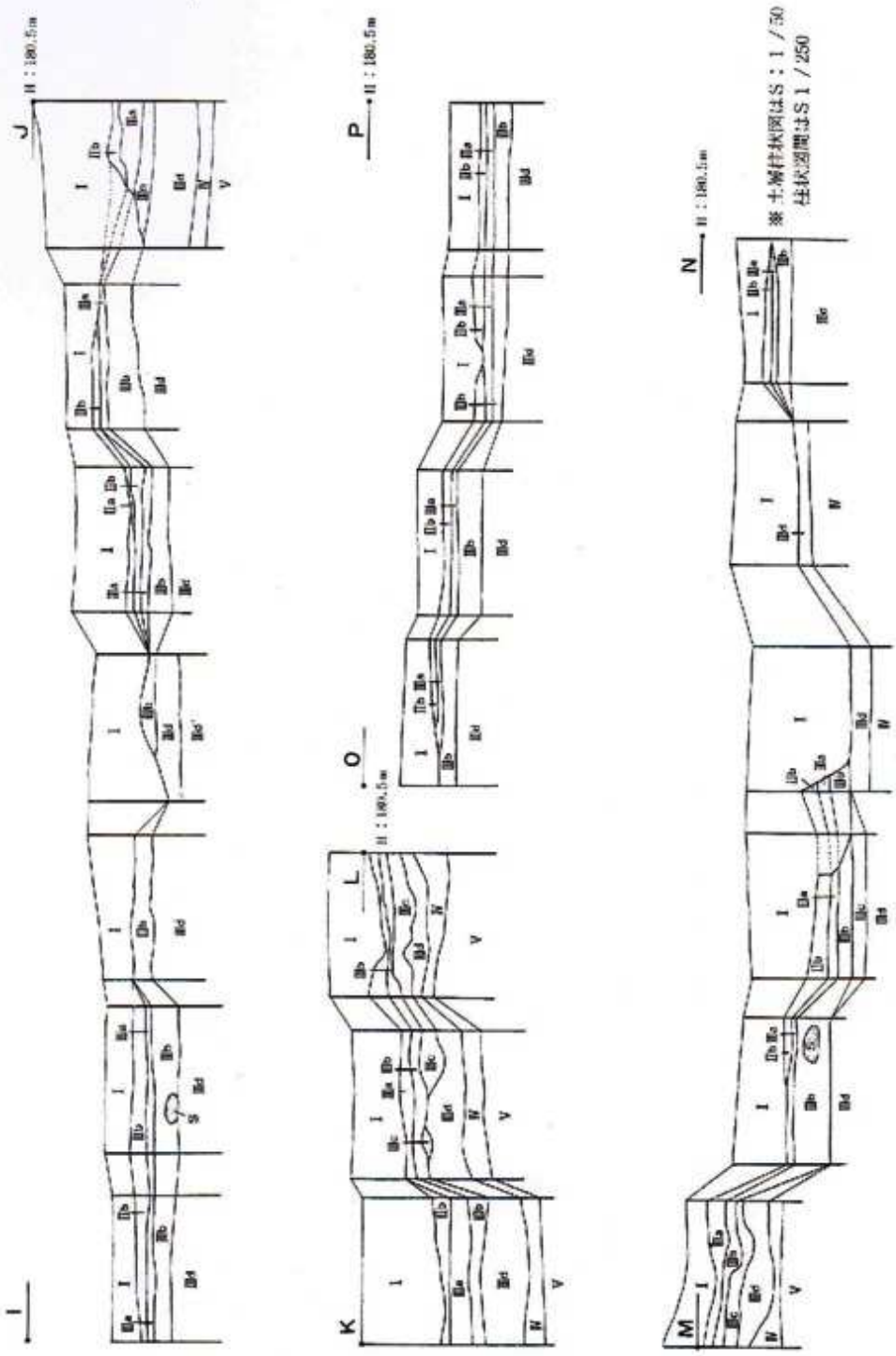


F_a区、D_s区基本層序

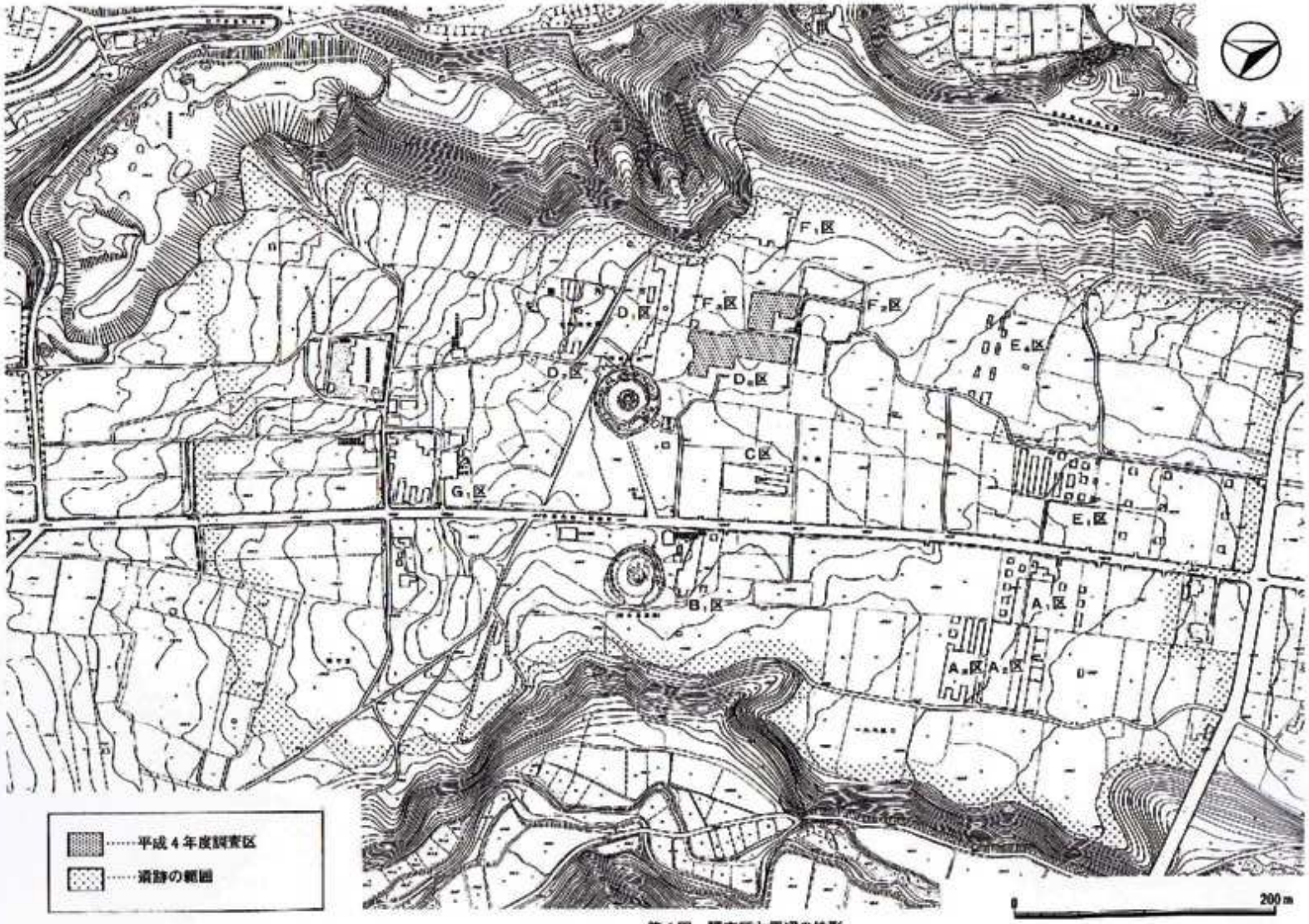
Ⅰ	層	黒褐色土（10YR2/2）耕作土	
Ⅱa	層	にぶい黄褐色火山灰（10YR5/4）シルト質火山灰、堅くしまる	大湯浮石層
Ⅱb	層	明黄褐色浮石（10YR6/6）径0.1～2.0cmの浮石粒	
Ⅱc	層	黒色土　（10YR2/1）浮石粒を多量混入	
Ⅲa	層	黒色土　（10YR1.7/1）堅くしまる	
Ⅲb	層	黒色土　（7.5YR2/1）Ⅲa層よりしまりが弱い	
Ⅲc	層	暗褐色土（7.5YR2/2）	
Ⅲd	層	黒褐色土（10YR2/2）下位火山灰を少量混入	
Ⅲd'	層	黒褐色土（10YR2/3）下位火山灰を少量混入	
Ⅳ	層	暗褐色土（10YR3/3）下位火山灰、ブロックを多量混入	
Ⅴ	層	黄褐色火山灰（10YR5/8）	

※土層柱状図はS：1／50
柱状図はS：1／250

第2図　F_a区基本層序図



第3図　D_s 区基本層序図



第４図　調査区と周辺の地形

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査に至る経過

昭和６年、中通地区の耕地整理中に発見された大湯環状列石は、17年に神代文化研究所、21年に秋田県・朝日新聞社、26、27年には文化財保護委員会により発掘調査が行なわれている。

このような調査を経てこの遺跡の重要性が判明するにつれ、遺跡の保存・保護も大きな問題となった。昭和25年６月30日には秋田県教育委員会により史跡に仮指定され、翌年12月26日には国指定史跡、さらに31年７月19日付で国指定特別史跡に指定されている。

昭和40年代になると史跡周辺の土木工事が多くなり、農業の機械化は、周辺に存在が予想された関連遺跡の存続を脅かしつつあった。

そのため、大湯環状列石と関連ある遺跡（大湯環状列石周辺遺跡）の範囲確認を目的に、秋田県教育委員会、鹿角市教育委員会が、昭和48年から51年まで分布調査を実施し、周辺遺跡の広がりが列石から北東300m、南西180mに及ぶことを確認した。

この調査結果をもとに鹿角市は、昭和51、52年に周辺遺跡をも含めた「特別史跡大湯環状列石保存管理計画書」を作成、さらに59年からは同計画書を具体化するための資料収集を目的に発掘調査を継続してきた。また、平成元年には「大湯環状列石環境整備検討委員会」を設置し、整備の基本方針について協議を重ね、４年３月に「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめるに至った。

この間、平成２年３月８日には周辺遺跡のほとんどが追加指定され、史跡の範囲は16,168㎡から236,697.81㎡と拡大している。また、３年度からは追加指定地の公有化事業が開始されている。

このように、環境整備事業を進めるための前提条件が整いつつある中で、発掘調査の必要性が以前にも増して強くなった。昭和59年から継続されていた調査は、主に分布調査によりその存在が知られていた各地区の様々な遺構の形態、性格、構築時期及び環状列石との関連を解明しようとするものであったが、その目的はほぼ平成３年度で達成できている。

このようなことから、文化庁、秋田県教育委員会の指導を受け、本年度からは史跡の環境整備事業を進めるための具体的な資料の収集を目的に調査が継続されることとなった。

2．調査要項

1．遺　跡　名　　特別史跡　大湯環状列石

2．調　査　地　　F_3区…鹿角市十和田大湯字万座20

　　D_5区…鹿角市十和田大湯字万座21

3．発掘面積　　2,736㎡（F_3区…958㎡、D_5区…1,778㎡）

4．調査期間

　発掘調査　　平成4年6月22日～11月25日

　整理・報告書作成　　平成4年11月26日～平成5年3月31日

5．調査主体者　　鹿角市教育委員会

6．調査担当者　　鹿角市教育委員会　生涯学習課　（主任　秋元信夫）

7．調査参加者

　調査指導員　　熊谷太郎（秋田県教育庁文化課　学芸主事）

　調　査　員　　鎌田健一（秋田県立十和田高等学校　教諭）

　　成田典彦（鹿角市立花輪第一中学校　教諭）

　　三ヶ田俊明（鹿角市立中滝小学校　教諭）

　　藤井安正（鹿角市教育委員会　主事）

　調査補助員　　花海義人、黒川　智、柴田絵理

　作　業　員　　大里チヤ、大森静子、黒沢珠子、金沢栄子、金沢ユリ、佐藤良子

　　千葉ヨリ、兎沢サツ子、苗代沢ノブ、宮沢トミエ、柳沢恵美子

　　松宮カチ、宮沢キヨ、宮沢カヨ、柳沢アエ、柳沢勝江、柳沢ヤス

8．生涯学習課

　課　　長　　川又節三（文化史跡整備室長兼務）

　課長補佐　　小笠原　昇

　主　　任　　秋元信夫（庶務・調査担当）

　　兎澤精子（庶務担当）

　主　　事　　藤井安正（調査担当）

　臨時職員　　古川孝政（庶務）

9．協力機関・協力者

　文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、奈良教育大学

　岩手県立博物館、柳沢長之助（土地所有者）、土館　昇

3．調査の方法

本年度の調査の主目的は、万座環状列石北側周辺の遺構、遺物の分布状況を確認することであった。万座環状列石の北側台地縁辺部に竪穴住居群が分布するであろうことは従来から予想されていたが、第6～7次調査（F_1区、F_2区）において、その西端及び東端が確認されている。このため、この竪穴住居群の南東側への広がりを確認するため、F_2区の南西側隣接地、万座環状列石の北北西80～130mに一つの調査区を設定、これをF_3区とした。また、この竪穴住居群と環状列石との関連を把握するため、F_3区南東側隣接地にもう一つの調査区、D_5区を設定した。

グリッドは第1次調査以来のN－49°－Wを基準とする5m単位のグリッドとし、万座環状列石内基準杭から延長した。杭番号はアルファベット（北西～南東方向）と算用数字（北東～南西方向）で付し、西隅の杭を以ってグリッドを呼称した。

作業の効率化を図るため、試掘調査結果に基づき、Ⅰ層はバックホーにより除去した。なお、Ⅱ層以下については手掘りに依る分層発掘とし、できるだけ上層での遺構確認に努めた。また、遺跡、遺構の保存のため、上部遺構が確認された層で掘り下げを中断した。このため、調査層面はⅢa～Ⅴ層と均一ではない。

遺構の番号については901番から種類別、発見順に付した。ただし、土壙及び配石関係については遺構確認時での識別が困難であるため、それぞれ一連の番号で順次付した。

遺構精査は、竪穴住居跡、竪穴遺構については四分割法、配石遺構、土壙等については二分割法を原則とした。遺構等の実測については簡易遣り方測量を用い、礫群は1/50、その他は1/20の縮尺で図化した。

遺構外の出土遺物については、完形あるいは復元可能土器等に関しては出土レベル、出土状況を図化、その他については各グリッド、各層ごとに一括して取り上げた。なお、遺構内の出土遺物については出土地点を記録するように努めた。

写真撮影には、2台のカメラを使用し、調査各段階の状況を白黒、リバーサルフィルムに収めた。

4．調査の経過

特別史跡大湯環状列石の第9次発掘調査は6月22日から開始し、全調査を終了したのは11月25日であった。以下、調査日誌に基づいて調査経過の概要を述べる。

6月22日、作業員への作業説明の後、グリッド設定とバックホー導入に伴う試掘調査に着手した。また、24日からはF_3区の土置場の確保のため、同区北東部の粗掘りを行なった。

6月29日には、F_3区に設定した6本の試掘トレンチ及び北東部の調査を終了し、D_5区の試掘調査に移行した。

7月2日から開始したバックホーによる表土除去は同月4日にF_3区を終了した。このため、5日より同区Ⅱ層以下の手掘りに着手した。F_3区のⅢb層までの粗掘りは8月25日までに終了、同日までに配石遺構5基、集石遺構1基、土壙5基、ピット1基が検出された。また、9月7日にはF_3区西端において竪穴住居跡らしい円形プランの落ち込みを確認したが、精査の結果、炉跡や柱穴が確認できず、一時喜びに終った。F_3区の調査は遺構及びその周辺を除いて、遺物のなくなるⅢd層中位～Ⅳ層まで実施、10月16日には配石下の調査を残し、ほぼ終了した。

D_5区の粗掘りは、F_3区の調査と併行し、8月10日より開始、20日には北東端部、9月28日までには中央部105ラインまでを終了している。10月8日からはD_5区中央から南西側の粗掘りに移行したが、多量の遺物の出土で、調査計画を大幅に狂わせることとなった。

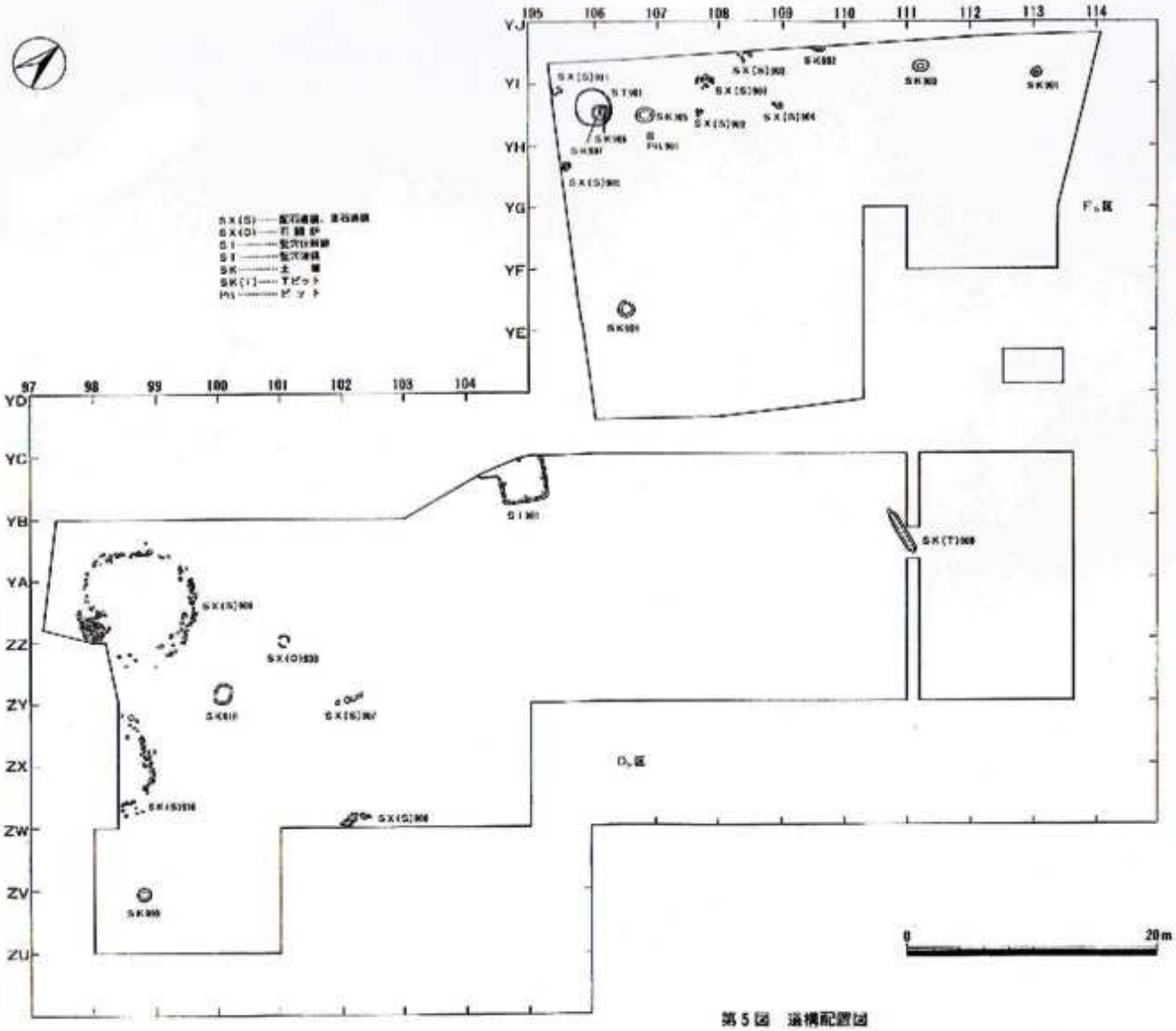
11月3日までにD_5区南部より、第906号配石遺構、第907号直線状列石、第908号石囲炉が検出され、同月4日にはD_5区西端部より第909号環状配石遺構、9日には南西端部より第910号環状配石遺構が確認された。

11月12日には、F_3区の配石下の調査を実施し、同日F_3区の全ての調査を終了した。

11月14日、現地説明会を開催し、県内外より100名余の参加者があった。

11月17日までに、環状配石遺構、直線状列石、配石遺構、石囲炉の精査、記録を終え、24日に確認された2基の土壙も25日には精査を完了、同日全体写真を撮影し、全ての調査を終了した。当初予定を1ヶ月余超過した調査であった。

（秋元信夫）


SX(S)……配石遺構、溝状遺構
SX(O)……石組炉
SI……竪穴住居跡
SI……竪穴遺構
SK……土　壙
SK(T)……Tピット
Pit……ピット
F区
D区
0
20m

第5図　遺構配置図

第Ⅲ章　F_3区の検出遺構と出土遺物

F_3区において検出された遺構は、縄文時代の配石遺構5基、集石遺構1基、竪穴遺構1基、土壙6基、ピット1個、時期不明の土壙1基である。また、遺構内・外より完形あるいは復元土器21個体、縄文土器片ダンボール箱17箱、石器282点、剥片1箱、土製品76点、石製品16点が出土している。

1．配石遺構

F_3区西部からは多量の礫とともに、10～60cm大の自然石が確認された。これらの自然石の大部分は規則的に立て並べたり、配列したものではなく、単独あるいは数個の石が寄り集まっているような状態で検出されている。耕作により本来の位置を変えているのか、ただ石を寄せ集めたものなのかは判断できないが、自然的要因のみで形成されたものとは考えられず、3個以上の石が集合したものを配石遺構として記載することとした。

第901号配石遺構（第6図）

F_3区西部のＹＪ、ＹＩ－107グリッドに位置する。Ⅲb層上位面で配石の一部を確認、Ⅲd層上面で全配石が検出された。160×100cmの範囲に11～44cm大の石13個が集中している。本来、26～44cm大の扁平な石を100×90cmの楕円形に配置したものと考えられる。石材は大部分が石英閃緑玢岩で、他は凝灰岩、安山岩、流紋岩である。

配石下から土壙等の下部遺構は確認されなかった。

配石構築面及び周辺の出土遺物から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

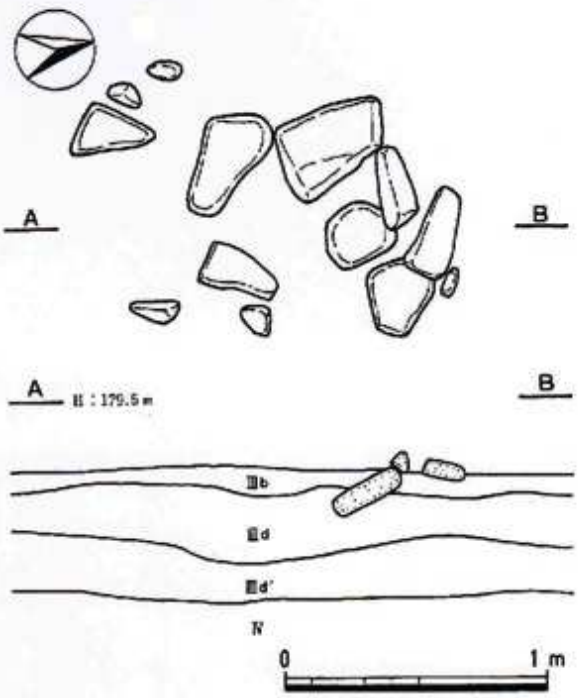
第902号配石遺構（第6図）

F_3区西部のＹＩ－107グリッドに位置し、北西側に901号配石遺構が近接している。Ⅲa層上面で配石の一部を確認、Ⅲb層中位面で全配石が検出された。70×50cmの範囲に10～38cm大の石7個が集中している。長軸を同じくし、立て並べていたものと考えられる。石材は南西端の小礫が安山岩である他は全て石英閃緑玢岩である。なお、配石下から土壙等の下部遺構は確認されなかった。

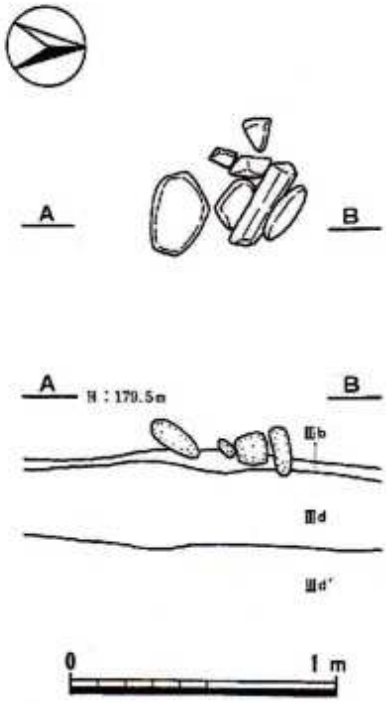
配石構築面及び周辺の出土遺物から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

第903号配石遺構（第6図、26図81、31図1）

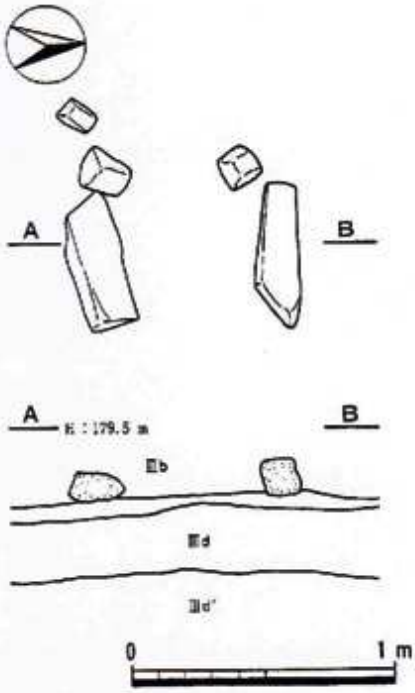
F_3区北西端のＹＪ－108グリッドに位置する。Ⅲb層上面で石頭を現わし、同層中位面で全容が明らかになっている。13～56cm大の石6個よりなるが、50～56cm大の細長い石が50cmの間隔をおいて置かれていることから、方形に配列された配石とも考えられる。これらの石は1個が石英安山岩である他は石英閃緑玢岩である。配石下から土壙等の下部遺構は確認されなかった。



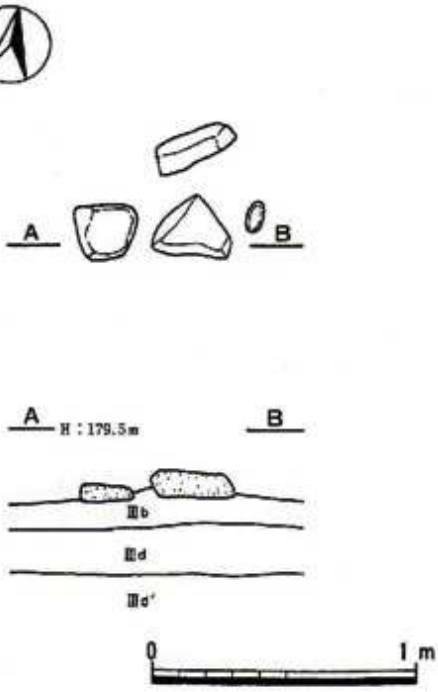
第901号配石遺構



第902号配石遺構



第903号配石遺構



第904号配石遺構

第６図　第901～904号配石遺構実測図

本配石北側に隣接して石刀１点（第31図１）、北東側に隣接して凹石（石皿）１点（第26図81）が出土したが、本遺構に伴うものかは定かでない。

配石構築面及び周辺の出土遺物から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

第904号配石遺構（第６図）

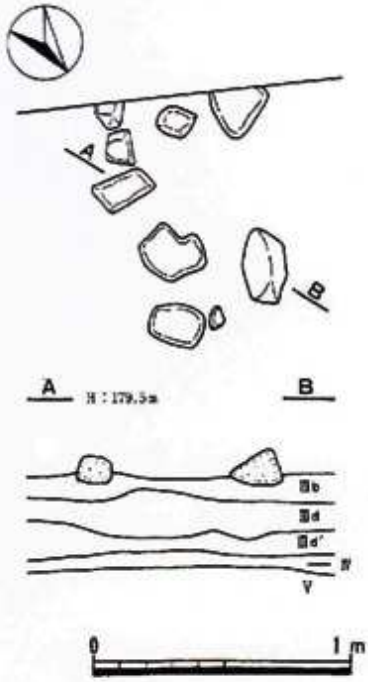
F_3区北東部のＹＪ、ＹＩ－109グリッドに位置する。Ⅲb層上面での確認である。12～32cm大の石４個が52×70cmの範囲に配置されている。これらの石材は石英閃緑玢岩及び火山礫凝灰岩である。本配石下からも下部遺構は確認されていない。

本配石に伴う遺物の出土はないが、配石構築面及び周辺の出土遺物から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

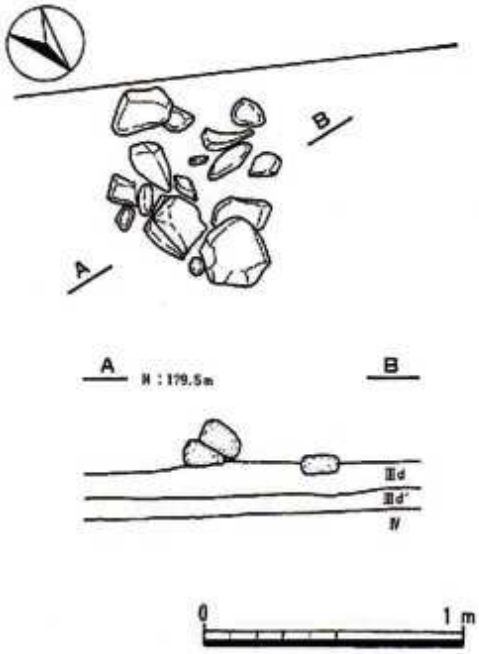
第911号配石遺構（第７図）

F_3区西端部のＹＩ－105グリッドに位置し、東側に第901号竪穴遺構が近接している。Ⅲa層で石頭を現わし、Ⅲb層中位面で全配石が検出されている。調査区域内では９～32cm大の石９個が80×102cmの範囲から確認されているが、南側に若干延びるものと考えられる。配石には石英閃緑玢岩、凝灰岩が使用されている。本配石下からも下部遺構は確認されていない。

配石構築面及び周辺の出土遺物から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。



第７図　第911号配石遺構実測図



第８図　第905号集石遺構実測図

2．集石遺構

第905号集石遺構（第８図）

F_3区南西端のＹＨ－105グリッドに位置する。Ⅲb層で配石の一部が確認され、Ⅲd層上面で全容が明らかとなっている。５～27cm大のやや小さめの石16個が72×90cmの範囲に集石されている。これらの石は全て石英安山岩で、熱変色を受けているものもみられる。集石下から土壙等の下部遺構は確認されていない。また、本遺構に伴う遺物の出土もなかった。

集石構築面及び周辺の出土遺物から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

3．竪穴遺構

第901号竪穴遺構（第９～11図）

F_3区西端部のＹＩ－105～106グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、径３ｍ程の円形の落ち込みを確認、竪穴住居跡として精査したが、炉跡や柱穴が検出されず、竪穴遺構に変更した。

第906、907号土壙と重複し、本遺構が最も新しい。

平面形は不整楕円形で、その規模は長軸3.28ｍ、短軸2.80ｍである。掘り込みの深さは、北東壁15cm、南東壁12cm、北西壁13cmである。なお、本遺構が北東から南東への緩斜面上に構築されているため、南西壁は明確にできなかった。

Ⅴ層を若干掘り込んで底面としている。底面はほぼ平坦であるが、堅く踏み固められた痕跡はなかった。

堆積土は４層に区分でき、自然堆積と考えられる。

本遺構からはミニチュア土器１個体、縄文土器片360点弱、石鏃、石錘、土器片利用土製品各１点、掻器３点の出土があった。これらの出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

4．土壙

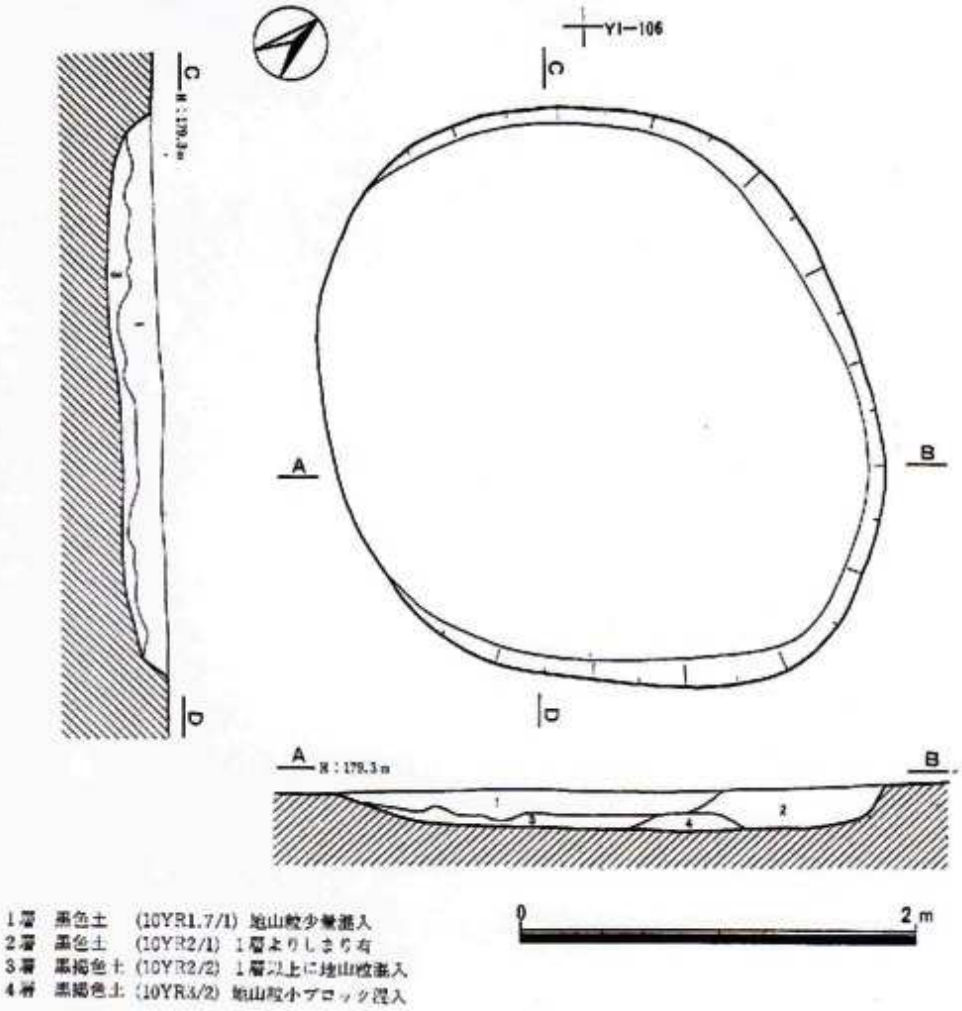
第901号土壙（第12図）

F_3区北端のＹＪ－112～113グリッドに位置する。Ⅲd層上面での確認である。

平面形は円形で、その規模は長軸70cm、短軸64cmである。Ⅲd層からⅤ層を若干掘り込み底面としており、その断面形は凸レンズ状、深さは38cmである。

堆積土は３層に区分でき、自然堆積と考えられる。

本遺構からの遺物の出土はないが、遺構確認面及び周辺の出土遺物から縄文時代後期の構築と考えられる。



第9図　第901号竪穴遺構実測図

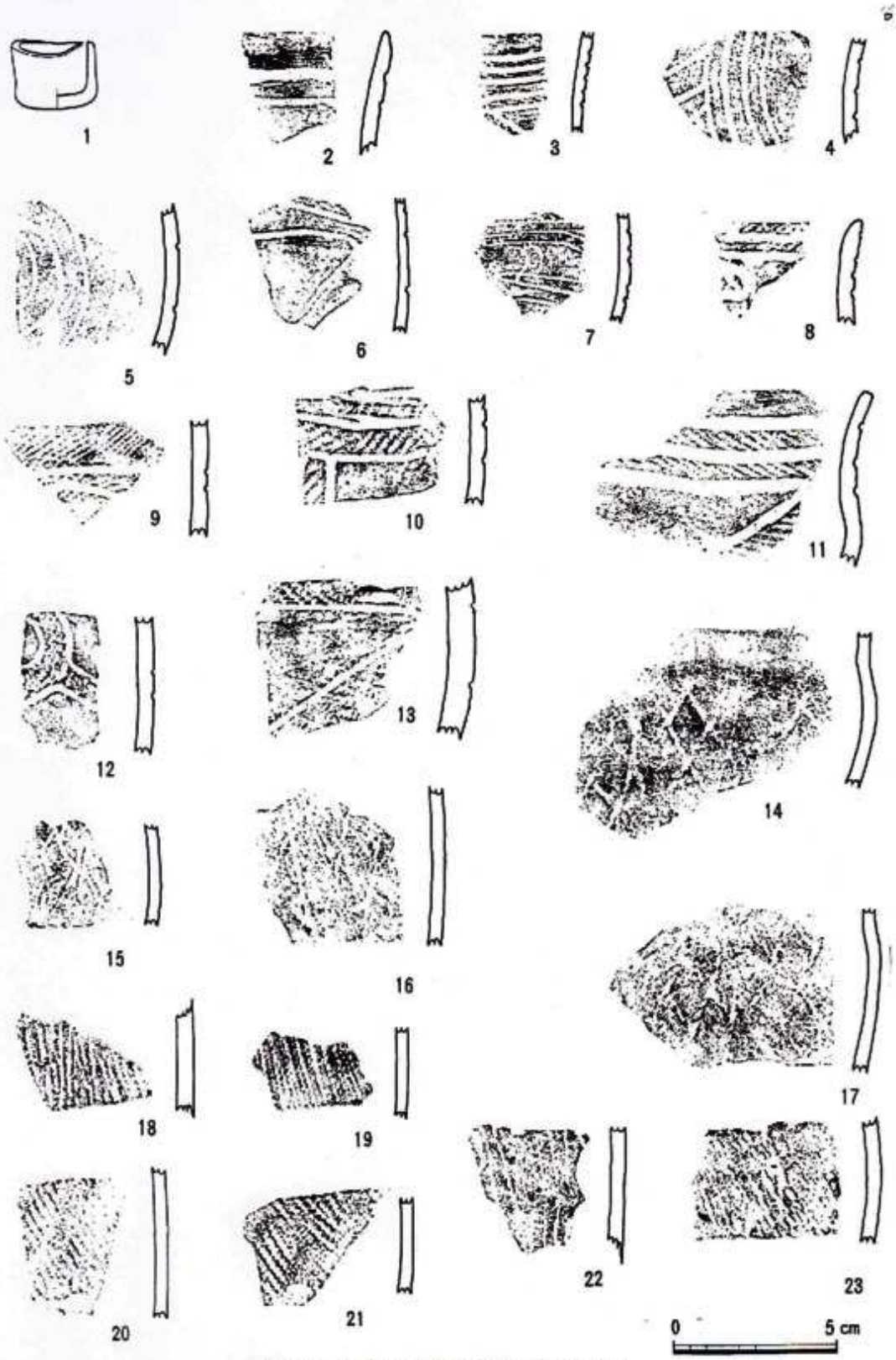
第902号土壙（第12図）

F_a区北西端のＹＪ−109グリッドに位置する。Ⅲd層上面での確認である。

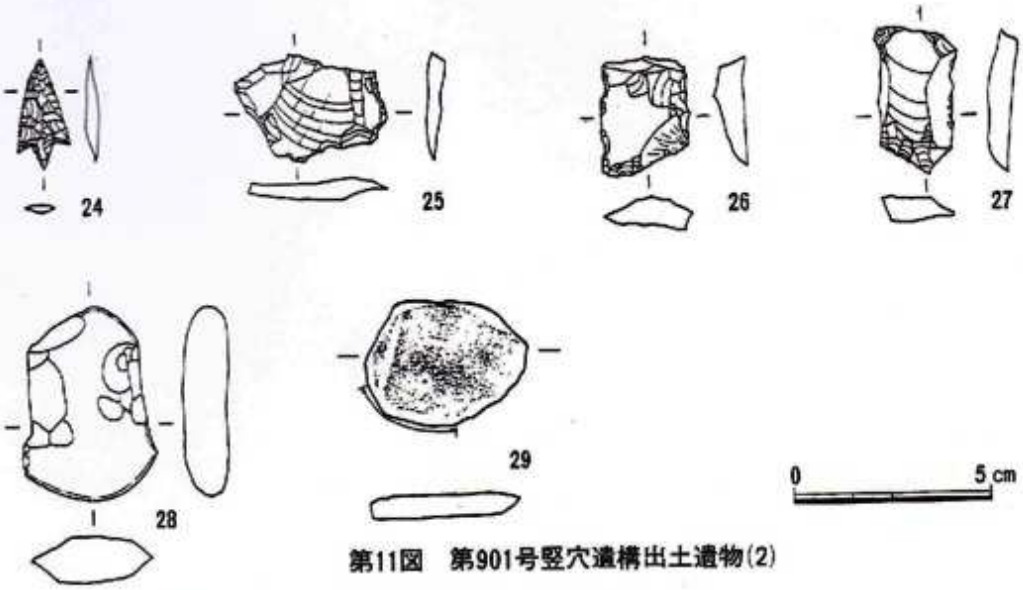
北西側が調査区域外であるが、平面形は円形で、その規模は径120cm程度と考えられる。Ⅲd層からⅣ層を若干掘り込み底面としており、その断面形は凸レンズ状、発掘範囲での最も深いところで33cmである。

堆積土は２層に区分でき、自然堆積と考えられる。

本遺構からの遺物の出土はないが、遺構確認面及び周辺の出土遺物から縄文時代後期の構築と考えられる。



第10図　第901号竪穴遺構出土遺物(1)



第11図　第901号竪穴遺構出土遺物(2)

第903号土壙（第12図）

F_3区北部のＹＪ－111グリッドに位置する。Ⅲd層下位での確認である。

平面形は楕円形で、その規模は長軸120cm、短軸94cmである。また、長軸方向はＮ－30°－Ｅである。Ⅲd層からⅤ層を若干掘り込み底面としており、その断面形は凸レンズ状、深さは33cmである。

堆積土は３層に区分でき、人為堆積と考えられた。

本遺構からの遺物の出土もないが、周辺の出土遺物より縄文時代後期の構築と考えられる。

第904号土壙（第12図）

F_3区南部のＹＦ－106グリッドに位置する。Ⅲa層でその存在が確認されたが、プランが明確にされたのはⅢb層上面であった。

平面形は不整円形で、その規模は長軸138cm、短軸132cmである。Ⅲd層中位面を底面とし、断面形は薄い凸レンズ状、検出面からの深さは20cmである。

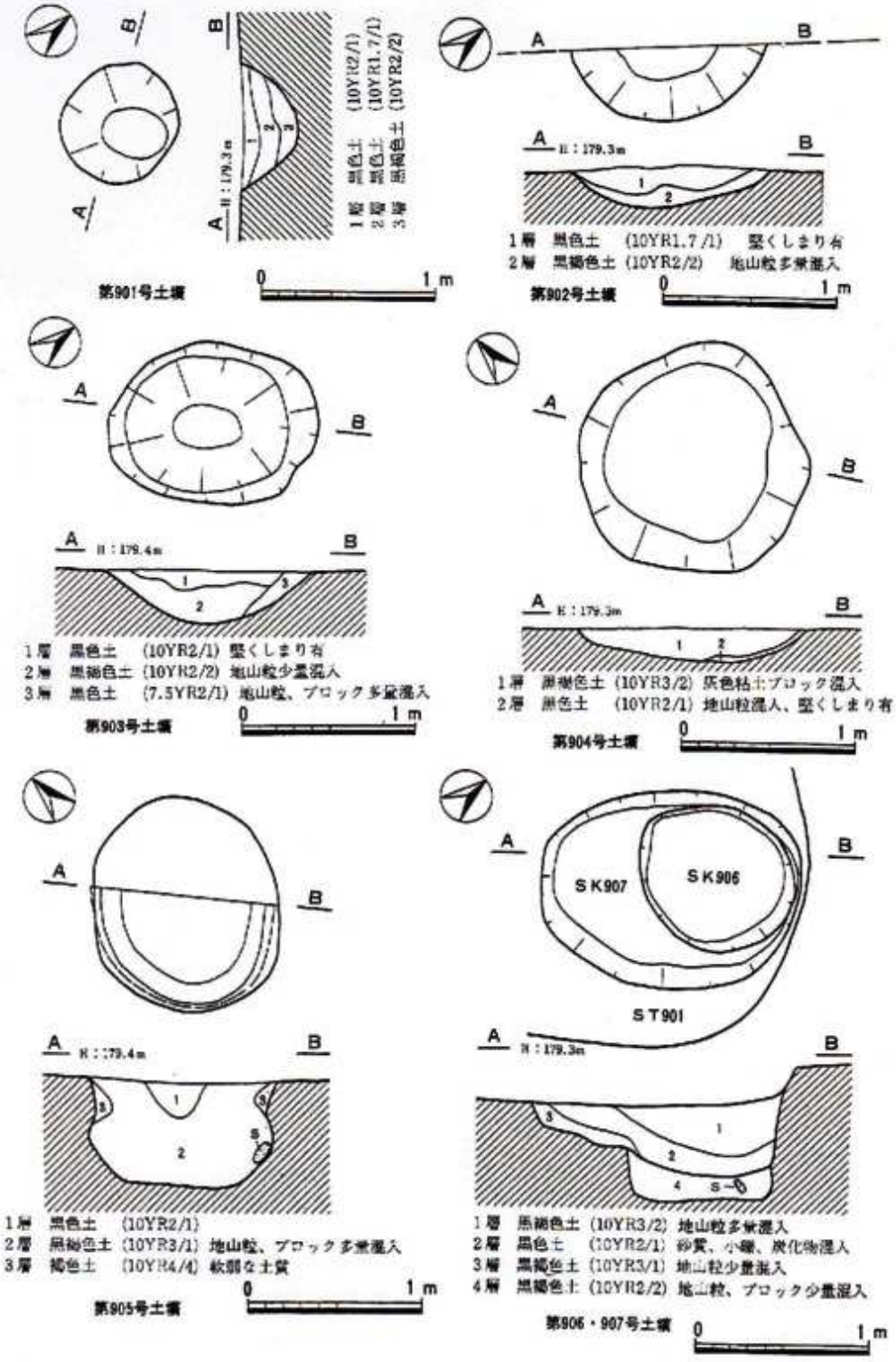
本遺構からの遺物の出土もなく構築時期を明確にできないが、他の土壙よりも確認面が上層であること、堆積土に浮石が多量混入していたことから、歴史時代の土壙の可能性が高い。

第905号土壙（第12、13図１～２）

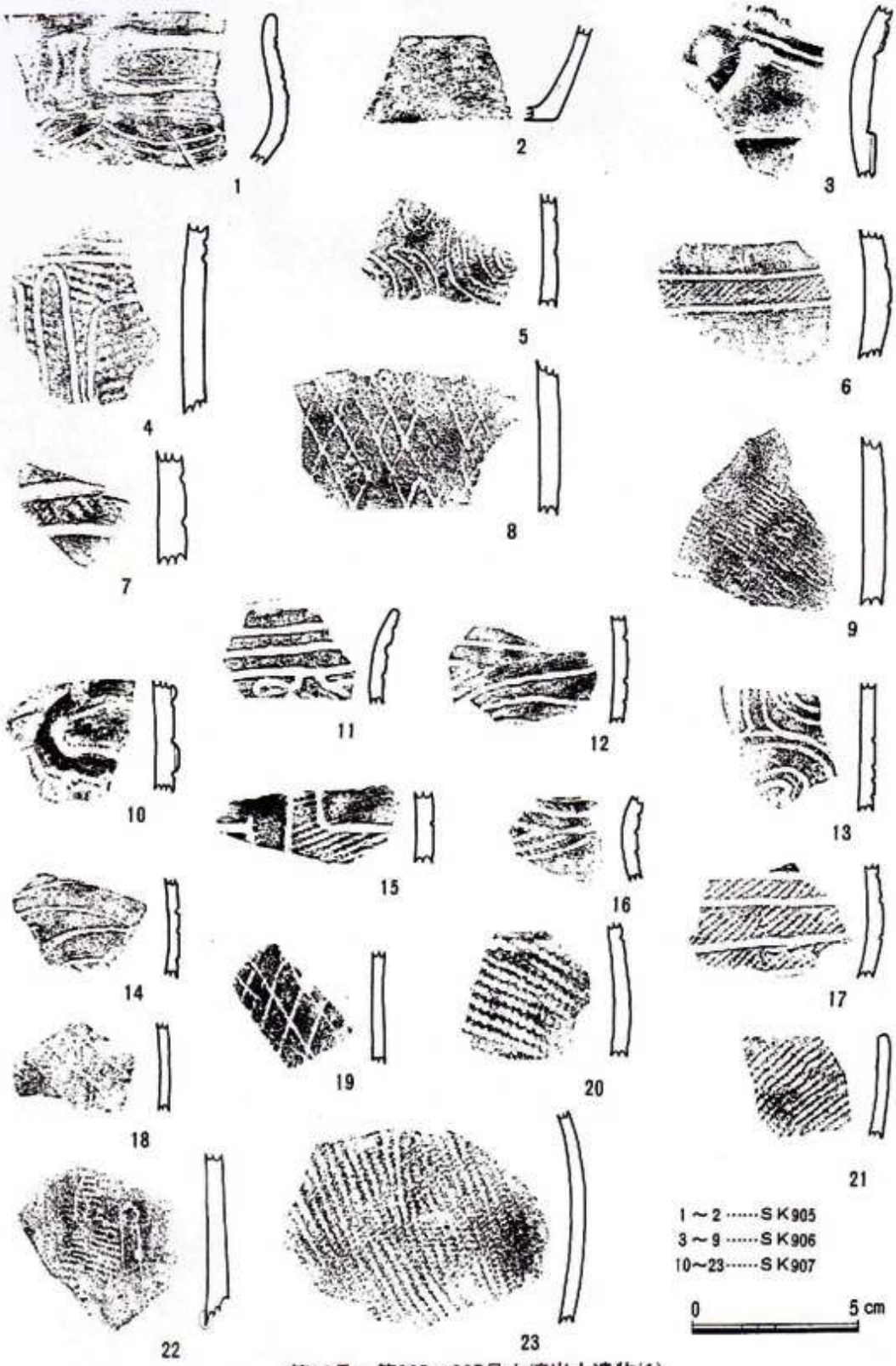
F_3区西部のＹＩ－106グリッドに位置する。本遺構周辺は小丘状の微高地であるため、Ⅲd層まで耕作による攪乱が及び、本遺構が確認されたのはⅣ層上面であった。

平面形は円形で、その規模は長軸126cm、短軸110cmである。Ⅵ層まで掘り込み底面としており、断面形は壁中央が外側に若干彎曲した袋状、確認面からの深さは60cmである。底面はシラス質のため、軟弱である。

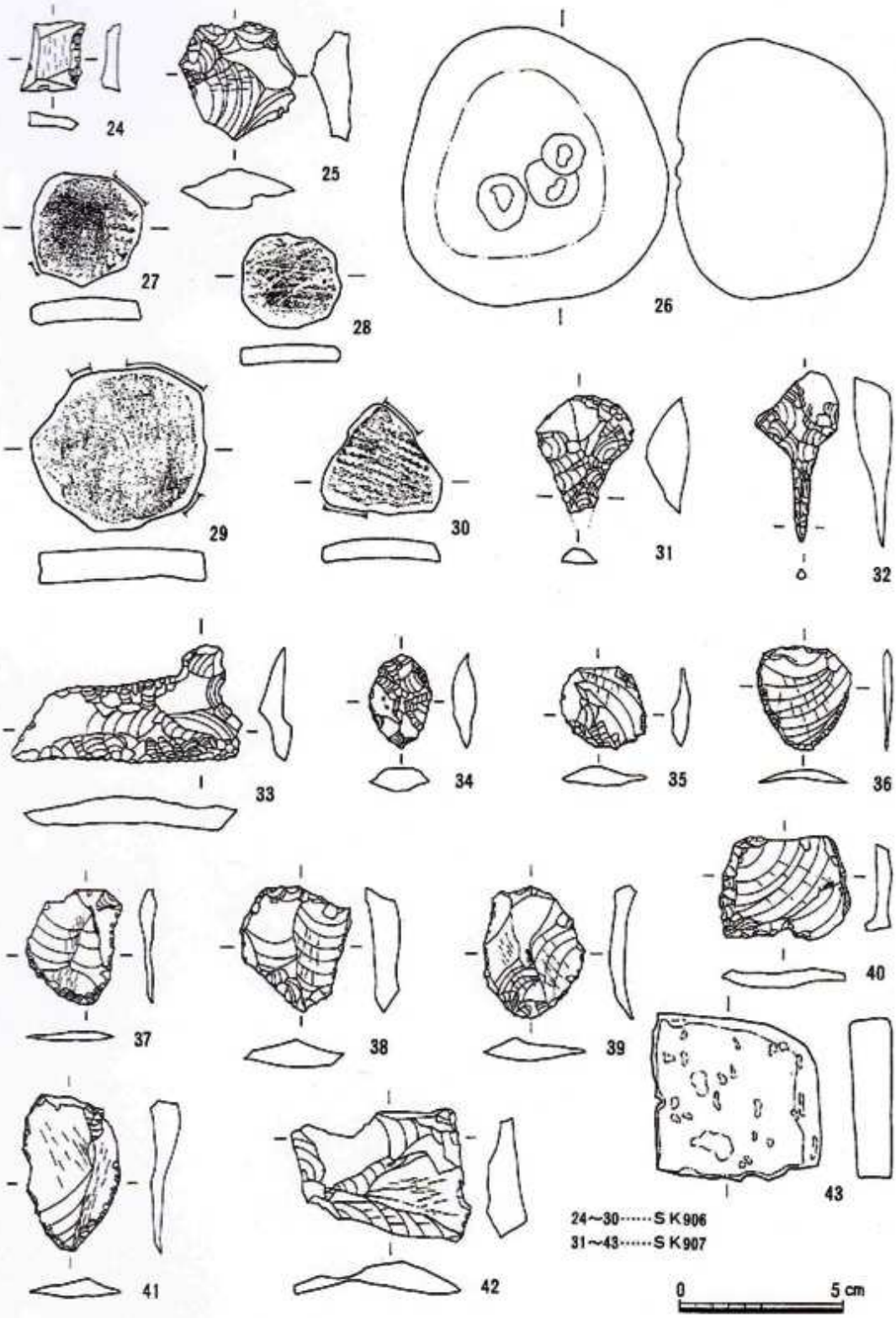
堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積と考えられた。



第12図　第901～907号土壙実測図



第13号　第905～907号土壙出土遺物(1)



第14図　第905～907号土壙出土遺物(2)

南西側半分の発掘により、縄文土器片８点の出土があった。これらの出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第906号土壙（第12図、13図３～９、14図24～30）

F_3区西端部のＹＩ－106グリッドに位置する。第901号竪穴遺構底面にて、907号土壙とともに確認された。

本遺構は901号竪穴遺構、907号土壙よりも古い。ただし、907号土壙とは、その位置関係や堆積状況から別遺構ではなく、段差をもった１つの土壙である可能性も残る。

平面形は楕円形で長軸92cm、短軸76cmである。残存する壁及び底面はⅤ、Ⅵ層からなり、壁は若干内彎して立ち上がる。また底面はほぼ平坦であるが、シラス質のため軟弱である。なお、901号竪穴遺構底面からの深さは56cmである。

残存する堆積土は底面付近の黒褐色土１層のみである。

本遺構からは縄文土器片62点、掻器２点、凹石１点、土器片利用土製品４点の出土があった。これらの出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第907号土壙（第12図、13図10～23、14図31～43）

F_3区西端部のＹＩ－106グリッドに位置する。第901号竪穴遺構底面での確認である。

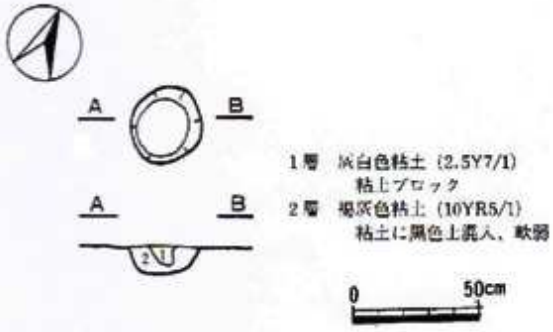
901号竪穴遺構、907号土壙と重複し、本遺構は907号土壙より新しく、901号竪穴遺構より古い。

平面形は楕円形で、確認面での規模は長軸150cm、短軸116cm、長軸方向はＮ－43°－Ｅである。また、901号竪穴遺構からの深さは42cmである。

残存する壁はⅤ層から成り、ややなだらかに立ち上がる。底面はⅤ層及び906号土壙覆土からなり、凸凹があり、南西から北東に若干傾斜している。

残存する堆積土は３層に区分でき、人為堆積と考えられる。

本遺構からは縄文土器片191点、石匙１点、石錐２点、掻器９点、軽石製石製品１点の出土があった。これらの出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。



第15図　ピット実測図

５．ピット

第901号ピット（第15図）

F_3区西部のＹＩ－106グリッドに位置する。Ⅲd層上面での確認である。

平面形は円形で、径32cm、深さ12cmの小規模なピットである。ピット内には灰白色粘土が充填されていた。

6．遺構外出土遺物

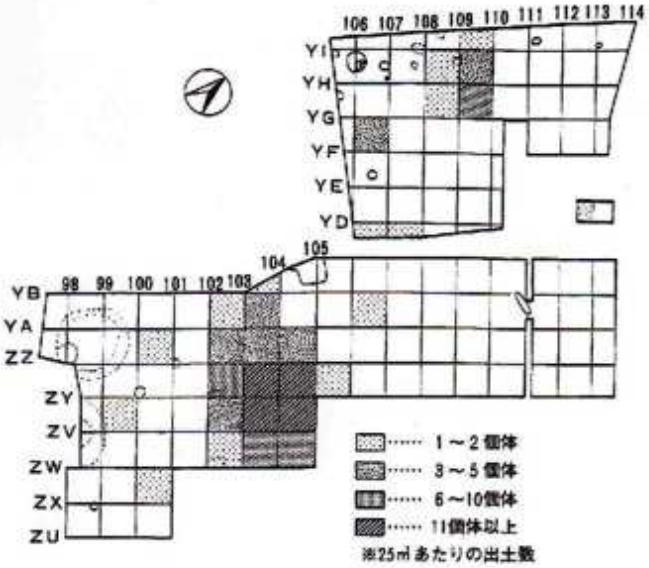
(1) 土器（第18図、ＰＬ10～11）

F_3区遺構外からは、完形及び復元可能な土器20個体、土器片ダンボール箱16箱の出土があった。これらの土器は、数点の縄文時代早期の土器を除き、縄文時代後期に位置づけられるもので、その大半は後期前葉のものである。

土器を初めとする遺物は、F_3区の中央部から西側にかけて多く分布している。

層的には明らかに攪乱と考えられるⅠ～Ⅱ層出土の土器を除くとⅢa～Ⅲd層から出土しており、特にⅢb層からⅢd層上位の出土量が多い。

出土遺物と層序との関係については、縄文時代の文化層が薄いことに加え、耕作による攪乱がかなりの深さまで及んでおり、明確にできなかった。



第16図　完形・復元土器分布密度図

第Ⅰ群　早期の土器

１類　貝殻沈線文の土器

（ＰＬ11－15）

15は口縁部破片で、表面には平行沈線文、裏面には縦位の貝殻腹縁文が施文されている。胎土には小礫及び砂粒を混入、焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。ＹＨ－110グリッド・Ⅲd層の出土である。

第Ⅱ群　後期初頭～前葉の土器

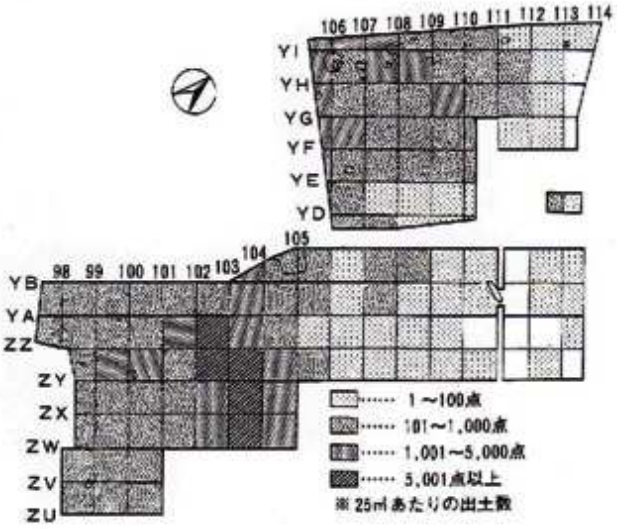
（第18図５、７、

ＰＬ10－１～７）

本群には、縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器を一括した。

１類　隆線文、隆沈文の土器

２類　地文上に沈線文が施文され



第17図　土器片分布密度図

た土器

3類　沈線文の土器（第18図5、7、PL10－1、3、5～7）

本類には、無文研磨された器面に2～4条の平行沈線により文様が描かれたものを一括した。

PL10－1は口径10.0cm、器高11.8cmの深鉢である。3個の頂部をもつ波状口縁で、波頂部には刻目文を有する。胴部上半には円文を主体とした文様が施文されている。焼成はやや良好、色調は暗赤褐色である。YG－106グリッドのⅢb～Ⅲd層からの出土である。

3は壺形の切断蓋付土器である。底径10.2cm、蓋をした状態での器高は27.3cmである。口頸部、胴部上端及び胴部下半に隆沈文による連続長楕円形文、胴部文様帯には弧状文を主体とする曲線文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。YH－109グリッド・Ⅲd層上位の出土である。なお、本土器の底部及びその付近の剥離した部分には黒色の補修剤がつめられており、その分析を岩手県立博物館に依頼、第Ⅴ章2のような結果を得ている。

5、7は波状口縁の大型の深鉢で、口縁部から胴部下半にかけ、2～3条の平行沈線により曲線文が施文されている。7は7つの頂部をもつ波状口縁で、口径30.5cm、器高42.5cmである。胴部文様帯は平行沈線文で二分され、上、下に同様の曲線文が展開している。いずれも焼成は良好で、色調は灰白色及びにぶい橙色である。それぞれYI－109、YH－109グリッドのⅢd層上位からの出土である。

6はゆるやかな波状口縁の深鉢で、波頂部には刻目文を有する。波頂部下には「8」字状文が施文され、その間を弧状文で連結している。なお、胴部には撚糸文が施文されている。焼成は良好、色調は灰白色である。YH－109グリッド・Ⅲd層上位の出土である。

4類　磨消縄文を主体とする土器（PL10－2、4）

PL10－2は、平口縁の大型の深鉢で、胴部中央の平行隆沈文により区画された口縁部から胴部上半に入組状曲線文を主体とした文様が施文され、LR縄文が充填されている。口縁部上端及び胴部中央の平行隆沈文間には円文が作り出されている。なお、これらの隆線文上にも縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。YH－104グリッドのⅢd層上位の出土である。

4は底径5.8cmの壺で、平行沈線により区画された胴部上半の文様帯に花弁文4個が等間隔に施文されている。区画文内にはLR縄文が充填されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。YG－106グリッド・Ⅲb～Ⅲd層の出土である。

第Ⅲ群　後期中葉の土器

本群には、縄文時代後期中葉に位置づけられる土器を一括した。

1類　平行線化した磨消縄文帯を有する土器

2類　磨消縄文の土器

3類　磨消縄文に刺突文が伴う土器

4類　隆線文、隆沈文の土器

5類　多条沈線文の土器（ＰＬ11～16）

ＰＬ11－16は底径4.6cmの注口土器と考えられる。胴部中央の隆沈文により文様帯を区画、胴部上半に多条沈線による曲線文が施文されている。なお、胴部中央の隆線上には刻目文が付けられている。焼成は非常に良く、色調は黒褐色である。ＹＧ－106グリッド・Ⅲb層の出土である。

第Ⅳ群　後期後葉から末葉の土器

第Ⅴ群　後期の土器（第18図、ＰＬ11）

本群には、後期に位置づけられる条痕文、撚糸文、縄文、無文の土器を一括した。

1類　条痕文の土器（第18図６、ＰＬ11－19）

６は平口縁の深鉢で、口径16.3cm、器高18.9cmである。外反する口縁部に横位方向、口頸部から胴部には斜位方向に条痕文が施文されている。焼成は良好で、色調は暗赤灰色、ＹＨ－109グリッドのⅢd層上位からの出土である。

2類　撚糸文の土器（ＰＬ11－17～18、20）

17、20は網目状撚糸文の施文された平口縁の深鉢形土器で、20の口径は28.2cm、器高は31.5cmである。17は狭い口縁部無文帯下より、また20は折り返し口縁直下から回転押捺されている。条はいずれもＲ縄文、焼成はやや良好、色調は17がにぶい橙色、20が黄灰色である。いずれもＹＩ－109グリッド・Ⅲd層上位からの出土である。

18は撚糸文が施文された深鉢形土器で、底径13.8cmである。軸に巻かれる条はＲ縄文、焼成はやや良好、色調は灰白色である。本土器もＹＩ－109グリッド・Ⅲd層上位からの出土である。

3類　縄文の土器

口頸部に撚糸圧痕文や沈線文を有し、無文部分と縄文部分を画しているもの、区画文を有しないが、口縁部に無文帯を有するもの、口縁部ほぼ上端から縄文が施文されるもの等がある。

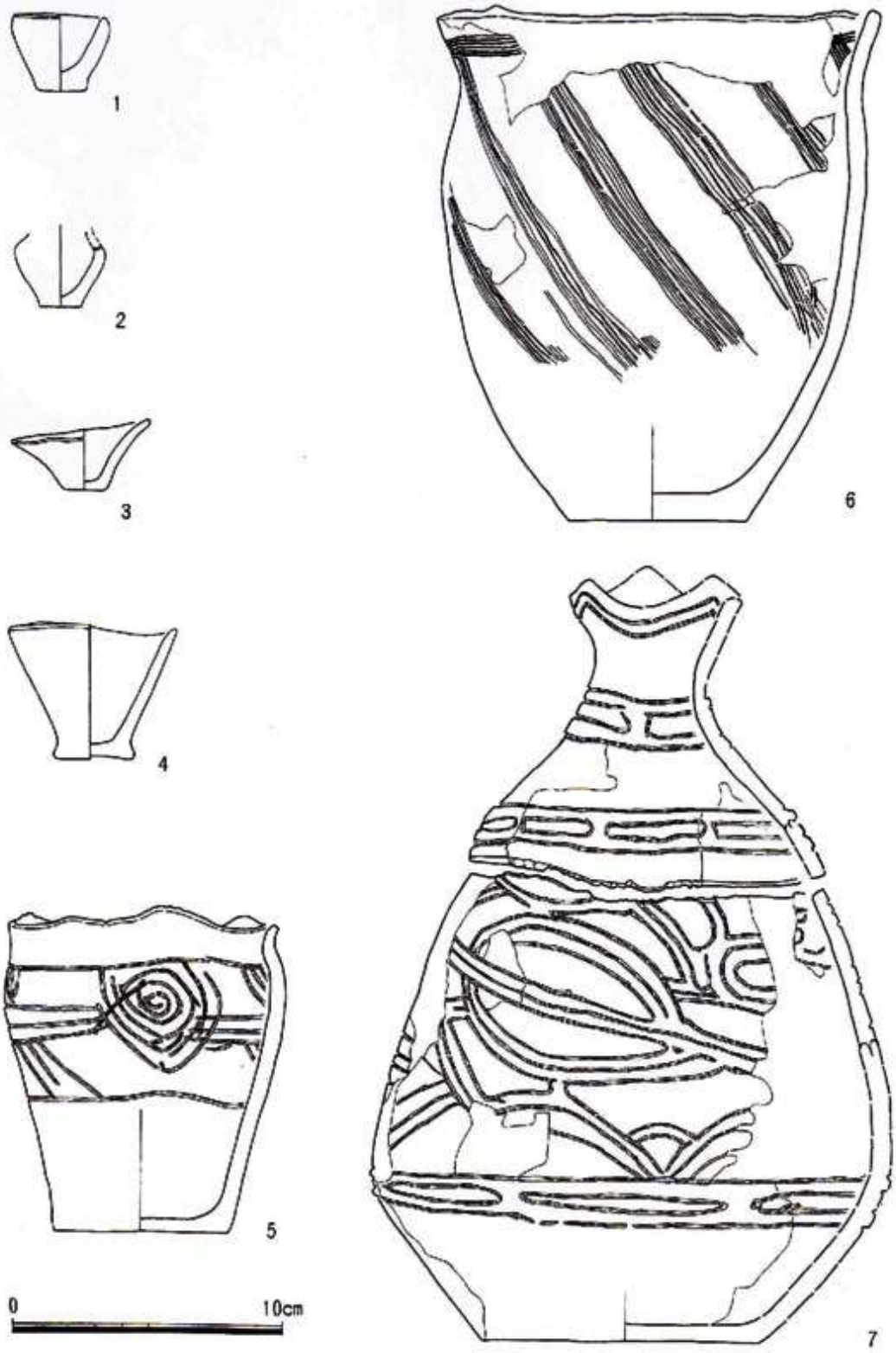
地文の原体にはＬＲ縄文が多用され、ＲＬ、Ｌ縄文と続く。焼成はやや良好で、色調はにぶい褐色、にぶい橙色、灰褐色のものが多い。

4類　無文の土器（第18図１～４、ＰＬ11－８～14）

本類は３類の縄文のみが施文された土器に次いで多い。本類には、深鉢、鉢、浅鉢、壺、台付土器等があり、比較的小型のものが多い。また、ミニチュア土器のほとんどは本類である。

ＰＬ11－８～12はミニチュア土器、13は口径6.3cm、器高5.0cmの小型の鉢、14は口径3.0cm、器高6.9cmの小型の壺である。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色、灰黄褐色等である。これらの土器はＹＪ～ＹＧ－106～109グリッド・Ⅲb～Ⅲd層より多く出土している。

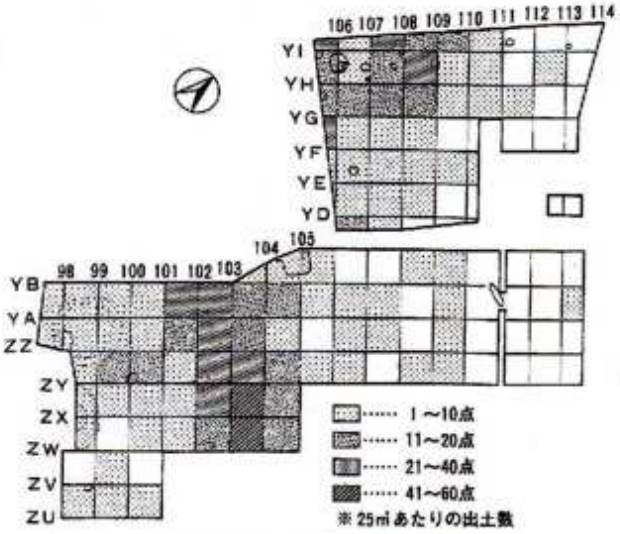
（秋元信夫）



第18図　F_3区遺構外出土土器実測図

(2) 石器

F_3区遺構外より出土した石器は多種多様で、その数も剥片石器196点、礫石器66点の計262点である。掻器1点のみ北側から出土し、残り全ては調査区西側から南東側にかけて分布し、大半は遺物包含層 Ⅲa～Ⅲd層からの出土であった。石器の分類については、形態別に類別・細分した。なお、石器出土分布状況は第19図の通りである。



第19図　石器分布密度図

石鏃（第20図1～21）

完形品及び欠損品含め53点出土した。調査区南西側、特にＹＨ－107・108、ＹＩ－108グリッド付近に集中していた。形態からⅡ群6類に分類した。石材は硬質頁岩が多く、珪質頁岩、赤色頁岩と続く。

Ⅰ群…無茎石鏃で、基部形態から以下のように細別した。

a…凹基石鏃で、1点出土した。先端部を欠損しているが、全体的にていねいな調整によって作り出され、基部に浅い抉りを持ち、側縁はわずかに曲線を描いている。長さ1.5cm、重さ0.6gを測る。（1）

b…円基石鏃で、2点出土した。調整は粗めで、基部は楕円形状を呈している。長さ2.6～3.5cm、重さ7.3～3gを測る。（2、3）

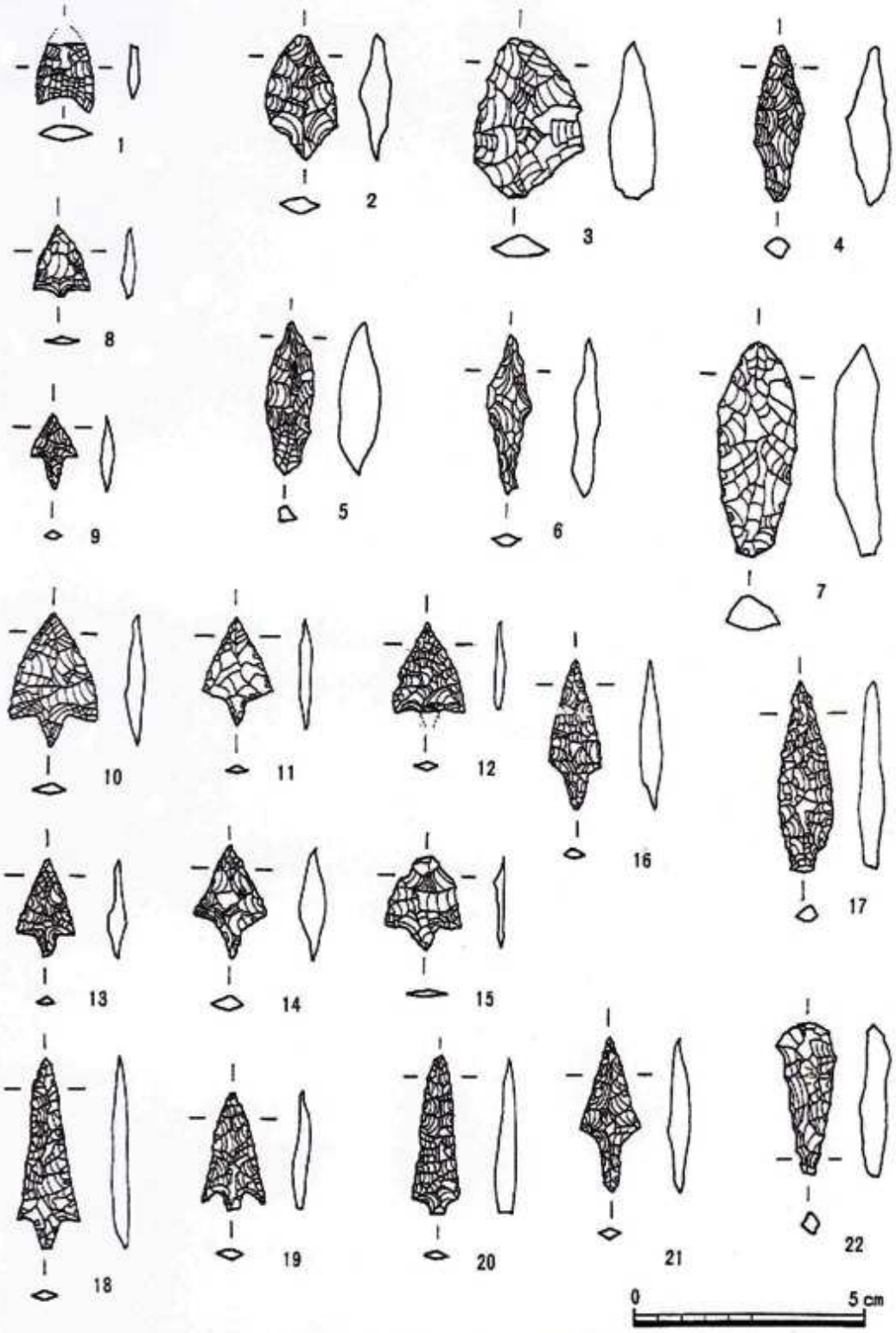
c…尖基石鏃で柳葉形を呈している。4点出土した。器中央部が膨らみ、断面形が菱形を呈するものと、先端部に広がりをもち、断面形が凸レンズ状を呈するものがみられる。前者より後者の方が、基面に一次剥離を残す部分があるものの、ていねいな調整が施されている。（4～7）

Ⅱ群…有茎石鏃で、基部の形態から以下のように細別した。

a…平基有茎石鏃で、35点出土した。長さ2.7～4.1cm、重さ1～2.6gを測り、法量的には、ばらつきがみられる。先端部を欠いているものが多い。（8～10、12～13、15）

b…凹基有茎石鏃で、6点出土した。基部の抉れは深いものと浅いものがあり、細長く、調整はていねいである。長さ2.7～4.1cm、重さ0.9～1.3gを測る。（18、19）

c…凸基有茎石鏃で、5点出土した。基部は、a類、b類に比べ大きく突出している。長さ2.4～4.15cm、重さは1.0～2.6gを測る。欠損品は基部を欠いているのが多くみられ



第20図　F$_3$区遺構外出土石器実測図(1)

る。（11、14、16、17、20、21）

石錐（第20図22、第21図23～31）

調査区中央部西寄りのＹＨ－108グリッド付近からの出土が多くみられ、13点出土した。形態別にⅡ群３類に分類された。材質は硬質頁岩が多く、珪質頁岩、黒色頁岩と続く。

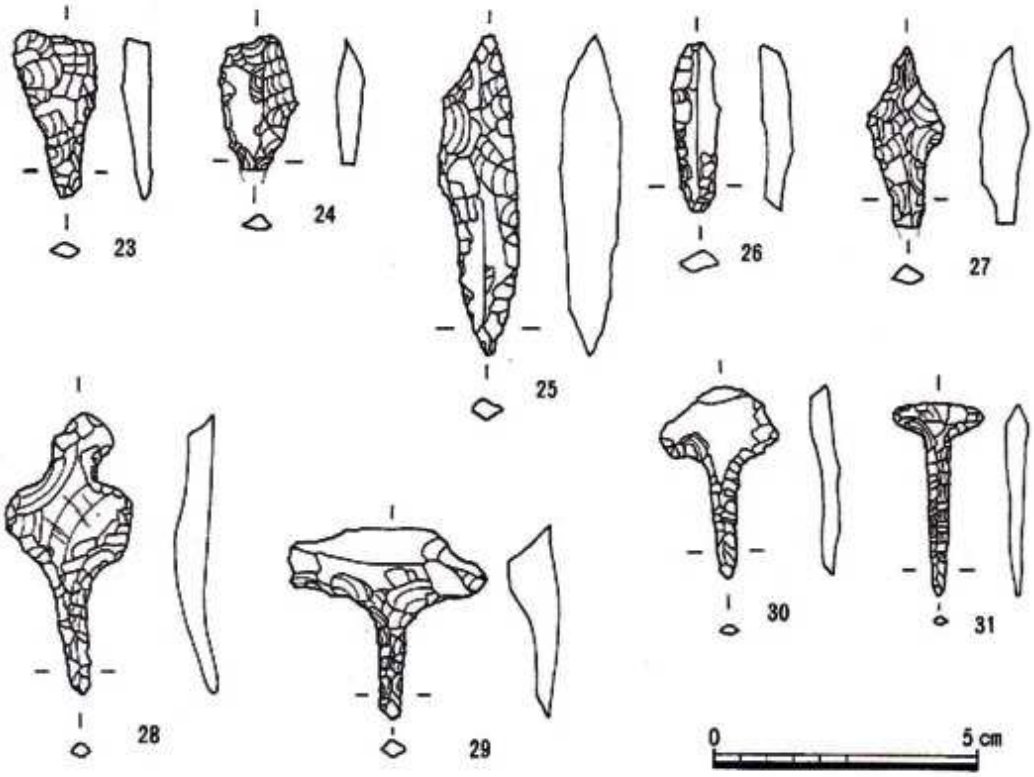
Ⅰ群…つまみ部と錐部の境が明確でないものである。

a…Ｖ字状を呈し、３点出土した。錐部先端には使用による磨耗が観察された。長さ2.5～3.4cm、重さ2.0～2.8ｇを測る。（22～24）

b…菱形状のもので、２点出土した。長さ3.5～6.1cm、重さ3.6～10.6ｇを測る。（25、27）

c…棒状のもので、調整はやや粗い。２点出土したが、先端部を欠いていた。（26）

Ⅱ群…つまみ部と錐部の境が明確なもので６点出土した。錐部は細長く、精巧な細部調整が施されている。長さ3.65～5.4cm、重さ1.0～6.6ｇを測る。（28～31）



第21図　Ｆ₃区遺構外出土石器実測図(2)

石匙（第22図32～39）

完形品、欠損品含め17点出土した。調査区中央部南西寄りの107ラインから110ラインに分布していた。つまみ部の作り出される位置からⅡ群に分類し、さらに刃部の作り出される位置により２類に細別した。石材は、硬質頁岩が多く、珪質頁岩、黒色頁岩と続く。

Ⅰ群…縦型石匙と呼ばれるもので、15点出土した。

a…刃部が左右いずれか一側縁に作り出されるもの。３点出土した。（32、35）

b…刃部が両縁・二側縁に作り出されるもので、11点出土した。使用による磨滅がみられるものもある。（33、34、38、39）

Ⅱ群…横型石匙と呼ばれているもので、４点出土した。（36、37）

観察するとⅡ群の方の加工調整の方がていねいになされているように思える。また法量的にも、Ⅰ群は長さ４～10.2cm、重さ2.3～79.6ｇを測り、Ⅱ群が長さ3.7～5.3cm、重さ6.5～23.7ｇと、Ⅱ群の方がまとまりを見せている。

篦状石器（第22図41～46）

調査区中央部ＹＨ－109グリッド付近より５点出土した。平面形態からⅡ群に分類した。

Ⅰ群…基部に対して刃部の幅が広くなる、台形状のものである。３点出土した。長さ3.45～3.9cm、重さ6.6～10.1ｇを測る。（41～43）

Ⅱ群…基部から刃部にかけて寸胴なもので、三角形状を呈している。３点出土し、長さ5.2～6.4cm、重さ14.5～35.9ｇを測る。（44～46）

Ⅰ群、Ⅱ群ともに背面中央に一次剥離面を残すものの刃部調整はていねいになされている。石材は全て硬質頁岩である。

掻器（第23図47～63）

108点出土した。調査区西側から南側にかけて分布し、特に西側ＹＩ・ＹＨ－108グリッドに多く集中していた。打面を上にして刃部の作り出される位置からⅤ群に分類された。

Ⅰ群…刃部が左、右一側縁に作り出されるもの。19点出土した。（47～50）

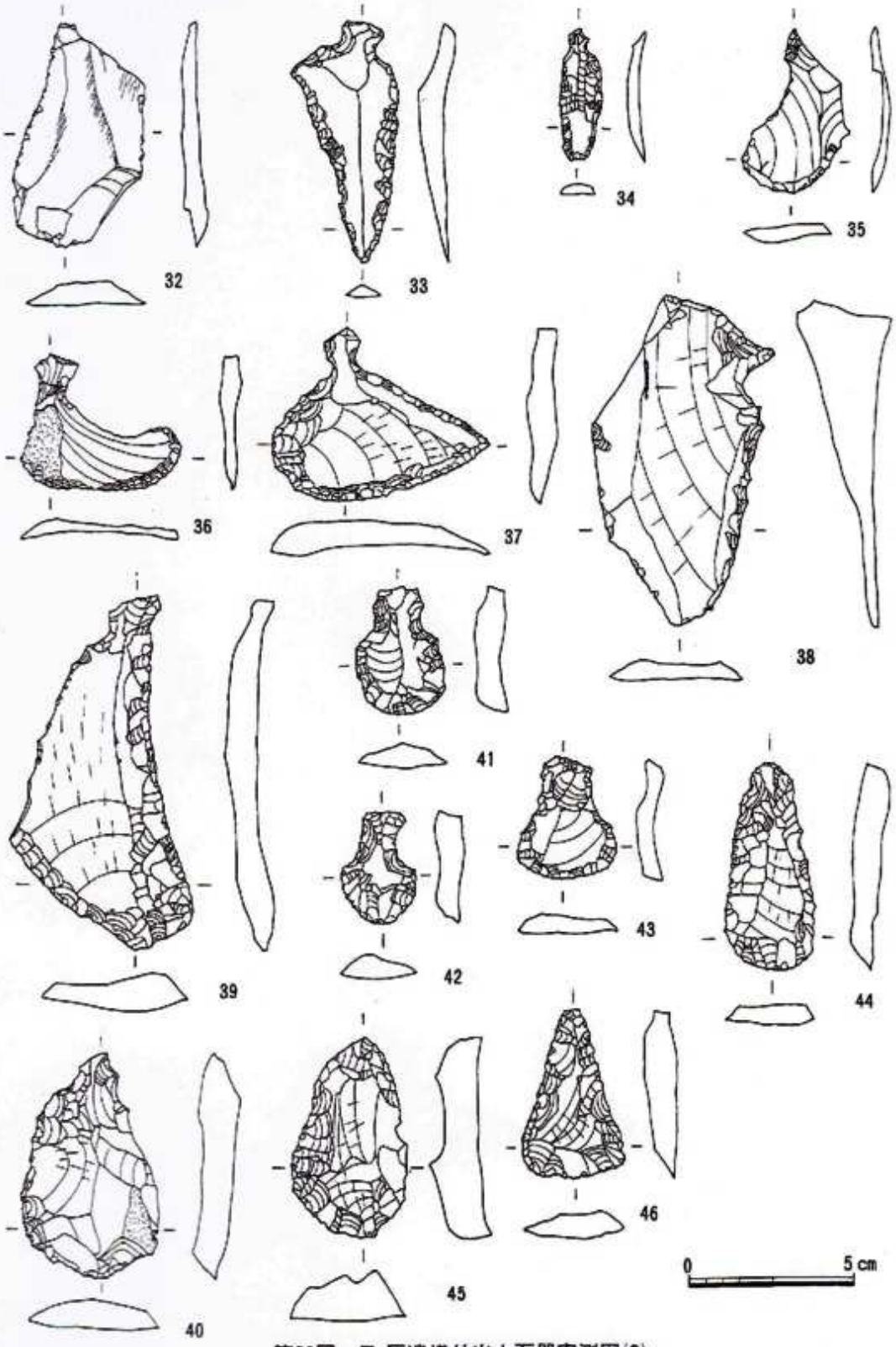
Ⅱ群…刃部が先端部に作り出されるもの。36点出土した。（55、57、58）

Ⅲ群…刃部が両縁・二側縁に作り出されるもの。24点出土した。（51、52、54、59）

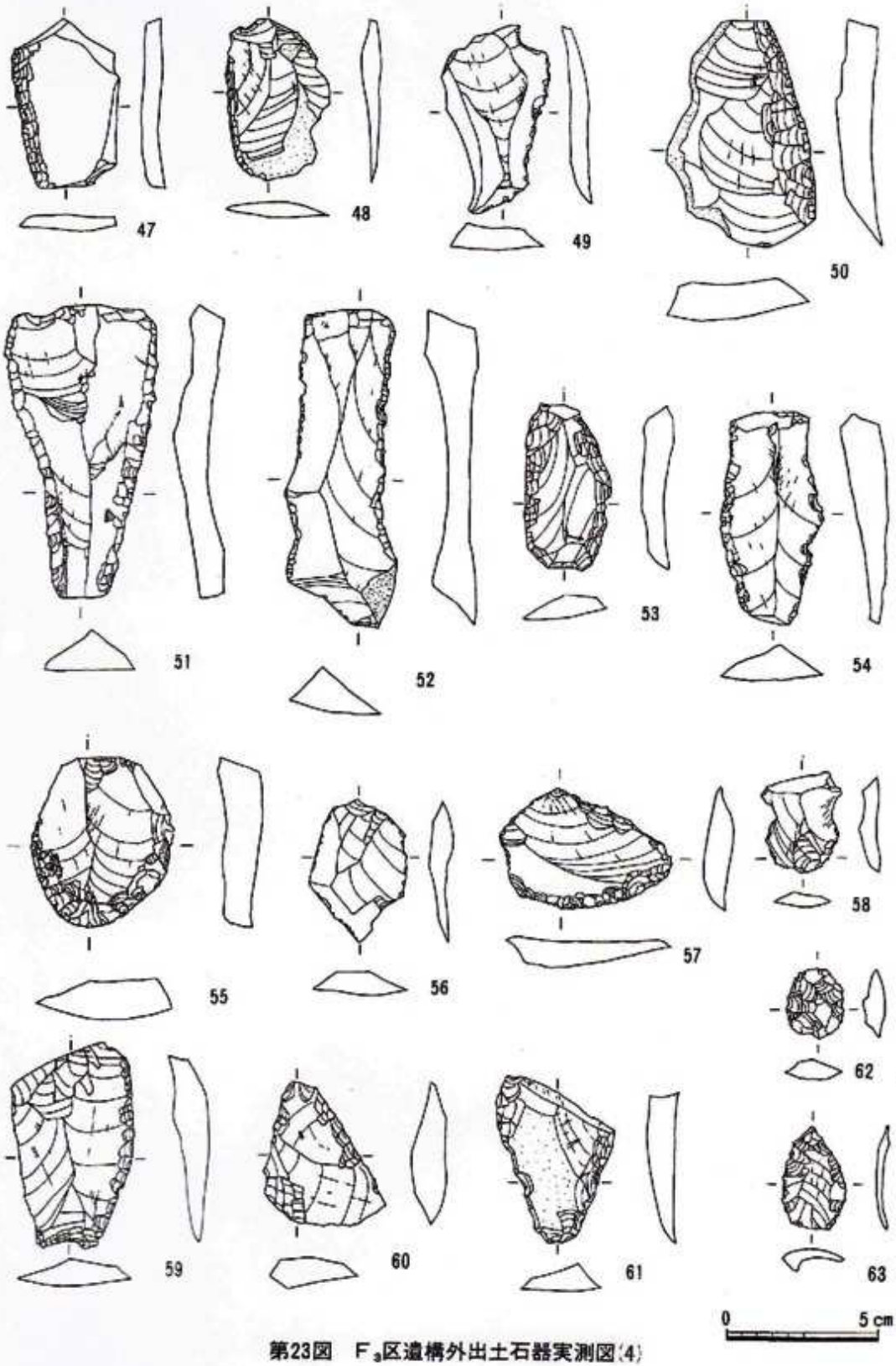
Ⅳ群…刃部が三側縁に作り出されるもの。18点出土した。（53、56、60、61）

Ⅴ群…刃部が周縁全域に作り出されるもの。11点出土した。（62、63）

法量・形態とも様々であるが、剥片に連続した加工調整により刃部と作り出しているものを掻器とした。観察すると、Ⅰ群・Ⅲ群は剥片の比較的直線的な部分に刃部が作り出され、Ⅱ群は曲線部分に刃部が作り出されている。これは使用別による違いであろうか。



第22図　F_3区遺構外出土石器実測図(3)



第23図　F$_3$区遺構外出土石器実測図(4)

磨製石斧（第24図64～68）

調査区南西側より６点出土した。全て欠損品で基部を欠くものが多いが、形態的にⅡ群に分類される。

Ⅰ群…定角式磨製石斧で、５点出土した。使用痕として、刃部には磨滅がみられる。欠損品のため法量は不明であるが、小型のもので長さ５cm、大きいもので10～12cm程度になると思われる。完形品に近いNo.67は長さ5.6cm、重さ178ｇを測る。断面形は隅丸長方形を呈している。使用される石材は緑色片岩、緑色砂質凝灰岩、緑色凝灰岩、火山礫凝灰岩である。（64～67）

Ⅱ群…乳棒状磨製石斧で１点出土した。Ⅰ群の定角式に比べ稜は丸味を帯び、断面形もきれいな楕円形を呈している。刃部にはアックス的使用による磨滅が観察された。（68）

石錘（第24図69～71）

９点出土し、そのほとんどが調査区西側から出土した。扁平な石の両側縁に凹みをもたせるように打ち欠いているものである。比較的大型と小型のものに分けられ、平均した法量は前者が長さ9.9cm、重さ170ｇ、後者の方は５～６cm、重さ30ｇを測る。石材は砂質凝灰岩、泥岩、石英閃緑玢岩、変朽安山岩で、砂質凝灰岩が主流である。

敲石（第24図72～75）

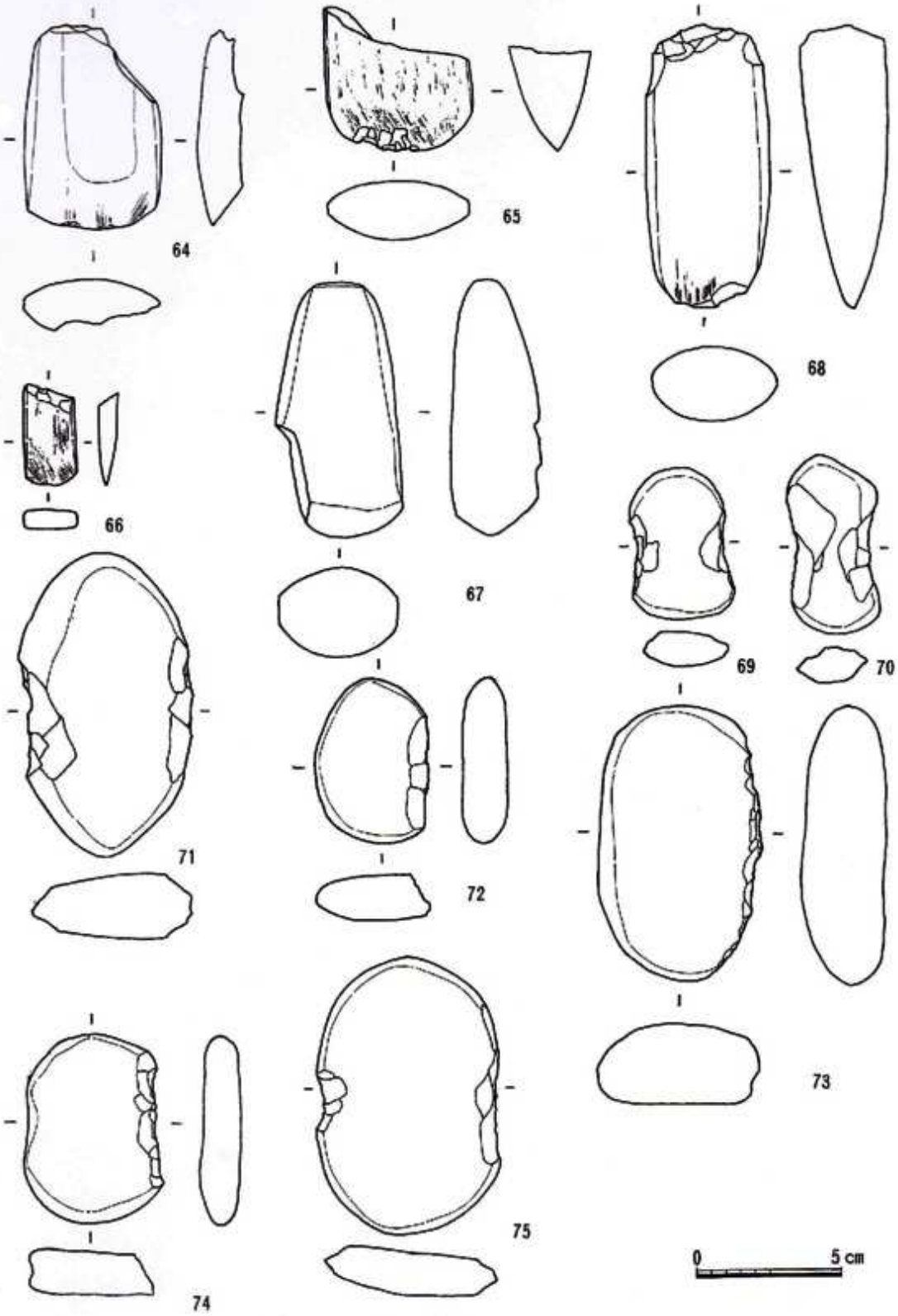
調査区北西側から南側にかけて５点出土した。扁平なかまぼこ状の川原石の一側縁が使用により打ち欠かれているもので、厚めの石を使用している例もある。長さ5.7～9.6cm、重さ49.4～415ｇを測り、法量的にばらつきがある。石質は石英閃緑玢岩、緑色凝灰岩、泥岩である。

凹石（第25図78、79）

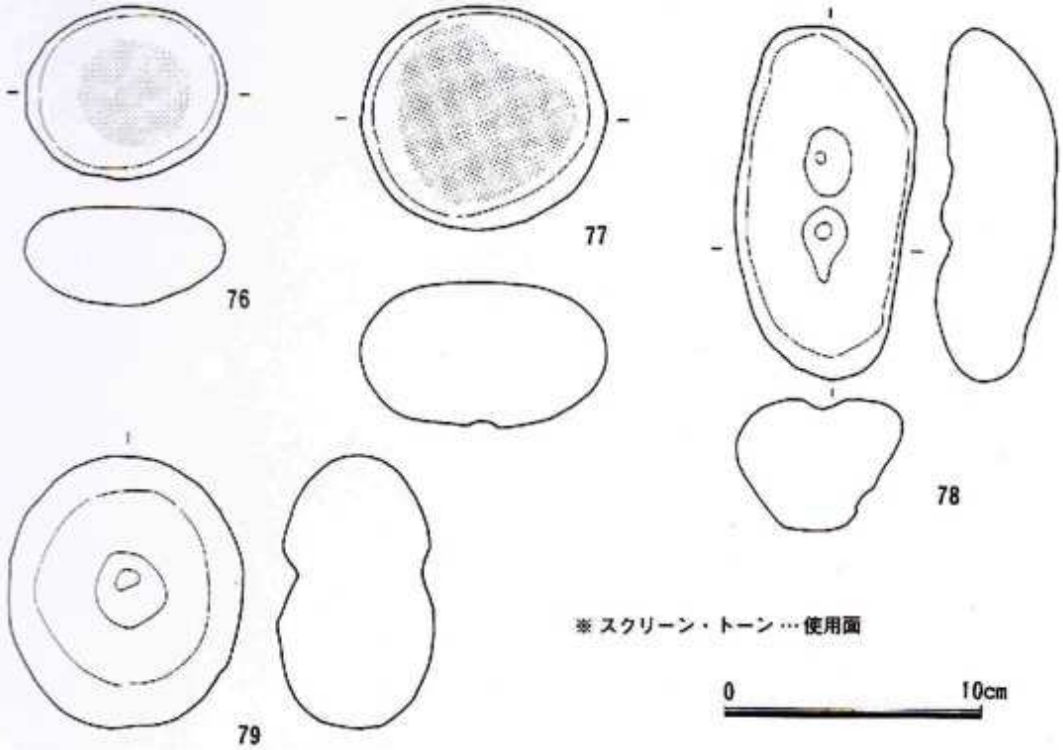
調査区西側から南側にかけて広く分布し、28点出土した。形状や大きさは様々であるが、主に長さ13cmの細長のものや、10cm大の円礫を利用している場合が多い。片面のみでなく両面に凹みをもつものが大半を占める。凹みの形状はすり鉢状を呈している。石材は石英閃緑玢岩が最も多く、砂質凝灰岩、緑色凝灰岩と続き、玄武岩、泥岩、石英安山岩、凝灰岩、閃緑岩が各１点ずつである。

磨石（第25図76、77）

調査区中央部及び西側から13点出土した。法量が小さいもので長さ6.7cm、重さ160ｇ、大きいもので長さ14cm、重さ750ｇの円礫に磨痕がみられるもので、両面を使用しているものが多くみられる。大きさ、形状もまばらであるが、10cm大の円礫を使用している場合が多く、凹石に転用されている例もみられる。石材は石英安山岩が多く、他は石英閃緑岩、安山岩、凝灰岩、火山礫凝灰岩、砂質凝灰岩である。



第24図　F$_3$区遺構外出土石器実測図(5)



第25図　F$_3$区遺構外出土石器実測図(6)

石皿（第26図80、81）

3点出土した。周辺に縁をもつもの、中央に凹みのあるものを石皿とした。81は欠損品のため形状、法量は不明であるが、肉厚で破損後凹石に転用されている。石材は安山岩である。81は他の石皿に比べ作りもていねいで、厚さも1.3～1.5cmと薄く、石材も火山灰質凝灰岩で非常にもろく、復元もままならない程であった。このことから、とうてい石皿としての実用的なものとは考えにくく、何か別の用途として使用されたものと考えられる。

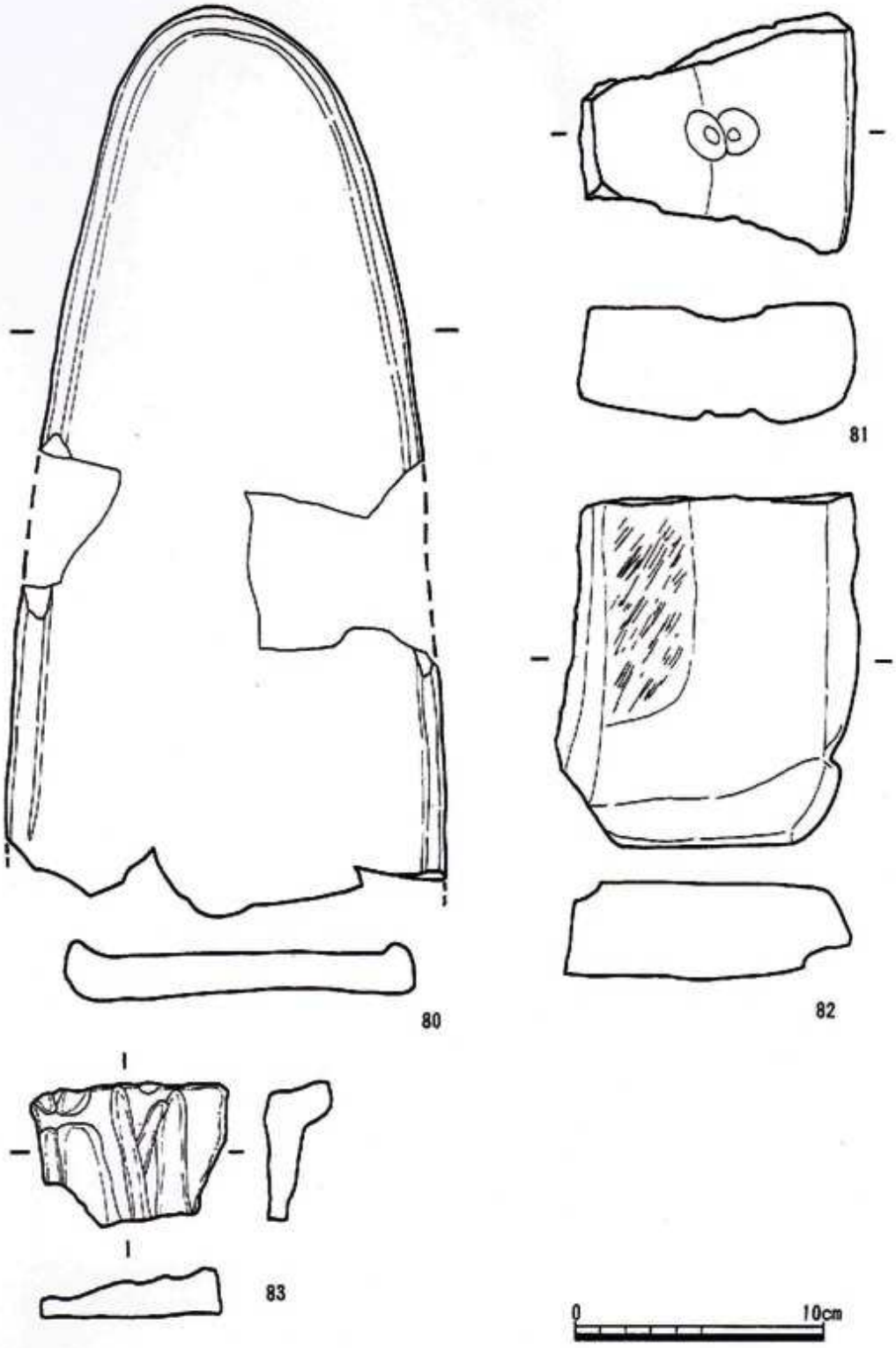
台石（第26図82）

1点出土した。石皿と似ているが、縁をもたず、中央に凹みもないものである。使用痕として擦跡が観察される。石材は、砂質凝灰岩である。

砥石（第26図83）

1点出土した。石皿から転用されたもので、裏面と側面に使用痕が認められる。石材は石英安山岩である。

（花海義人）



第26図　F_3区遺構外出土石器実測図(7)

(3) 土製品（第28～30図）

F_3区遺構外から出土した土製品は、土偶５点、鐸形土製品６点、環状土製品２点、きのこ形土製品１点、有孔土製品３点、耳栓１点、管状土製品１点、土器片利用土製品52点の計71点である。

土偶（第28図１～５）

１、２は土偶の頭部で、いずれも逆三角形で扁平な顔である。２には鼻の突出すらない。１の耳の部分から頭上に斜めの貫通孔を有する。１はＹＨ－108グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、２はＹＧ－106グリッド・Ⅰ～Ⅲa層の出土である。

３は土版に乳房を作り出したもので、ＹＨ－108グリッド・Ⅲd層上位の出土である。

４は大型の土偶の足で、長さ7.8cm、幅4.7cm、ＹＨ－105グリッド・Ⅲa～Ⅲb層からの出土である。

５は板状の土偶であるが、足部のみ立体的となり、立つように作られている。上半身及び右足を欠いており現存長は11.8cmである。へそと考えられる突起下には腹巻きを思わせる沈線文が描かれている。ＹＧ－106グリッド・Ⅲb～Ⅲd層からの出土である。

鐸形土製品（第29図12～15、17）

F_3区からは６点が出土している。開口部断面が円形のもの（12、15）と楕円形のもの（13、14、17）とがある。また、貫通孔は鈕部の短軸方向（12、13、15）のものと長軸方向（14、17）に穿孔されるものとがある。13、17には鈕から鐸身にかけ沈線文が、14には鐸身にのみ沈線による渦巻文や連続刺突文が施文されている。12は小型で、高さは2.8cm、F_3区で最大の14は高さ6.9cmである。これらの土製品はＹＪ、ＹＩ－107、ＹＨ－108、ＹＤ－106グリッド・Ⅲa～Ⅲd層より出土している。

環状土製品（第29図18、19）

18、19とも環状土製品の一部で、18は推定径6.2cm、19は径8.8cmである。18には平行沈線文とその間に連続刺突文が、19には磨消縄文技法による入組状曲線文が施文されている。18はＹＦ－108グリッド・Ⅲa～Ⅲb層からの出土である。

きのこ形土製品（第29図６）

きのこを模したと考えられる土製品で、F_3区ではＹＤ－107グリッド・Ⅰ～Ⅱ層から１点が出土している。かさはろうと形、柄が直線的で、かさ径2.5cm、高さ3.0cmの小型の土製品である。

有孔土製品（第29図９～11）

貫通孔を有する板状の土製品を一括したが、９、11は円形、10は隅丸三角形である。また、９、11が表面に垂直に孔が穿たれるのに対し、10は平行に穿たれている。９は無文で、径2.7cmと小型である。10、11には竹管による刺突文が施文されている。９はＹＩ－107グリッド・Ⅲa

層、10はＹＦ－106グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、11はＹＩ－108グリッド・Ⅲb～Ⅲd層の出土である。

耳栓（第29図７）

径2.1cm、厚さ1.5cm、ＹＧ－106グリッド・Ⅲa～Ⅲd層からの出土である。

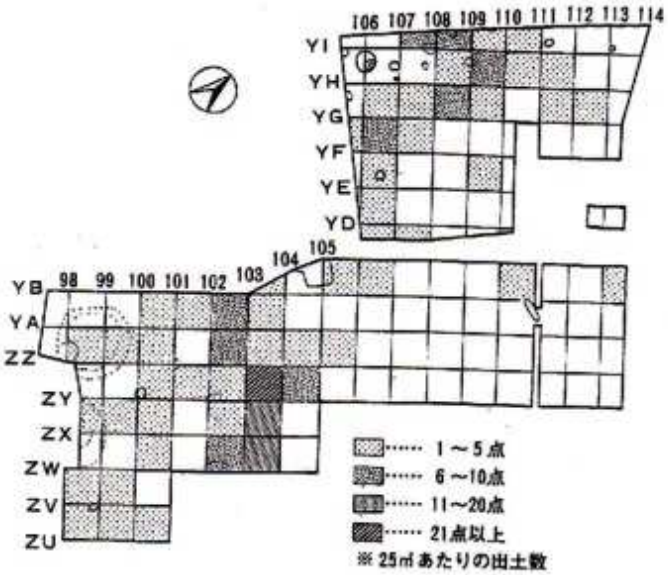
管状土製品（第29図８）

径1.3cm、長さ3.9cm、孔径３mm、ＹＨ－107グリッド・Ⅲa～Ⅲb層からの出土である。

土器片利用土製品（第30図20～54）

土器片を打ち欠き、研磨により円形、三角形、方形に成形しているもので、従来円盤状土製品、土製円盤、土製メンコなどと呼ばれていたものである。

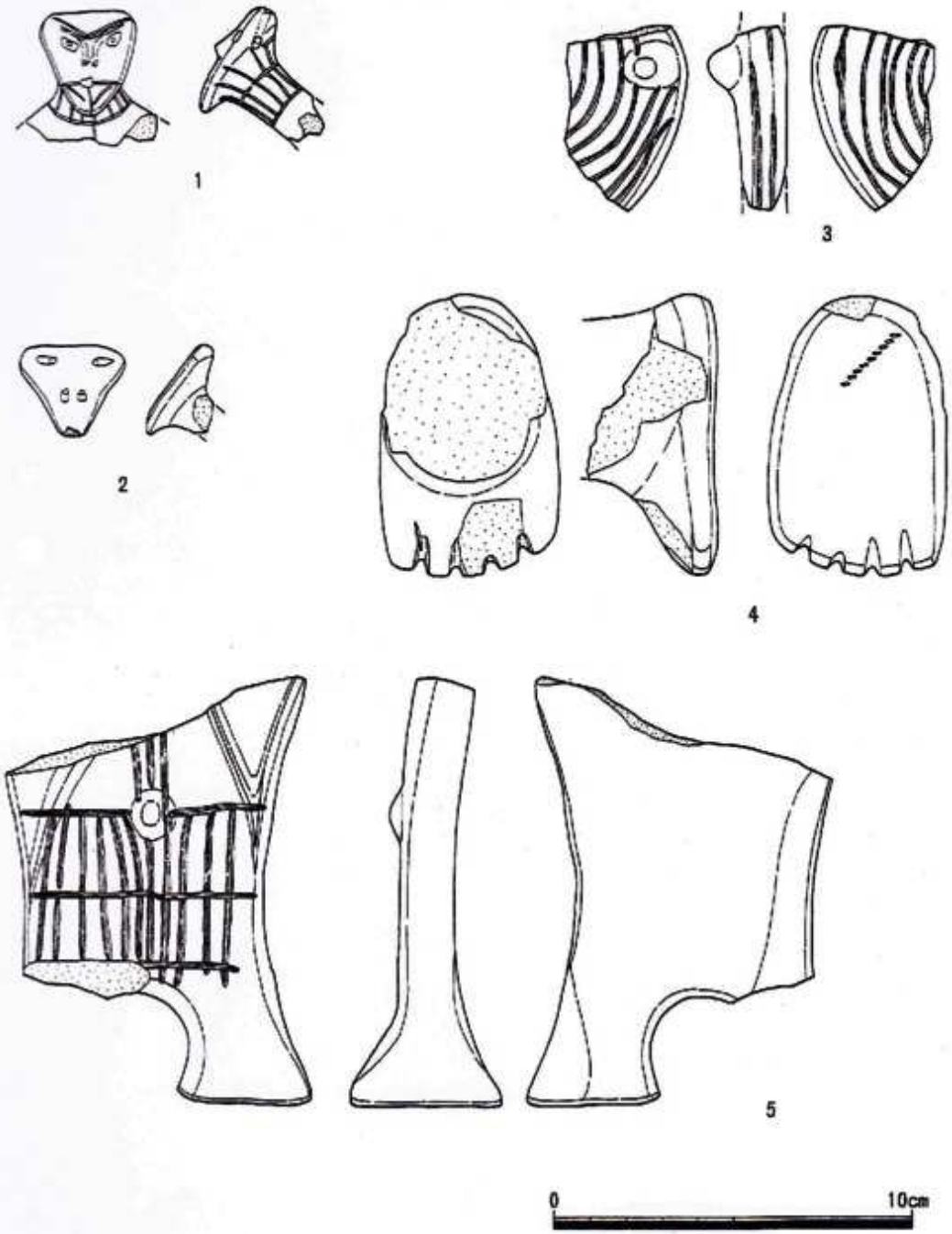
F_3区からは52点の出土であるが、平面形状としては円形のものが８割を占め、次いで三角形のものが多く、方形のものが最も少ない。打ち欠きだけのものが多く、45、47のように全周あるいはほぼ全周に研磨を施こしているものは少ない。



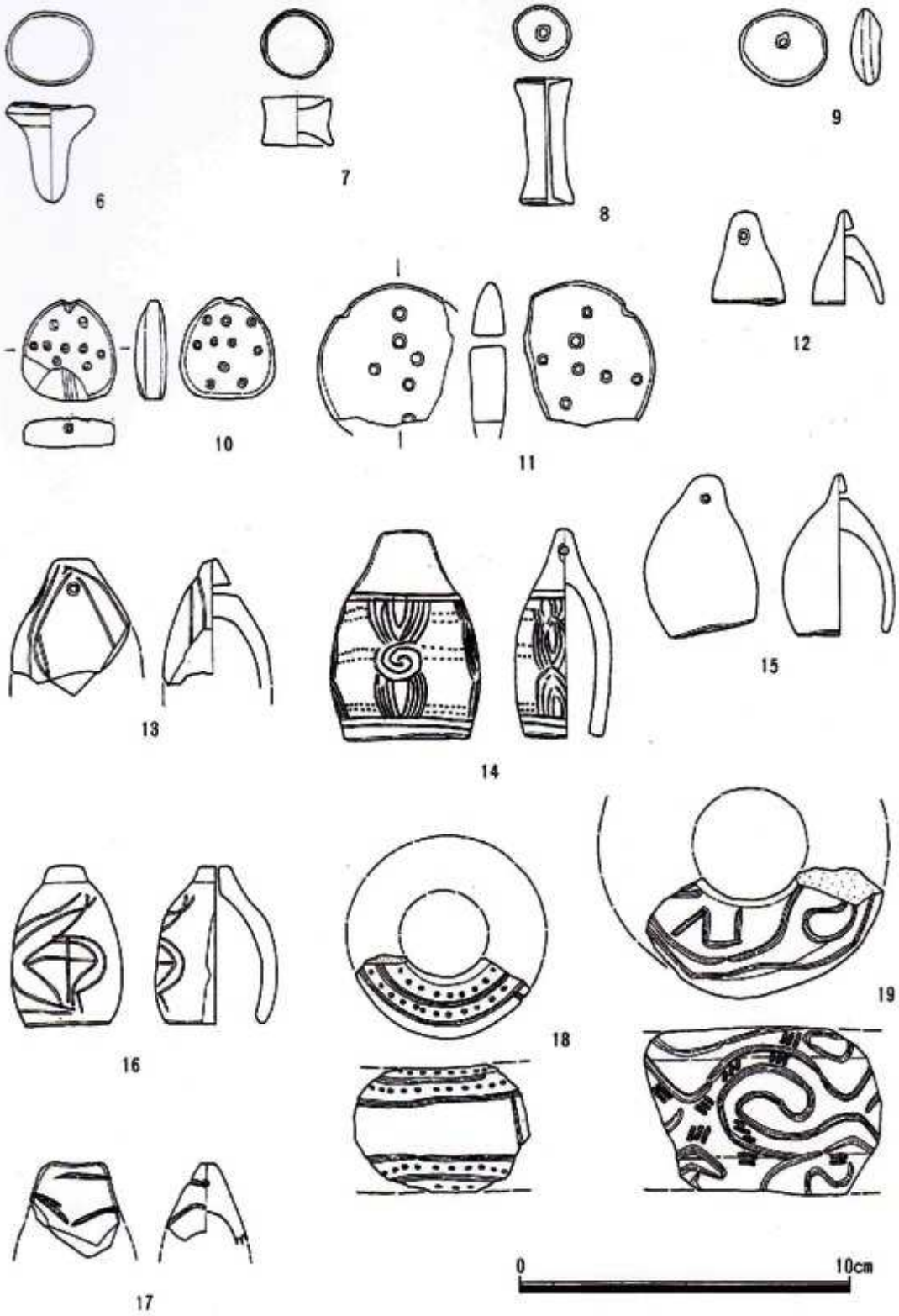
第27図　土器片利用土製品分布密度図

口縁部や底部片の利用もみられるが、胴部片が多用されている。また、特定の文様の土器片が利用される傾向はみられない。

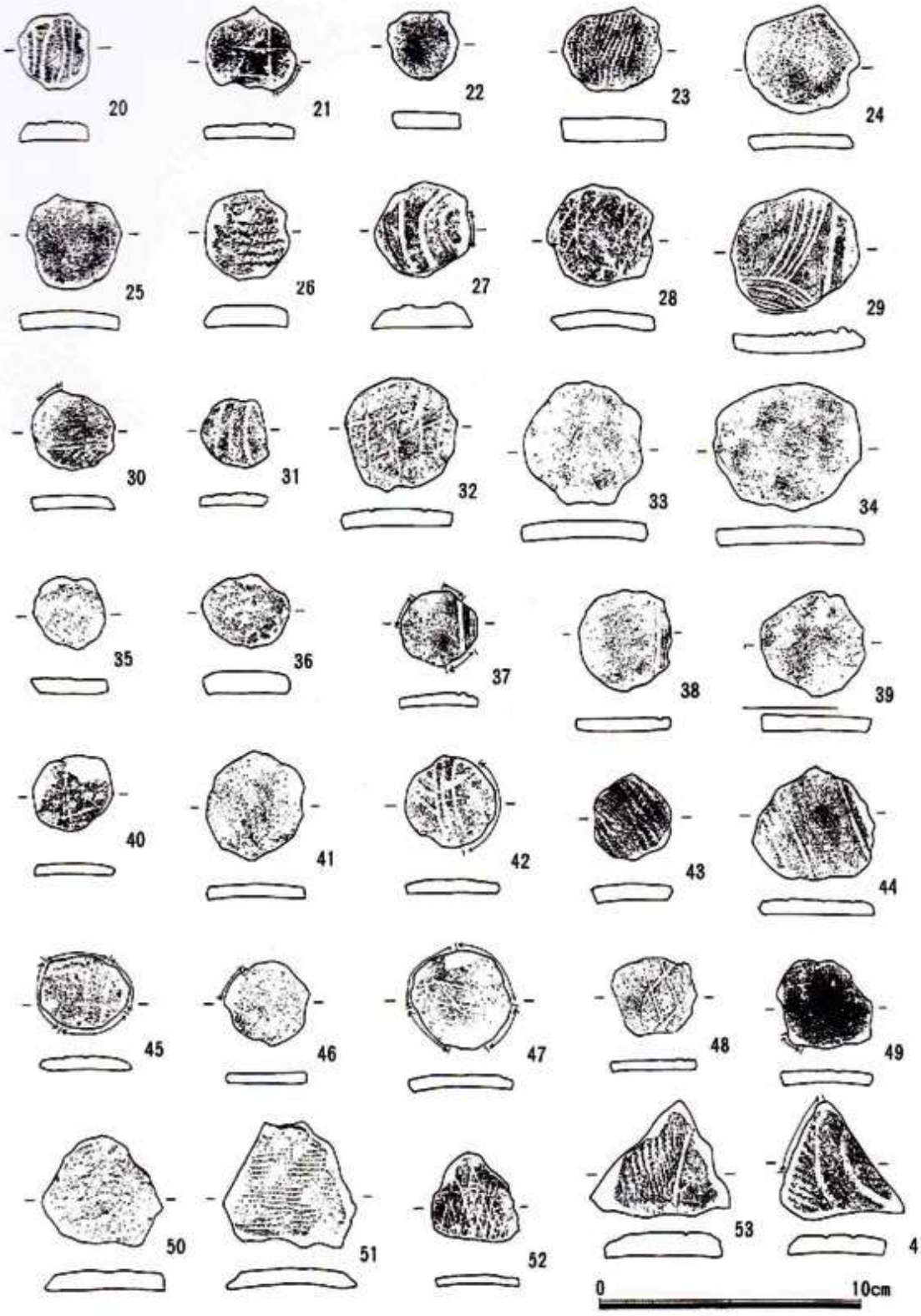
出土状況は第27図のとおりで、土器の出土状況と大差なく、特殊な分布とは考えられない。



第28図　F_3区遺構外出土土製品実測図(1)



第29図　F_3区遺構外出土土製品実測図(2)



第30図　F_3区遺構外出土土製品実測図(3)

(4) **石製品**（第31図）

F_3区遺構外から出土した石製品は、石剣・石刀４点、円盤状石製品９点、軽石製石製品１点、その他の石製品１点の計15点である。

石剣・石刀（第31図１～４）

１、２は石刀、３、４は石剣である。

１は、903号配石遺構に隣接して出土した内反り形の石刀である。刃部先端を欠いており、残存長は16.1cmである。柄と刃部とは明確に区別され、背面には溝を有する。石材は粘板岩。

２は、石刀の刃部破片で、残存長は8.8cm、ＹＩ－112グリッド・Ⅲd層上面からの出土である。石材は粘板岩。

３、４は石剣の先端部で、３はＹＪ－108グリッド・Ⅲd層、４はＹＨ－110グリッド・Ⅲd層からの出土である。石材は３が粘板岩、４が泥岩。

円盤状石製品（第31図６～14）

石を円形に打ち欠き、周縁及び表、裏面を擦って成形したもので、径3.4～5.4cm、厚さは７～12mmである。６、７には沈線文が掘り込まれている。また、14は打ち欠きのみで、擦りによる整形が施こされていない。石材は、泥質凝灰岩がほとんどである。これらの石製品はF_3区西部のＹＪ～ＹＧ－107～109グリッドに偏在している。

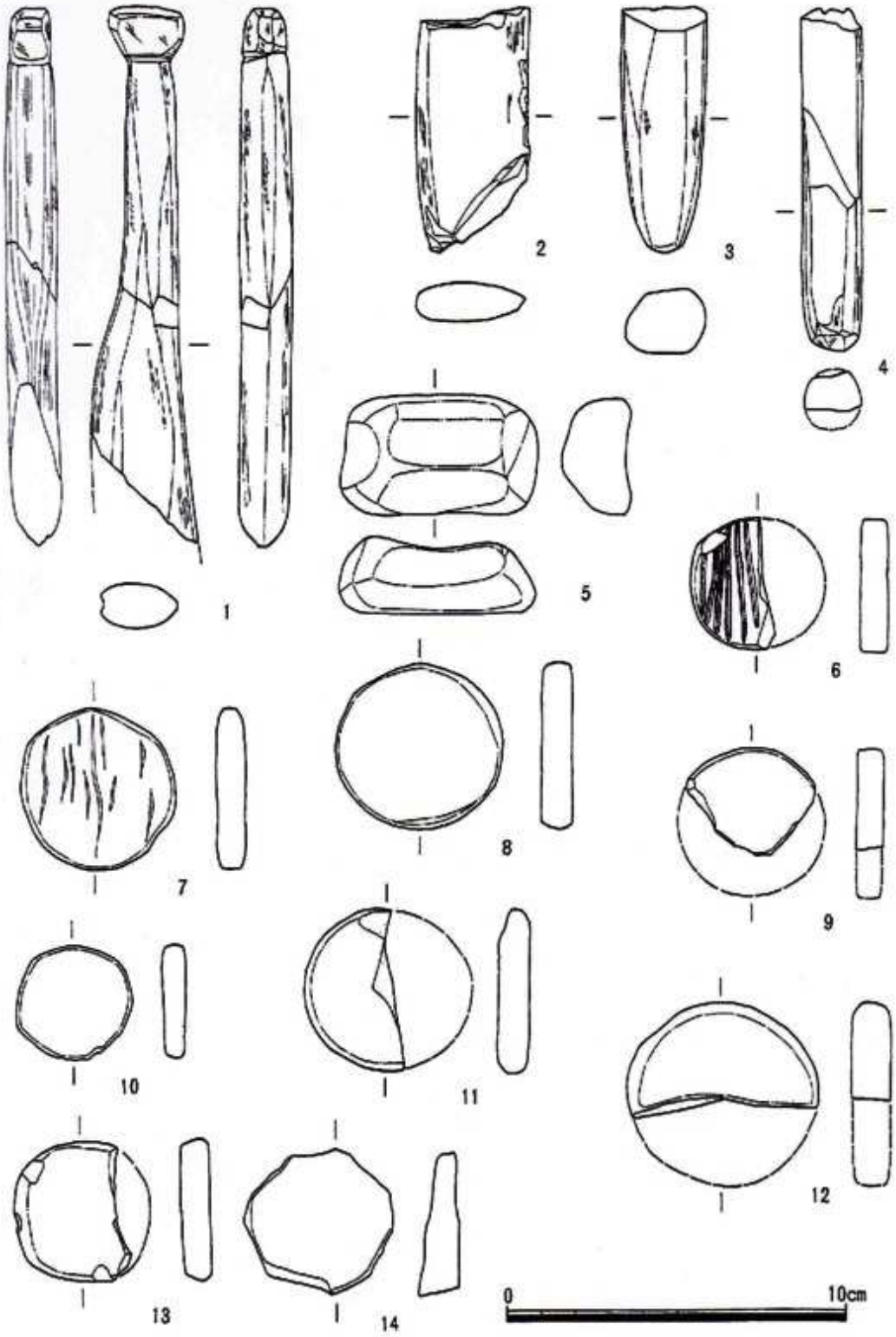
軽石製石製品

気孔に富み海綿状の軽石を隅丸方形、板状に整形したもので、F_3区からはＹＪ－107グリッド・Ⅲd層より１点が出土している。欠損品であり、大きさは不明、厚さは2.0cm、石材は軽石（石英安山岩）である。

その他の石製品（第31図５）

５は、枕状の小型の石製品で、上面中央が擦りくぼめられている。長さ5.8cm、幅3.6cm、厚さ2.3cm、石材は凝灰質泥岩である。

（秋元信夫）



第31図　F_3区遺構外出土石製品実測図

第Ⅳ章　D_5区の検出遺構と出土遺物

D_5区において検出された遺構は、縄文時代の環状配石遺構２基、直線状列石１基、配石遺構１基、石囲炉１基、Ｔピット１基、土壙２基、歴史時代の竪穴住居跡１軒である。また、遺構内・外より完形あるいは復元土器111個体、縄文土器片ダンボール箱48箱、石器564点、剥片２箱、土製品186点、石製品34点が出土している。

１．配石遺構

(1)　環状配石遺構

第909号環状配石遺構（第32、33図）

D_5区南西端のＹＢ～ＺＺ－97～99グリッドに位置する。Ⅲb層上面で配石の一部を確認、Ⅲd層上面で全配石が検出された。

配石は環帯部と張り出し部からなり、石の総数は223個である。

南東部が攪乱され、消失しているが、環帯部は径8.8ｍの環状で、環帯の幅は32～56cm、10～52cm大の細長の石の長軸方向を繋いで、３～４列に敷き並べていたものと考えられる。

張り出し部は環帯の南部に付設されている。扇形に16～50cm大の扁平な石が敷かれ、外縁には細長の石を繋いで縁取りをするかのように配置されている。なお、張り出し部の規模は1.8×2.6ｍである。

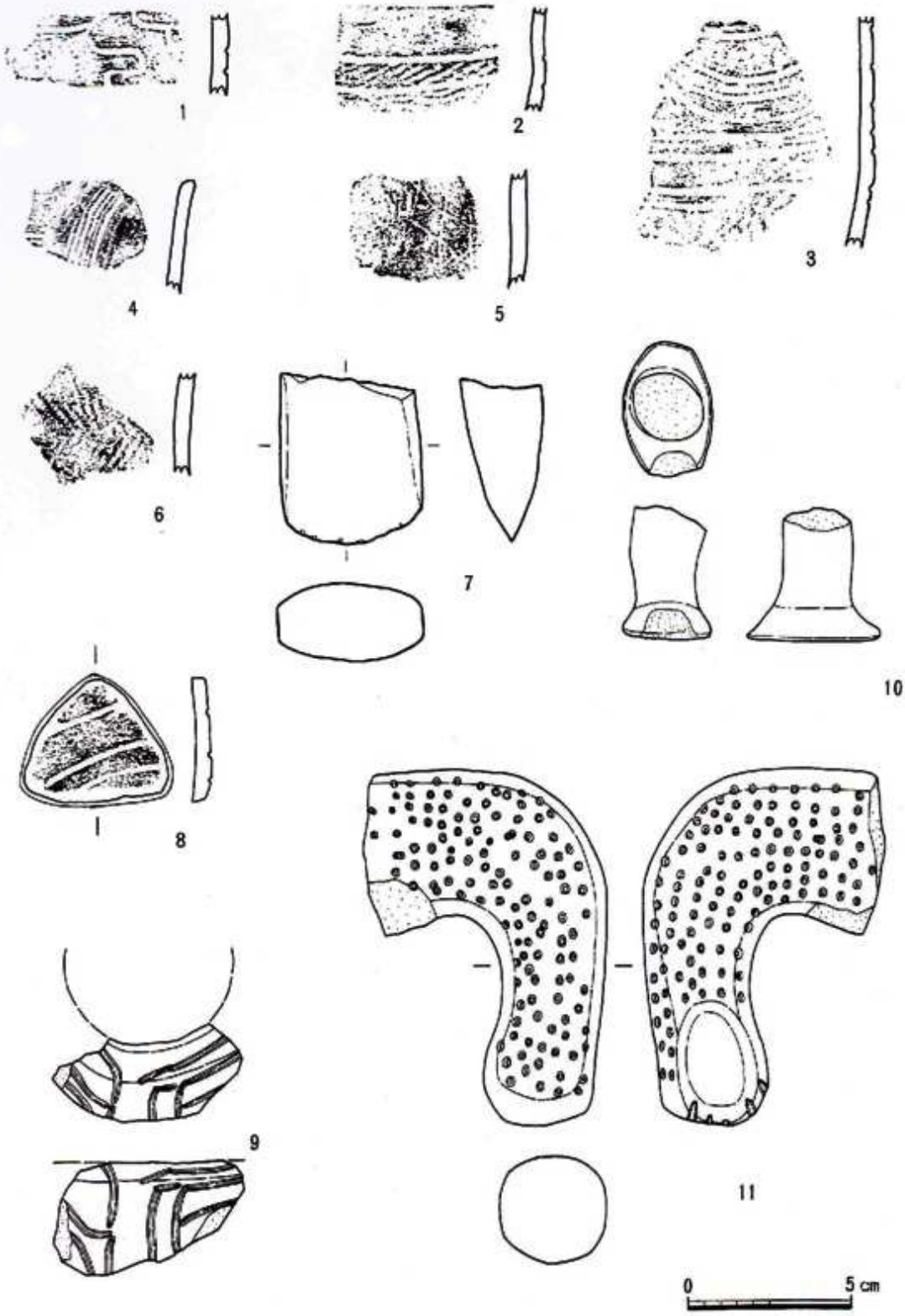
配石は石英閃緑玢岩、石英安山岩、流紋岩、凝灰岩などで構成され、石英閃緑玢岩が約90%を占める。

環内部及び外部付近を精査したが、本遺構に伴うような施設は確認されなかった。ただし配石直下は未調査である。

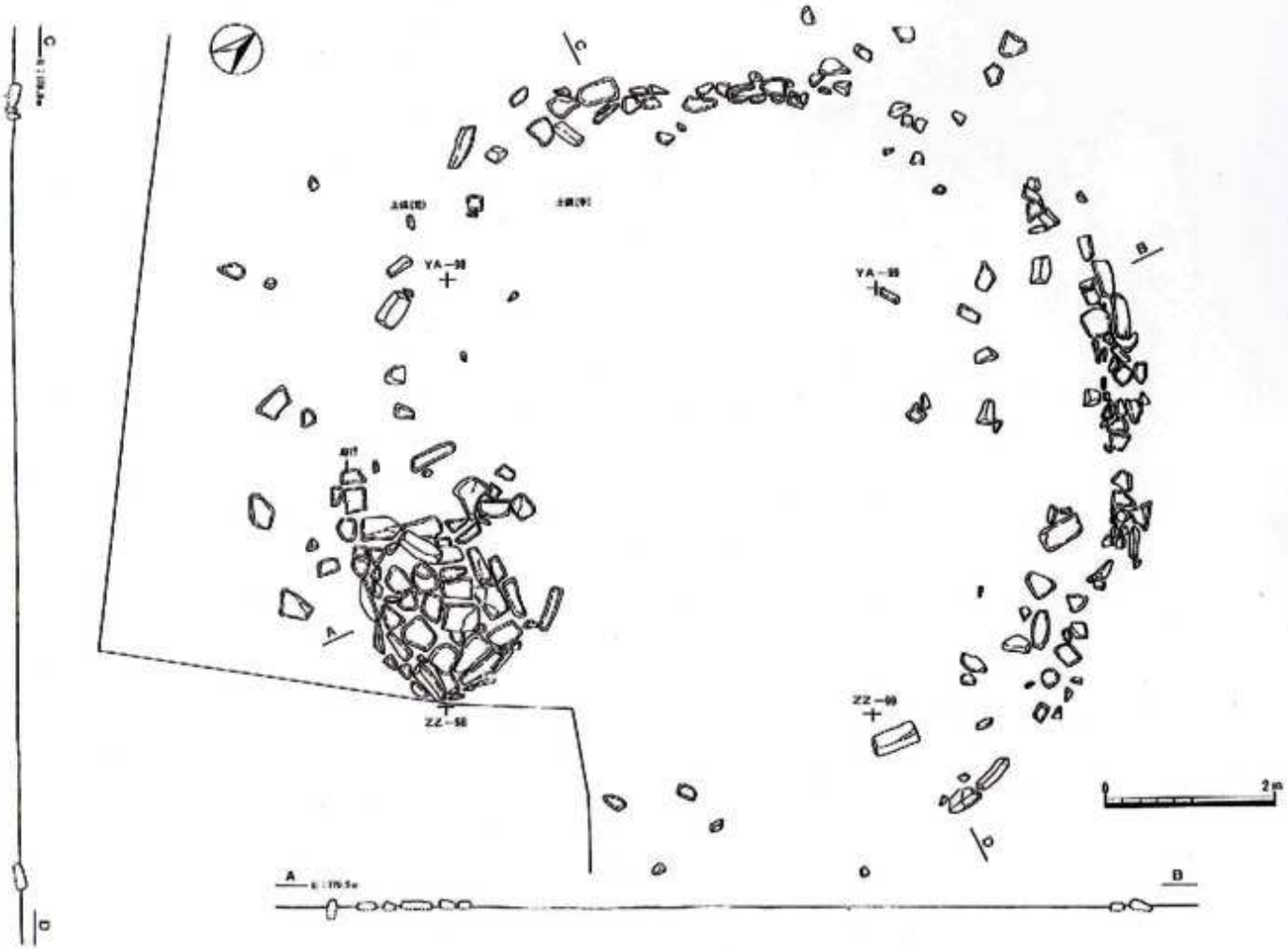
配石内及び周辺の構築面からは、縄文土器片31点、磨製石斧１点、土偶腕、足、環状土製品、土器片利用土製品各１点の出土があった。

第32図７は環帯南南西部出土の磨製石斧、10は同南西部出土の土偶の右足で、D_5区西端のＹＢ－103グリッド・Ⅲd層出土の土偶（63図７）に接合する。11は大型の土偶の左腕、９は環状土製品の一部である。

これらの出土遺物及び配石構築面から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。



第32図　第909号環状配石遺構周辺出土遺物



第33図　第909号環状配石遺構実測図

第910号環状配石遺構

（第34、35図）

D_5区南西端のＺＹ～ＺＸ－98グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面としている。北西側には909号環状配石遺構が近接している。

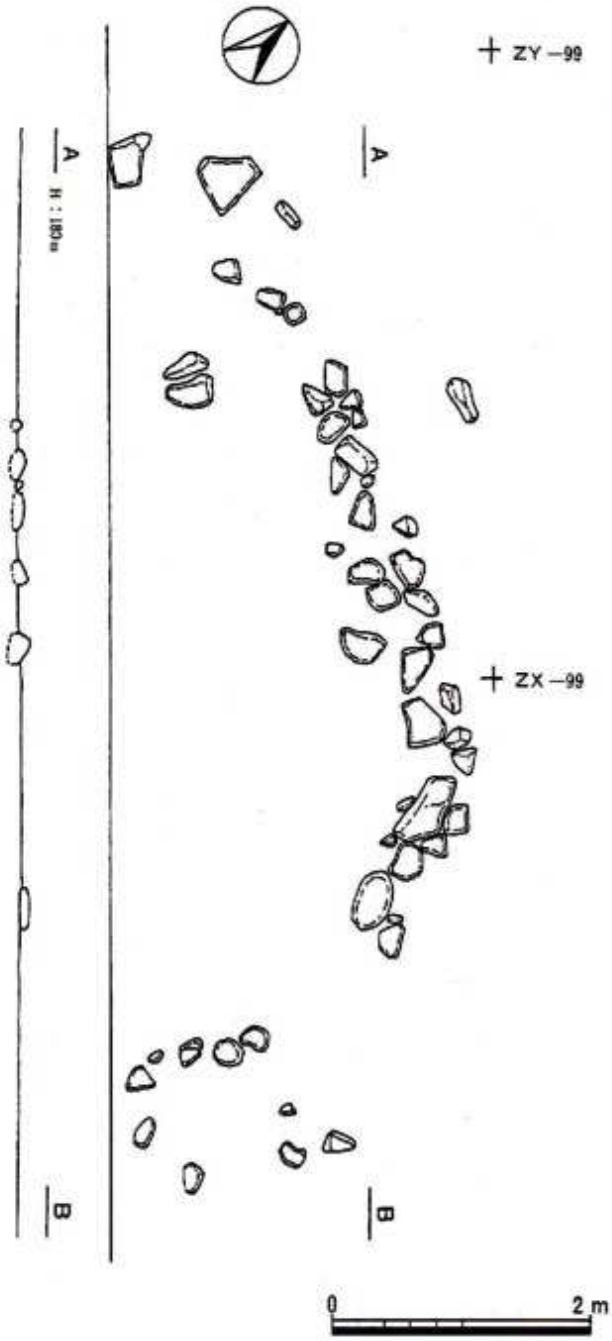
南西側が調査区域外のため、未調査であるが、環帯部は径８ｍ位の規模と考えられる。環帯の幅は40～52㎝で、15～60㎝大の細長の石が２～３列に敷き並べられている。

調査区域内では張り出し部は確認されず、未調査部分に付設されているものと考えられる。検出された石の総数は50個で、これらの石材は石英閃緑玢岩、石英安山岩、泥質凝灰岩、緑色凝灰岩等であるが、石英閃緑玢岩が約80％を占める。

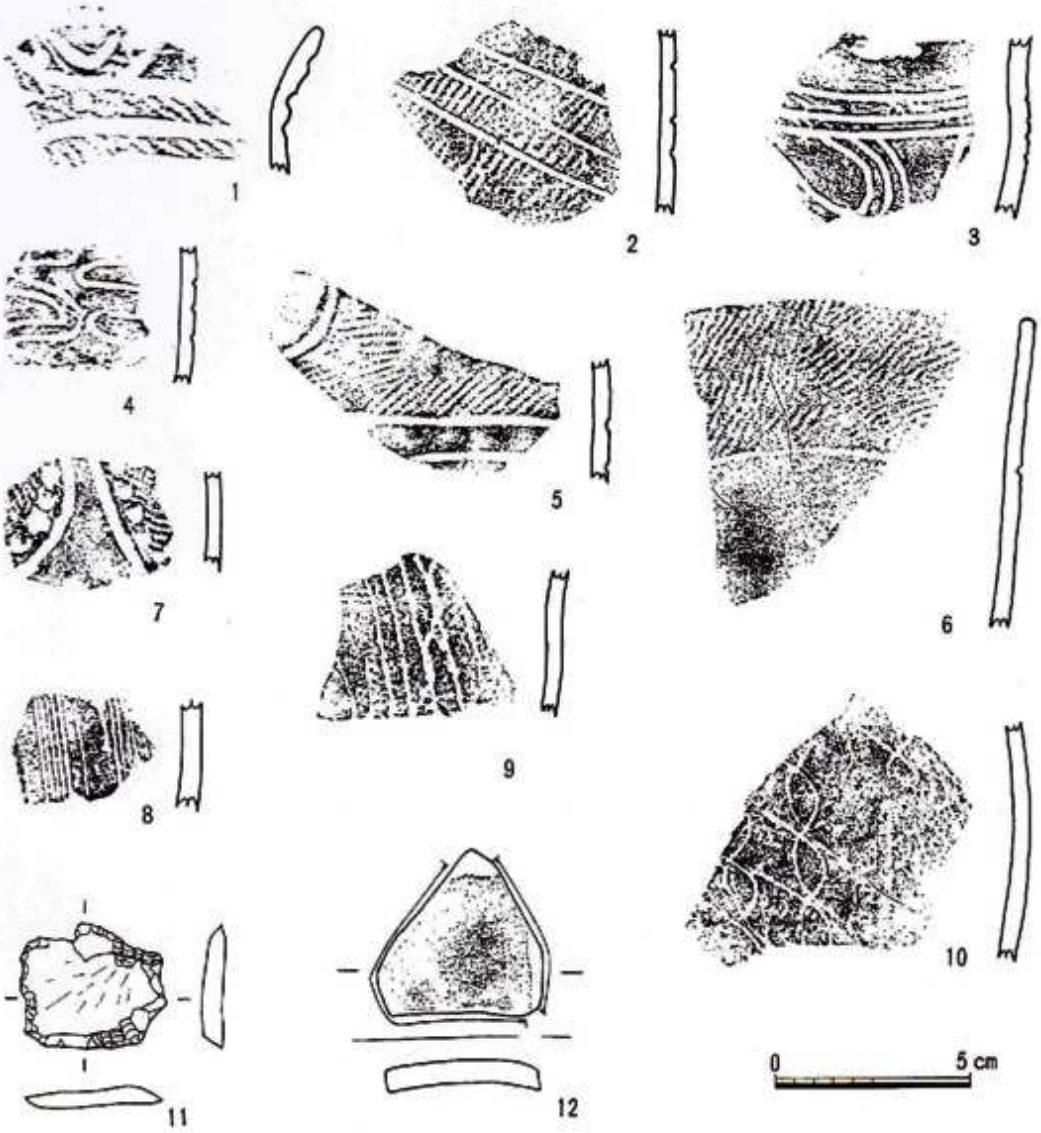
環内部及び外部付近より、本遺構に伴う施設は確認されていない。ただし、909号環状配石遺構同様、配石直下は未調査のため、その有無は不明である。

配石内及び周辺の構築面からは、縄文土器片131点、掻器１点、土器片利用土製品１点の出土があった。

これらの出土遺物及び配石構築面から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前～中葉と考えられる。



第34図　第910号環状配石遺構実測図



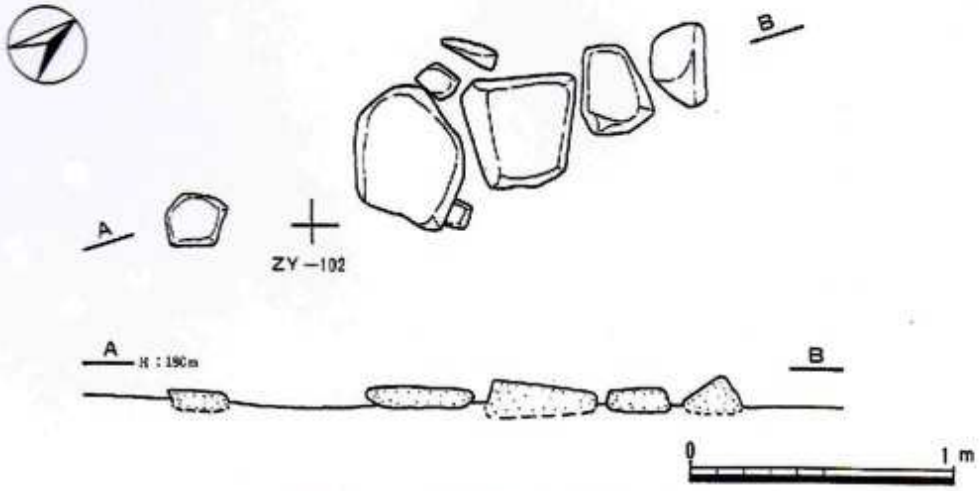
第35図　第910号環状配石遺構周辺出土遺物

(2) 直線状列石

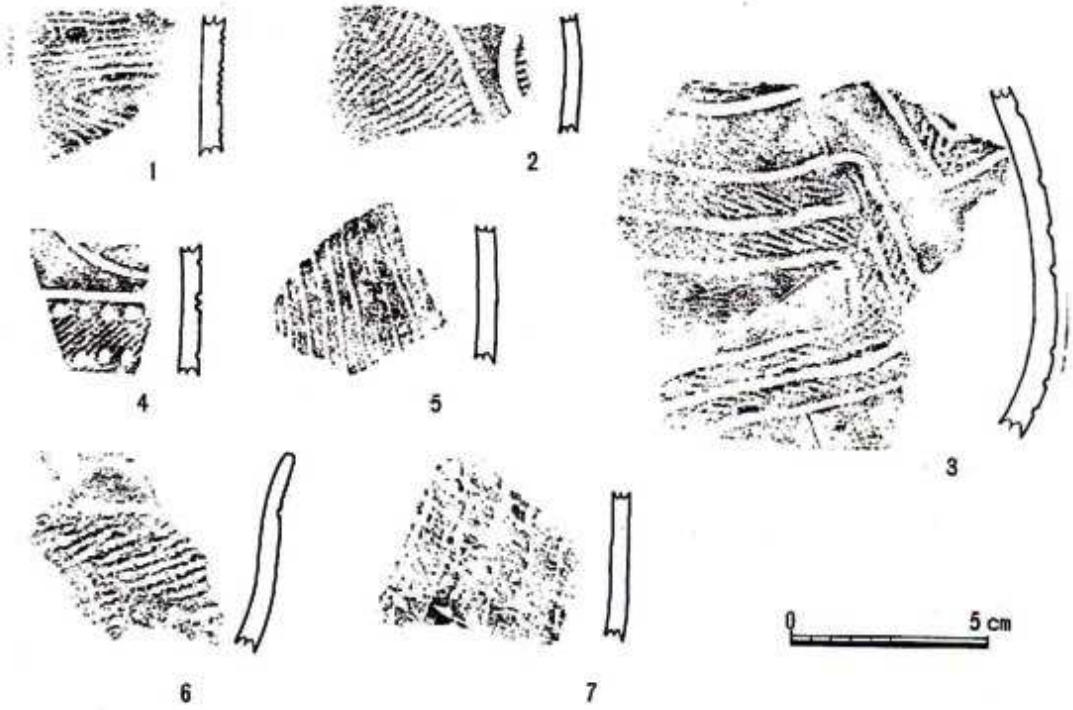
第907号直線状列石（第36、37図）

D_6区中央部南寄りのＺＺ～ＺＹ－101～102グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面としている。24～58cm大の扁平な石５個がＮ－22°－Ｅの方向に直線状に配置されている。北側の密に置かれた４個の石列の長さは1.8m、５個目までの長さは2.2mである。なお、これらの石は全て、石英閃緑玢岩である。

列石下については未調査のため不明。周辺の構築面からは88点の土器片の出土があった。これらの遺物及び列石構築面から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前～中葉と考えられる。



第36図　第907号直線状列石実測図



第37図　第907号直線状列石周辺出土遺物

(3)　その他の配石遺構

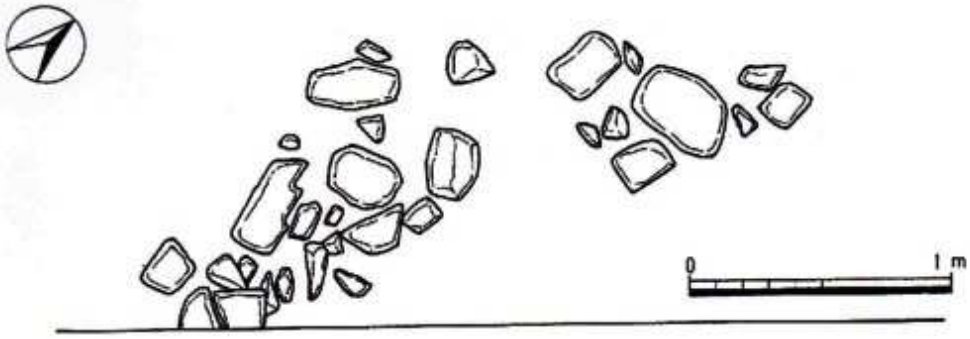
第906号配石遺構（第38図）

D_5区南東端のＺＸ－101～102グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面としている。

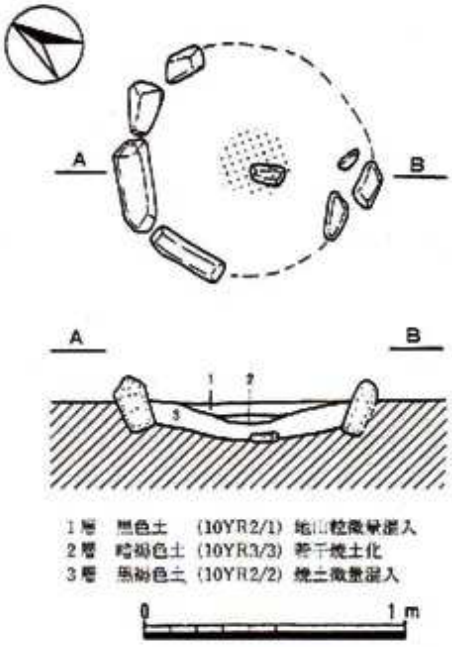
7～42cm大の石31個が2.6×1.0mの範囲に配石されている。北東側と南西側に2分され、2基の配石遺構である可能性もある。なお、南西側については調査区域外に若干延びるものと考えられる。本配石には石英閃緑玢岩、石英安山岩、凝灰岩等が使用されているが、石英閃緑玢岩がほとんどである。

配石下については未調査のため不明。

周辺の出土遺物及び構築面から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前～中葉と考えられる。



第38図　第906号配石遺構実測図



第39図　第908号石囲炉実測図

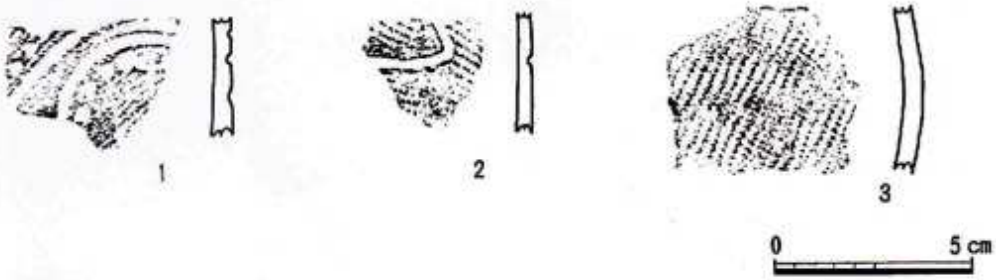
2．石囲炉

第908号石囲炉（第39、40図）

D_5区南西部のＺＺ－100～101グリッドに位置し、Ⅲd層上面を構築面としている。

耕作により半壊しているが、26～38cm大の石を径90cmの円形に配した石囲炉と考えられる。炉内24～26cmの範囲で、最大層厚3cmの若干焼土化した土が確認されている。また、炉石の内側はかなりの熱を受けたように赤変していた。なお炉石は石英閃緑玢岩及び緑色凝灰岩である。

炉内より9点の土器片の出土があり、これらの遺物より、本遺構の構築時期は縄文時代後期前～中葉と考えられる。



第40図　第908号石囲炉出土遺物

3．土壙

(1)　Tピット

第908号Tピット（第41図）

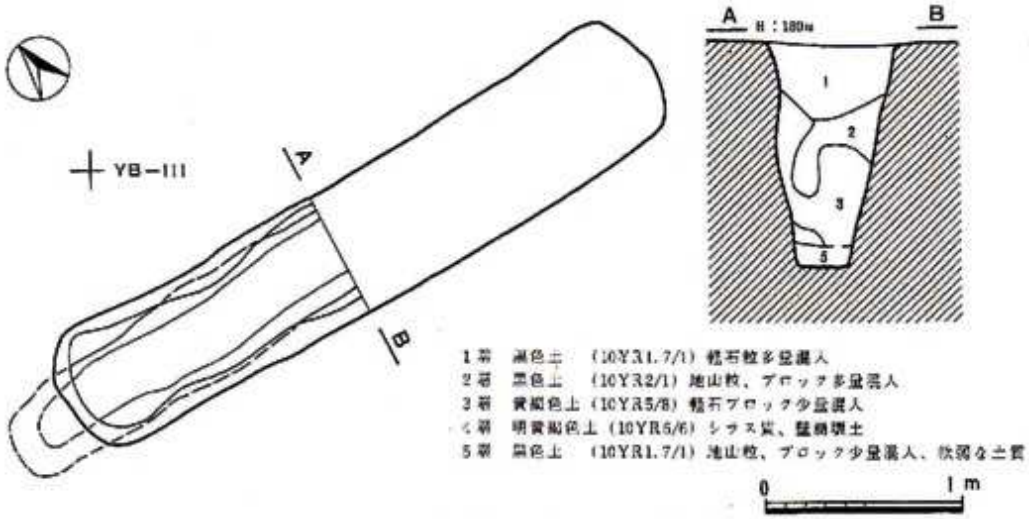
D_n区北東部のＹＣ～ＹＢ－110～111グリッド、Ⅳ層において、黒色の長楕円形の落ち込みを確認した。本遺構周辺は小丘状の微高地であり、耕作等によりⅣ層まで攪乱が及んでおり、本来の構築面はⅢd層上面であったものと考えられる。

規模は長軸348cm、短軸68cm、確認面からの深さは116cm、長軸方向はＮ－79°－Ｗである。

Ⅵ層を掘り込み底面としているため、底面は軟弱である。

堆積土は５ブロックに区分され、人為堆積と考えられる。

本遺構からの遺物の出土はないが、周辺の出土遺物から縄文時代の構築と考えられる。



第41図　第908号Tピット実測図

(2) 土壙

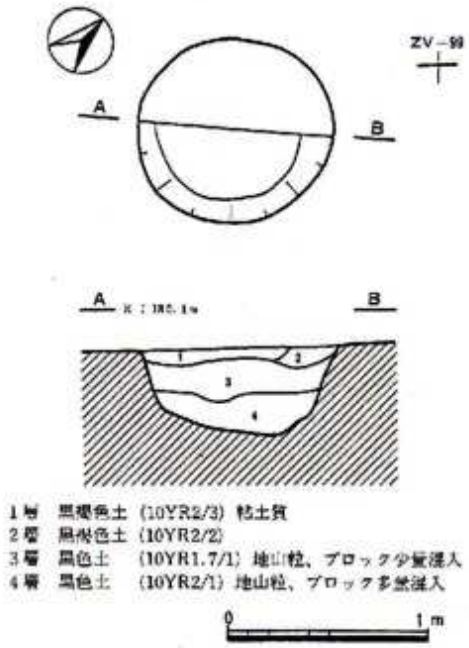
第909号土壙（第42、43図）

D_5区南端のＺＷ～ＺＶ－98グリッドに位置する。Ⅲd層上面での確認である。

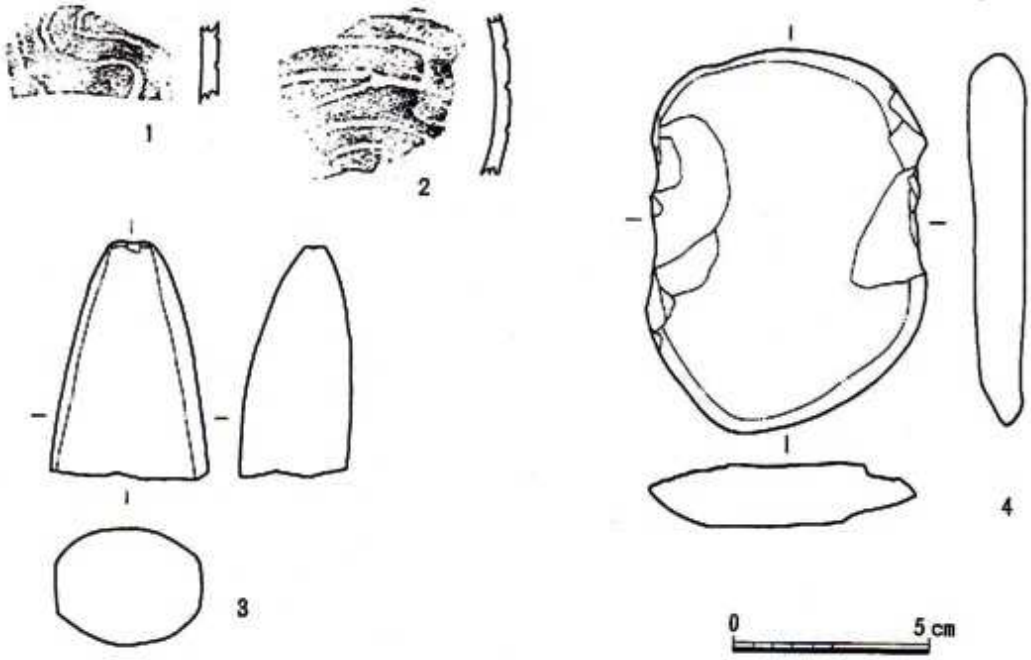
平面形は円形で、その規模は長軸98cm、短軸94cmである。Ⅲd層からＶ層中位面まで掘り込み底面としており、その断面形は凸レンズ状、深さは46cmである。

堆積土は４層に区分でき、人為堆積と考えられる。

南東側半分の発掘により、縄文土器片16点、磨製石斧、石錘各１点の出土があった。これらの出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。



第42図　第909号土壙実測図



第43図　第909号土壙出土遺物

第910号土壙（第44、45～46図）

D_5区南西部のＺＺ－99～100グリッドに位置する。Ⅲd層上面での確認である。

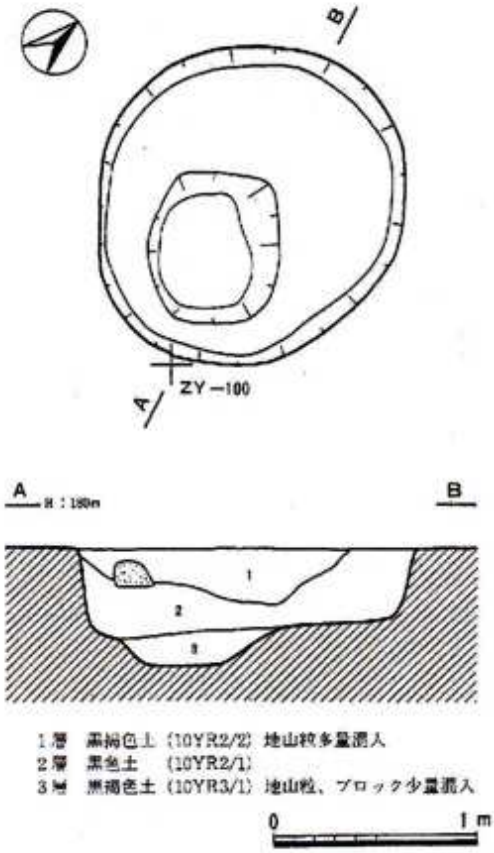
平面形は円形で、その規模は長軸170cm、短軸152cmである。底面は二段構造で、下段はＶ層下位まで掘り込まれている。上段はほぼ平坦で、確認面からの深さは38cm、下段はレンズ状で、確認面からは60cmの深さである。

堆積土は３層に区分され、人為堆積と考えられる。

本遺構からは、完形・復元土器２個体、土器片400点強、掻器２点、石錘、凹石、石刀、有孔石製品各１点の出土があった。

46図18、19は覆土下位出土の完形及び復元土器で、18は器高24.0cmの片口土器、19は底径7.6cmの壺形土器である。18の口縁部から胴部上半には入組文、花弁文等が施文され、ＲＬＲ縄文が充填されている。19は無文の土器で器面内外に赤色顔料の塗付の痕跡がみられる。

これらの出土遺物から、本遺構の構築時期は縄文時代後期前葉と考えられる。



第44図　第910号土壙実測図

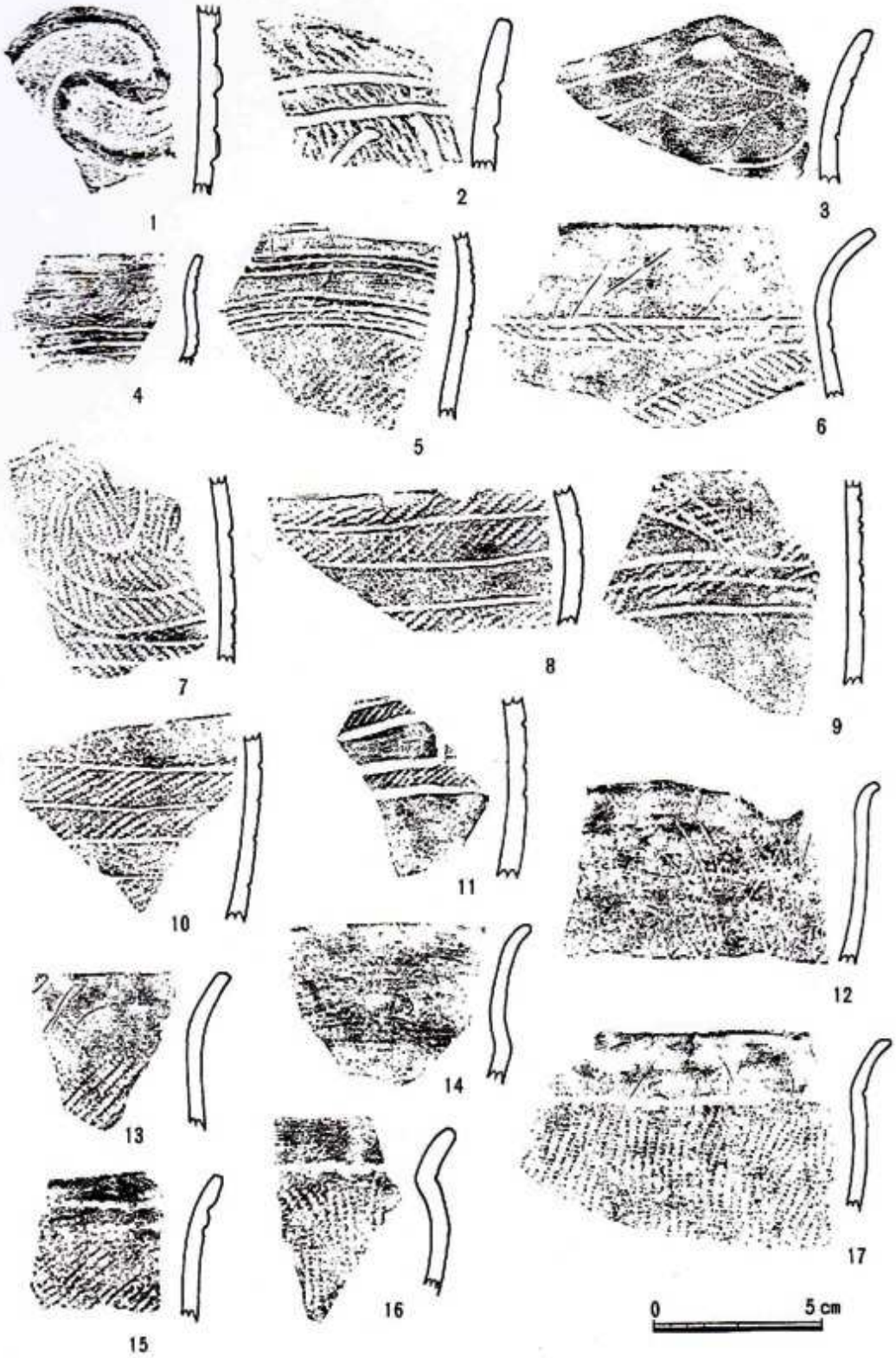
４．竪穴住居跡

第901号竪穴住居跡（第47図）

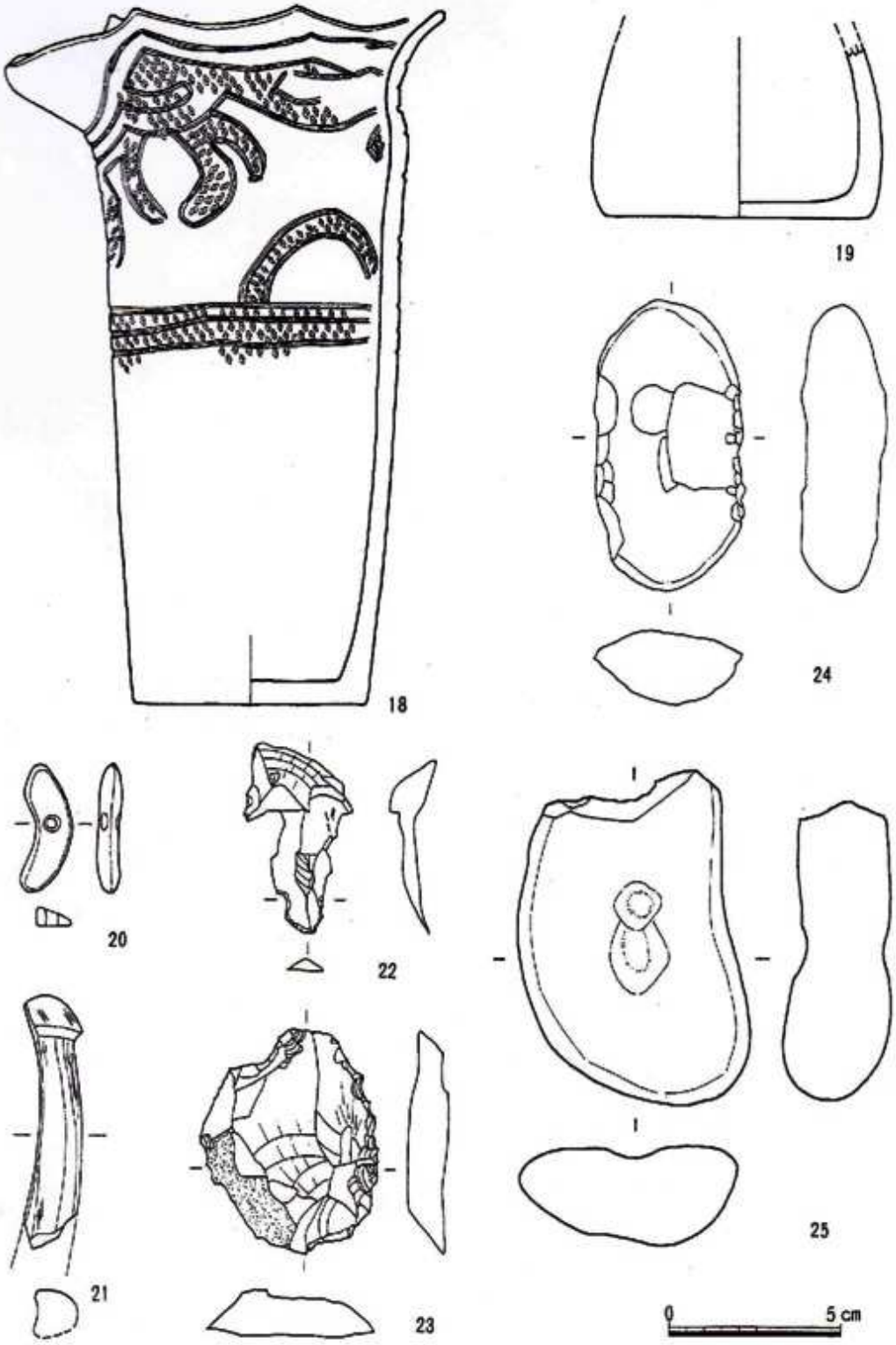
D_5区北西端のＹＣ～ＹＢ－104～105グリッド、Ⅱ層（大湯浮石層）上面で確認した。本遺構西側が若干調査区域外であるが、一辺3.5ｍの方形プランで、南西壁の北東側に長さ84cm、幅110cmのスロープ状張り出しを持つ構造と考えられる。なお、主軸方向はＮ－37°－Ｅである。

壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北東壁26cm、南東壁41cm、南西壁31cmである。

Ｖ層を若干掘り込んだ面を床面としている。ほぼ平坦で、中央部から西部にかけ堅く踏みしめられている。各壁隅及びその中間に柱穴を有する。これらの柱穴は径22～32cm、深さ56～63



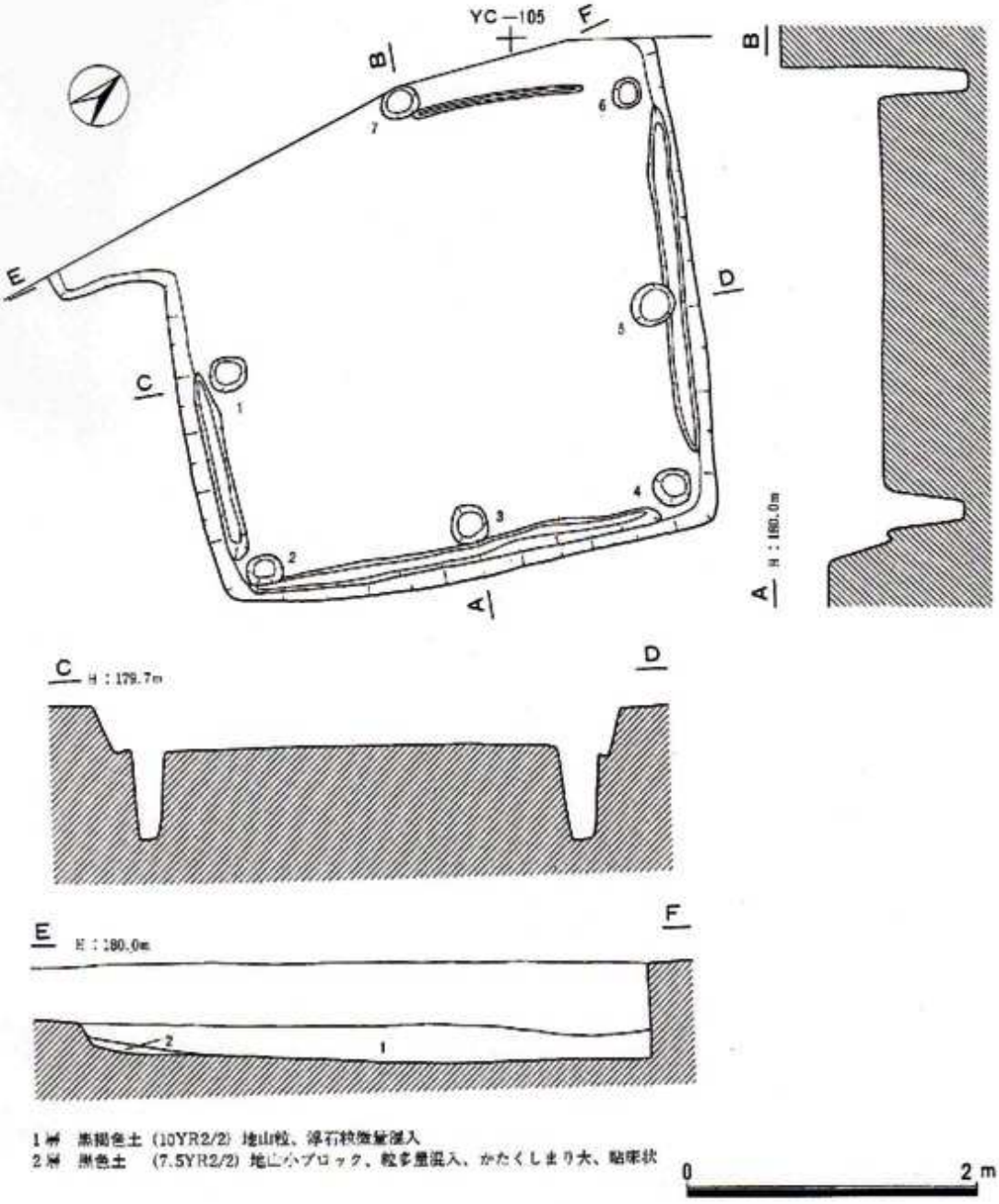
第45図　第910号土壙出土遺物(1)



第46図　第910号土壙出土遺物(2)

cmの規模である。また、張り出し部を除き、壁際から幅12～18cm、深さ５～８cmの周溝が確認されている。

本遺構からは縄文土器片等、縄文時代の遺物しか出土していないが、遺構確認面から本遺構の構築時期は大湯浮石降下（平安時代後半）以後と考えられる。



第47図　第901号竪穴住居跡実測図

5 .遺構外出土遺物

(1) 土器（第48～50、ＰＬ27～36）

D_5区遺構外からは、完形及び復元可能な土器109個体、土器片ダンボール箱46箱の出土があった。これらの土器は、数点の縄文時代早期の土器を除き、縄文時代後期に位置づけられるもので、その大半は後期前葉のものである。

土器を初めとする遺物は、D_5区の中央部から南西側にかけて多く分布し、特に中央部から若干南西に寄ったＹＣ～ＺＸ－102～104グリッドに密集していた。

層的には、明らかに攪乱と考えられるⅠ～Ⅱ層出土の土器を除くとⅢa～Ⅲd層から出土しており、特にⅢb層からⅢd層上位からの出土量が多い。

本地区はF_3区ほど攪乱を受けていないが、縄文時代の文化層が薄く、Ⅲa～Ⅲb層からⅢ、Ⅳ群、Ⅲb～Ⅲd層からⅠ、Ⅱ群の土器が多く出土する傾向を把握できる程度で、出土土器と層序との関係を明確にできていない。

第Ⅰ群　早期の土器（ＰＬ27－11）

１類　貝殻沈線文の土器（ＰＬ27－11）

沈線文と貝殻腹縁文を組合せ、幾何学的な文様が展開されている。胎土には小礫及び砂粒を混入、焼成は良好、色調はにぶい黄橙色である。ＺＺ－103グリッドのⅢd層からの出土である。

第Ⅱ群　後期初頭から前葉の土器（第48図１～８、49図９～10、ＰＬ27－１～10、ＰＬ28－12～19、29－20～31、30－32～34、38、32－56～57）

本群には、縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器を一括した。東北地方北部の前十腰内、十腰内Ⅰ式、東北地方南部の宮戸Ⅰ式、南境式に比定されるもので、本群のほとんどは大湯式と呼ばれているものである。

１類　隆線文、隆沈文の土器

２類　地文上に沈線文が施文される土器（ＰＬ27－９～10）

地文上に１～３条の沈線で曲線文、直線文が施文されるもので、文様帯は平行沈線により、胴部上半に区画されるものが多い。地文にはＲＬ縄文が多用される。

９、10とも深鉢で、底径は９が11.5cm、10が7.5cmである。焼成はやや良好で、９の色調はにぶい黄橙色、10は灰黄褐色である。９はＺＷ－100グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、10はＺＺ－103グリッド・Ⅲb層からの出土である。

３類　沈線文の土器（第48図１～４、６、ＰＬ27－１～８、32－56～57）

本類には、無文研磨された器面に２～４条の平行沈線により文様が描かれたものを一括した。口縁部や胴部中央に区画文として隆沈文が使用されている土器も本類とした。

ＰＬ27－１は推定口径4.2cmのミニチュアの鉢で、底部に４個の脚を有する。器面ほぼ全面に

斜方向の沈線文が施文されている。2は口径18.5cmの浅鉢で、折り返し口縁下から体部上半に3段の長楕円形文が施文されている。3は口径14.9cmの浅鉢で、折り返し口縁下に1条の沈線を有する。

4～6及び8は胴部上半に花弁文を有する深鉢形土器で、4には口縁部にも花弁文が付加されている。これらの文様は4個の頂部をもつ波状口縁の波頂下及びその間に施文されている。4、6、8の口径はそれぞれ10.0cm、22.0cm、15.1cm、5の底径は4.8cmである。

7は底径7.2cmの深鉢で、平行沈線により区画された胴部上半の文様帯に3条の平行沈線により、縦位及び横位の孤状文が施文されている。

56は壺の口縁部で、口径12.1cm、57は径5.8cm、高さ4.6cmの蓋である。

本類の土器の焼成は良好なものが多く、色調はにぶい黄褐色、にぶい黄橙色、黄灰色等である。またＹＡ～ＺＹ－103～104グリッドのⅢa－Ⅲd層から多く出土している。

4類　磨消縄文を主体とする土器（第48図5、7～8、49図9～10、ＰＬ28－12～19、29－20～31、30－32～34、38）

2～3条の平行沈線により、入組状曲線文、花弁文、階段状文等を施文、平行沈線間に縄文を有する土器類で、磨消縄文は充填技法によるものがほとんどである。地文にはＬＲ縄文、ＲＬ縄文が多用され、ＬＲＬ縄文、Ｌ縄文等も少数みられる。深鉢、壺が多いが、他に鉢、片口土器等もある。

ＰＬ28－12～14、17は花弁文が施文された壺で、器高は12が15.9cm、13が14.3cm、14が18.8cmである。15～16、25、30は入組状曲線文の壺、18～24、26～27は入組状曲線文を主文様とする深鉢形土器である。30の器高は21.5cm、19の口径は33.0cm、25の底径は7.5cmである。32は「く」字文の深鉢、33、34、38は階段状文の壺及び深鉢である。32の口径は14.5cm、33、38の器高はそれぞれ11.9cm、30.0cmである。

本類の土器の焼成は、大型のものにやや不良のものもみられるが、全体的には良好、色調はにぶい黄橙色、にぶい橙色、浅黄橙色等である。ＹＡ～ＺＸ－102～104グリッドのⅢb～Ⅲd層からの出土が多い。

第Ⅲ群　後期中葉の土器（第49図11～15、ＰＬ30－37、39～44、31－45～54、32－58～62）

本群には、縄文時代後期中葉に位置づけられる土器を一括した。東北地方北部の十腰内Ⅱ式、Ⅲ式、東北地方南部の宮戸Ⅱ式、宝ヶ峰式、関東地方の加曽利B_1、B_2式に比定される。

1類　平行線化した磨消縄文帯を有する土器（第49図11～12、ＰＬ30－35～36、40～42）

3～5条ほどの平行沈線部分に磨消技法により縄文が施文されている土器類である。

ＰＬ30－35は3個の頂部をもつ波状口縁の小型深鉢で、口径9.0cm、器高10.0cmである。波頂部から口縁部にかけ「Ｓ」字状の貼付文を有する。36、40～42の沈線文間は「Ｓ」字状沈線

文あるいは孤状沈線文で連結されている。36は底径3.1cmの深鉢、40は口径15.0cm、器高7.0cmの浅鉢、42は底径5.9cmの深鉢である。

本類の土器にはＬＲの細縄文が多用されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、褐色、にぶい黄橙色等である。ＺＺ～ＺＸ－104グリッドのⅢa～Ⅲb層に集中している。

２類　磨消縄文の土器（ＰＬ30－37、43～44、31－45～51、54）

磨消縄文により曲線文、直線文の施文される土器類で、第Ⅱ群４類が２～３条の平行沈線文で文様が構成されるのに対し、本類は１条の沈線により文様が形づくられ、平行線状の文様の場合もその幅は広い。また文様帯は胴部下半にまで及ぶようになる。

ＰＬ30－37は、口径21.3cm、器高19.5cmの平口縁の深鉢で、外傾する口縁部には地文上に竹管文が施文されている。また胴部には長方形文が２段描かれ、その外側の地文が磨消されている。

43は底径5.0cmの壺で、胴部上半に幅の広い帯縄文が施文されている。44は台付の壺あるいは鉢で、底径は6.6cmである。縦位に鋸歯状の沈線６列を施文、１つおきに沈線間の地文を磨消している。45は底径4.0cmの壺で、３段の円文６列を施文、区画文外を磨消している。また、46は底径4.2cmの壺で、幅広の帯状文で入組状曲線文が施文されている。

47は口径13.6cmで、鉢状であるが、底部を有しない。穴のあいた蓋であろうか。十字形の文様が描かれ、その内側が磨消されている。

51、54は同一個体で、突起を有する深鉢形土器である。直線文と逆「Ｃ」字文により区画された区画文外が磨消されている。

本類の土器の地文にはＬＲ、ＲＬ縄文が使用され、大型の土器を除いて細かい縄文原体が多用されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、にぶい褐色、灰褐色、黒褐色等である。ＹＡ～ＺＸ－103～104グリッドからの出土がほとんどで、特にＺＺ～ＺＹ－104グリッドからの出土が多い。層序的にはⅢa～Ⅲb層からの出土が多い。

３類　磨消縄文に刺突文が伴う土器（ＰＬ31－52～53）

曲線的な磨消縄文を構成する沈線や帯縄文に連続刺突文が付加された文様の土器類である。

52は３つの頂部をもつ波状口縁の深鉢で、帯縄文や区画文に刺突文が付加されている。53は台付深鉢で、文様帯を区画する帯縄文間に連続刺突文が施文されている。いずれも地文はＬＲ細縄文で焼成は良好で、色調は52がにぶい褐色、53がにぶい橙色である。ＹＢ、ＺＺ－103グリッドのⅢa～Ⅲb層から出土している。

４類　隆線文、隆沈文の土器（第49図13～15、ＰＬ32－60～62）

隆線文、隆沈文の土器を一括した。

ＰＬ60～62は注口土器である。60は口縁部に隆線文をもつ他は無文で、器高9.6cmである。

61～62は隆沈文により渦巻文をもつ楕円文、孤状文を主体とした文様が施文されている。61の底径は5.3cm、62の底径は4.7cm、器高は12.2cmである。

本類の土器の焼成は、60が不良である他は良好で、色調は62が黒褐色、他がにぶい黄橙色である。また、これらの土器はＹＢ－103及びＺＹ～ＺＸ－104グリッドのⅢa～Ⅲd層より出土している。

５類　多条沈線文の土器

第Ⅳ群　後期後葉から末葉の土器（ＰＬ31－55）

本群には、縄文時代後期後葉から末葉に位置づけられる土器を一括した。東北地方北部の十腰内Ⅳ式、Ⅴ式、東北地方南部の宮戸Ⅲ式、新地式に比定されるものである。

１類　浮彫文様の土器（ＰＬ32－58～59）

ＰＬ32－59は注口土器で、58も注口土器と考えられる。いずれも胴部上半に浮彫手法により曲線文や入組状曲線文が表出されている。59の底径は4.2cmである。焼成はいずれも良好で、色調は58は褐灰色、59は淡黄色である。ＹＡ、ＺＺ－103グリッドのⅢa～Ⅲd層の出土である。

２類　磨消縄文の土器（ＰＬ31－55）

ＰＬ31－55は、胴部上半でくびれる深鉢で、９個の突起とその間の小突起を有する口縁である。口縁突起部には瘤が付けられている。主要文様は入組帯状文で、区画帯内には刻目が充填されている。口縁部及び胴部中央の磨消縄文には、ＬＲ縄文が使用されている。口径33.5cm、器高41.0cm、焼成は良好で色調は明褐灰色である。ＺＹ－99グリッドのⅢa～Ⅲb層で出土している。

第Ⅴ群　後期の土器（第50図、ＰＬ33～36）

F_3区同様本群には、後期に位置づけられる条痕文、撚糸文、縄文、無文の土器を一括した。

１類　条痕文の土器

２類　撚糸文の土器（ＰＬ35－91、93～94）

91、93は網目状撚糸文を有する深鉢形土器で、いずれも平口縁、91は口径29.0cm、93は27.0cmである。91は口縁部ほぼ上端から、93は口頸部から施文されている。条はいずれもＲ縄文、焼成は良好、色調は91が漆黄色、93が灰黄褐色である。91はＺＸ－103グリッド・Ⅲb～Ⅲd層、93はＺＺ－103グリッド・Ⅲd層の出土である。

94は撚糸文が施文された平口縁の深鉢形土器で、口径は22.0cmである。軸に巻かれる条はＬ縄文、焼成は良好、色調は明黄褐色である。ＺＸ－102グリッド・Ⅲa層からの出土である。

３類　縄文の土器（ＰＬ35－92、95～96、36－97～108）

本類の土器のほとんどは深鉢であるが、壺、台付土器等もみられる。

口頸部に撚糸圧痕文を有するもの（98）、口縁部に無文帯を有するもの（100～101、104、107

～108）、口縁部ほぼ上端から縄文が施文されるもの（95～96、99、103）等がある。

深鉢は平口縁で、口縁部が外反するものが多いが、山形状口縁のもの（96）もある。92の壺口縁部には３条の隆帯を有し、その上に刻目文が施文されている。

本類の土器の地文には、ＬＲ、ＲＬ縄文が多用されている。焼成は大型のものに不良のものもみられるが、全体的にはやや良好である。色調は浅黄橙色、にぶい褐色、にぶい黄橙色等である。ＺＺ－102～104、ＺＹ－103グリッド・Ⅲd層からの出土が多い。

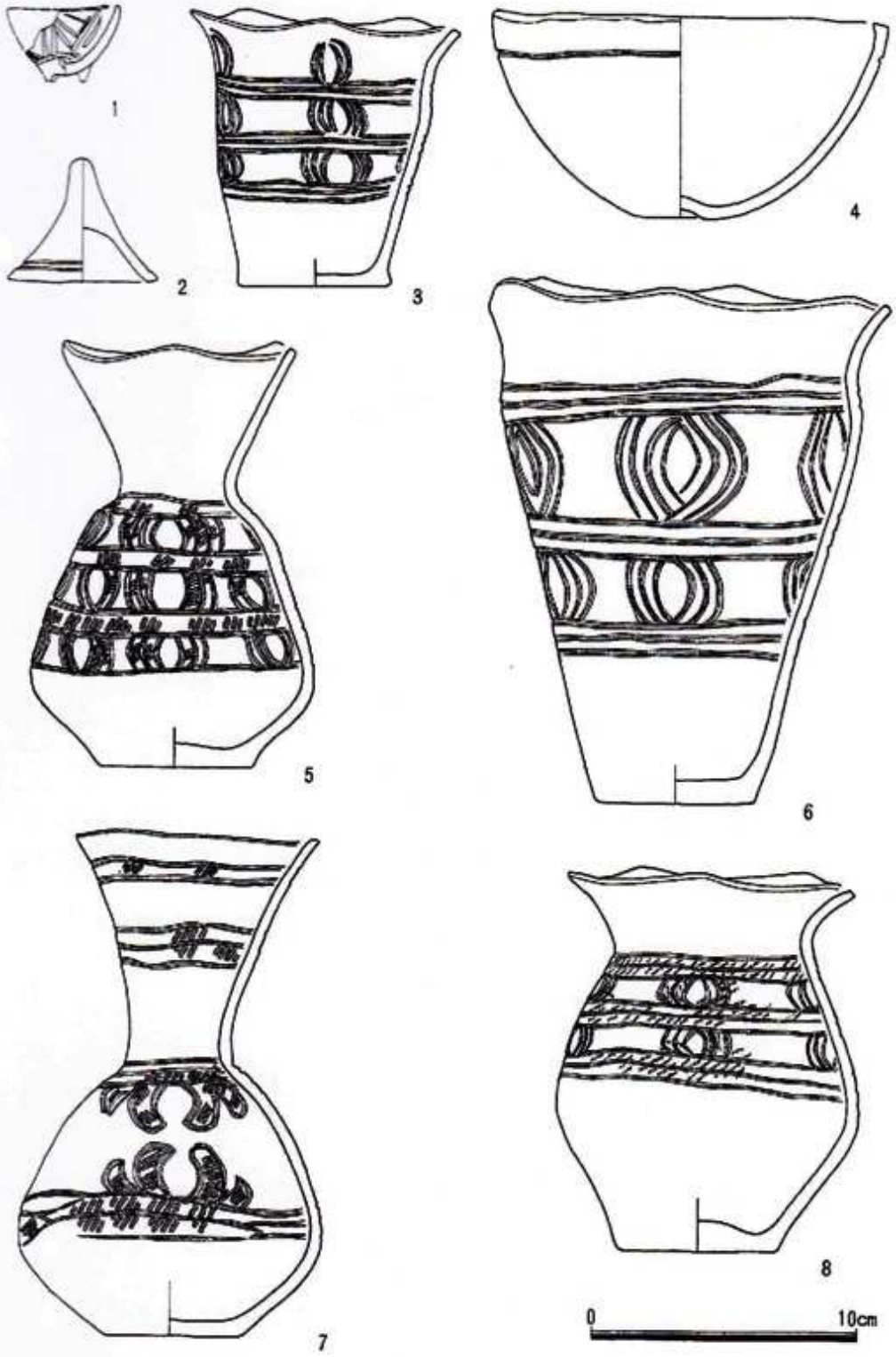
４類　無文の土器（第50図16～28、ＰＬ33－63～82、34－83～90）

本類には深鉢、鉢、浅鉢、壺、台付土器等がある。ＰＬ34－81のように口径22cmもの大型の浅鉢もあるが、深鉢、鉢、浅鉢は小型のものが多い。また、ミニチュア土器のほとんどは本類である。

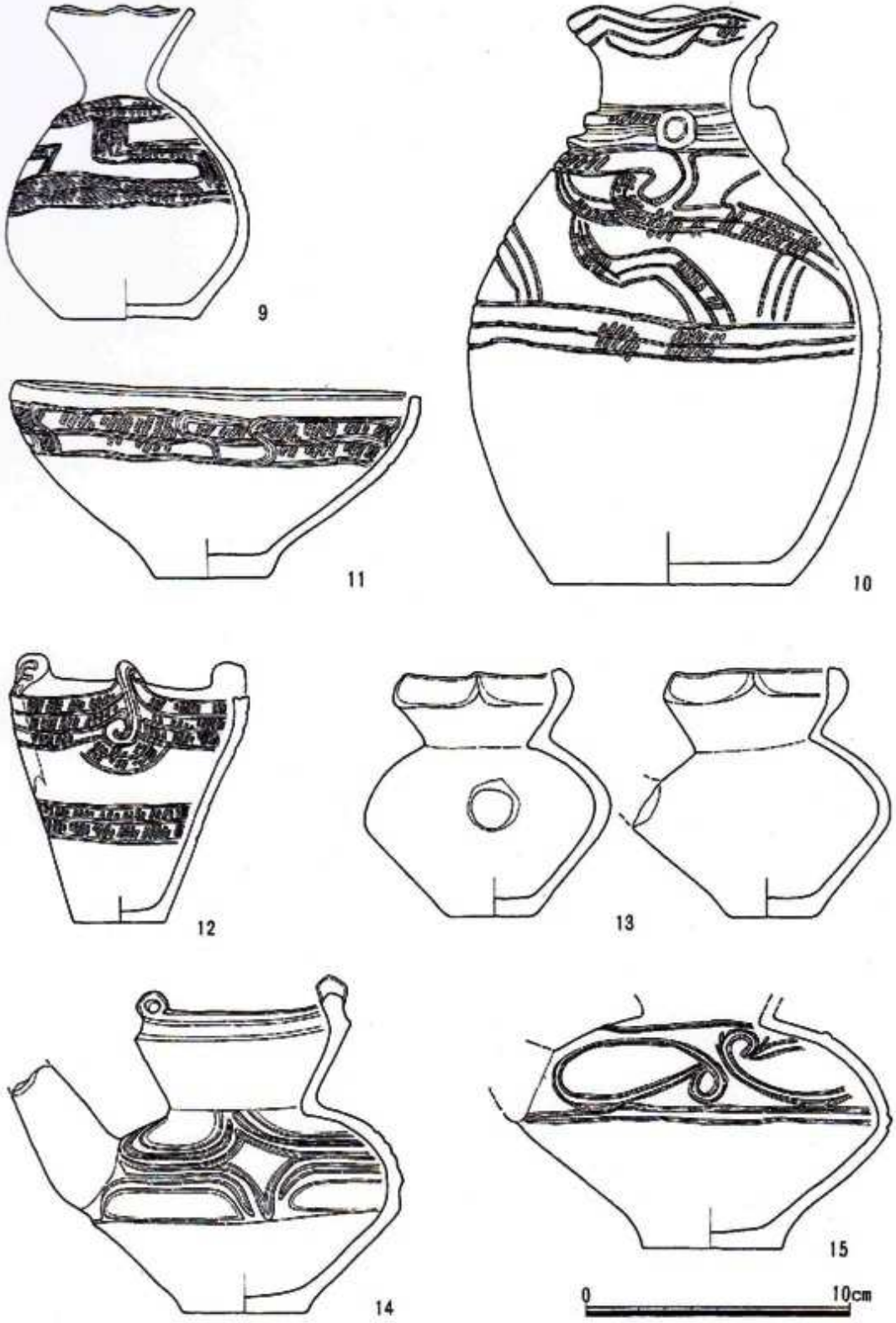
第50図16～18はミニチュアの台付土器、19はミニチュアの壺、20～25は小型の鉢、22の深鉢の口頸部は強く押しなぞられ、溝状文のようになっている。ＰＬ34－88は器高33cmの大型の壺で口縁部４ヶ所には縦位の橋状把手が付けられている。

本類の土器の焼成は良好なものが多く、色調は浅黄橙色、浅黄色、にぶい橙色、にぶい褐色等である。ほとんどがＹＢ～ＺＸ－102～104グリッドのⅢb～Ⅲd層の出土である。

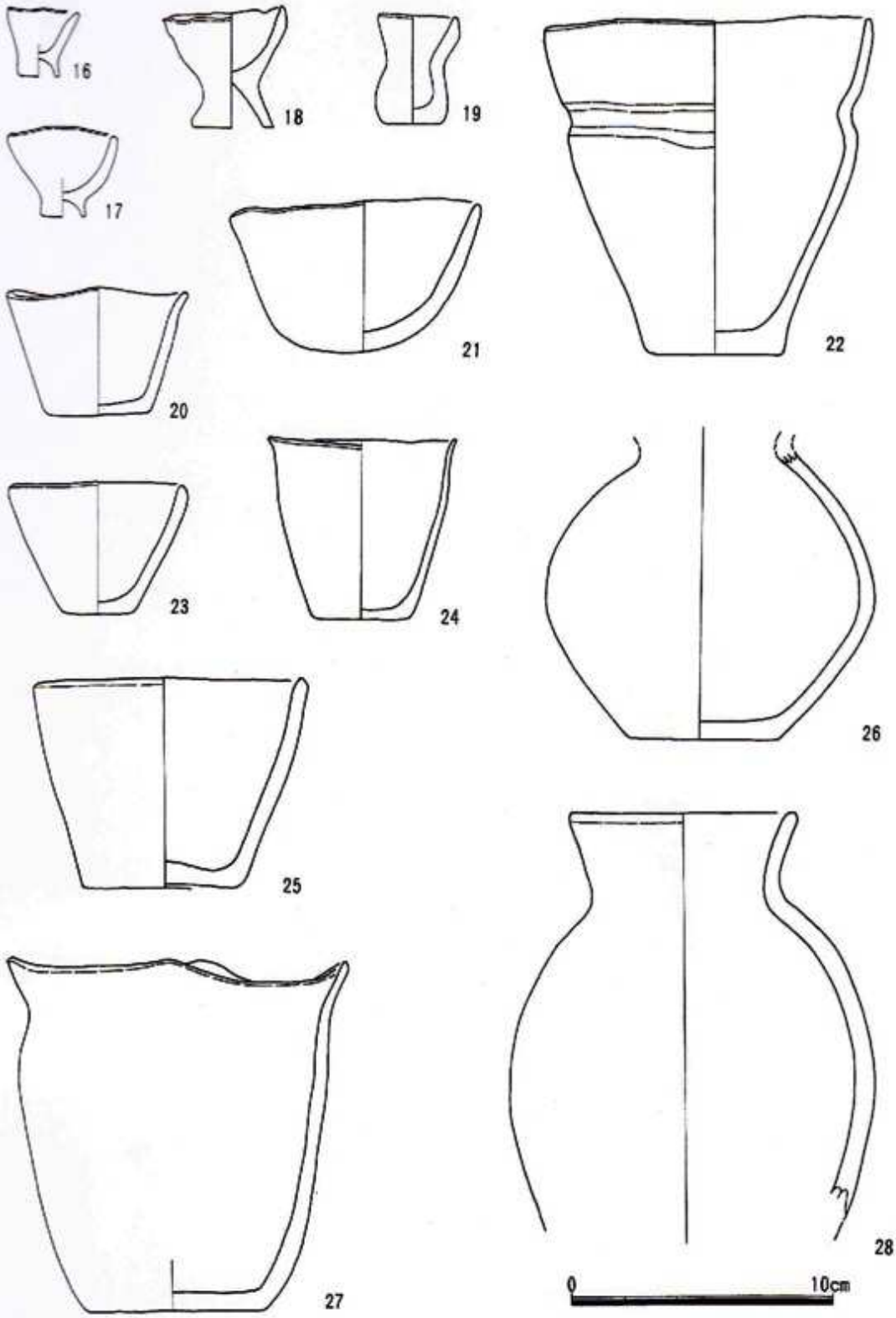
（秋元信夫）



第48図　D_5 区遺構外出土土器実測図(1)



第49図　D_5 区遺構外出土土器実測図(2)



第50図　D_5 区遺構外出土土器実測図(3)

(2) 石器

D_5区遺構外より出土した石器は、剥片石器416点、礫石器139点の計555点を数える。その多くは、調査区南西半に分布し、大半が遺物包含層から出土した。なお、分類にあたってはF_3区を基本とした。なお、石器出土分布状況は第19図の通りである。

石鏃（第51図１～25、第52図26～41）

65点出土した。調査区南西側から南側中央寄りから多くが出土し、特に103ライン上のグリッドに集中していた。それぞれ形態別にⅡ群７類に分類した。

Ⅰ群…無茎石鏃と呼ばれるものである。

a…凹器石鏃で３点出土した。基部の抉れは深く、出土品全ての基部および先端部が欠損している。長さ平均３cm、重さ１g前後を測り、石材は硬質頁岩である。（28～30）

b…円基石鏃で３点出土した。完形品は長さ３cm、重さ2.2gを測る。石材は珪質頁岩、硬質頁岩である。（33、34、36）

c…尖基石鏃で、５点出土した。長さ2.8～6.8cm、重さ1.1～11.1gを測り、石材は硬質頁岩４点と赤色頁岩１点であった。（37～41）

d…菱形、三角形状を呈しているもので、２点出土した。刃部調整はていねいであるが、基面中央には一次剥離面を残している。三角形状のものは長さ32cm、重さ1.5gを測り、菱形状のものは、長さ2.1cm、重さ1.0gを測る。石材は硬質頁岩である。（32、35）

Ⅱ群…有茎石鏃と呼ばれるものである。

a…平基有茎石鏃で、32点出土した。長さ1.7～3.4cm、重さ0.3～2.0gを測る。基面中央部には１次剥離面を残すものもある。欠損品の多くは、基部を欠いている。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。（１～９、11、12、14、16～19）

b…凹基有茎石鏃で、11点出土した。基部の抉れは深いものが多く、調整は基面全体に及び、ていねいである。長さ1.7～4.5cm、重さ0.5～3.0gを測る。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。（20～25）

c…凸基有茎石鏃で、７点出土した。茎部の長いものと短いものがあり、長さ1.7～4.5cm、重さ0.5～3.0gを測る。調整は基面全体にていねいに施されている。石材は硬質頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩である。（10、13、15、26、27、31）

石錐（第52図42、43、第53図44～51）

17点出土した。調査区南西側中央寄り、102、103ライン上のグリッドに集中して出土した。石材は硬質頁岩が最も多く、黒色頁岩、珪質頁岩、赤色頁岩と続く。形態からⅡ群５類に分類される。

Ⅰ群…つまみ部と錐部の境が明確でないもの。

a…V字状を呈するもので、5点出土した。錐部先端には使用による磨耗が観察されるものもみられる。(43～45)

b…菱形を程するもので、1点出土した。錐部は基部上下に作り出され、それぞれの錐部先端には使用による磨耗が観察された。(42)

c…棒状のもので2点出土した。使用する錐部のみが加工調整され、先端部は欠損、磨耗している。(46)

Ⅱ群…つまみ部と錐部の境が明確なもの。

a…不定形な剥片の一部を加工調整して錐部が作り出されているもので、4点出土した。錐部は太めで、先端部は磨耗が観察される。長さ3.9～7.8cm、重さ12.6～29.2gを測る。(49～51)

b…つまみ部と錐部にていねいな加工調整が施され、錐部は途中で折れているものの、その作りは精巧である。(47、48)

石匙(第53図52～59、第54図60～65)

30点出土した。調査区南西側中央寄り、102・103ライン上のグリッドから多くが出土した。形態からⅡ群2類に分類される。石材は硬質頁岩、黒色頁岩、珪質頁岩である。

Ⅰ群…縦型石匙である。

a…刃部が左、右、先端部一側縁に作り出されるもので、6点出土した。長さ3.7～6cm、重さ6.0gを測る。刃部には著しい磨滅が観察されるものもある。(52、58～60)

b…刃部が両縁・二側縁に作り出されるもので、19点出土した。欠損品は基部半分を欠いているものが多い。長さ4.8～9.5cm、重さ8.6～19.8gを測る。(53～57、61)

Ⅱ群…横型石匙で、4点出土した。長さ3.4～4.7cm、重さ8.6～18.2gを測る。(62～65)

石篦(第54図66～72)

調査区南側から7点出土した。特に103ライン上のグリッドから5点と集中していた。形態からⅢ群に分類された。石材は硬質頁岩である。

Ⅰ群…基部に対して刃部の幅が広くなるもので、台形状を程する。2点出土した。長さ3.3～4.5cm、重さ5.1～7.0gを測る。主要刃部が先端部にある。(66、72)

Ⅱ群…基部から刃部にかけて寸胴なもので、頭部は尖り三角形状を呈している。2点出土した。長さ3.3～4.5cm、重さ5.1～7.0gを測る。(67、68)

Ⅲ群…基部な寸胴で、頭部にも幅があり、主要刃部が両側縁に作り出されている。長さ4.4～8cm、重さ6.2～102.5gを測る。(69～71)

三脚石器(第54図73)

三叉状に加工調整されたもので、1点のみ出土した。調整された部分は刃部とは考えにくく、

装飾品などの用途に使用されたものではないかと考えられる。長さ2.9cm、重さ5.0gを測り、石材は硬質頁岩である。

掻器（第55図74～92）

296点出土した。調査区ほぼ全域に広く分布していたが、特に南西側中央寄りの102・103ライン上のグリッドに集中していた。打面を上にして刃部の作り出される位置からV群に分類した。石材は硬質頁岩が最も多く、珪質頁岩、黒色頁岩、赤色頁岩、白色凝灰岩（1点）と続く。

Ⅰ群…刃部が左、右いずれか一側縁に作り出されるもの。70点出土した。（75～79）

Ⅱ群…刃部が先端部に作り出されるもの。112点出土した。（82、83、87）

Ⅲ群…刃部が両縁・二側縁に作り出されるもの。71点出土した。（74、80、81）

Ⅳ群…刃部が三側縁に作り出されるもの、25点出土した。（84、85）

Ⅴ群…刃部が周縁全域に作り出されるもの。18点出土した。（86、88～92）

法量・形態とも多種多様、特に87はF_3、D_5区合わせた剝片石器の中でも最大のもので、長さ10cm、幅12.9cm、重さ176.9gを測る。

磨製石斧（第56図93～102）

調査区南西側、SX(S)909付近から中央寄りにかけて多く出土し、その数は15点である。全て定角式磨製石斧で、刃部には使用痕として磨滅が観察され、102にはアッズ的に使用されたと思われる痕跡を残している。欠損品が10点と多く、基部半分から破損しているものがほとんどである。完形品のみの法量は、長さ6～10.5cm、重さ18.9～198.4gを測り、小型のものは、のみ的にまたは別の用途に使われたと考えられる。石材は緑色凝灰岩、石英閃緑玢岩が多く、緑色片岩、火山礫凝灰岩、緑色砂質凝灰岩と続く。

石錘（第57図103～112）

調査区西側から南側にかけて24点出土した。扁平な川原石の両側縁を打ち欠いているもので、中には自然の凹みを利用し、一方だけに打ち欠きを施すものもみられる。法量から3分類した。

a…長さ4.7～7cm、重さ20.3～70.0gを測るもの。10点を数える。

b…長さ7.4～8.5cm、重さ70.0～232.5gを測るもの。8点を数える。

c…長さ10～12.8cm、重さ215～435gを測るもの。4点を数える。

石材は泥質凝灰岩、砂質凝灰岩、片岩、変朽安山岩、泥岩、石英閃緑玢岩で、泥質凝灰が多く使用されている。

敲石（第57図113～117）

調査区中央部から南西側にかけて広く分布し、21点出土した。扁平な川原石の一側縁が打ち欠かれているものである。両縁を使用しているものも1例みられた。長さ5.6～12cm、重さは54.3～600gを測り、法量的にばらつきがみられるが、8cm大前後の石を使用する場合が多い

ようである。石材は石英閃緑玢岩、緑色凝灰岩、泥岩、凝灰質泥岩、石英安山岩である。

凹石（第58図118～125）

調査区全域から38点出土し、特に南西側に多く分布していた。形状から４分類した。

a…円礫のもので11点出土した。長さ8.1～10cm、重さ175～600ｇを測る。（124）

b…扁平でかまぼこ状を程するもので、12点出土した。長さ10.5～15.8cm、重さ247～700ｇを測る。（118、120、121、122）

c…断面形が三角形状を程するもので、13点出土した。長さ12～16.6cm、重さ365～410ｇをを測る。（119、123）

d…断面形が四角形状を程し、２点出土した。（125）

c、d類は棒状のものがほとんどである。石材は石英閃緑玢岩が多く、他は緑色凝灰岩、砂質凝灰岩、凝灰岩、安山岩、流紋質凝灰岩、泥岩、石英安山岩である。

磨石（第59図126～133）

23点出土した。調査区南西側からその大半が出土し、北側からは２点のみであった。5.5～10cm大の円礫の両面を使用しているものが主であるが、長さ6.5～10cmの扁平な石の側面を使用しているもの（126、132）もみられる。石材は石英閃緑岩、硬質凝灰岩、安山岩、チャート、石英安山、緑色凝灰岩、花孔閃緑岩、泥岩、玄武岩、火山礫凝灰岩、凝灰岩で石英閃緑岩が多かった。

石皿（第60図134～137、第61図138～140、第62図149、150）

調査区南側中央寄りに多く分布し、11点出土した。比較的肉厚なものが多い。全て破損品で、凹石に転用されたものも４点みられた。石材は凝灰岩、石英安山岩、石英閃緑玢岩、砂質凝灰岩、緑色凝灰岩である。

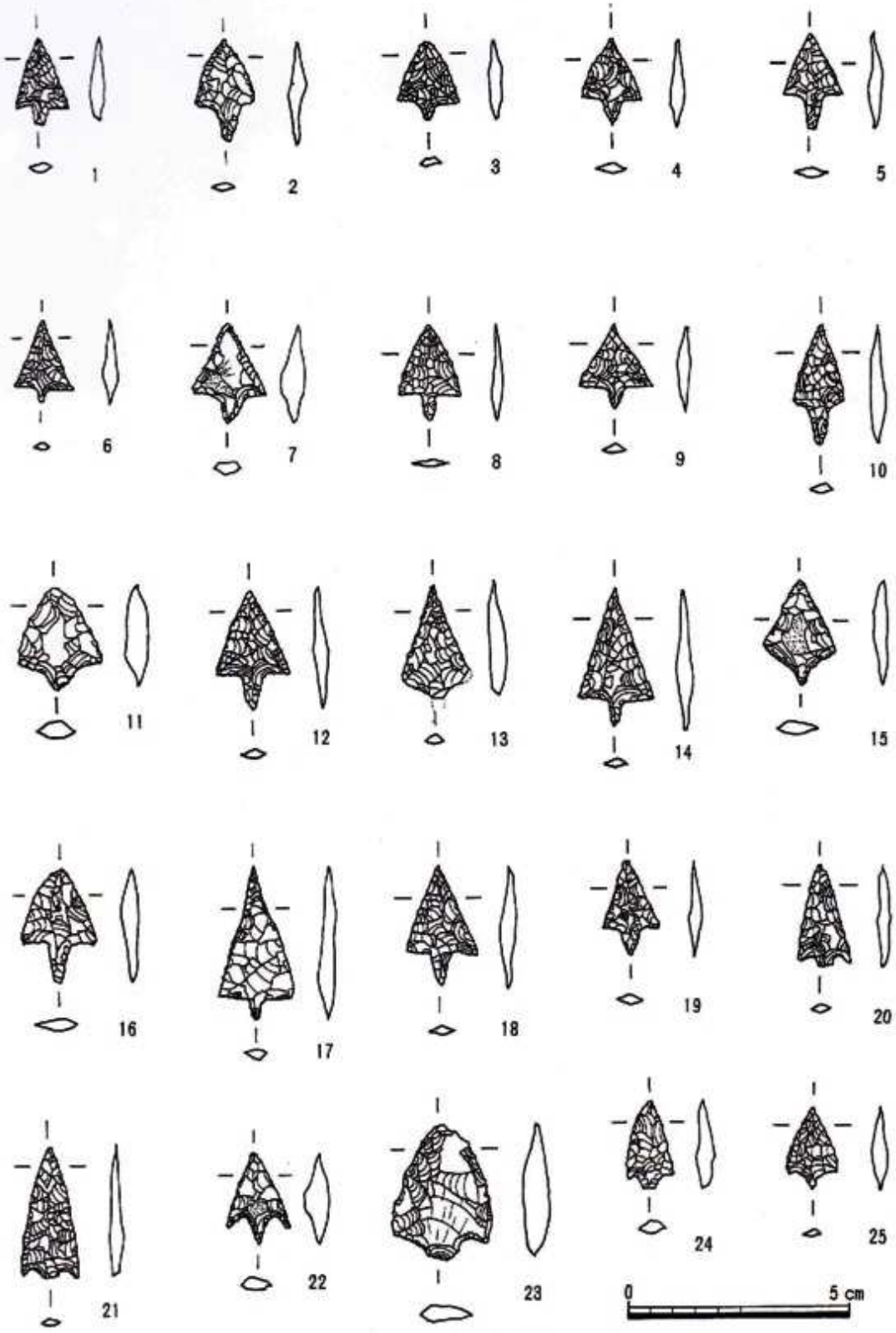
台石（第61図141、142）

調査区西側中央寄りから２点出土した。破損品であるが、表面には磨擦痕が観察される。石材は砂質凝灰岩、緑色凝灰岩である。

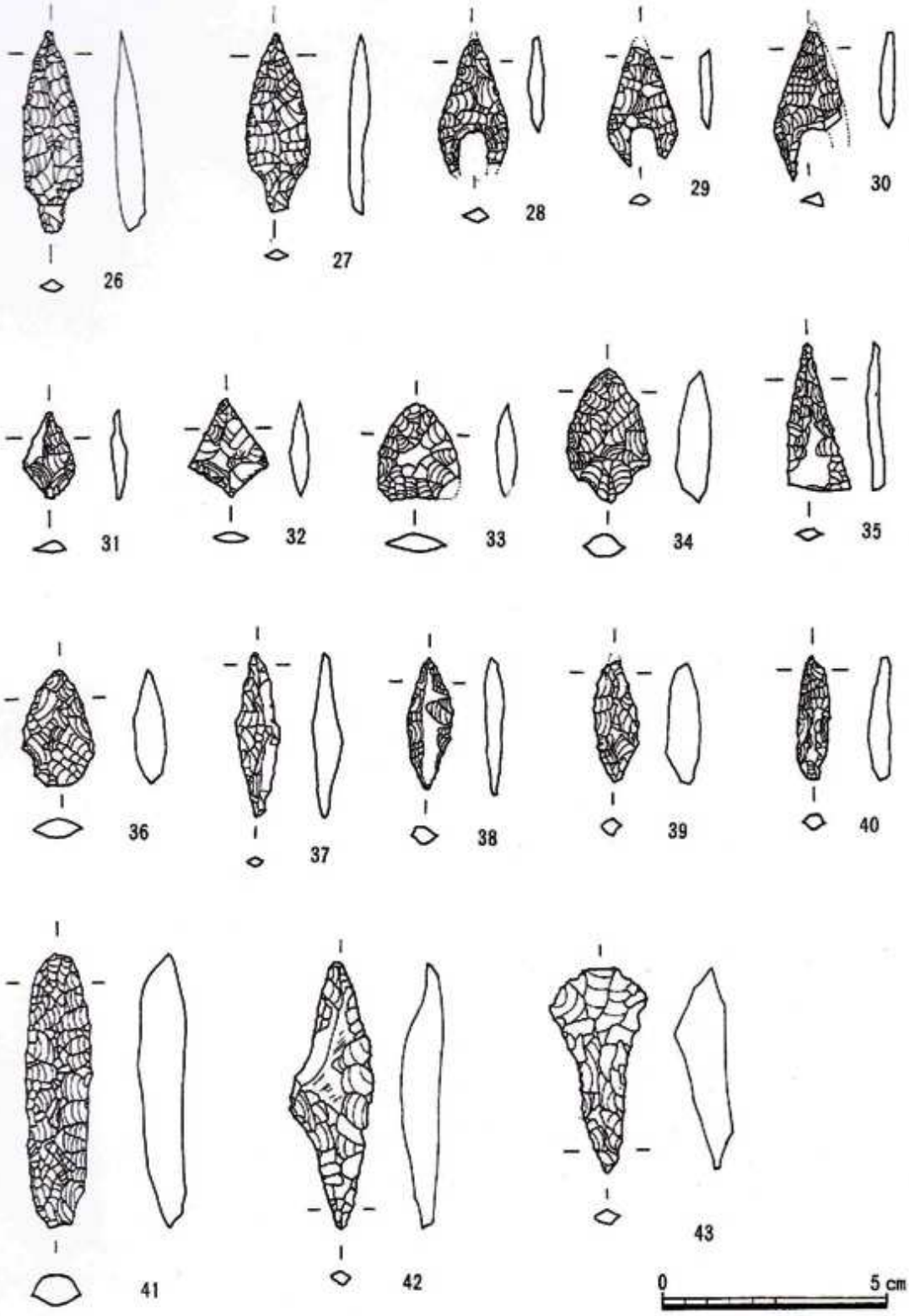
砥石（第62図143～148）

調査区南側から５点出土した。石皿から転用されたものもみられる。石材は安山岩、軽石質凝灰岩、凝灰岩である。

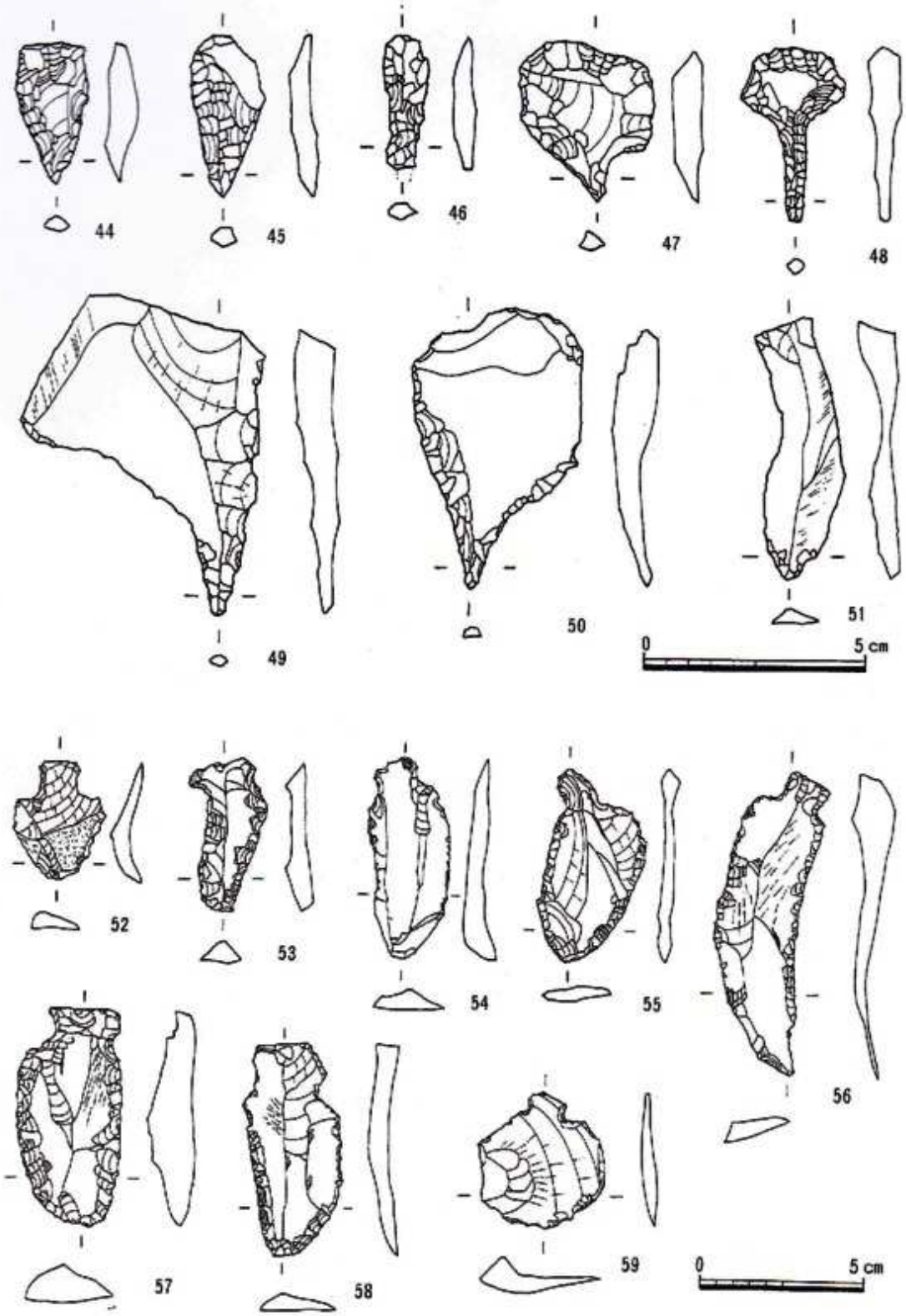
（花海義人）



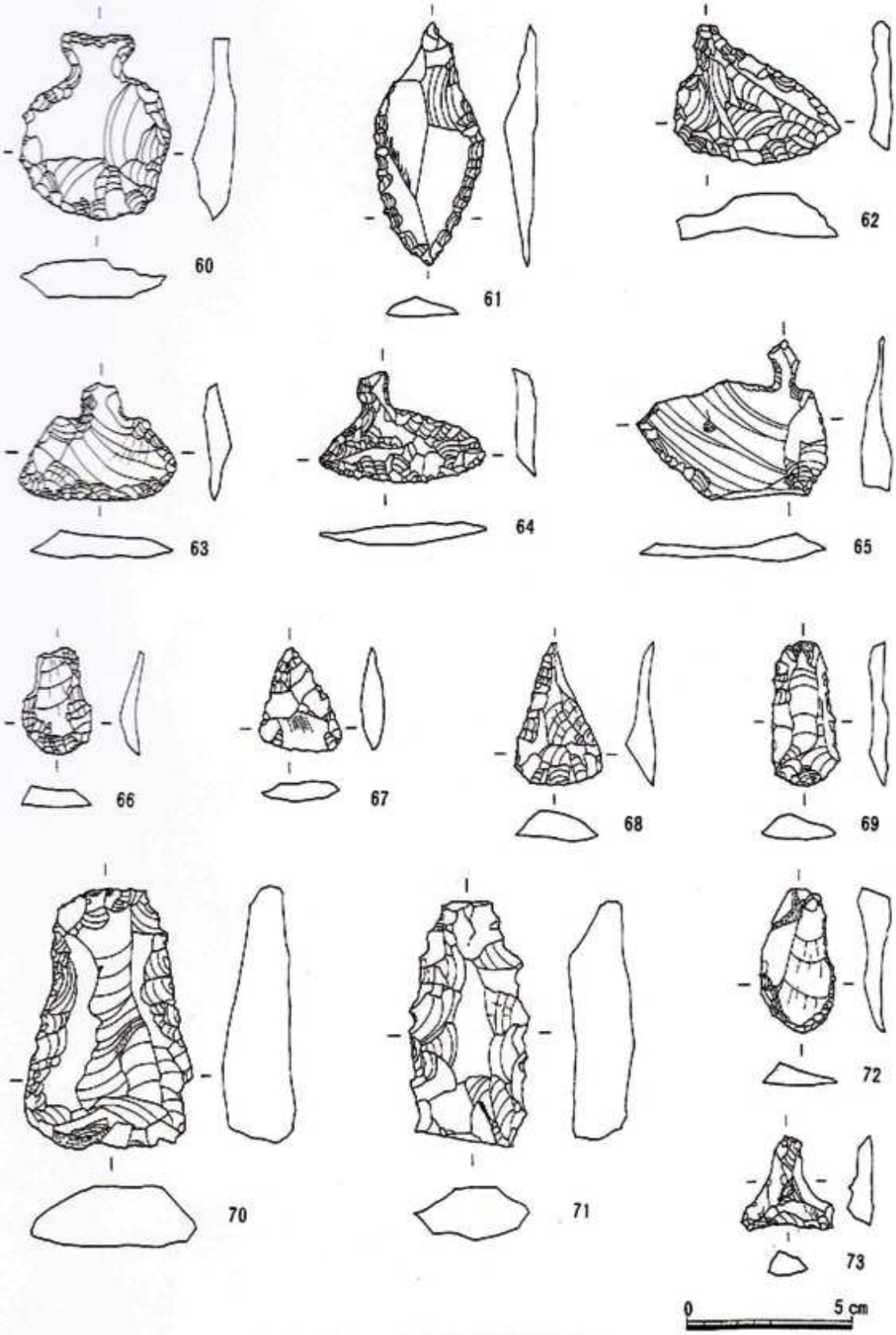
第51図　D_5 区遺構外出土石器実測図(1)



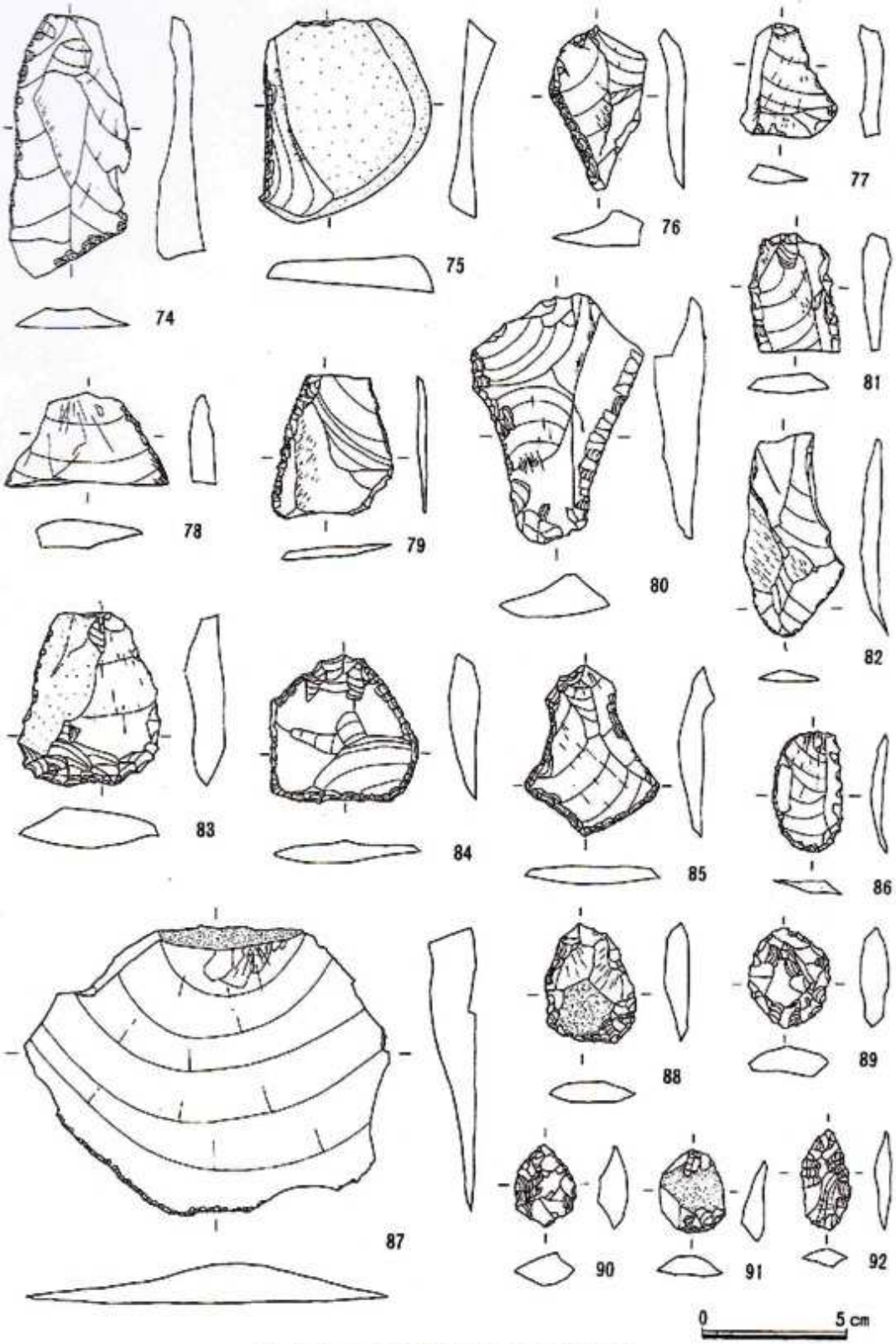
第52図　D_5 区遺構外出土石器実測図(2)



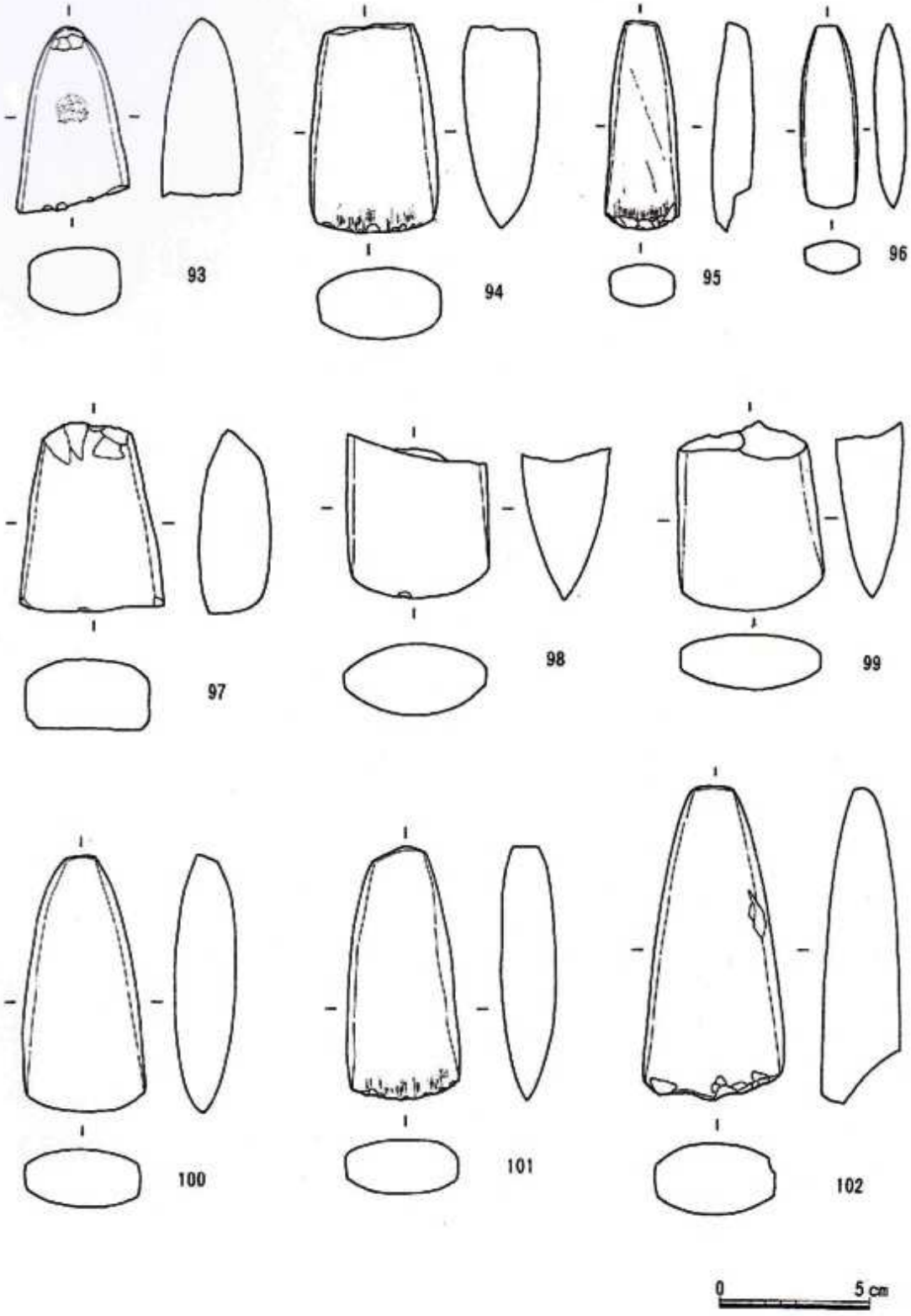
第53図　D_5 区遺構外出土石器実測図(3)



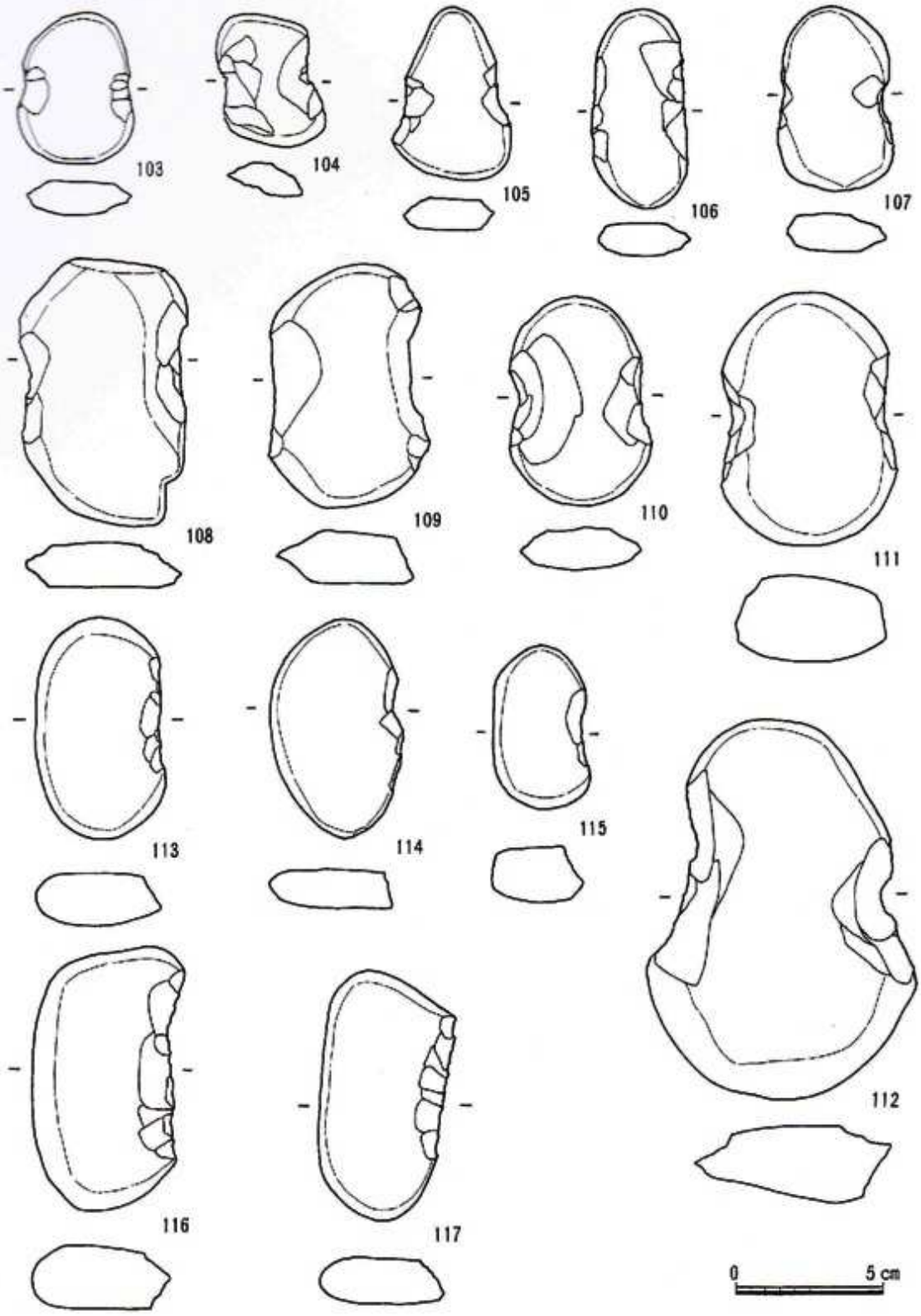
第54図　D_5 区遺構外出土石器実測図(4)



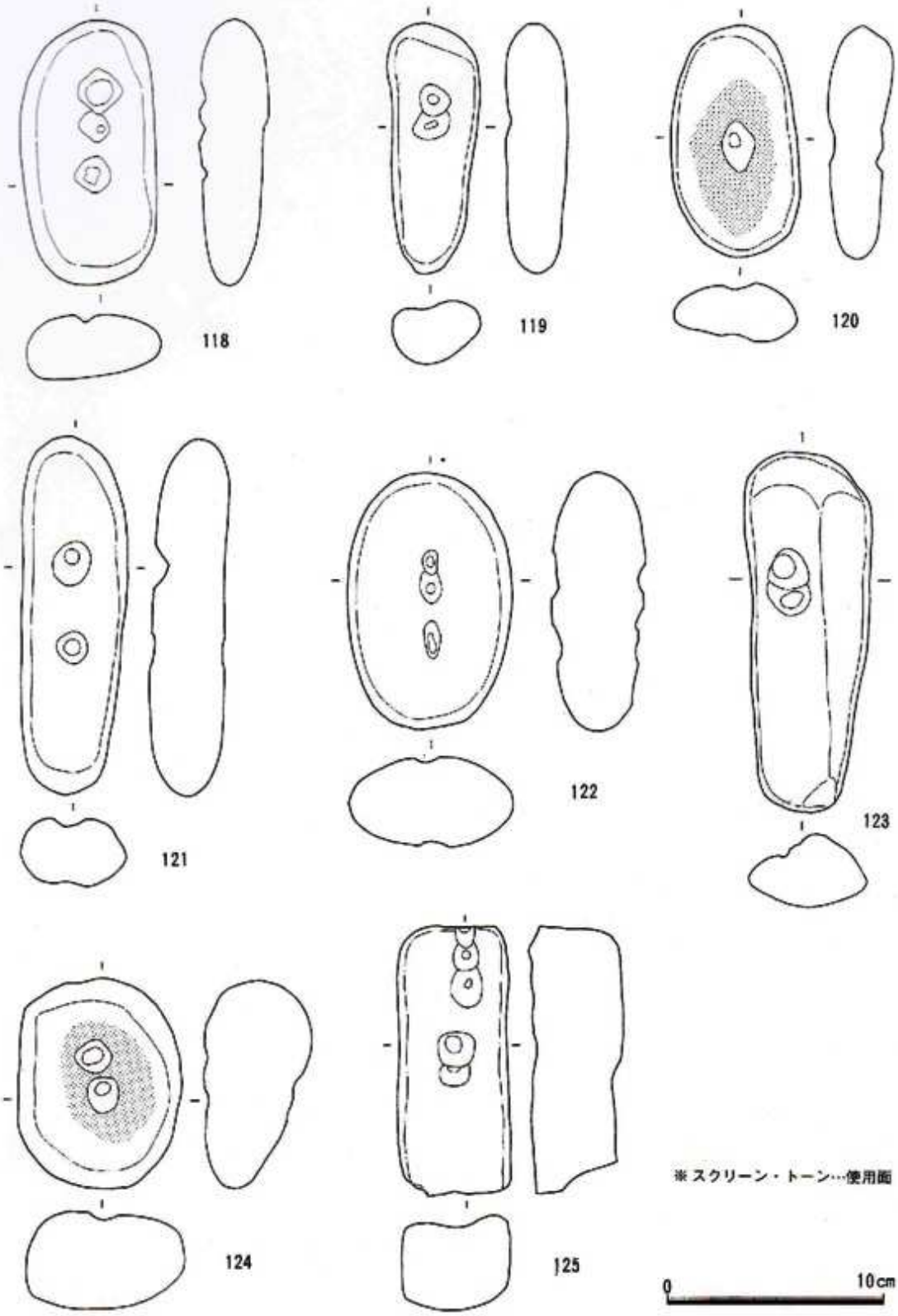
第55図　D_B 区遺構外出土石器実測図(5)



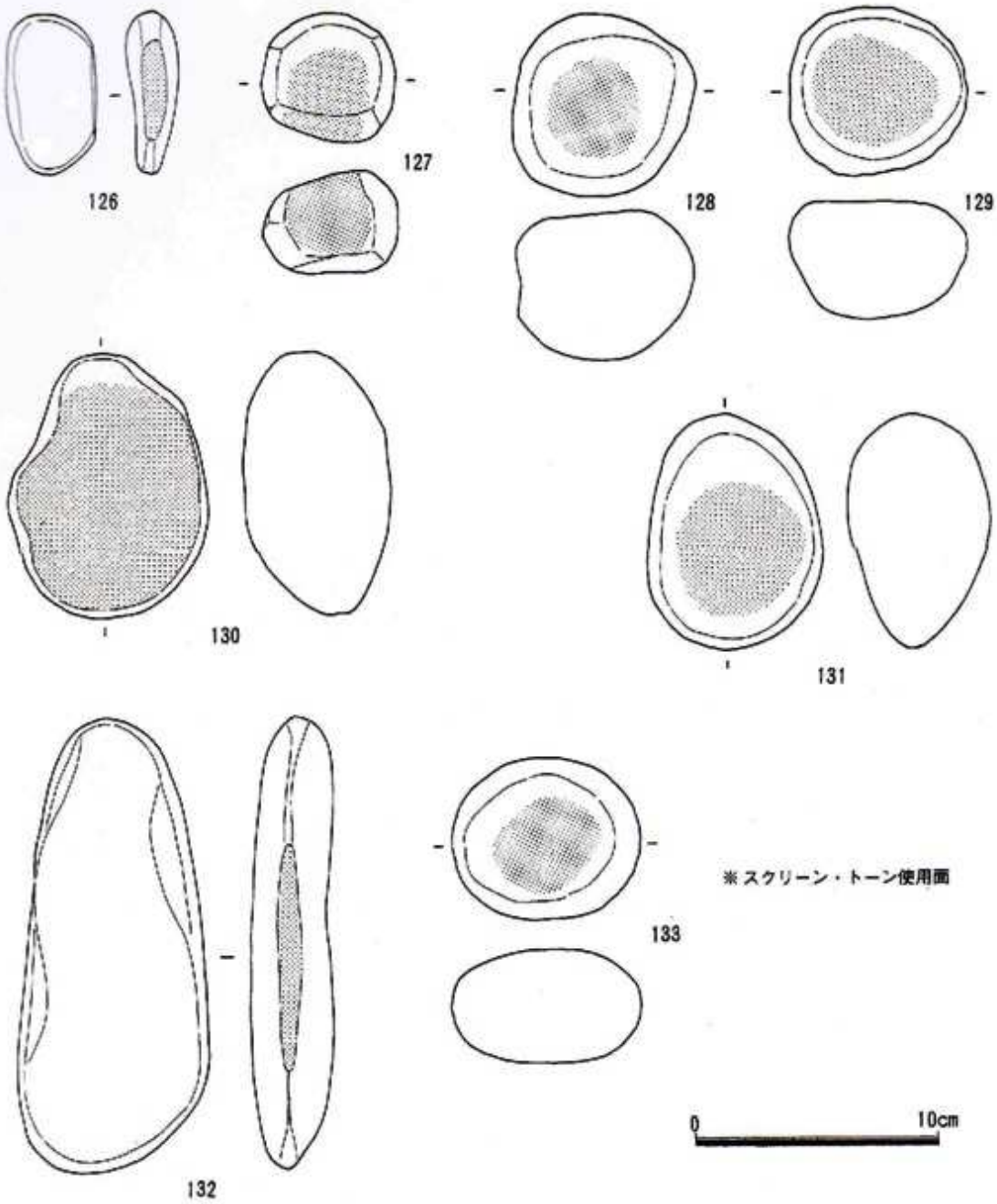
第56図　D_5 区遺構外出土石器実測図(6)



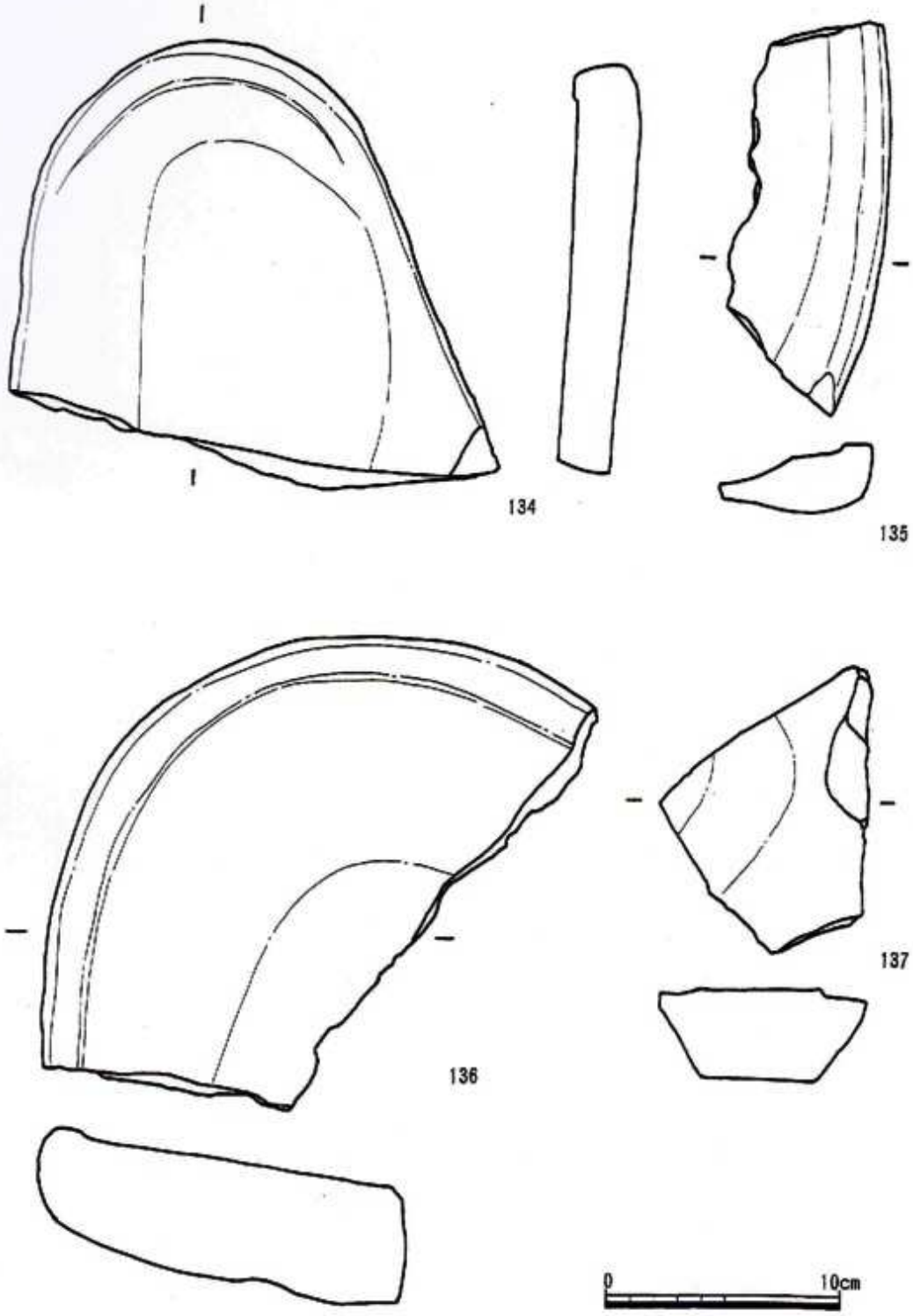
第57図　D_5 区遺構外出土石器実測図(7)



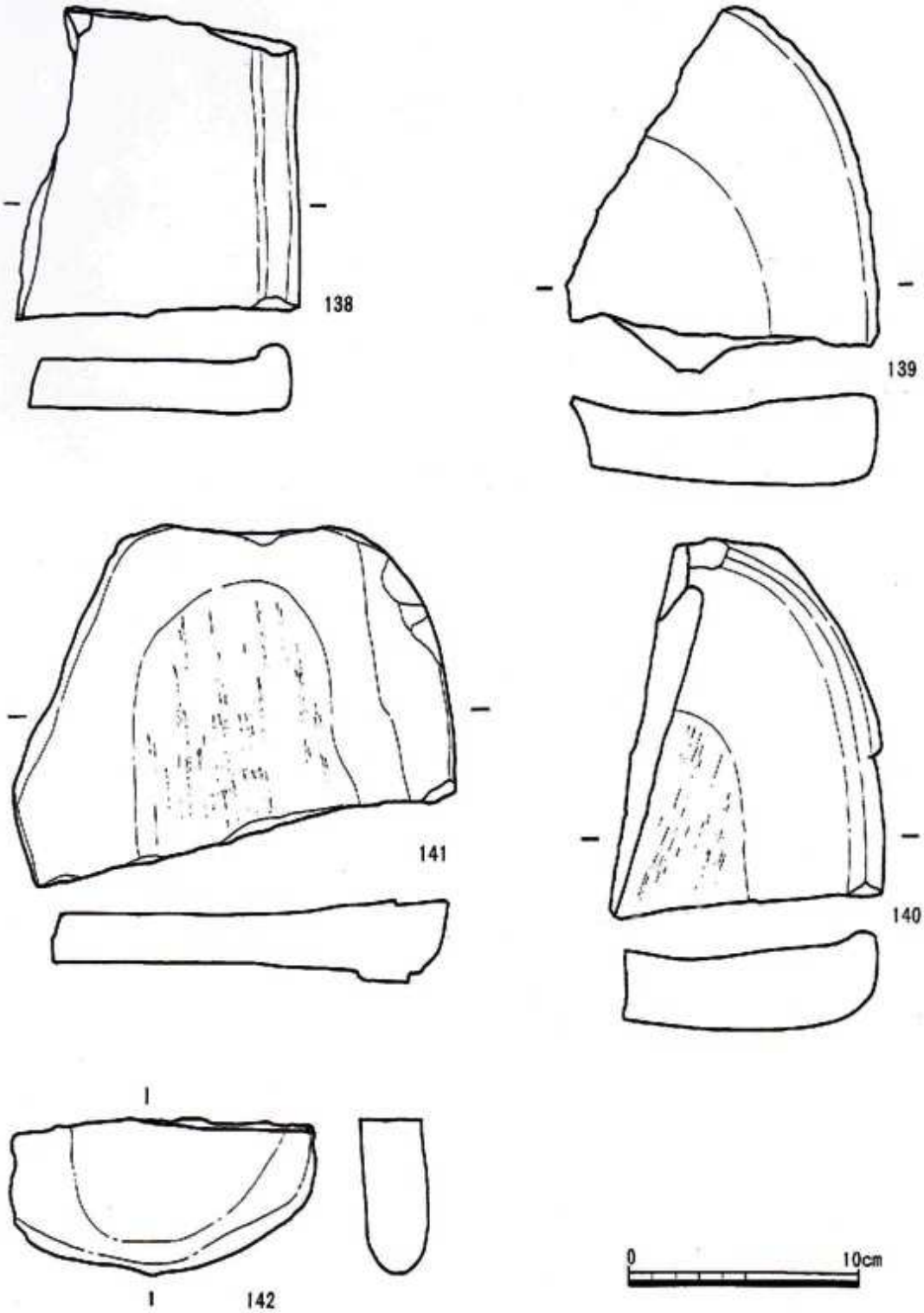
第58図　D_5 区遺構外出土石器実測図(8)



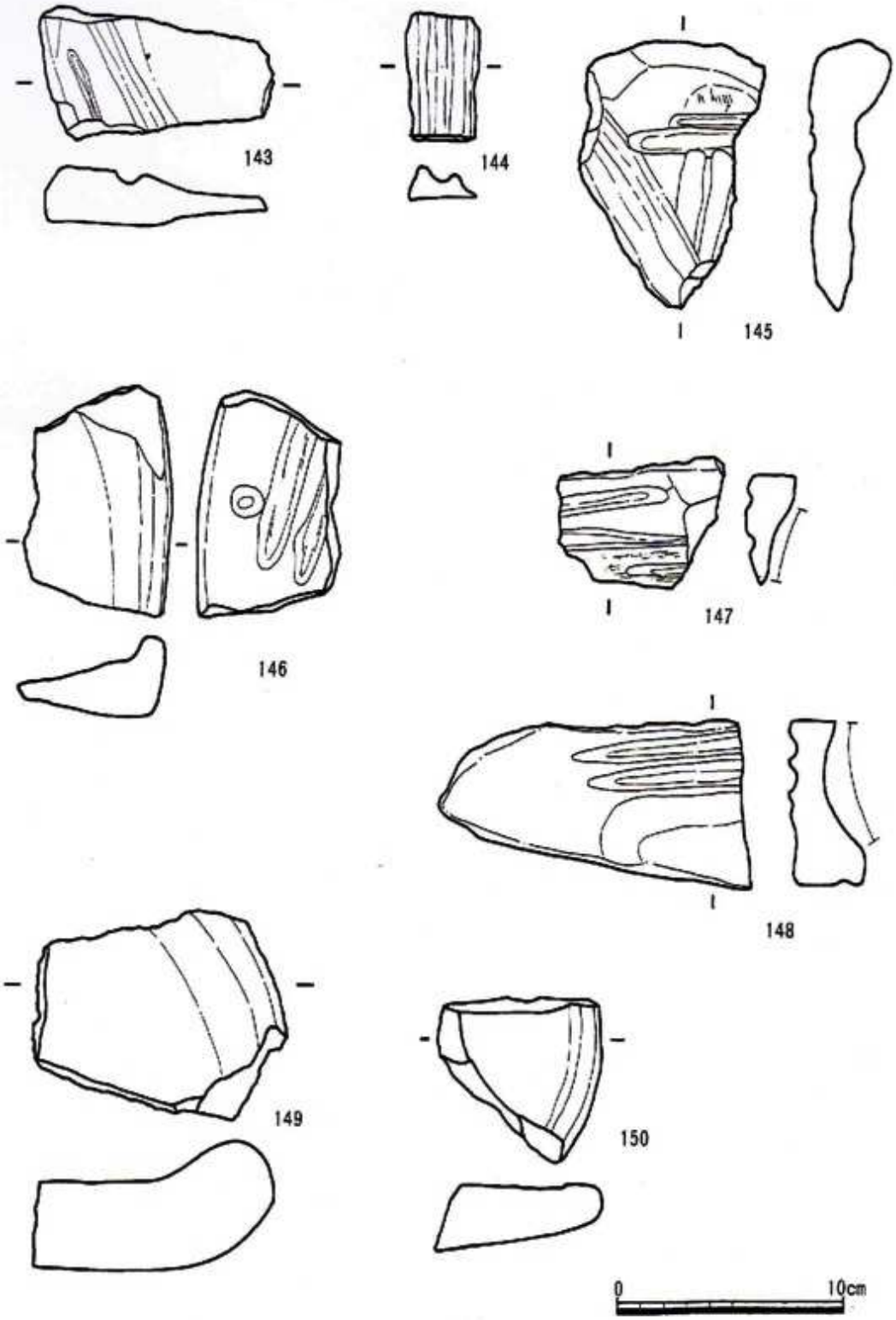
第59図　D_5 区遺構外出土石器実測図(9)



第60図　D_5 区遺構外出土石器実測図(10)



第61図　D_5 区遺構外出土石器実測図(1)



第62図　D_5 区遺構外出土石器実測図⑫

(3) 土製品（第63～66図）

D_5区遺構外から出土した土製品は、土偶18点、鐸形土製品11点、きのこ形土製品３点、有孔土製品６点、三角形土製品２点、土器片利用土製品142点の計182点である。

土偶（第63図１～７、64図13、16）

１～３は土偶の頭部でいずれも逆三角形状の顔であるが、F_3区出土のもののように扁平ではなく高い鼻が作り出されている。１と３とは大きさがかなり違うが、目、耳、口、鼻の表現方法が非常に良く似ている。２には目、耳の表現がなく、動物の顔か仮面等をかぶった姿かと考えられる。１～３ともＺＹ－104グリッド・Ⅲa～Ⅲd層からの出土である。

４は体部上半で、豊かな乳房が表現されている。やはりＺＹ－104グリッド・Ⅲa～Ⅲd層の出土である。

５はＺＶ－98グリッド・Ⅲd層より出土した土偶で、肩より上を欠いている。豊かな乳房と大きな腹が表現されており、妊婦と考えられる。腹部下の刻目文と沈線文や股の沈線文はパンツ状の衣類を表現しているのであろうか。残存長は8.8cm。

６はＺＺ－103グリッド・Ⅲd層出土の土偶の腹部で、大きな腹部分と背面下半に刺突文が施文されている。

７は、その体部及び左足がＹＢ－103グリッド・Ⅲd層、右足が第909号環状配石遺構近傍より出土した土偶で、頭部及び左腕を欠いている。現在長は15.5cmである。首から肩、へその周りなどに刺突文が施こされている。また、腹部下の山形状の沈線文と股の沈線文間にはＬＲ縄文が充填されている。

８、９は同一土偶の左腕と右腕と考えられる。８はＺＺ－104グリッド・Ⅲb～Ⅲd層、９はＺＹ－103グリッド・Ⅲb～Ⅲd層からの出土である。10はＺＹ－104グリッド・Ⅰ～Ⅱ層出土の土偶の左足である。

13は土偶体部上半、16は土版状で小さな乳房が作り出されている。脇下から肩に紐を通すためと考えられる貫通孔を有する。13はＺＹ－101グリッド・Ⅲa～Ⅲd層、16はＺＹ－100グリッド・Ⅲa～Ⅲb層の出土である。

鐸形土製品（第29図16、64図21～27）

D_5区からは11点の鐸形土製品が出土している。F_3区同様、開口部断面には円形のもの（16、21～23、25）と楕円形（27）とがある。また、貫通孔は鈕部の短軸方向のもの（21～22、24～25）や長軸方向（26～27）に穿孔されるものの他に、鈕部上部から中空部に垂直に穿孔するもの（16）もみられる。23は小型で、貫通孔の他に貫通しない孔をも等間隔に有している。D_5区出土の鐸形土製品はほとんどが無文で、文様を有するのは１点（16）のみである。

これらの土製品のほとんどはＹＢ～ＺＸ－102～103グリッドから出土している。

きのこ形土製品（第64図28～30）

28、30のかさは薄い山形で、柄は先になるほど細くなる。28は若干柄が彎曲している。29のかさは平形で中央が盛り上がった形状で、柄の下半は太くなっている。28はＹＢ－100グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、29はＺＶ－100グリッド・Ⅲd層、30はＺＹ－104グリッド・Ⅲc～Ⅲd層の出土である。

有孔土製品（第64図11～12、14～15、17～18）

11は径1.5cmの玉、12は長軸3.1cm、短軸1.7cmの長方形で厚さ0.8cm、短軸方向に貫通孔を有する。14は径3.4cmの円形で厚さは0.8cm、孔は表面に垂直に穿孔されている。15はひし形で、縦3.8cm、横2.8cm、幅0.7cmである。縦位に穿孔されており、表・裏面には十字に、側縁には全周、刺突文が施こされている。11はＺＺ－103グリッド・Ⅱ～Ⅲb層、12はＹＡ－102グリッド、Ⅲb～Ⅲd層、13はＺＸ－103グリッド・Ⅲb～Ⅲd層、14はＺＺ－103グリッド・Ⅲb～Ⅲd層の出土である。

17、18は逆Ｖ字形で内彎、表面に平行、横位の貫通孔が穿孔されている。17はＹＡ－103グリッド・Ⅲd層、18はＺＺ－102グリッド・Ⅲb～Ⅲd層からの出土である。

三角形土製品（第64図19、20）

三角形で内彎した土製品で、19の表面には沈線文が施文されている。19はＹＢ－103グリッド・Ⅰ層、20はＹＢ－105グリッド・Ⅲa～Ⅲb層の出土である。

土器片利用土製品（第65図31～65、66図66～99）

D_5区からは142点出土している。F_3区同様、円形のものが多く８割を越す。成形方法、土器利用部位、文様等もF_3区と大きな違いはみられない。

出土状況は第27図のとおりで、土器同様、102～104ラインからの出土が多い。

(4) 石製品（第67～69図）

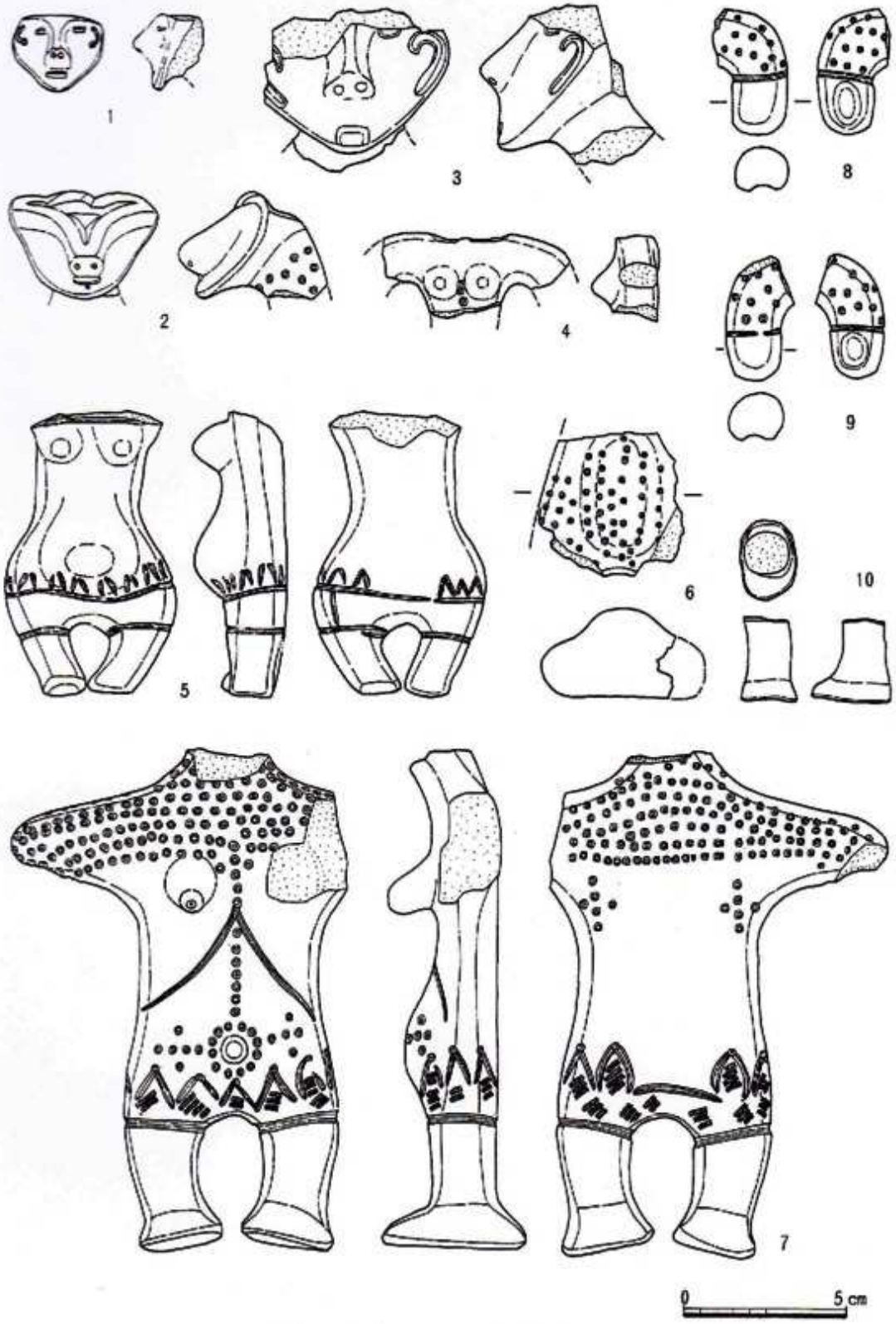
D_5区遺構外から出土した石製品は、石剣・石刀７点、男根状石製品２点、円盤状石製品５点、軽石製石製品16点、その他の石製品２点の計32点である。

石剣・石刀（第67図１～６、68図９）

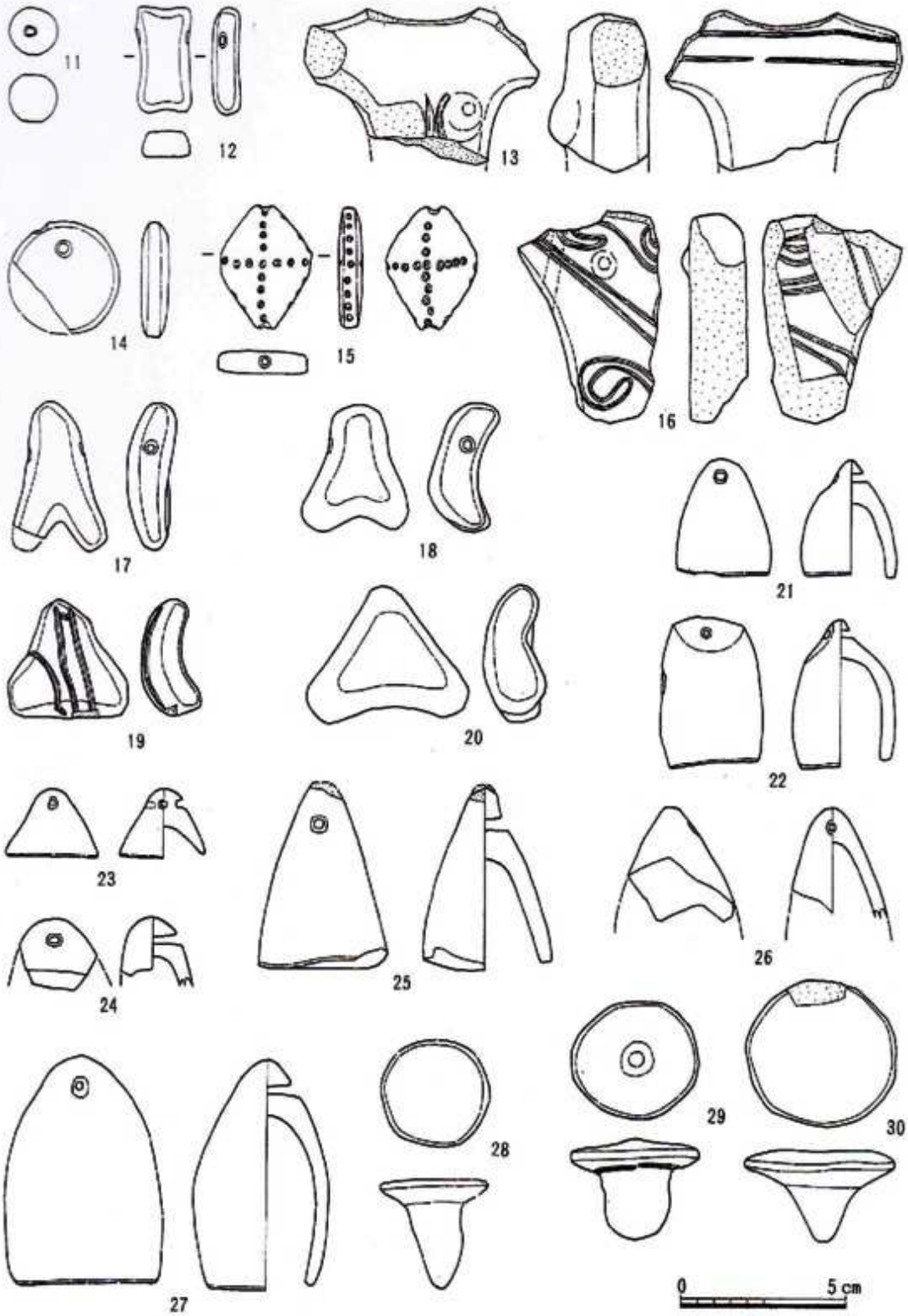
１～３は石刀、４～６、９は石刀あるいは石剣の未完成品と考えられる。

１、２とも内反り形の石刀で、刃部先端を欠いている。現存長は１が18.7cm、２が16.9cm、石材は１が粘板岩、２が泥岩である。２は柄部を明瞭に作り出し、背面に溝を掘り込んでいるが、１は柄、刃部間に切り込みを入れた程度に簡略化されている。１はＹＡ－102グリッド・Ⅲd層出土、２はＺＺ－99グリッド・Ⅲd層とＺＺ－100グリッド・Ⅲd層出土の接合資料である。

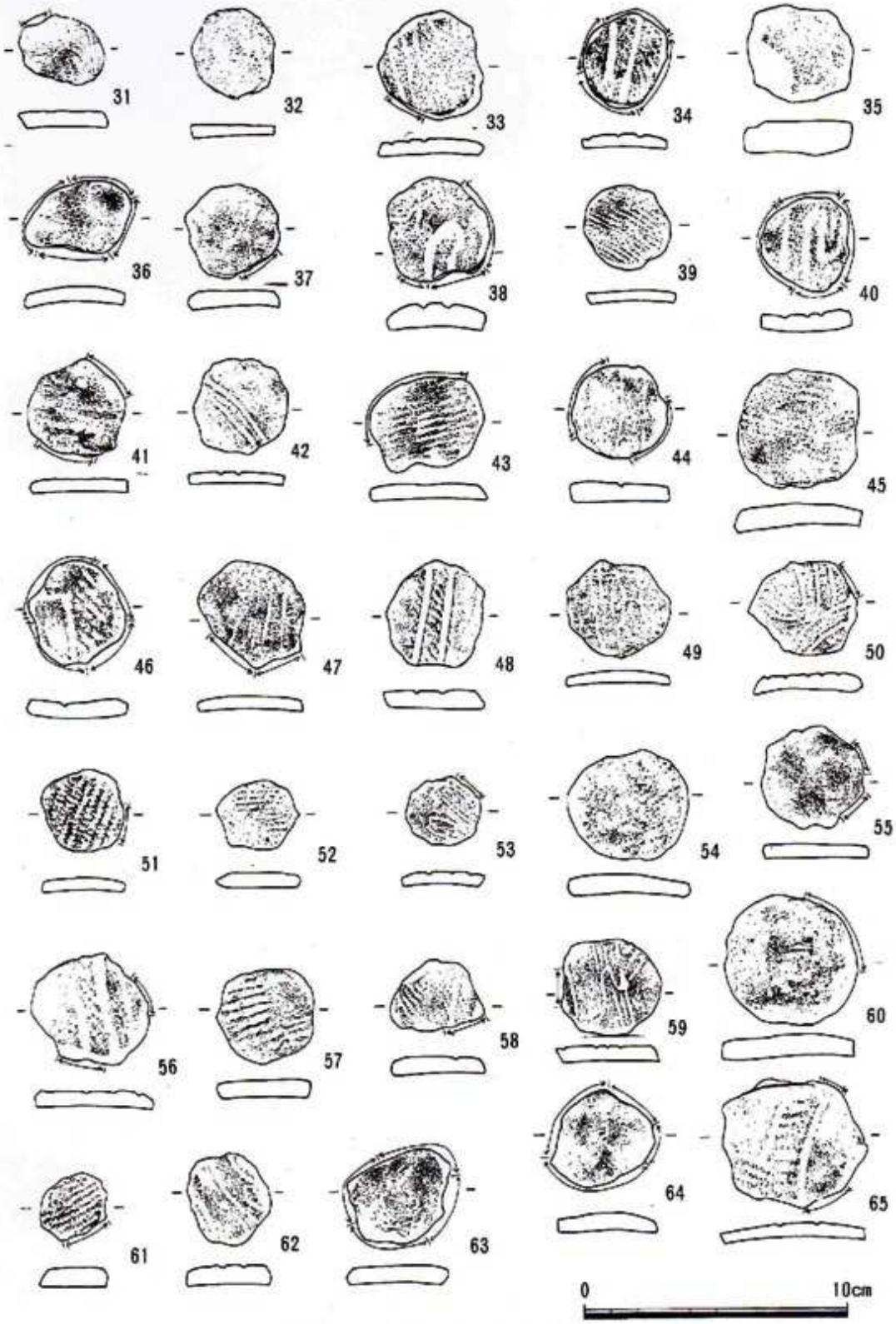
３も内反り形の石刀で、柄部を明瞭に作り出している。石材は粘板岩、ＺＺ－103グリッド・Ⅲb層の出土である。



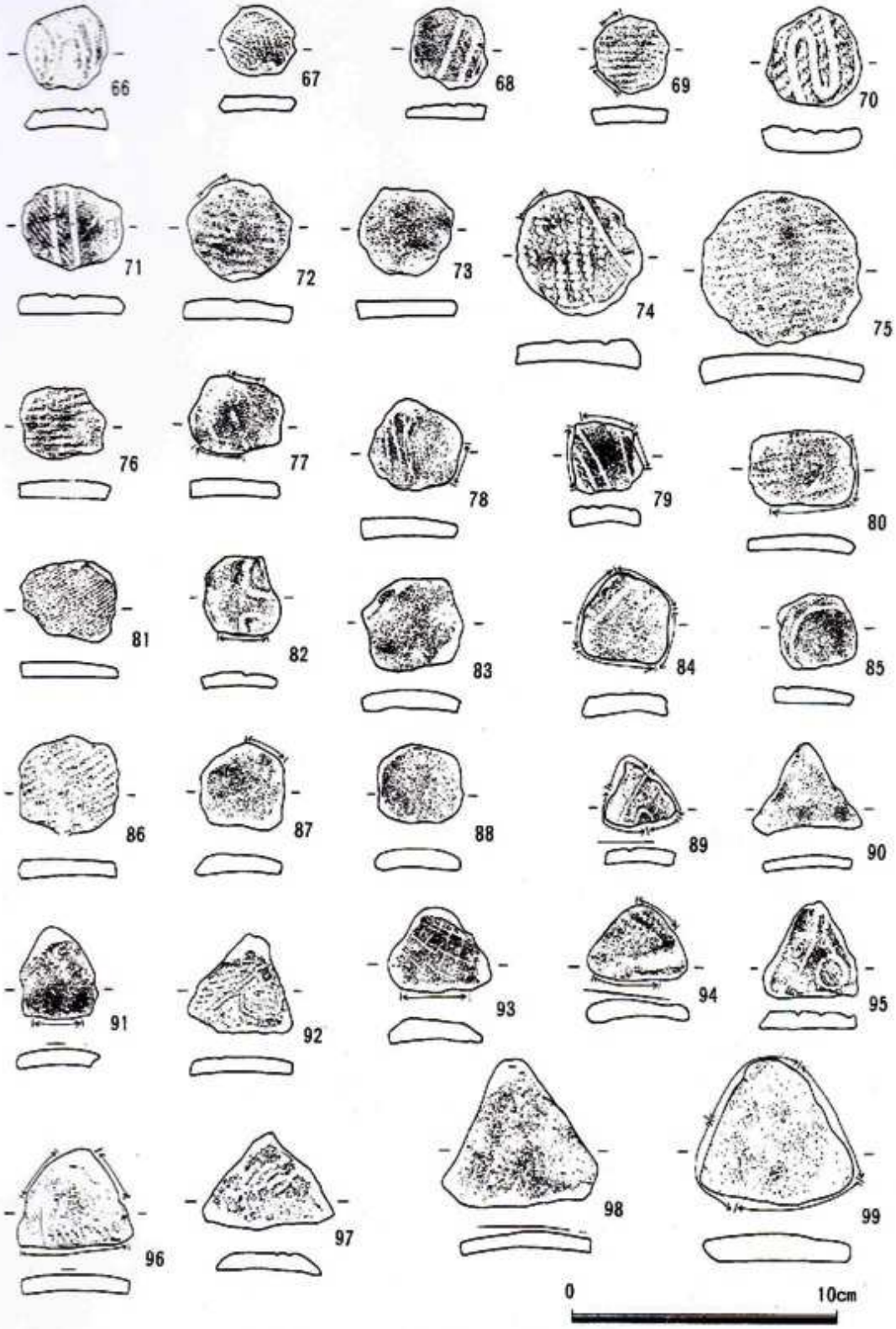
第63図　D_5 区遺構外出土土製品実測図(1)



第64図　D_5 区遺構外出土土製品実測図(2)



第65図　D₂区遺構外出土土製品実測図(3)



第66図　D_8 区遺構外出土土製品実測図(4)

4、9は細長くかつ薄く打ち欠いたもので、4の側面には擦った痕跡がみられる。石材はいずれも片岩、ＺＺ－103グリッド・Ⅰ層の出土である。

5は薄い石片の一側面が擦りにより整形されている。石材は粘板岩、ＺＶ－98グリッド・Ⅲa～Ⅲb層からの出土である。

6は打ち欠きの後、擦りにより鋭い刃部を作り出している。石材は片岩、ＺＺ－100グリッド・Ⅲd層の出土である。

男根状石製品（第68図７～８）

7は棒状で、長さ10.1cm、径2.6cm、下部には女性の性器が表出されている。8は板状で、残存長7.9cmである。石材はいずれも凝灰質泥岩、7はＹＢ－109グリッド・Ⅲa～Ⅲb層、8はＺＶ－98グリッド・Ⅲd層からの出土である。

円盤状石製品（第68図12～15）

D_5区からは５点の出土である。北部を除くD_5区全域に散在している。13が最小で径2.6cm、厚さ６mm、15は楕円形で長軸4.3cm、短軸3.8cm、厚さ９mmである。なお、これらの石製品の石材は泥質凝灰岩か泥岩である。

軽石製石製品（第68図16～18、69図19～25）

D_5区からは16点の出土があった。

16～18はシルト質の軽石（凝灰岩質泥岩）を円形あるいは楕円形に成形している。４～９cmの大きさで、厚さは13～18mm、ＹＡ－102及びＺＸ－104グリッド・Ⅲa～Ⅲd層からの出土である。

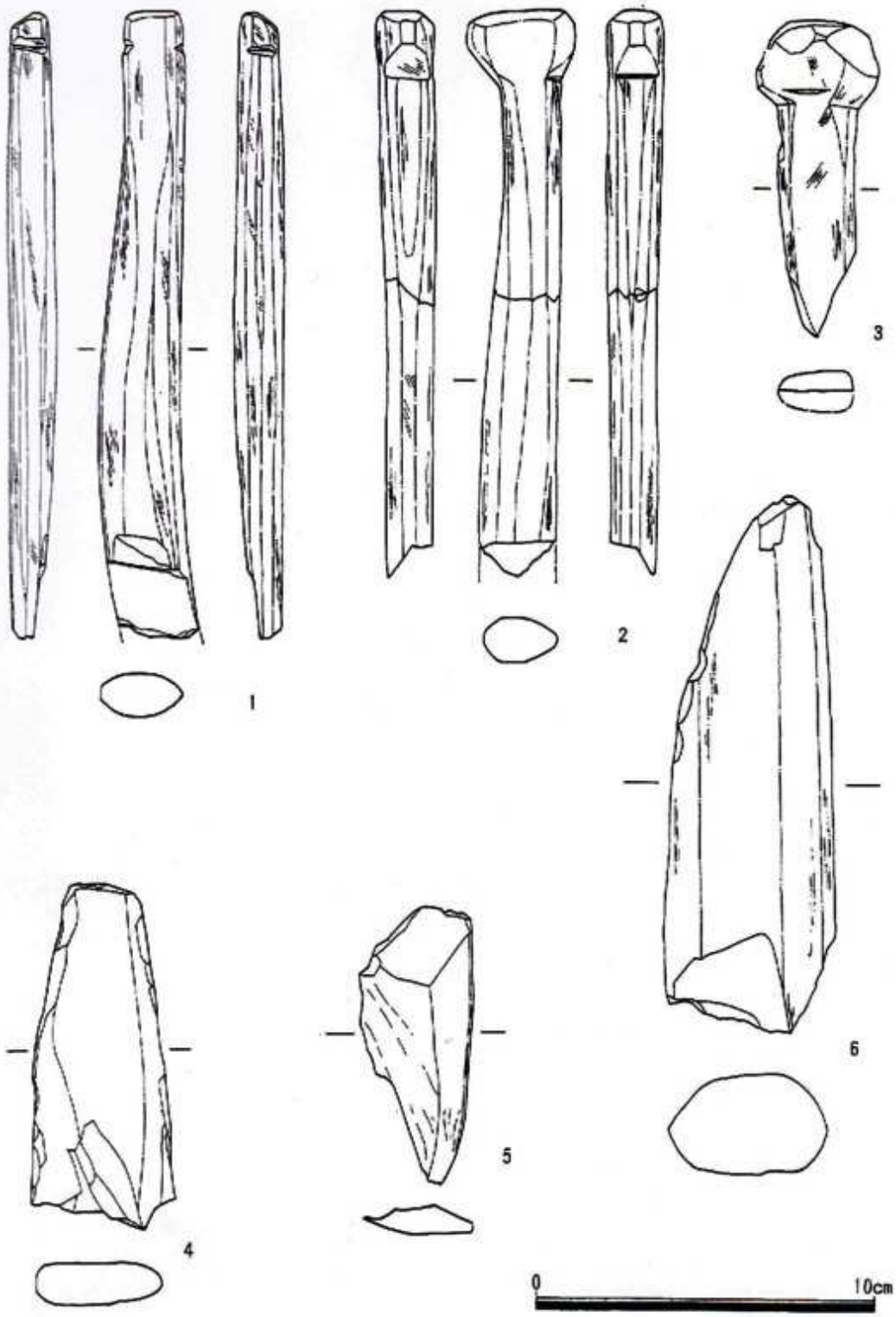
19～25は多孔質の軽石（石英安山岩）を円形、楕円形あるいは長方形に成形したものである。8.9～12.1cmの大きさで、厚さは14～39mmと前者よりも大型である。ＺＹ－99グリッド及びＹＢ～ＺＸ－102～104グリッド・Ⅲd層からの出土である。

その他の石製品（第68図10、11）

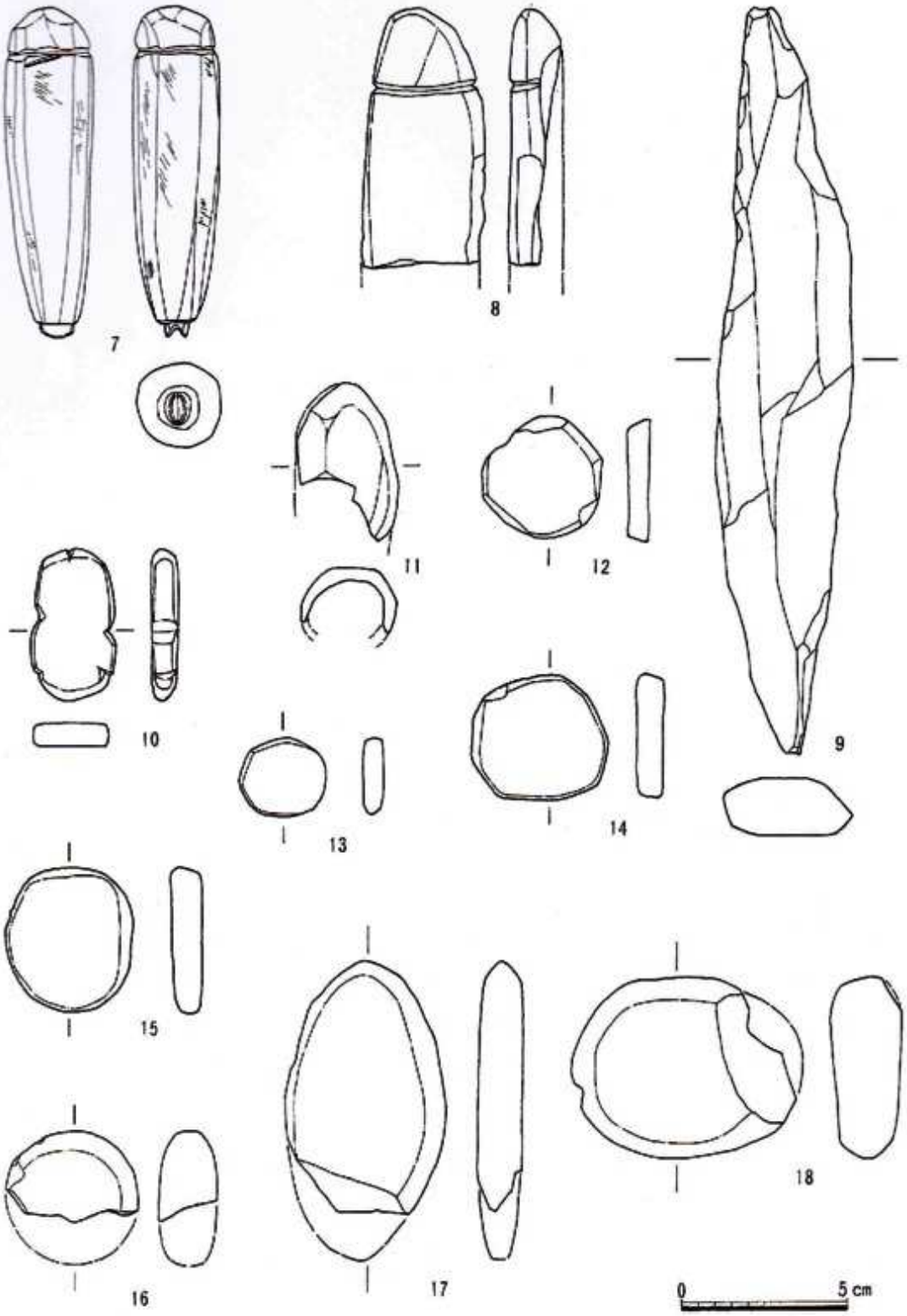
10は楕円形かつ板状に成形した石の５カ所を刻み目状に削り取ったもので、長さ4.6cm、幅2.6cm、厚さ0.8cmである。石材は凝灰質泥岩、ＺＸ－99グリッド・Ⅲa～Ⅲb層からの出土である。

11は軽石質泥岩を鐸形土製品状に成形したものである。ＺＺ－103グリッド・Ⅰ層からの出土である。

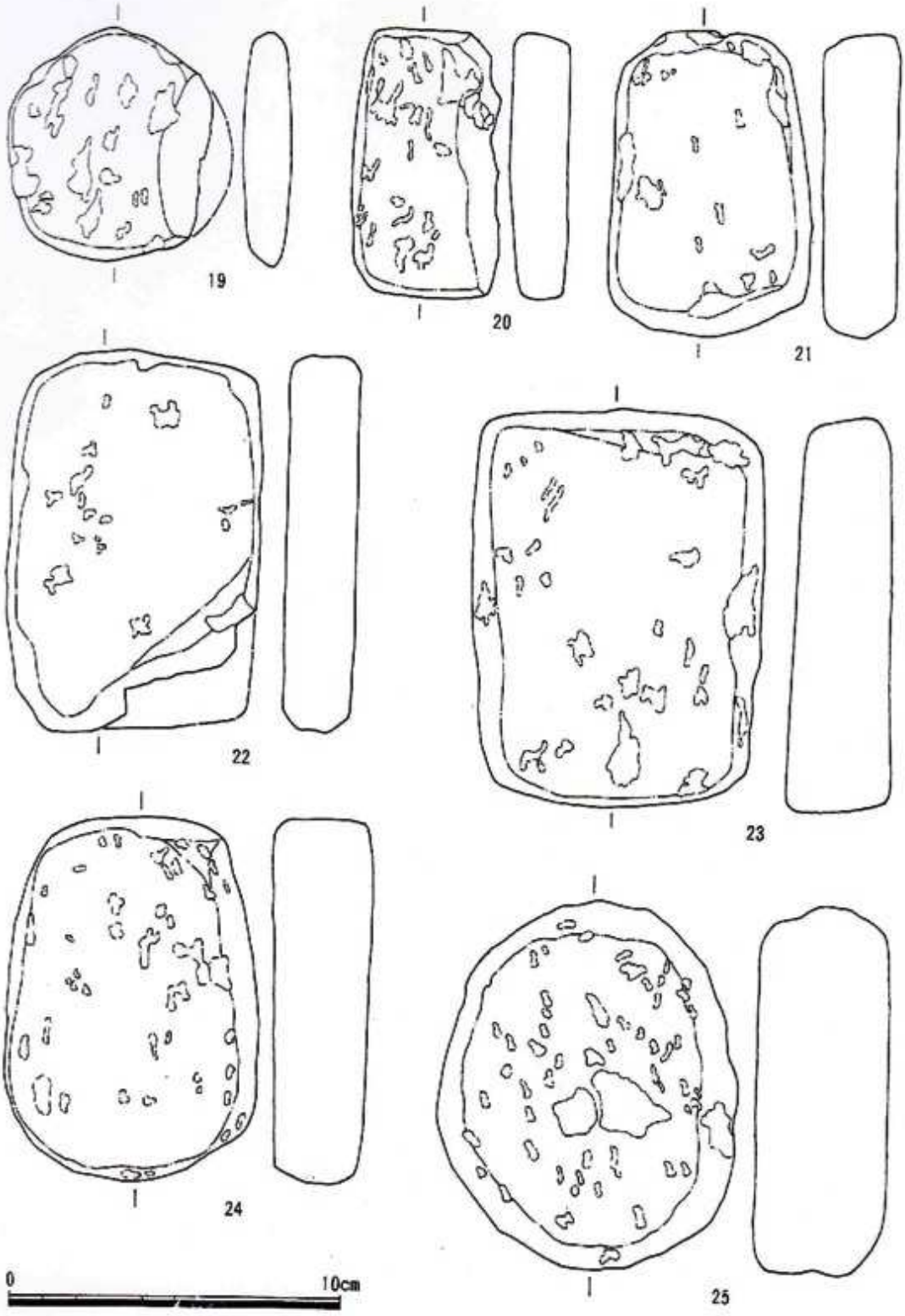
（秋元信夫）



第67図　D_8区遺構外出土石製品実測図(1)



第68図　D_5 区遺構外出土石製品実測図(2)



第69図　D_5 区遺構外出土石製品実測図(3)

第Ⅴ章　自然科学的調査

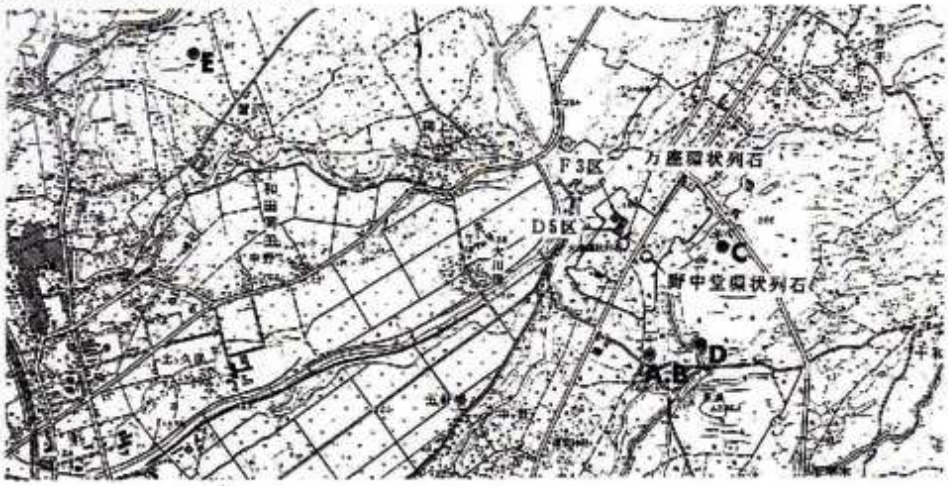
1．大湯環状列石第９次調査出土縄文土器および粘土の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学教授　三　辻　利　一

(1) はじめに

縄文土器は生産地である窯跡が残っていないので、須恵器や中世陶器のようにして産地を求める訳にはいかない。通常、１遺跡から出土した多数の縄文土器を分析した場合、クラスター分析法を使って土器を分類し、その結果を考古学的な分類結果と対応させる。さらに、粘土を探し出すことによってその産地を求めたり、同時期のいくつかの遺跡から出土した土器をも分析し、クラスター分析によって類似した胎土をもつ土器を探し出し、遺跡間交流を追跡したりする。このような方法で縄文土器の胎土分析の研究は遅ればせながら、進みはじめている。

本報告では大湯環状列石第９次調査で出土した縄文土器と、その素材となる粘土を蛍光Ｘ線分析した結果について報告する。



第70図　分析資料採取地点

第１表　分析資料一覧表

資　料　名	出土、採取、採掘地点	備　　考
土　器　1	大湯環状列石D_5区　ＺＸ－103グリッド　Ⅲb層	縄文後期前葉
土　器　2	D_5区　ＺＸ－104グリッド　Ⅰ～Ⅱ層	縄文後期中葉
土　器　3	F_3区　ＹＪ－109グリッド　Ⅲd層中位	縄文後期前葉
土　器　4	F_3区　ＹＪ－109グリッド　Ⅲd層中位	縄文後期中葉
粘　土　1	F_3区　第901号ピット	径30cm、深さ11cmのピット上部より
粘　土　A	大湯環状列石ののる舌状台地（中通台地）南東側斜面	第70図参照
粘　土　B	同　　上	同　　上
粘　土　C	中通台地南東側に隣接する台地上	同　　上
粘　土　D	豊真木沢川底	同　　上
粘　土　E	中通台地の北西に位置する砂利採取場	同　　上

2．大湯環状列石出土土器付着黒色物質の分析

岩手県立博物館専門調査員　赤　沼　英　男

縄文時代後期と推定されている大湯環状列石F_3区出土の土器表面に付着している黒色物質の分析結果を、以下に報告する。

(1) 分析資料ならびに分析方法

分析した資料は、大湯環状列石F_3区ＹＨ－109グリッド・Ⅲd層上面から検出された土器（第18図７、ＰＬ10－３）の表面に付着していた黒色物質である。

分析にはミクロスパーテルを使って土器表面より採取することのできた、微小試料片を用いた。

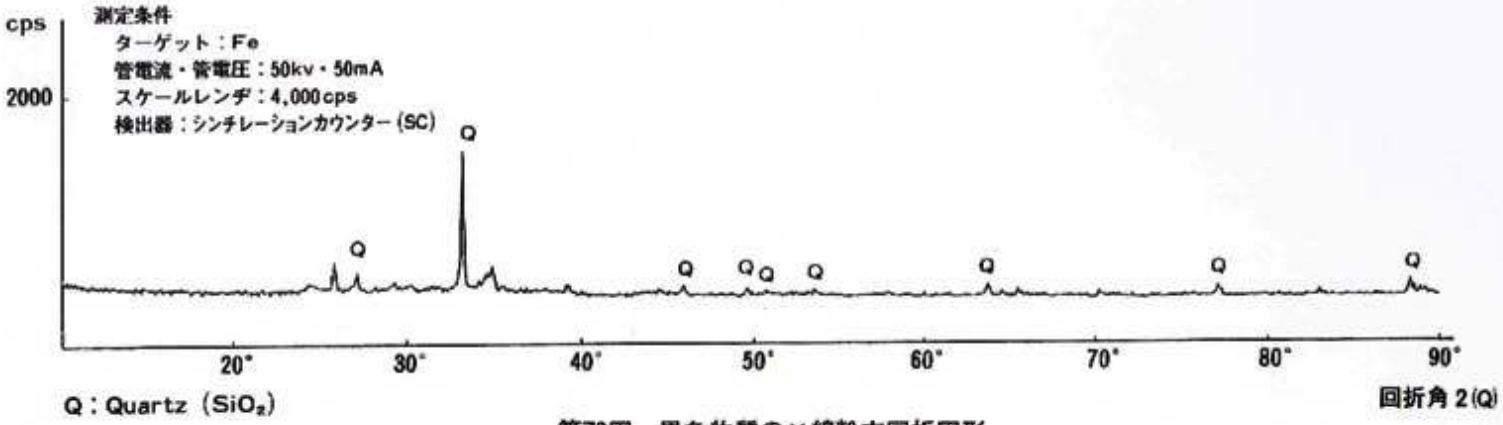
採取した試料を真空デシケーター中で十分乾燥しメノウ－乳鉢で粉砕した後２分し、一方はＸ線粉末回折法により含有される鉱物の同定を、また、他方については赤外分光分析に供し、含有される有機化合物の検討を行った。

(2) 分析結果

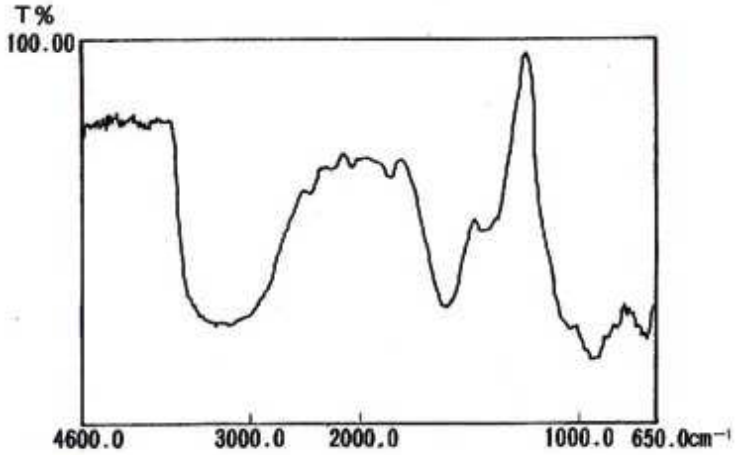
第73図は黒色物質のＸ線回折像である。3.34、2.46、2.28、1.82、1.54、4.19に一連の強い回折線が検出されているが、これは石英（α－Quartz：$\alpha-SiO_2$）による回折線と同定される。

第74図は黒色物質の赤外吸収スペクトルであるが、3600～3200cm^{-1}にＯＨ伸縮による巾広い吸収帯、1700～1600cm^{-1}のＣ＝Ｏ伸縮およびＣ＝Ｃ環伸縮と推定される吸収が特徴的である。第75図はメタノール－クロロホルム（１：２）混合溶液可溶成分の赤外吸収スペクトルである。3600～3200cm^{-1}のＯＨ伸縮の他に2930～2860cm^{-1}には比較的鋭いオレフィンの－ＣＨ伸縮が観察され、さらに1700～1600cm^{-1}付近の吸収体はＣ＝Ｏ伸縮とＣ＝Ｃ環伸縮の２つに分離している。動植物中に含まれる高級脂肪酸の赤外吸収スペクトルの吸収パターンに近い。

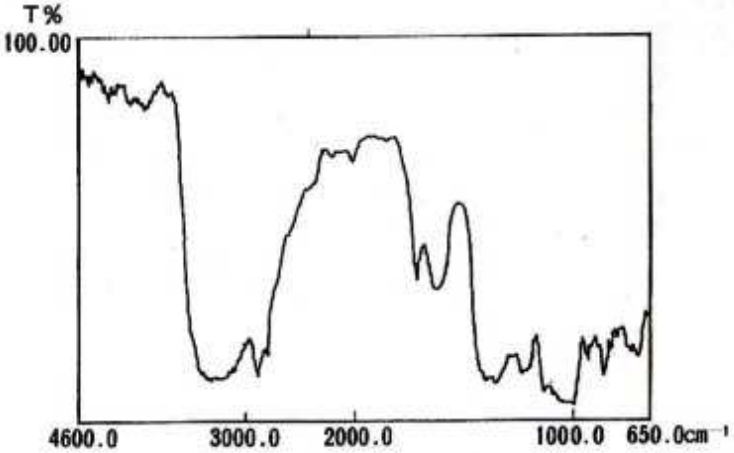
上述の分析結果を総合すると、土器片に付着している黒色物質は、粘土を何らかの膠着材に混ぜたものであり、黒色物質が土器表面の亀裂、欠落孔に残存していることから、痛んだ土器の補修材として使用されたものと推定される。なお膠着材については、今後ＧＣ－ＭＳ分析法によりメタノール－クロロホルム可溶成分の同定を行うことによりその特定が可能となるであろう。



第73図　黒色物質のX線粉末回析図形



第74図　黒色物質の赤外線吸収スペクトル



第75図　黒色物質のメタノール―クロロホルム可溶成分の赤外線吸収スペクトル

第Ⅵ章　調査のまとめ

特別史跡大湯環状列石は、米代川の一支流である大湯川の南東岸の台地上に位置する。大湯環状列石周辺の発掘調査は、昭和48～51年の分布調査によりその存在が知られていた各地区の様々な遺構の形態、性格、構築時期及び環状列石との関連の解明を主目的に、昭和59年から継続され、平成３年でほぼその目的を達成している。

また、平成２年３月に周辺遺跡のほとんどが特別史跡に追加指定され、３年度から追加指定地の公有化を開始、４年３月には「特別史跡大湯環状列石環境整備基本構想」をまとめるに至った。

このようなことから、本年度からは史跡の環境整備を進めるための直接的な資料の収集を目的に調査が行なわれることとなった。

本年度の調査区の一つであるF_3区は、万座環状列石の北北西80～130ｍの地点である。第７次調査F_2区の南西側隣接地であり、第６次調査F_1区の南東30ｍの距離にある。F_1区の調査では同区南西側から、本遺跡で初めての竪穴住居跡４軒が検出され、翌年のF_2区の調査でもその北西端から１軒が確認された。このため、万座環状列石の北側台地縁辺部には環状列石と関連ある竪穴住居群が分布するものと予想された。F_3区の調査は、この竪穴住居群の南西側への広がりを確認しようとするものであった。

F_3区の調査では、縄文時代後期の配石遺構５基、集石遺構１基、竪穴遺構１基、土壙６基、ピット１個、時期不明の土壙１基が検出された。また、遺構内・外から完形あるいは復元可能土器21個体、土器片ダンボール箱17箱、石器282点、剥片１箱、土製品76点、石製品16点の出土があった。

配石遺構５基は、野中堂、万座環状列石や一本木後口配石遺構群を構成する配石（組石）遺構のように、石を規則的に立て並べたり、配置したものではなく、３～十数個の石が0.5～1.5ｍ四方に寄せ集められたような状態で検出されたものである。いずれの配石下からも土壙等の下部遺構は確認されていない。

竪穴遺構としたものは、径2.80×3.28ｍと竪穴住居跡とほぼ同規模でありながら、炉跡や柱穴が確認できなかった遺構である。

土壙７基のうち、南西部に位置する第905～907号土壙の３基は、出土遺物から縄文時代後期前葉に位置づけられる。また、北西部の第901～903号土壙は、遺構内からの遺物の出土はないものの、遺構確認面及び周辺の出土遺物から同時期と考えられる。なお、第904号土壙については、確認面や堆積土から大湯浮石降下（10世紀）以降と考えられる。D_5区北西端に位置する第901号竪穴住居跡に近接していることから、中世に下る可能性もある。

第901号ピットは、径32cm、深さ12cmの小規模な穴で、ピット内には粘土が充填されていた。同様のピットは、D_1区、G_1区の調査でも検出されている。

予想された竪穴住居跡は確認されず、F_3区まで竪穴住居群が広がらないことが判明した。竪穴住居群の分布範囲については、F_3区北西側の調査を待たなければならないが、今回検出された遺構のうち、縄文時代後期と考えられる遺構が全て北西際に分布していること、遺物の分布密度がF_3区中央から西側にかけて高いことから、これらの遺構、遺物はF_3区際まで延びるであろう竪穴住居群との関連が考えられる。

D_5区の調査は、前述の竪穴住居群やF_2区で確認されているフラスコ状土壙群、Tピット群と万座環状列石との関連を解明しようとするものであった。

D_5区の調査では、縄文時代後期の環状配石遺構2基、直線状列石1基、配石遺構1基、石囲炉1基、Tピット1基、土壙2基、歴史時代の竪穴住居跡1軒が検出され、遺構内・外から完形及び復元可能土器111個体、土器片ダンボール箱48箱、石器564点、剥片2箱、土製品186点、石製品34点の出土があった。

環状配石遺構としたものは、環帯部と張り出し部からなる特異な形態の配石遺構で、本遺跡以外では岩手県松尾村の釜石遺跡の類例が知られている程度である。本遺跡では第4次調査D_1区で3例が検出されており、今回のものが4、5例目である。第909号環状配石遺構の環帯部径が8.8mで、D_1区202号環状配石遺構の14.0mに次いで2番目に大きい。本遺構で注目されることは張り出し部（敷石部）の位置である。D_1区の3基は南東側あるいは北西側に張り出し部をもつのに対し、今回の909号環状配石は南側に張り出し部を有し、910号環状配石でも、調査された北東側では確認されていない。このことは、これらの張り出し部の位置は方位に関係なく、その延長線上にある環状列石との位置関係に影響されるものと考えられる。これらの遺構の時期については、未調査の配石直下以外からは下部土壙等が検出されず、明確にすることができない。遺構の新旧関係や周辺の遺物から後期前～中葉と考えられ、環状列石よりも若干新しくなる可能性もあるが、環状列石の影響を依然持ち続けているのであろう。

直線状列石は、24～58cm大の扁平な石5個が直線状に配置されたもので、その長さは2.2mである。

南東端で確認された第906号配石遺構は、昭和27年の文化財保護委員会による調査で、万座環状列石の北東側近傍から検出された「石列」との関連も考えられたが、調査区南部まで延びず、その可能性は少ない。

D_5区北東側で唯一検出された第908号Tピットは、F_2区で検出されているTピット群との関連が考えられる。

縄文時代後期に位置づけられる遺構は、908号Tピットを除き、D_5区南側に偏在しているが、

環状列石近傍のように密集はしていない。万座環状列石周辺については、D_1、D_2区の調査結果より、列石から12mまでは建物群域、12mから24mまではフラスコ状土壙等の分布域、24mから48mまでは遺物の廃棄域となるものと推察してきた。列石に最も近いD_5区南端部の列石までの距離は24mであり、本調査区は遺構の密集する区域の外側にあたる。遺構が少ないこと、フラスコ状土壙が分布しないこと等から、前述の規則性は万座環状列石の北側にも及ぶものと考えられる。

F_3区、D_5区からの出土遺物は膨大な量で、今までの調査で最も多い。縄文土器は、数点の早期中葉の貝殻沈線文系土器以外は後期に位置づけられ、その大半は後期前葉の土器である。完形や復元可能な土器が多く、後期の土器研究の良好な資料となるものと考えられる。

土製品では、土偶の多さが目についた。完形のものはなく、頭部、腕、足等の部位のみの出土が多い。また、環状土製品、鐸形土製品、きのこ形土製品、三角形土製品、土器片利用土製品等の用途不明、非実用品、耳栓、有孔土製品等の装飾品の出土もあった。

石製品としては、石剣、石刀、男根状石製品、有孔石製品、円盤状石製品、軽石製石製品等の出土があった。男根状石製品2点のうち1点は、その基部に女性の性器と考えられる表現のあるもので、類例の少ないものである。円盤状石製品のほとんどはF_3区、軽石製石製品はD_5区からの出土であり、分布に隔りのみられる遺物である。

（秋元信夫）

参考・引用文献

阿部義平　「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻1号　1968年

今井富士雄・磯崎正彦　「十腰内」『岩木山』岩木山刊行会　1968年

江波輝弥　「岩手県岩手郡釜石遺跡」『日本考古学年報6』　日本考古学協会　1957年

岡田　康博　「十腰内第Ⅲ群・第Ⅳ群・第Ⅴ群の再検討」『弘前大学考古学研究3号』　1986年

加藤普平・鶴丸俊明　『石器の基礎知識Ⅰ・Ⅱ』　柏書房　1980年

鈴木道之助　『石器の基礎知識Ⅲ』　柏書房　1981年

鈴木保彦　「集落の構成」『季刊考古学』第7号　雄山閣　1984年

富樫泰時　「貝殻沈線文系土器様式」『縄文土器大観』第1巻　小学館　1989年

戌田滋彦　「青森県の土器」『縄文文化の研究』第4巻　雄山閣　1981年

林　謙作　「縄文期の葬制・第Ⅱ部」『考古学雑誌』第63巻3号　1977年

本間　宏　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号　1985年

〃　「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」『よねしろ考古』第3号　1987年

〃　「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』第4号　1988年

村越　潔　「北東北の葬制」『よねしろ考古』第3号　1987年

水野正好　「環状組石墓群の意味するもの」『信濃』第20巻第4号　1968年

〃　「ストーンサークルの意義」『季刊考古学』第9号　雄山閣　1984年

村田文夫　『縄文集落』　考古学ライブラリー36　ニュー・サイエンス社　1985年

秋元信夫　「環状列石と建物跡」『よねしろ考古』第6号　1990年

文化財保護委員会　『大湯町環状列石』　1953年

青森県教育委員会　『中ノ平遺跡』　1974年

〃　『大石平遺跡』　1985年

〃　『大石平遺跡Ⅲ』　1987年

〃　『表館(1)遺跡Ⅲ』　1987年

大館町教育委員会　『崎山弁天遺跡』　1974年

大迫町教育委員会　『立石遺跡』　1979年

宮城県教育委員会、日本道路公団　『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』　1978年

秋田県教育委員会　『平鹿遺跡』　1983年

〃　『八木遺跡』　1989年

〃　『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1975年

〃　『館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　1979年

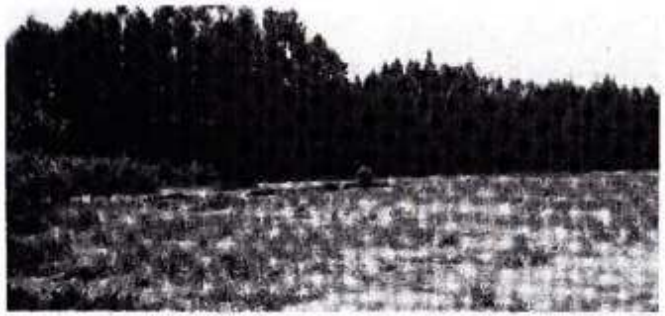
鹿角市教育委員会　『昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1976年

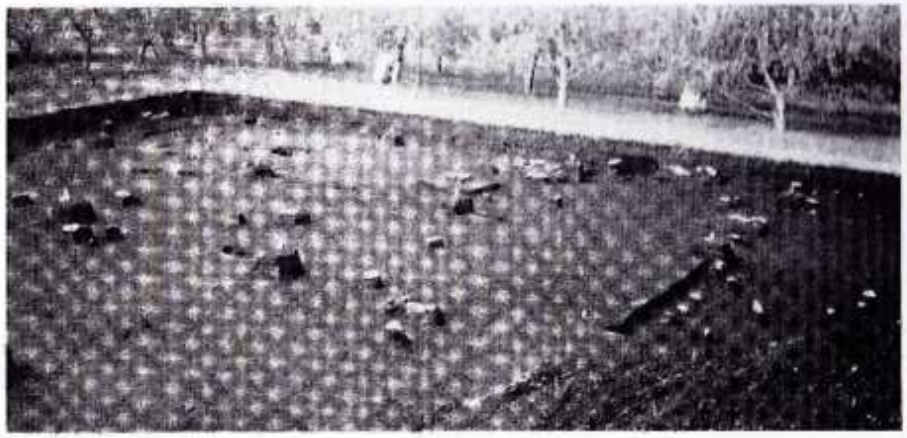
〃　『昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書』　1977年

〃　『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)～(6)』　1985～1990年

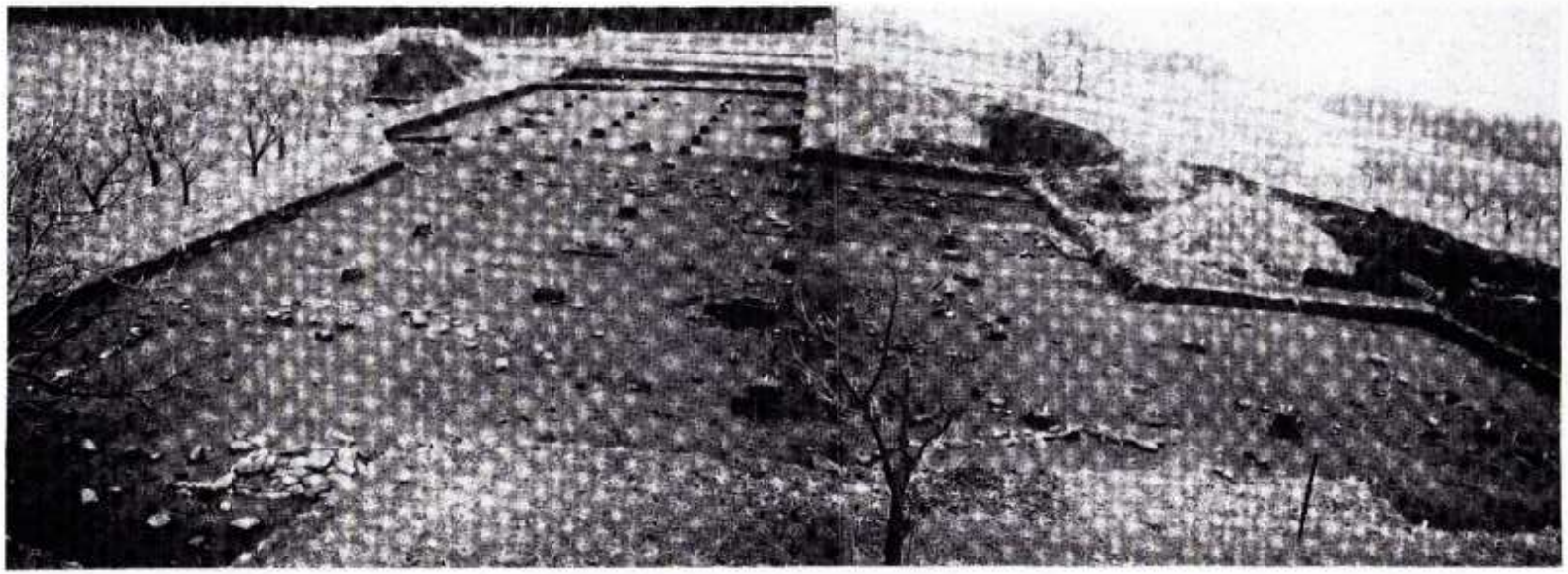
〃　『大湯環状列石発掘調査報告書(7)～(8)』　1991～1992年

ＰＬ１　特別史跡大湯環状列石全景

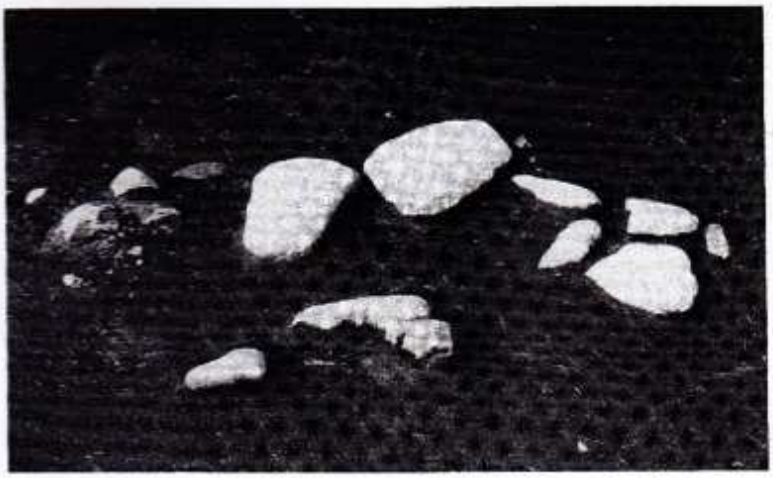




上：調 査 前
右：F_3 区全景
下：D_5 区全景

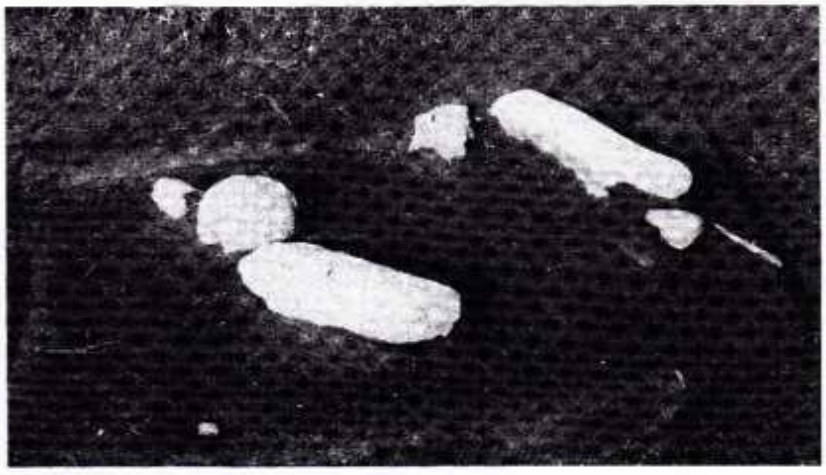


PL 2　調査区全景



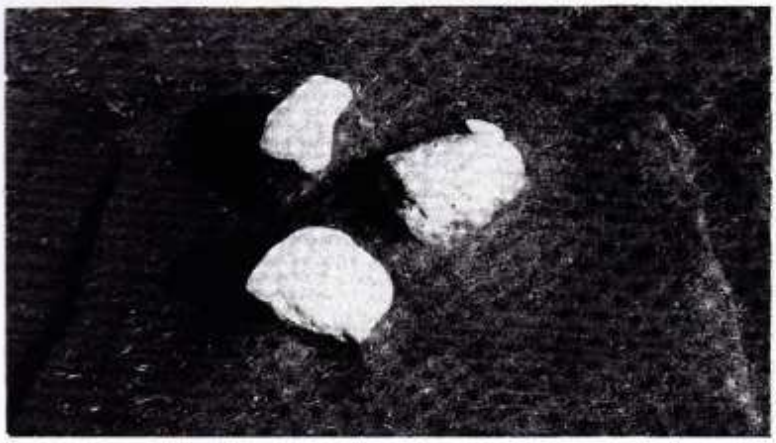
第901号配石遺構

第902号配石遺構

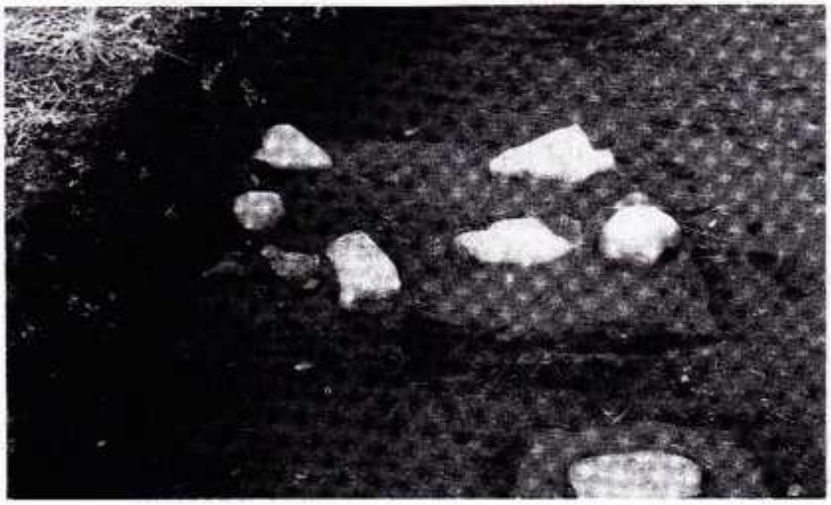


第903号配石遺構

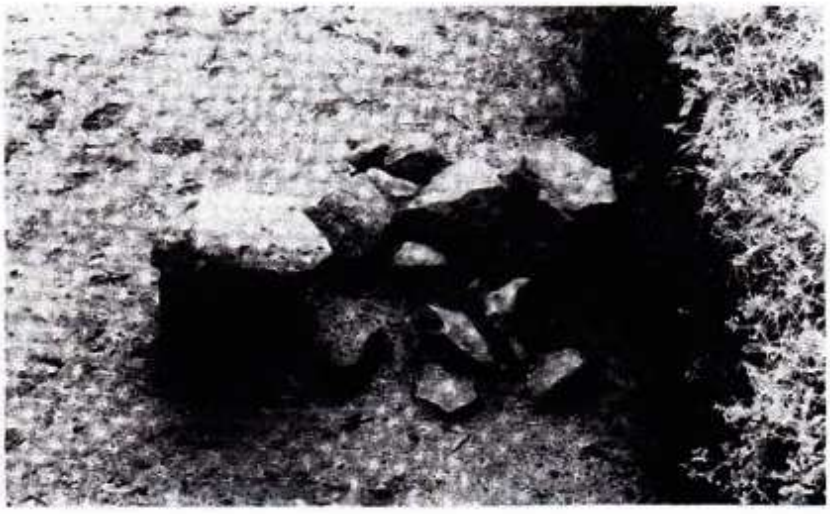
ＰＬ３　第901～903号配石遺構



第904号配石遺構

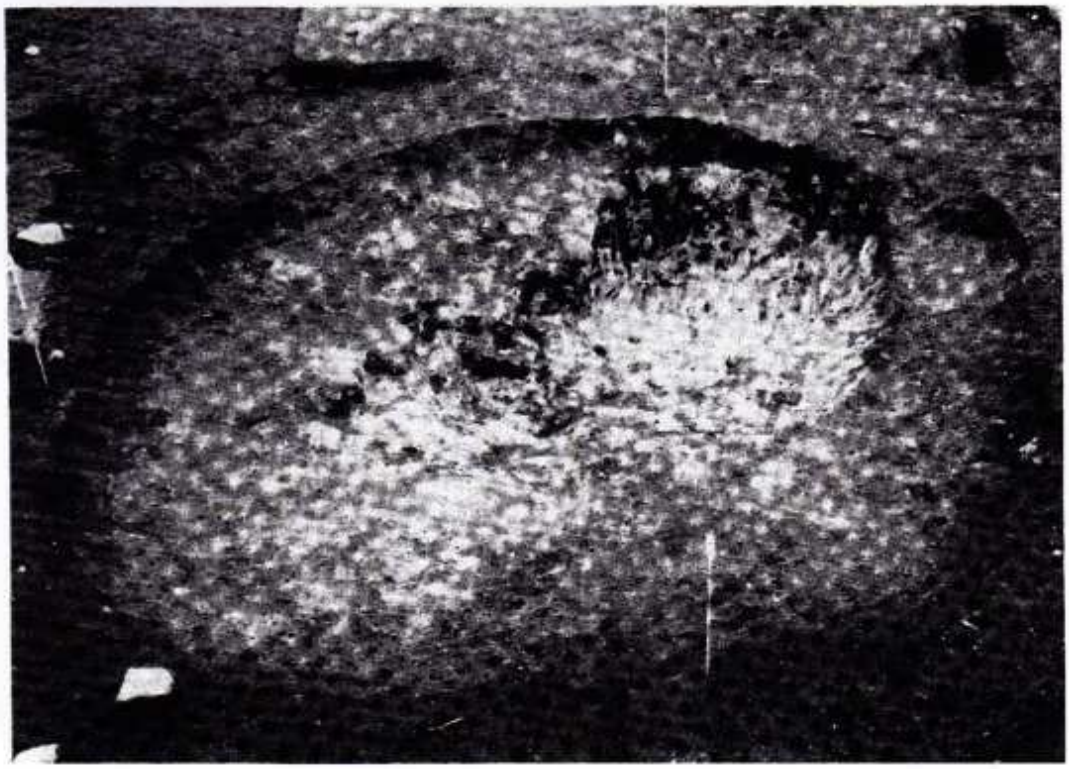


第911号配石遺構

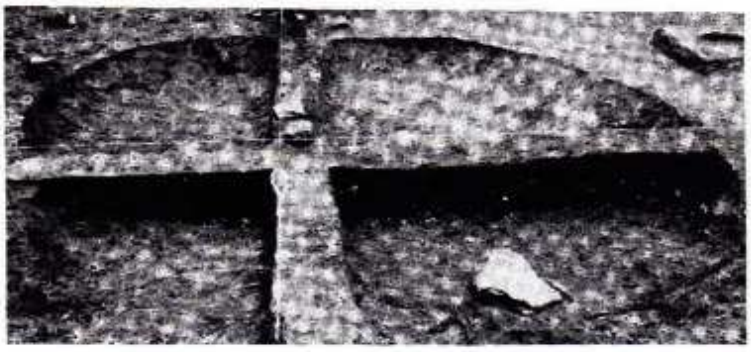


第905号集石遺構

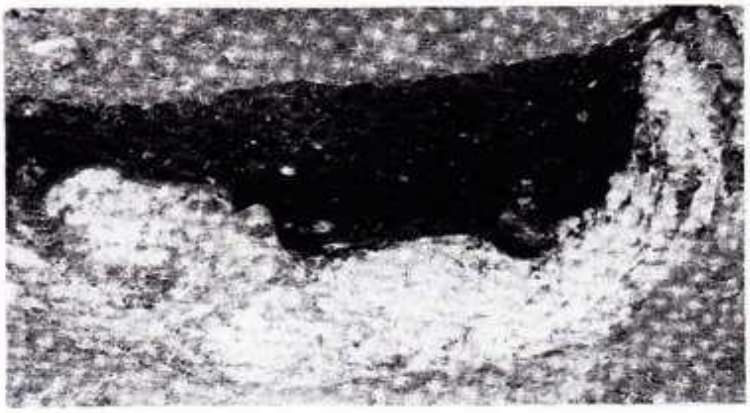
ＰＬ４　第904・911号配石遺構、905号集石遺構



第901号竪穴遺構
第906・907号土壙

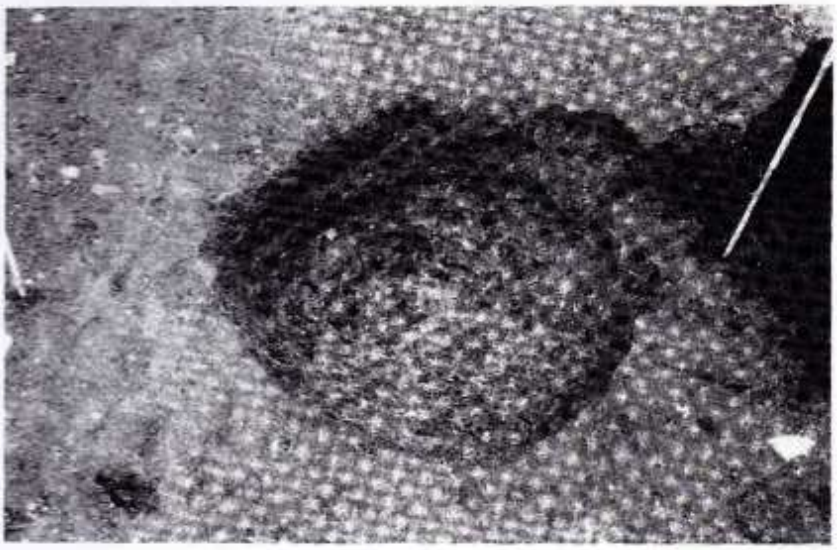


第901号竪穴遺構断面

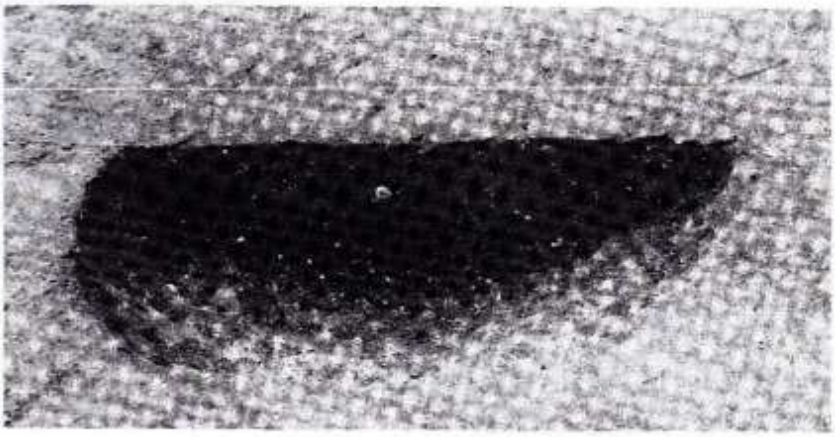


第906・907号土壙断面

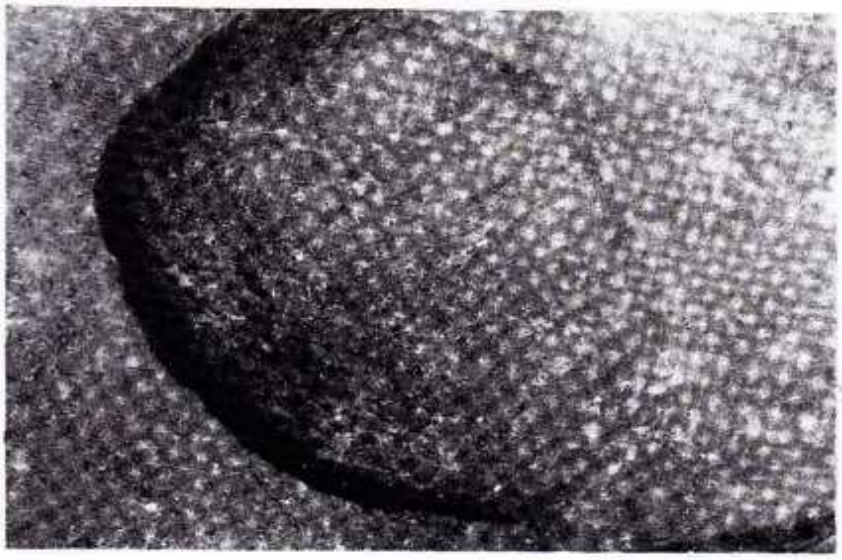
ＰＬ５　第901号竪穴遺構、906・907号土壙



第901号土壙

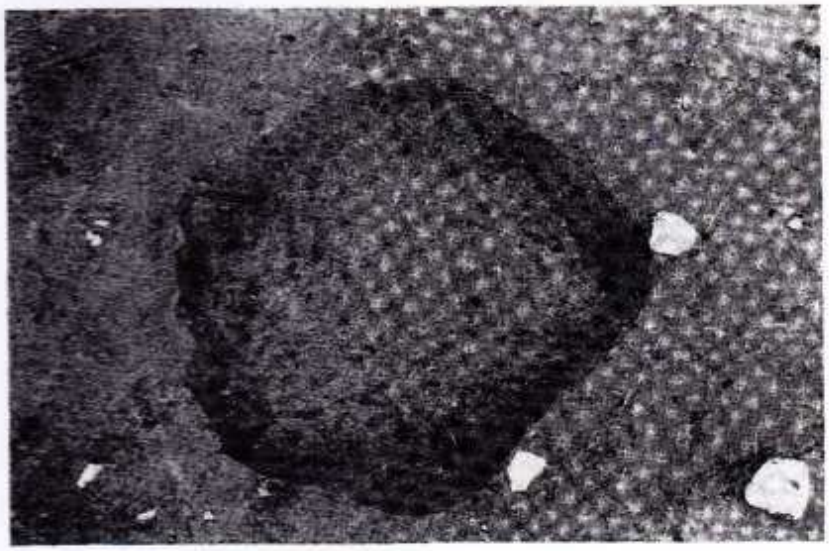


第902号土壙

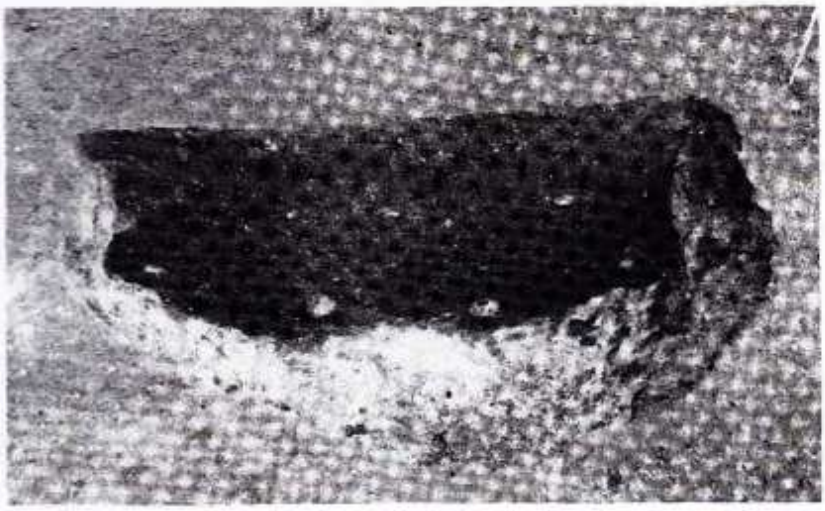


第903号土壙

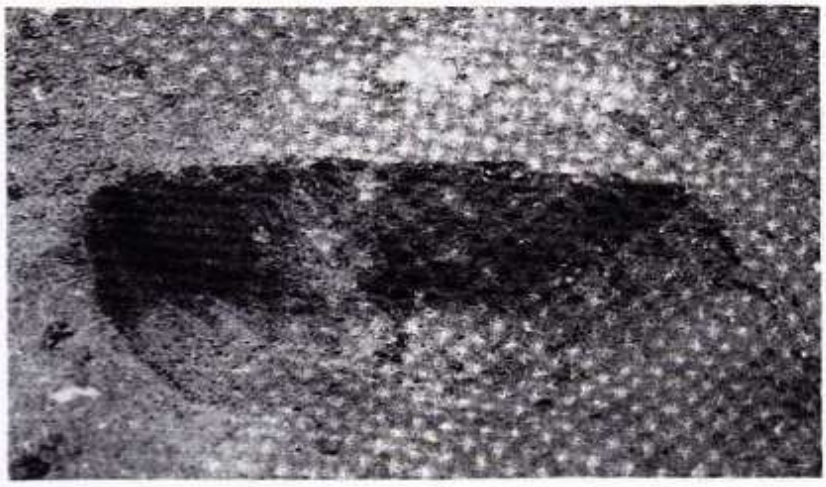
ＰＬ６　第901～903号土壙



第904号土壙



第905号土壙

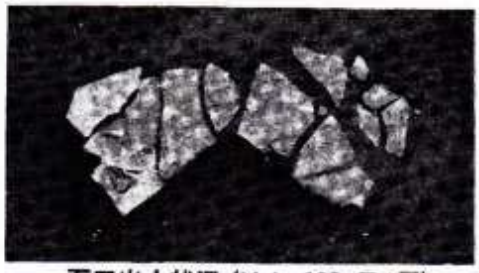


第901号ピット

ＰＬ７　第904～905号土壙、901号ピット

YH－109グリッド遺物出土状況

石刀出土状況（YT－108・Ⅲd層）



石皿出土状況（YJ－108・Ⅲd層）

壺形土器出土状況（YG－106・Ⅲb～Ⅲd層）

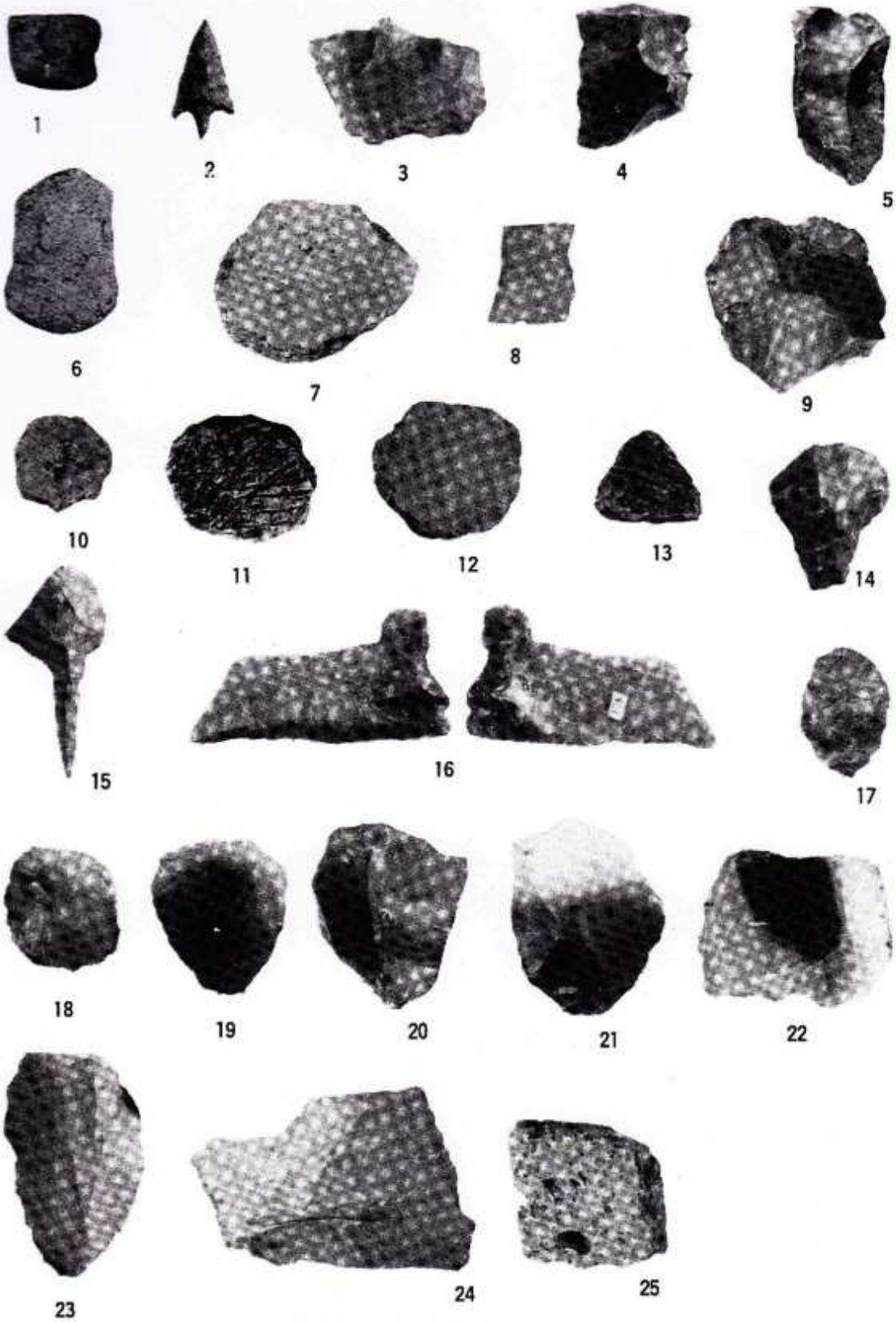
調査風景

調査風景

文化庁西田調査官調査指導

現地説明会

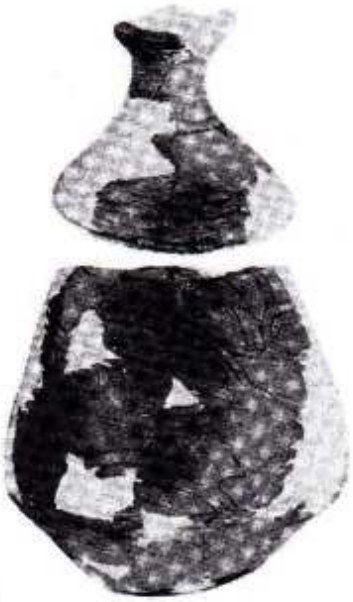
ＰＬ８　F_3区遺物出土状況



PL 9　F_3区遺構内出土遺物

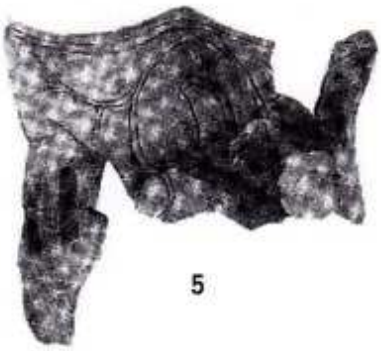
1

2



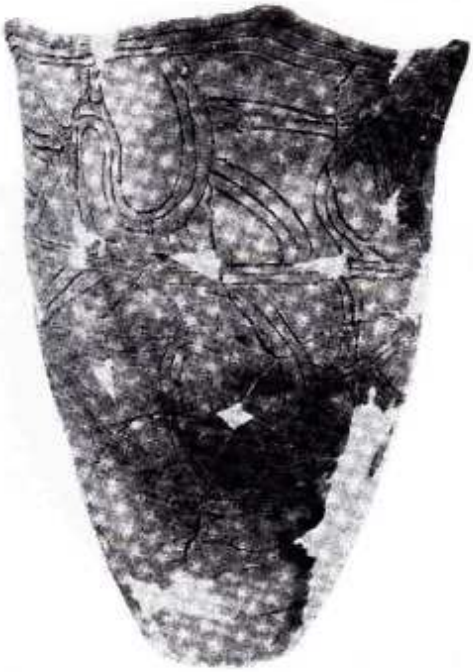
3

4



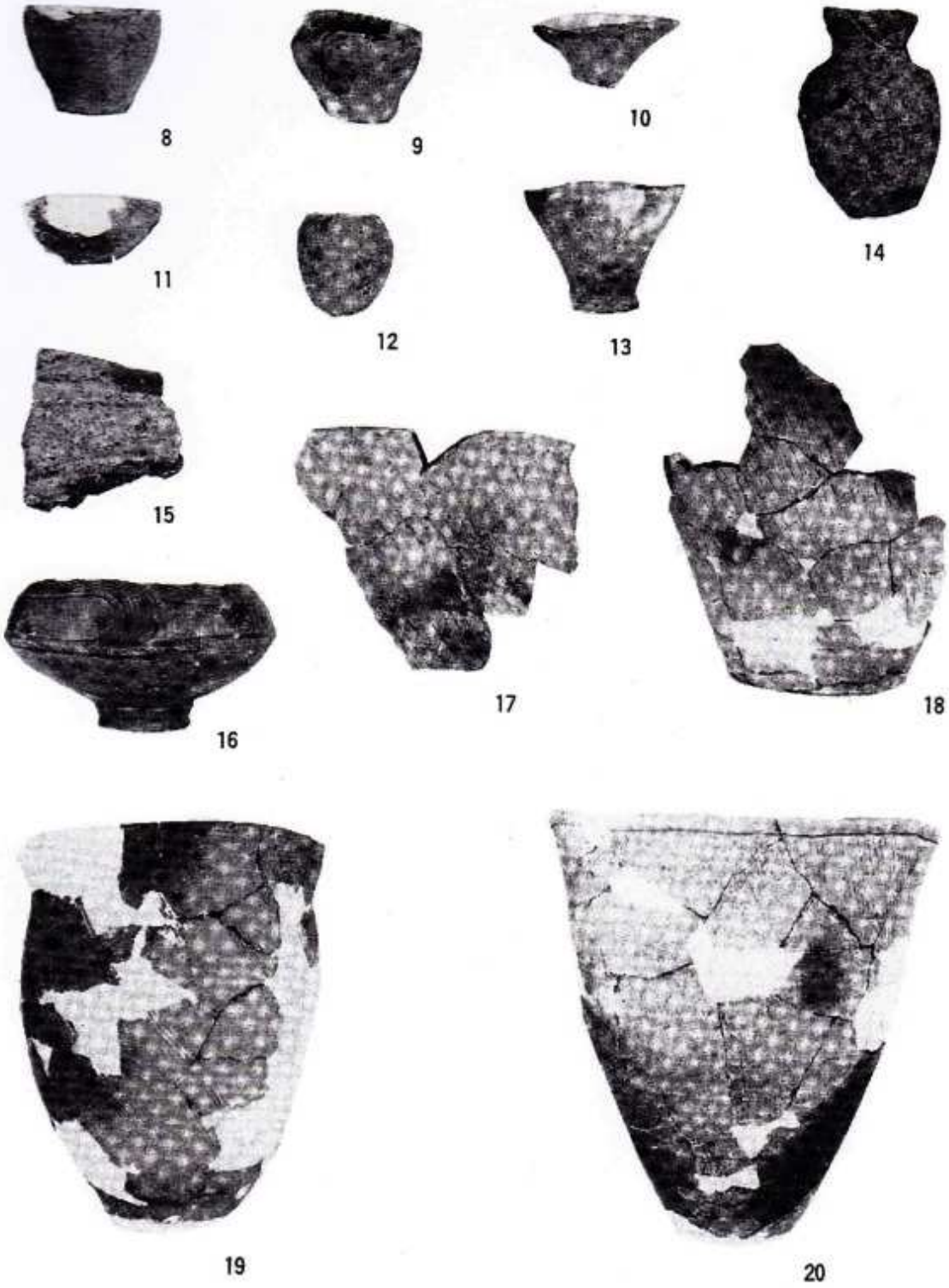
5

6

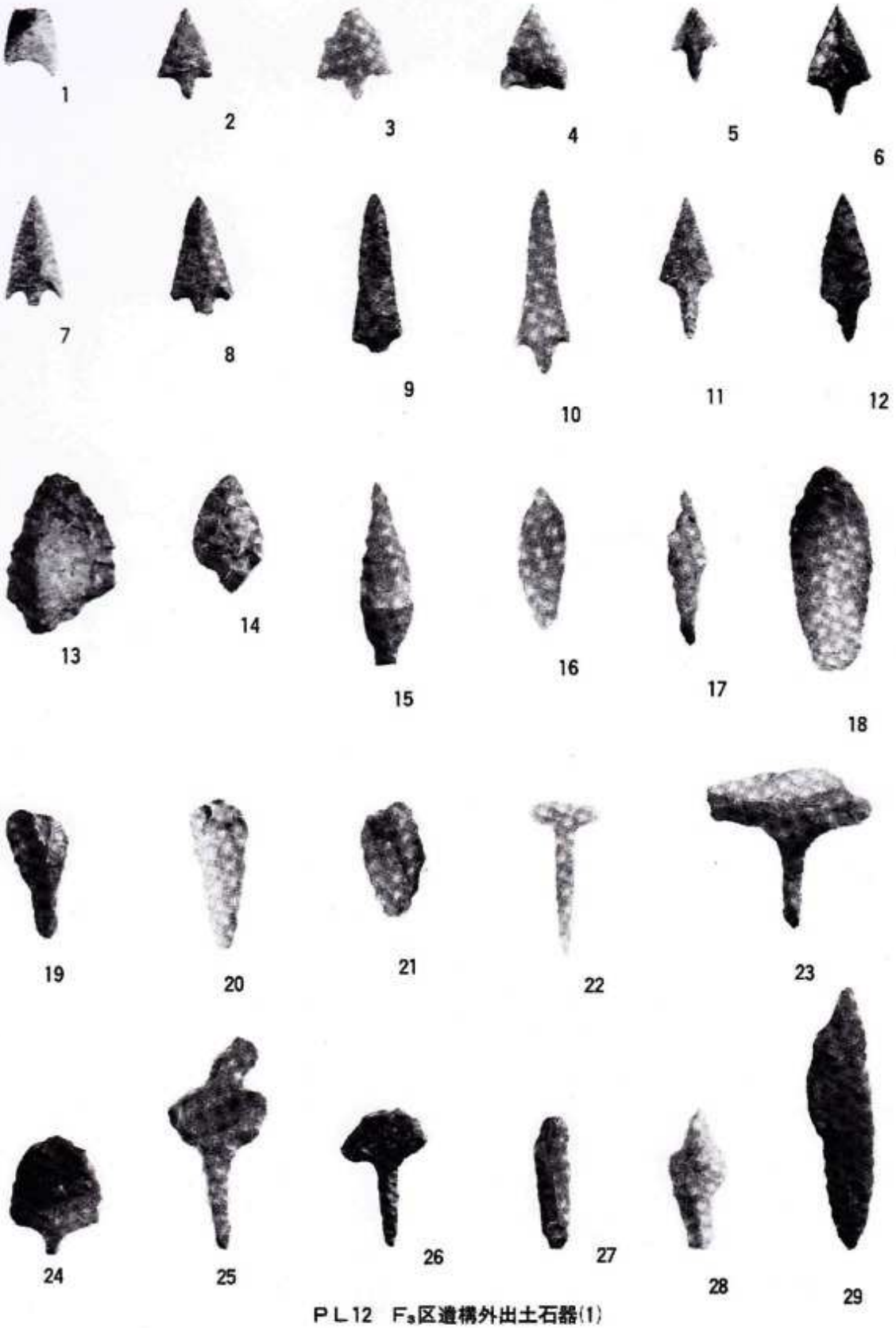


7

PL10　F_3区遺構外出土土器(1)

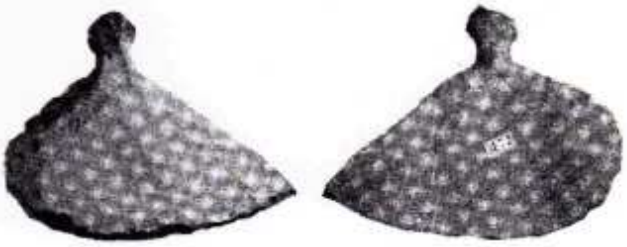


PL11　F_3区遺構外出土土器(2)



PL12　F_3区遺構外出土石器(1)

30



31

32

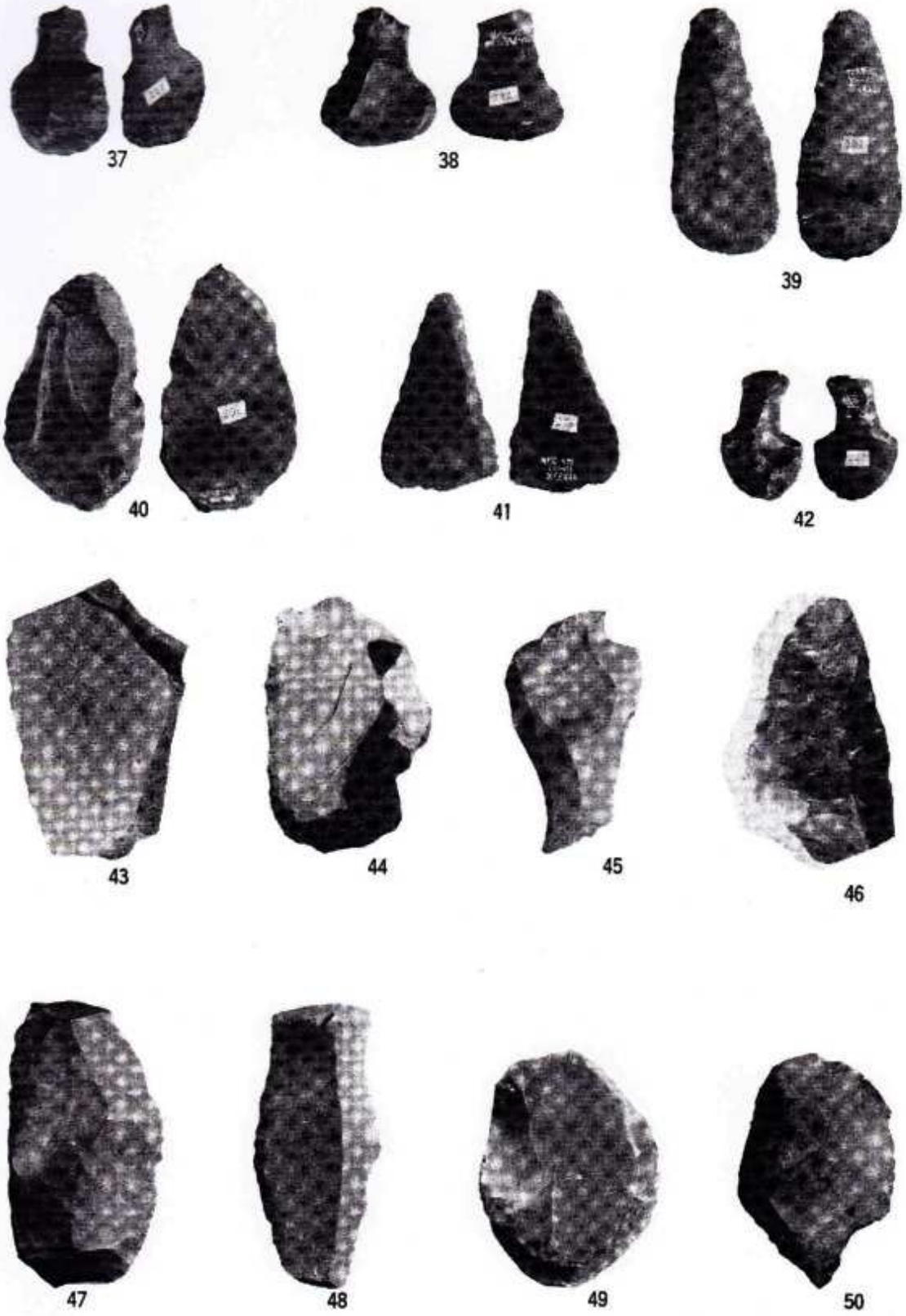
33

34

35

36

PL13　F_3区遺構外出土石器(2)

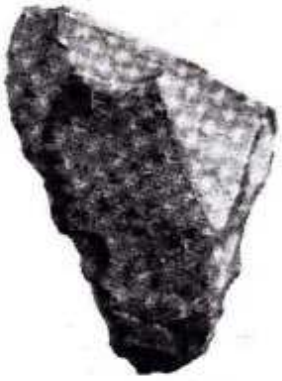


PL14　F_3区遺構外出土石器(3)

51

52

53



56

55

54

57

58

59

ＰＬ15　F_3区遺構外出土石器(4)

60

61

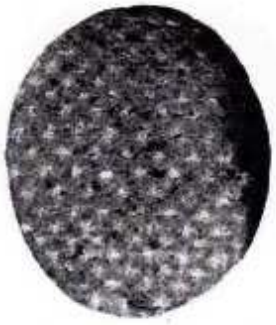
62

63

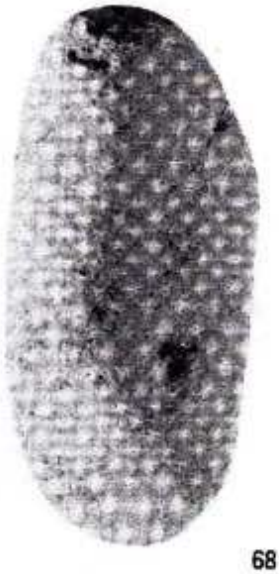
64

65

66

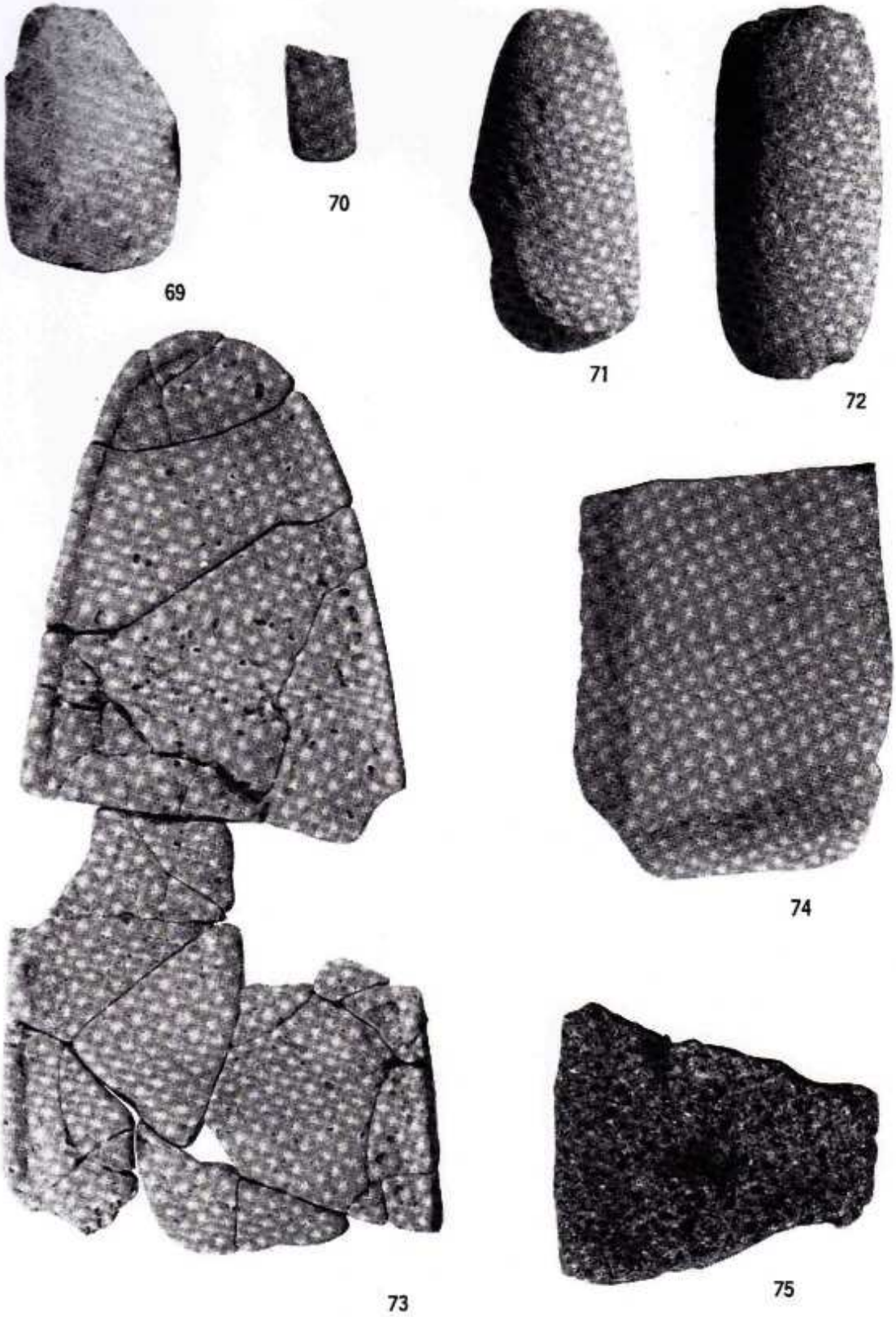


67

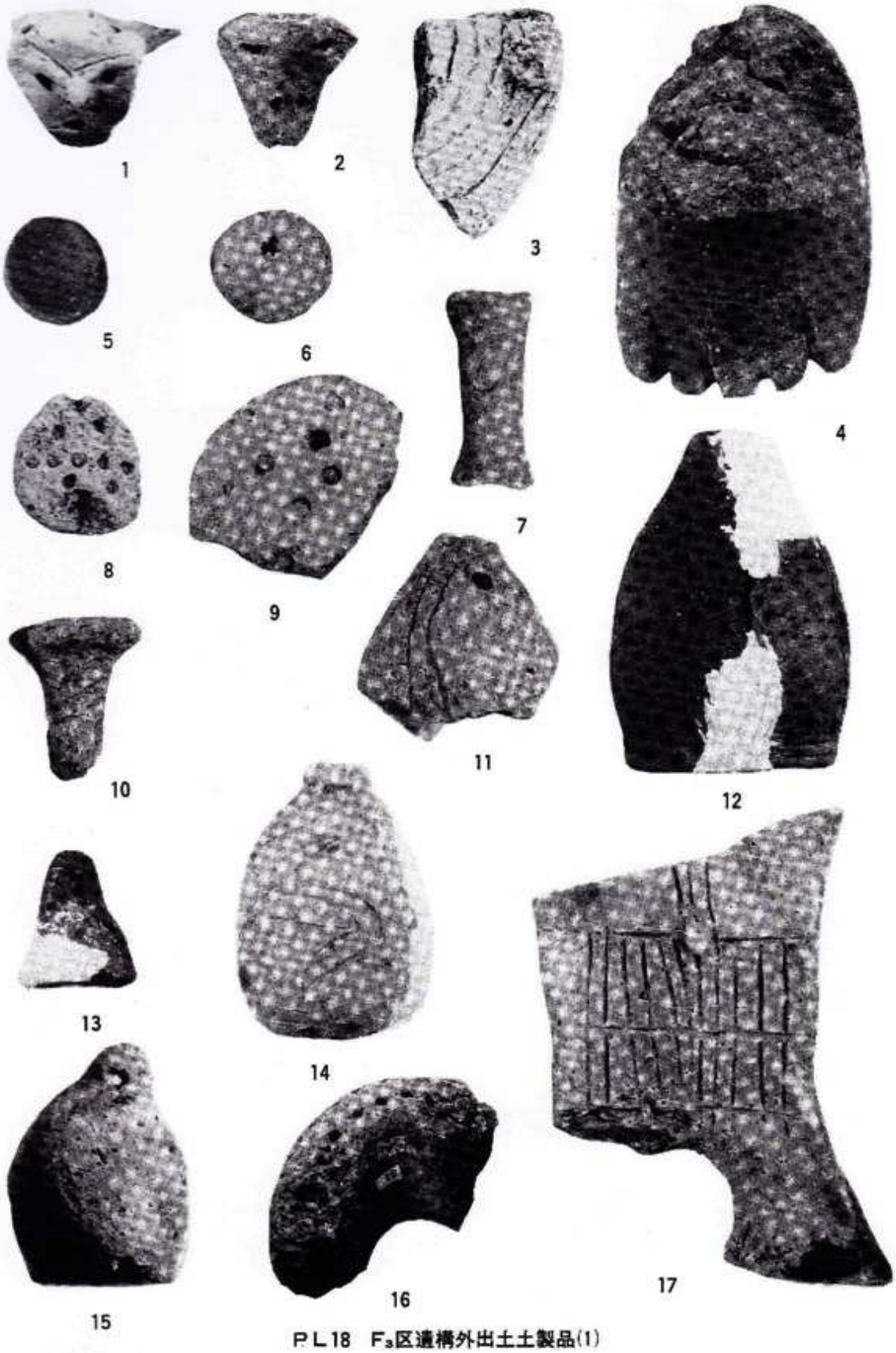


68

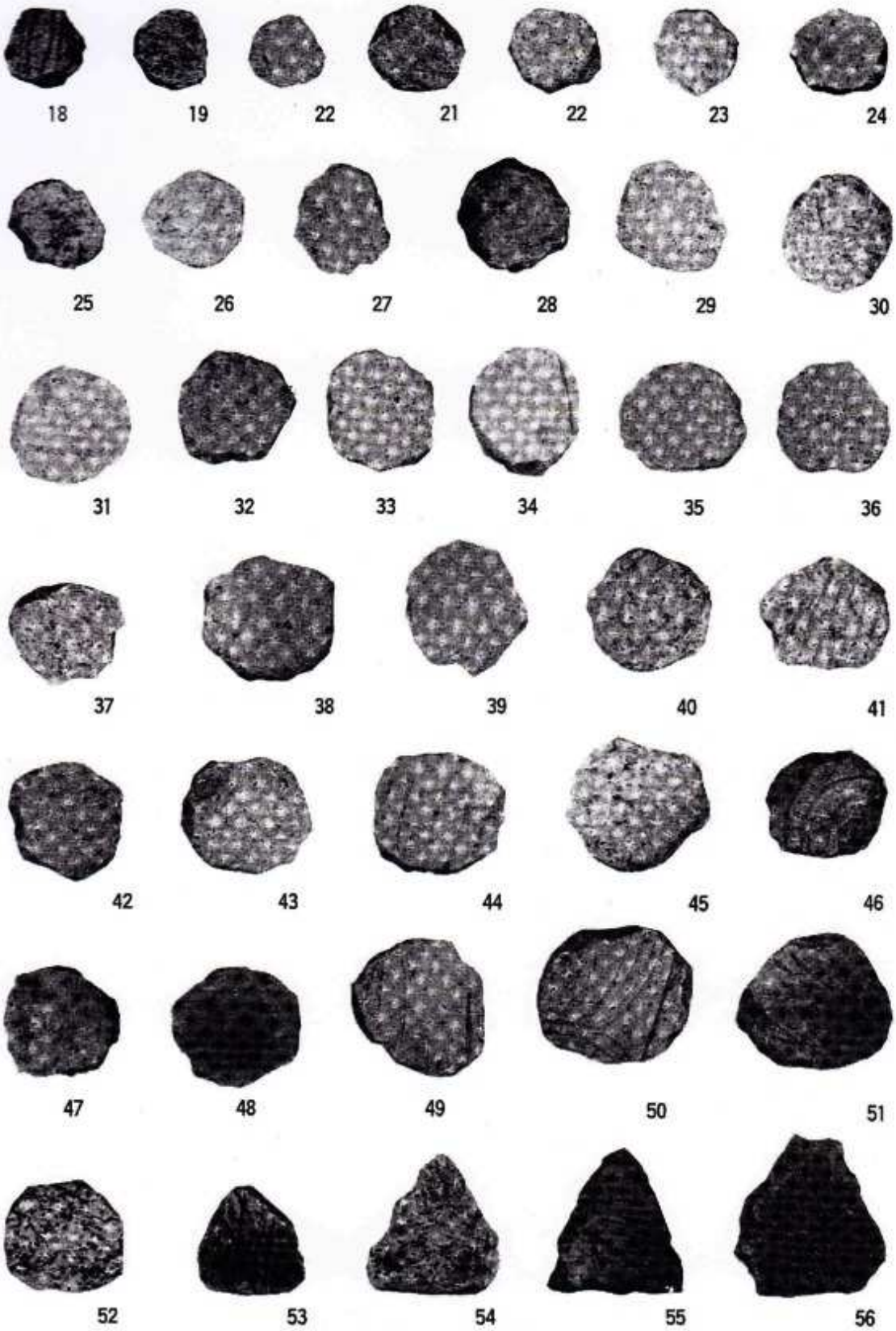
PL16　F_3区遺構外出土石器(5)



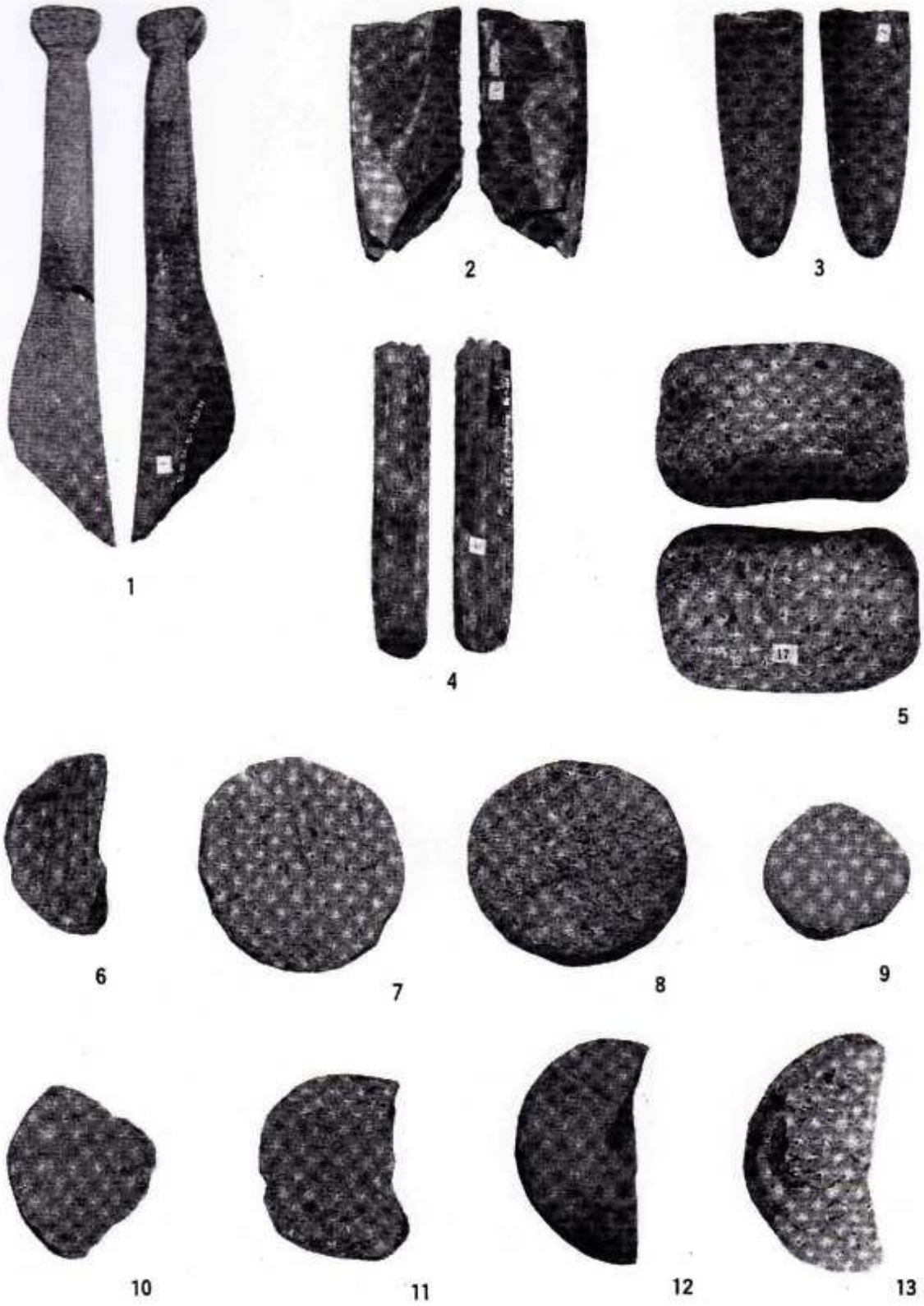
PL17　F_3区遺構外出土石器(6)



PL18　F_3区遺構外出土土製品(1)

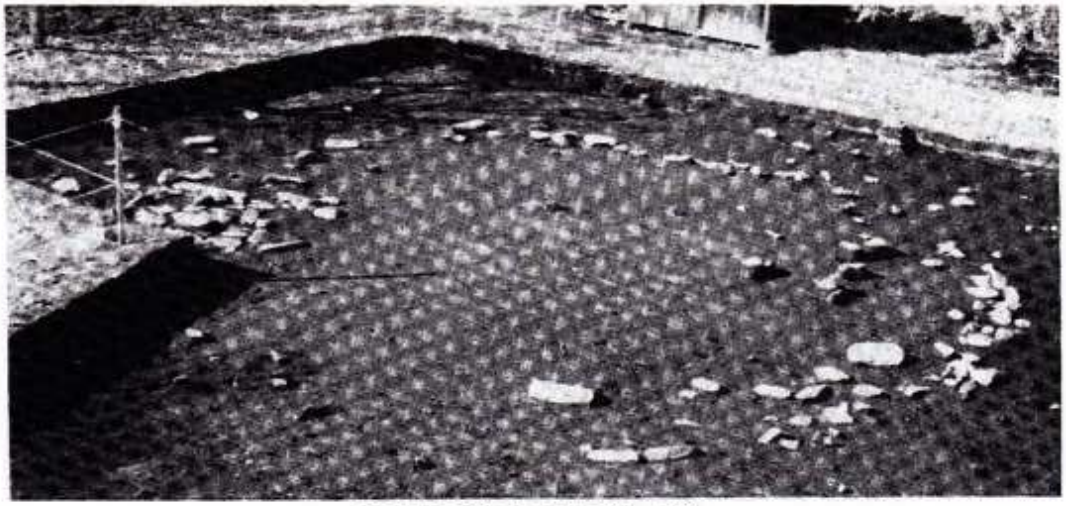


PL19　F_3区遺構外出土土製品(2)



ＰＬ20　F_3区遺構外出土石製品

第909号環状配石遺構（S→N）



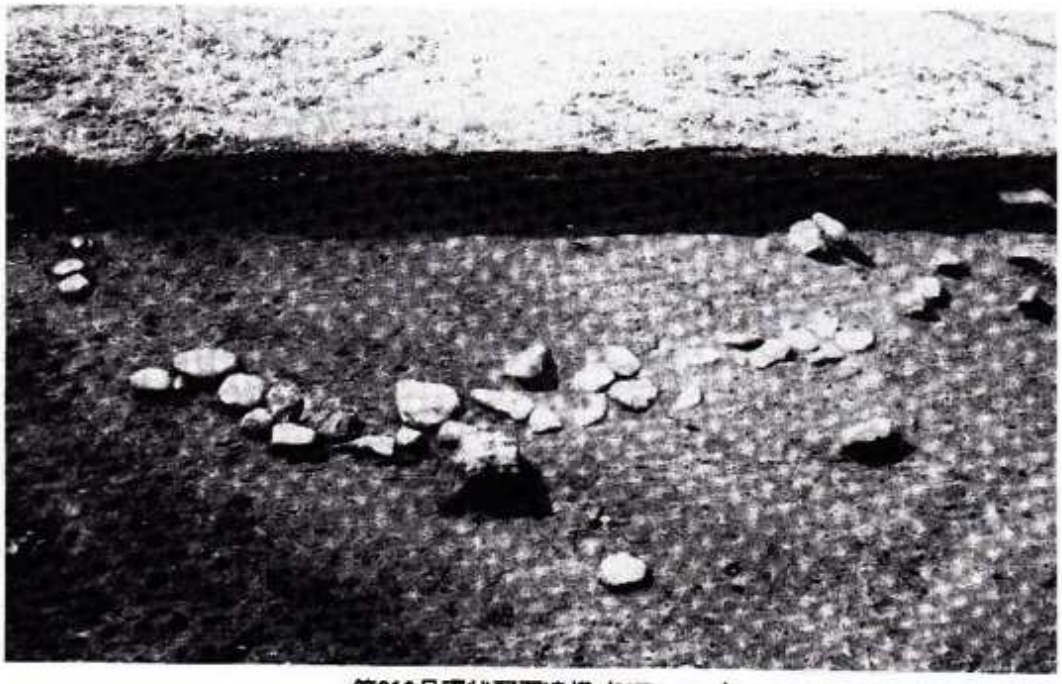
第909号環状配石遺構（E→W）

土偶足出土状況

土偶腕出土状況

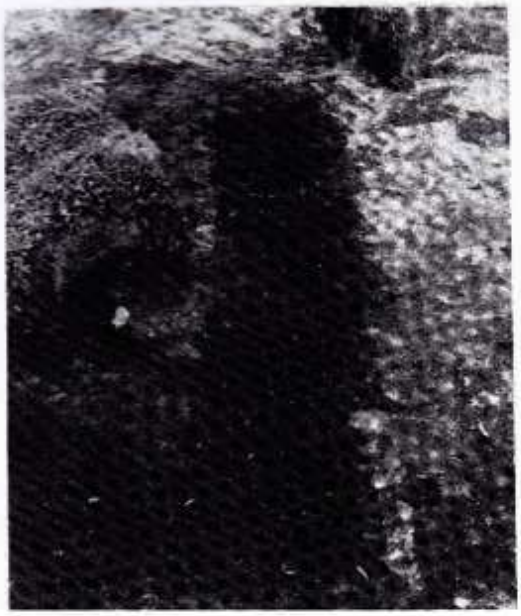
PL21　第909号環状配石遺構

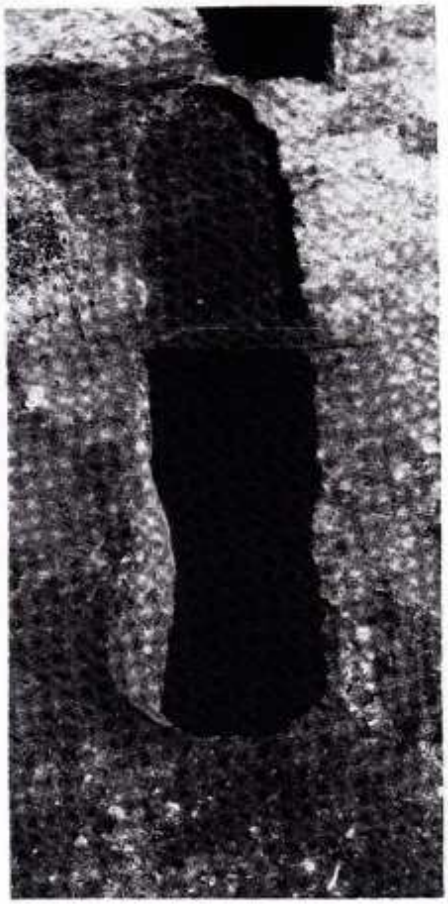
第910号環状配石遺構（SW→NE）



第910号環状配石遺構（NE→SW）

ＰＬ22　第910号環状配石遺構

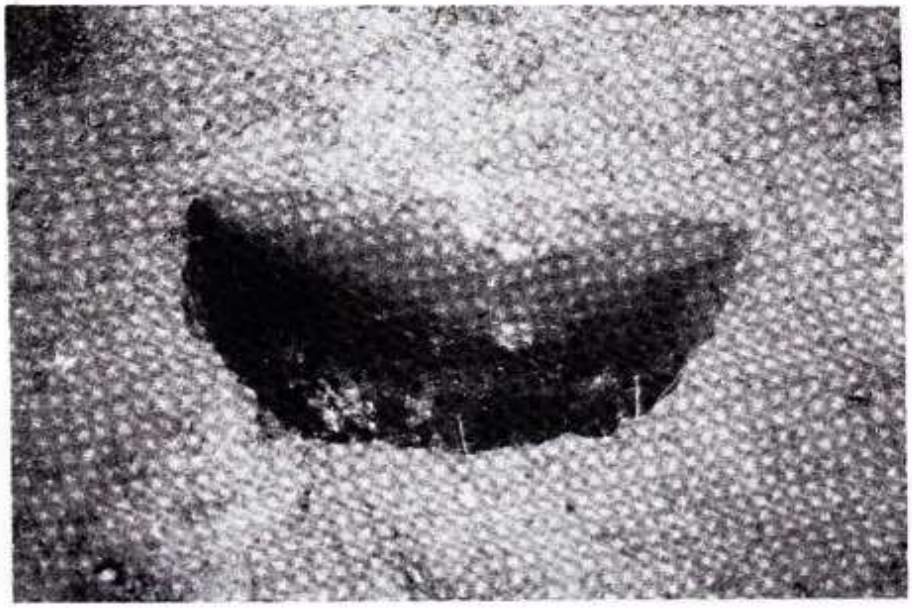




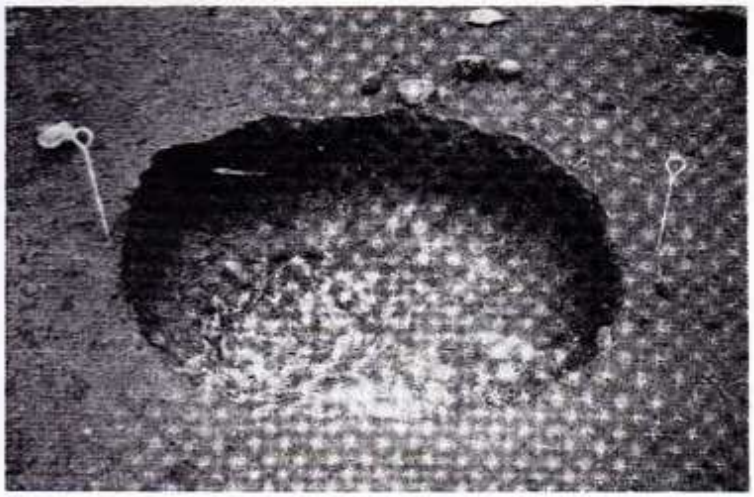
上：第908号Ｔピット確認状況

右：第908号Ｔピット

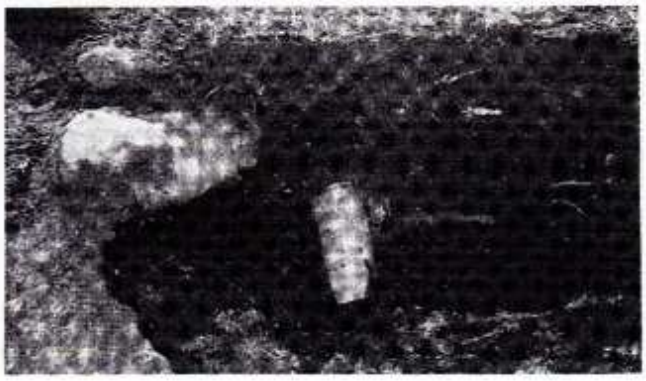
下：第909号土壙



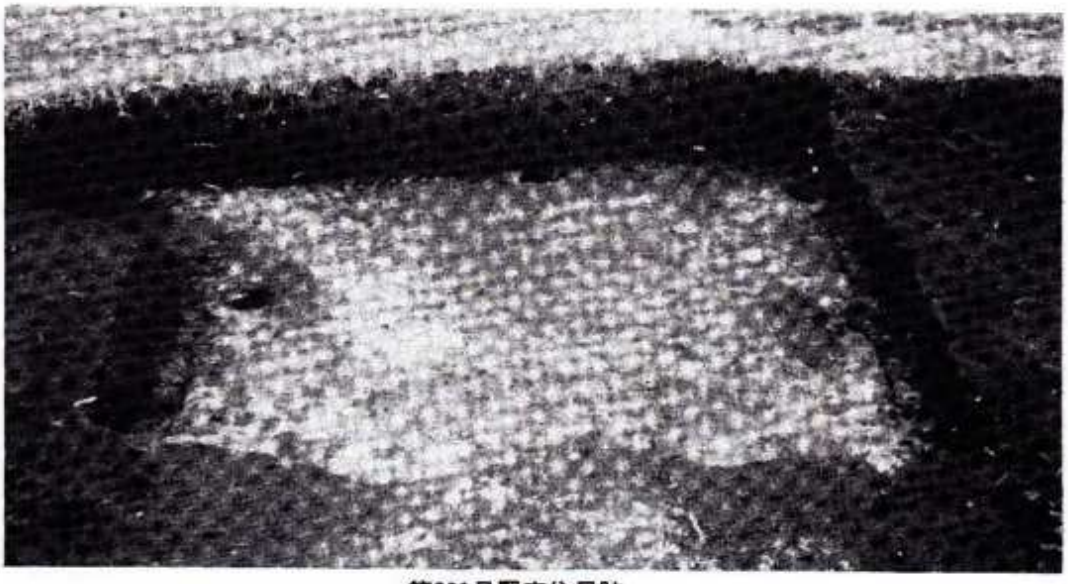
ＰＬ23　第908号Ｔピット、909号土壙



第910号土壙



第910号土壙完形土器出土状況



第901号竪穴住居跡

ＰＬ24　第910号土壙、901号竪穴住居跡

D_s区中央部遺物出土状況

壺形土器（ZY－105・Ⅲd層）

壺形土器（ZX－104・Ⅲd層）

深鉢形土器（ZX－104・Ⅲb層）

深鉢形土器（ZY－104・Ⅲd層）

壺形土器（ZX－104・Ⅲa～Ⅲd層）

深鉢形土器（YB－103・Ⅲb～Ⅲd層）

壺形土器（ZZ－103・Ⅲd層）

壺形土器（ZY－104 Ⅲa～Ⅲd層）

壺形土器（YA－102・Ⅲd層）

壺形土器（ZX－103・Ⅲd層）

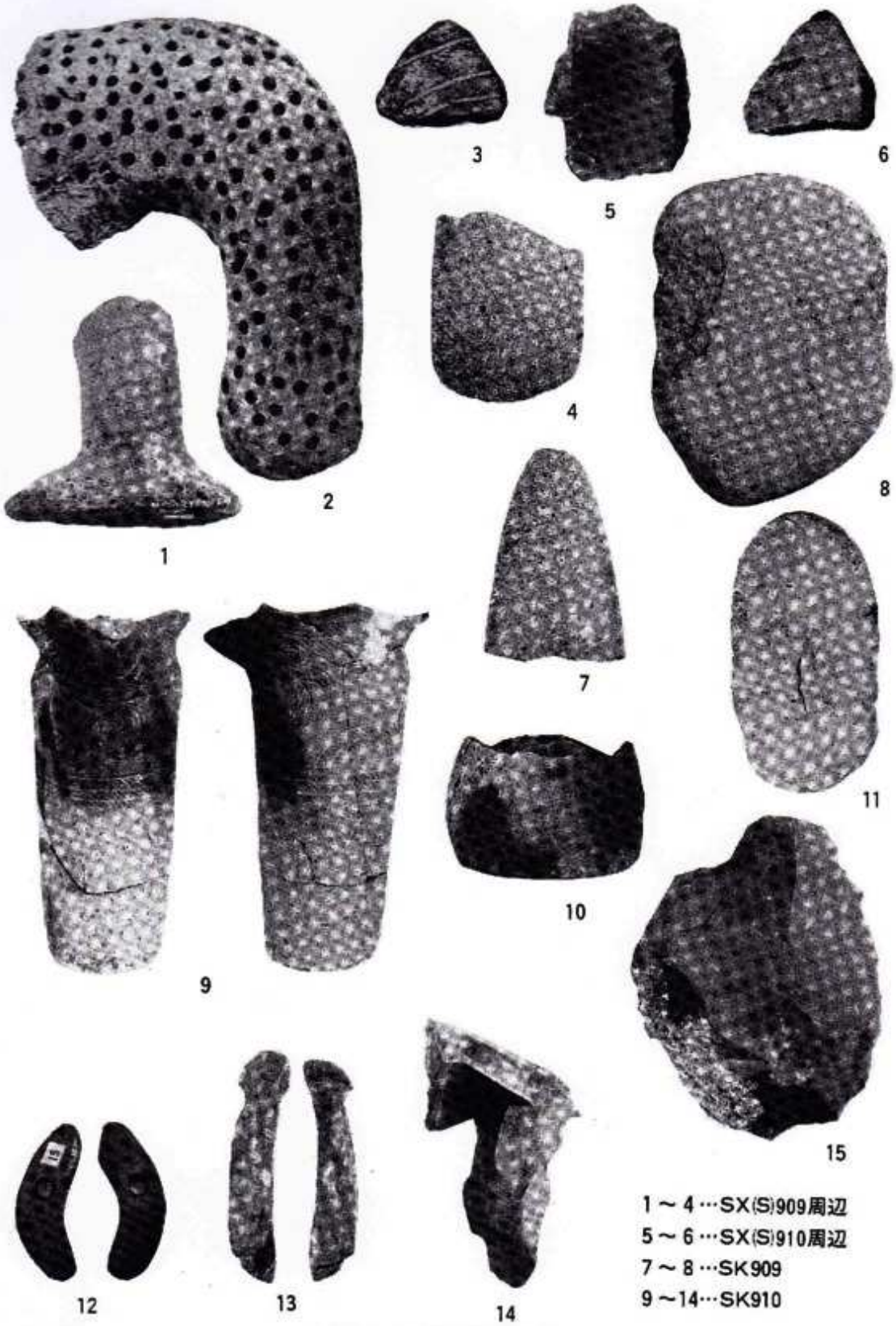
台付土器（YA－103・Ⅲb層）

壺形土器（ZX－99・Ⅲd層）

土偶（YB－103・Ⅲd層）

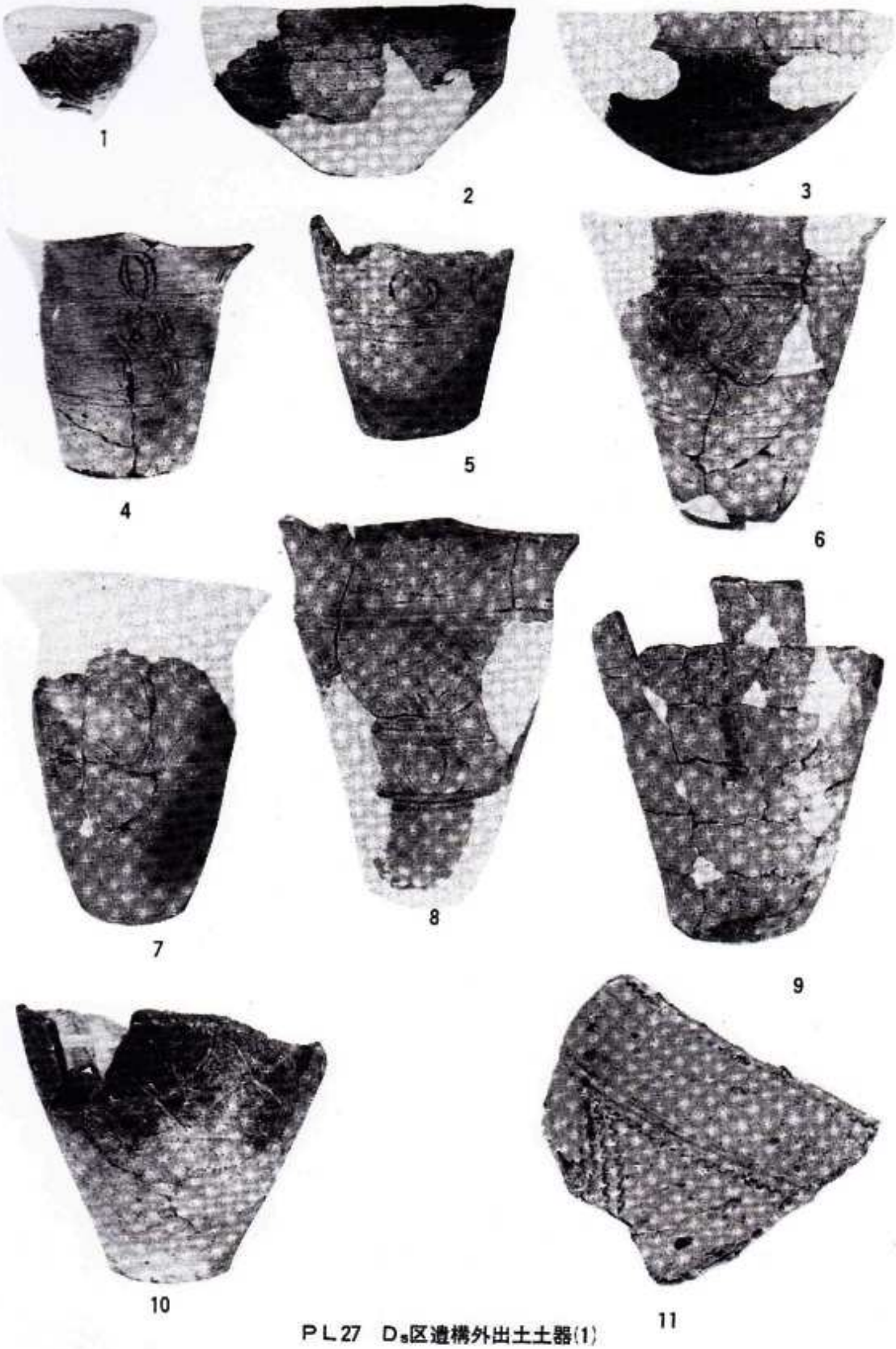
石刀（YA－102・Ⅲd層）

PL25　D_s区遺物出土状況

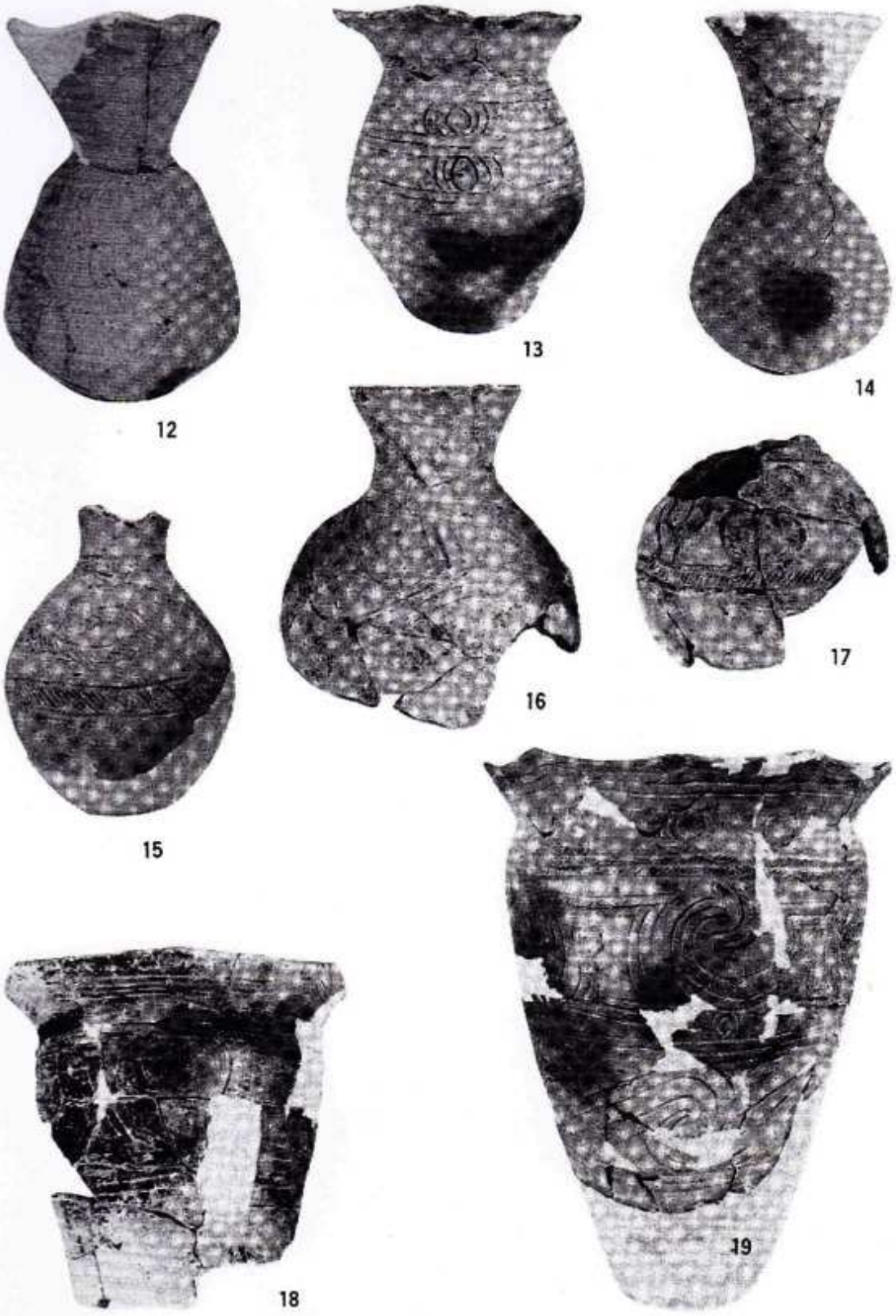


1～4…SX(S)909周辺
5～6…SX(S)910周辺
7～8…SK909
9～14…SK910

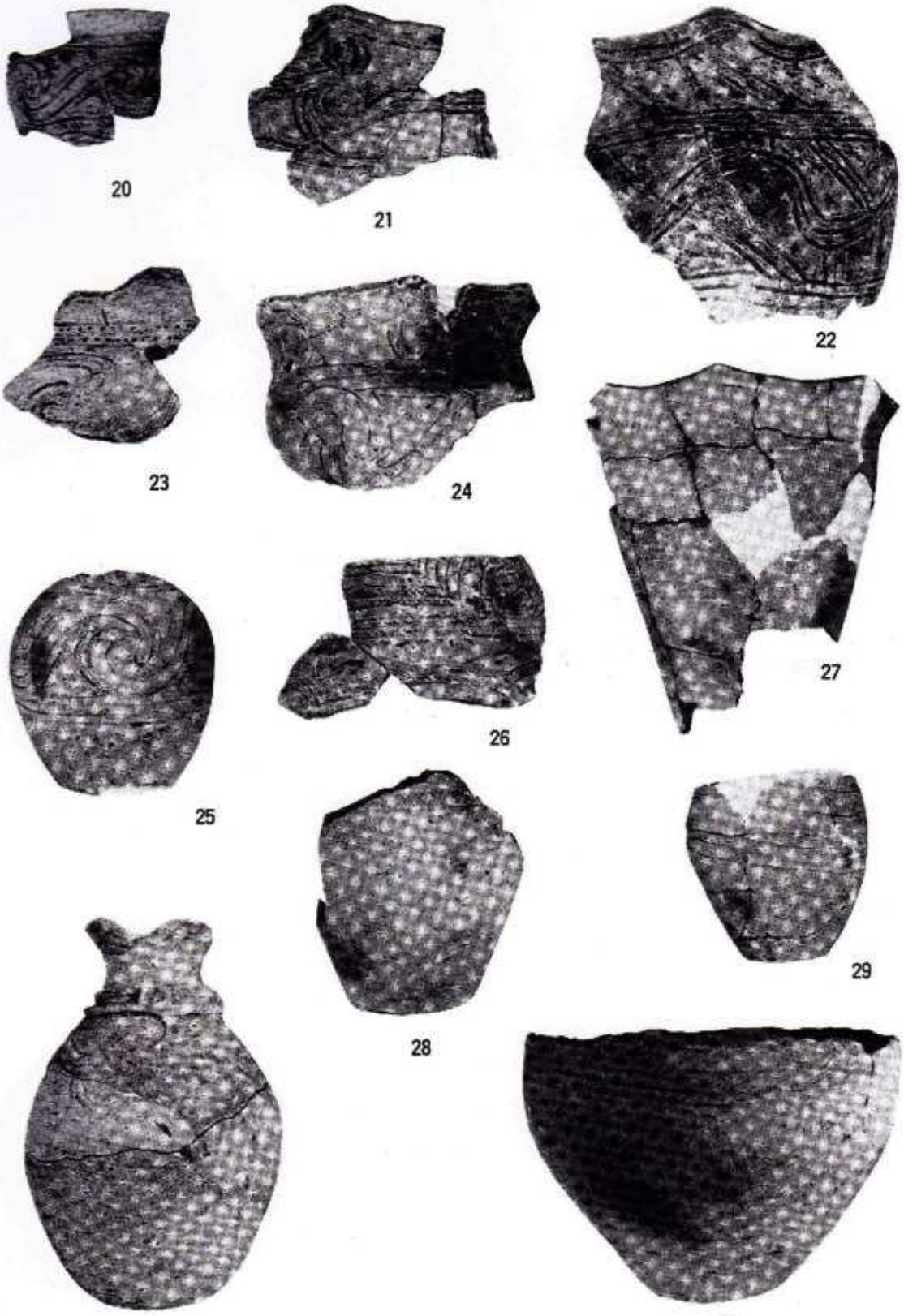
PL26　D_6区遺構内出土遺物



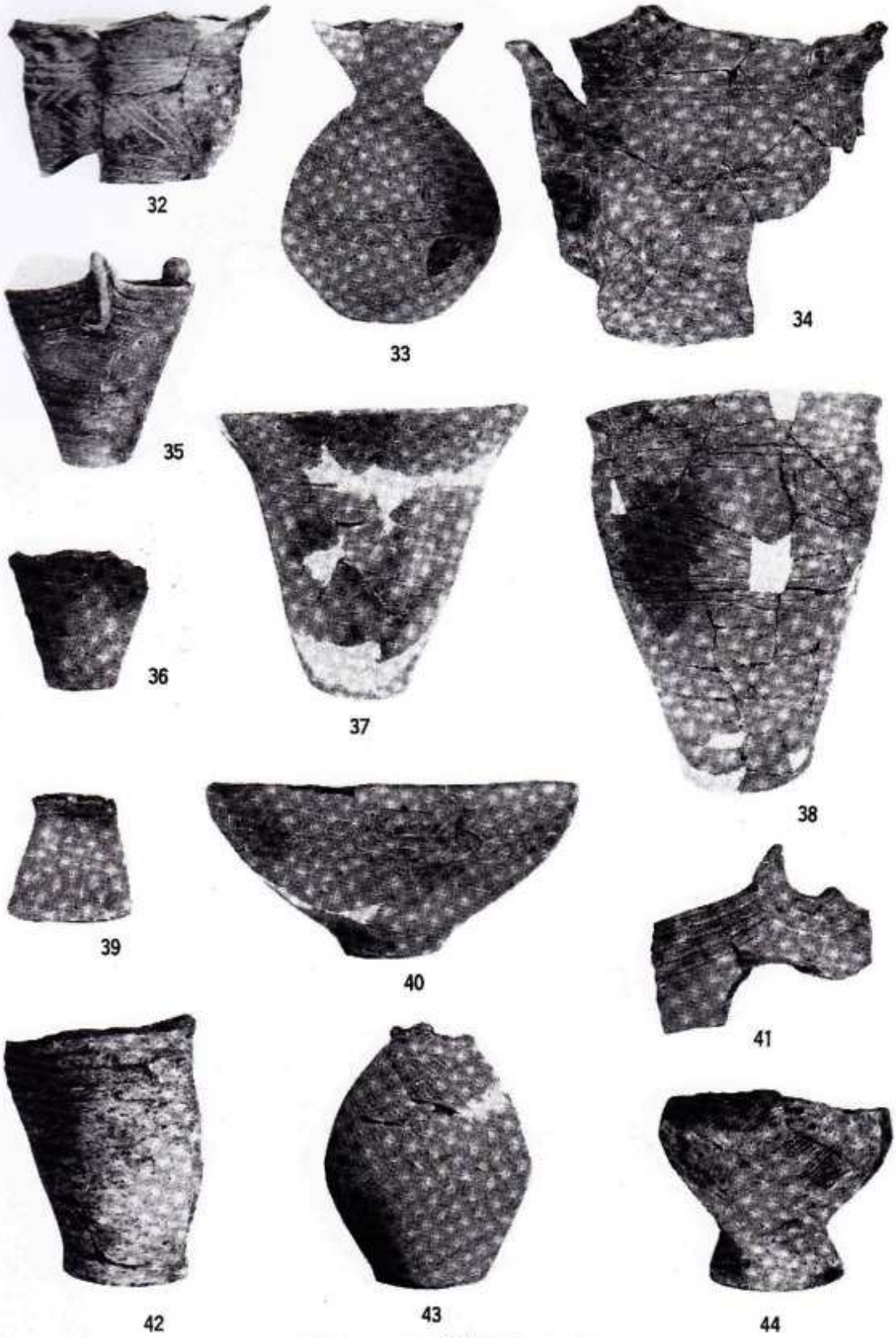
PL27　D_s区遺構外出土土器(1)



PL28　D_s区遺構外出土土器(2)



PL29　D_5区遺構外出土土器(3)



PL30　D_6区遺構外出土土器(4)

45

46

47

48

49

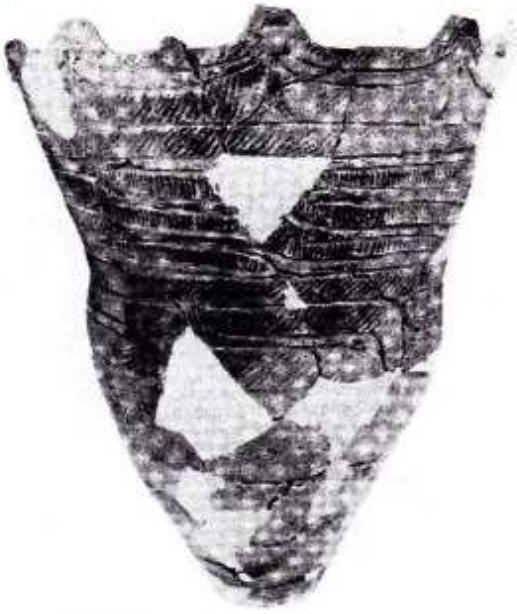
50

51

52

53

54



55

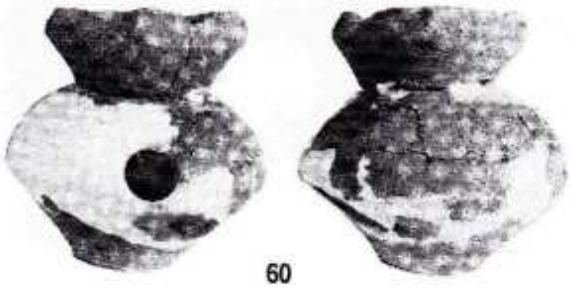
PL.31　D_5区遺構外出土土器(5)

56

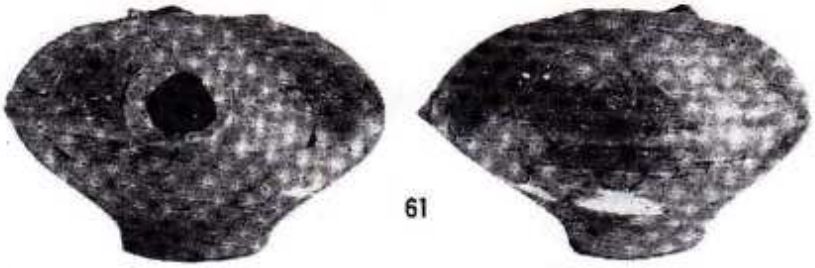
57

58

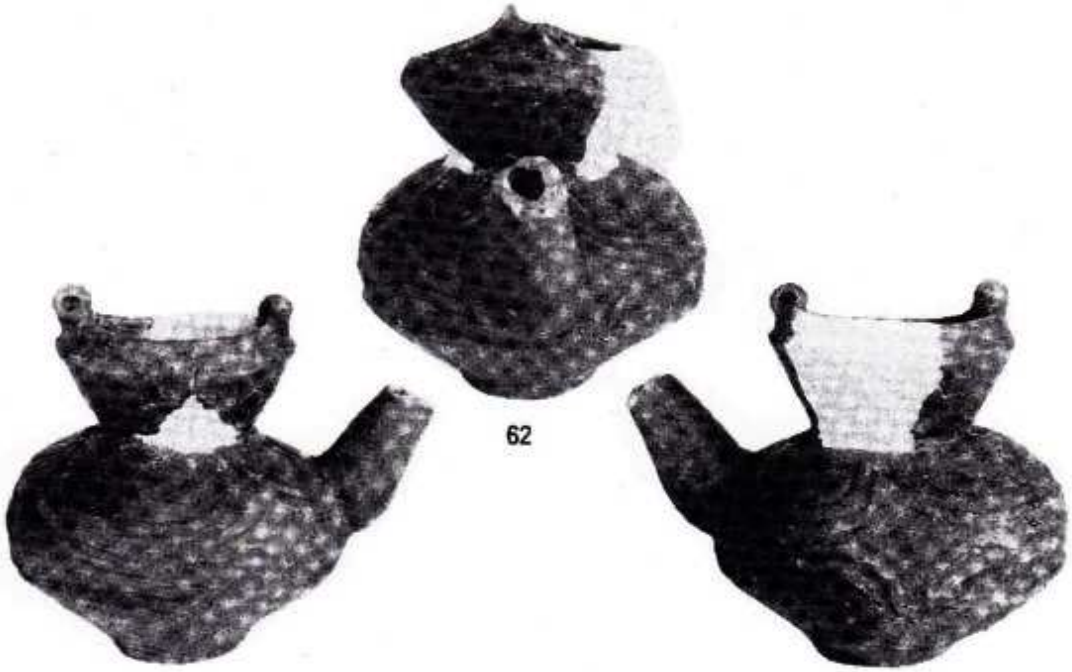
59



60

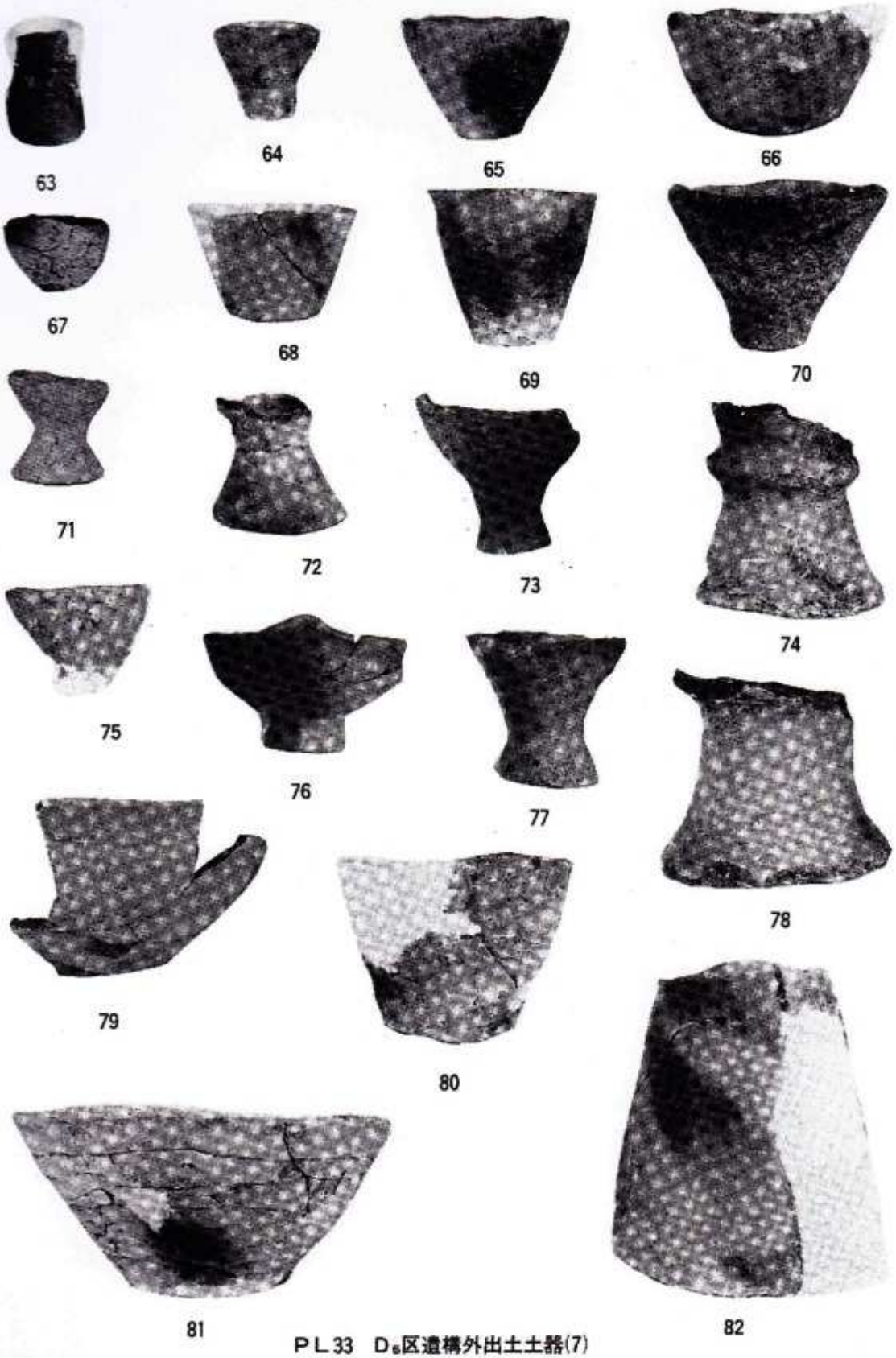


61

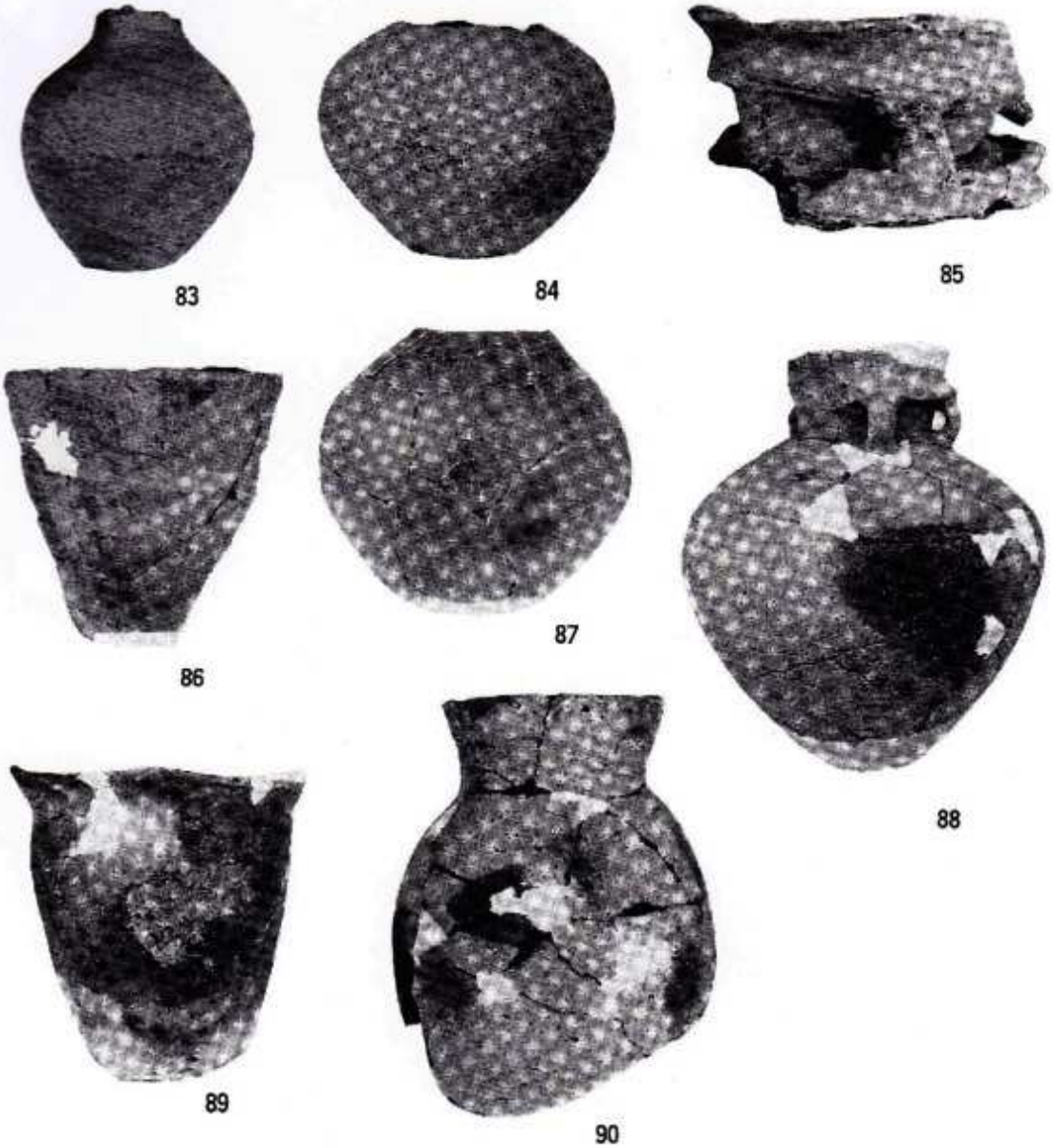


62

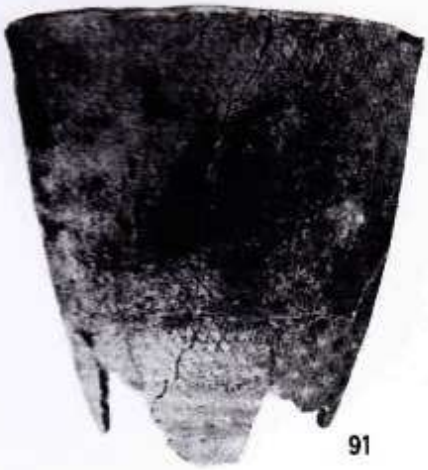
PL.32　D_5区遺構外出土土器(6)



PL33　D_s区遺構外出土土器(7)

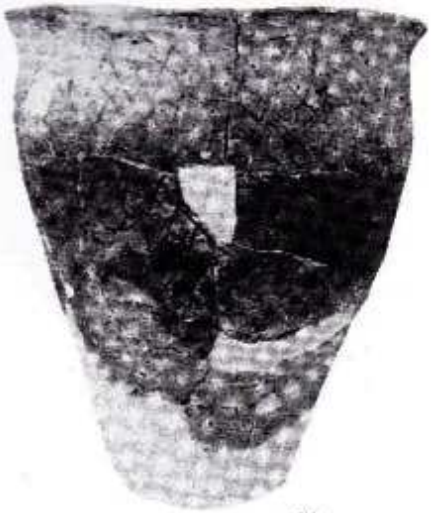


PL34　D_5区遺構外出土土器(8)

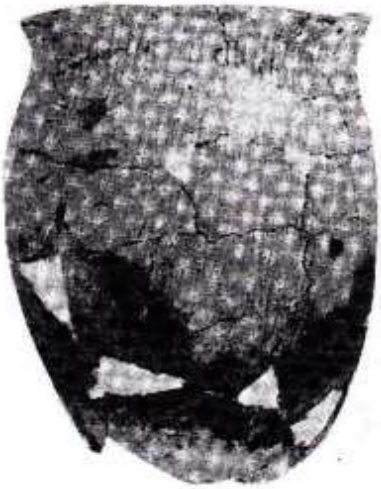


91

92



93



94

95

96

PL35　D_6区遺構外出土土器(9)

97

98

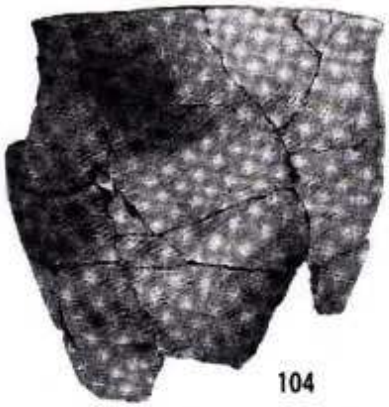
99

100

101

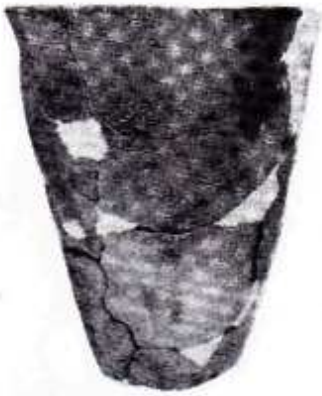
102

103



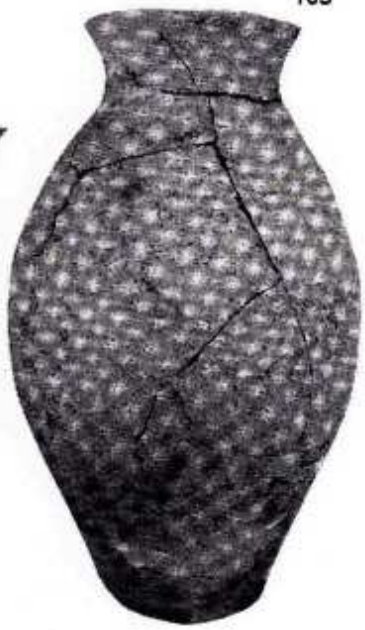
104

105



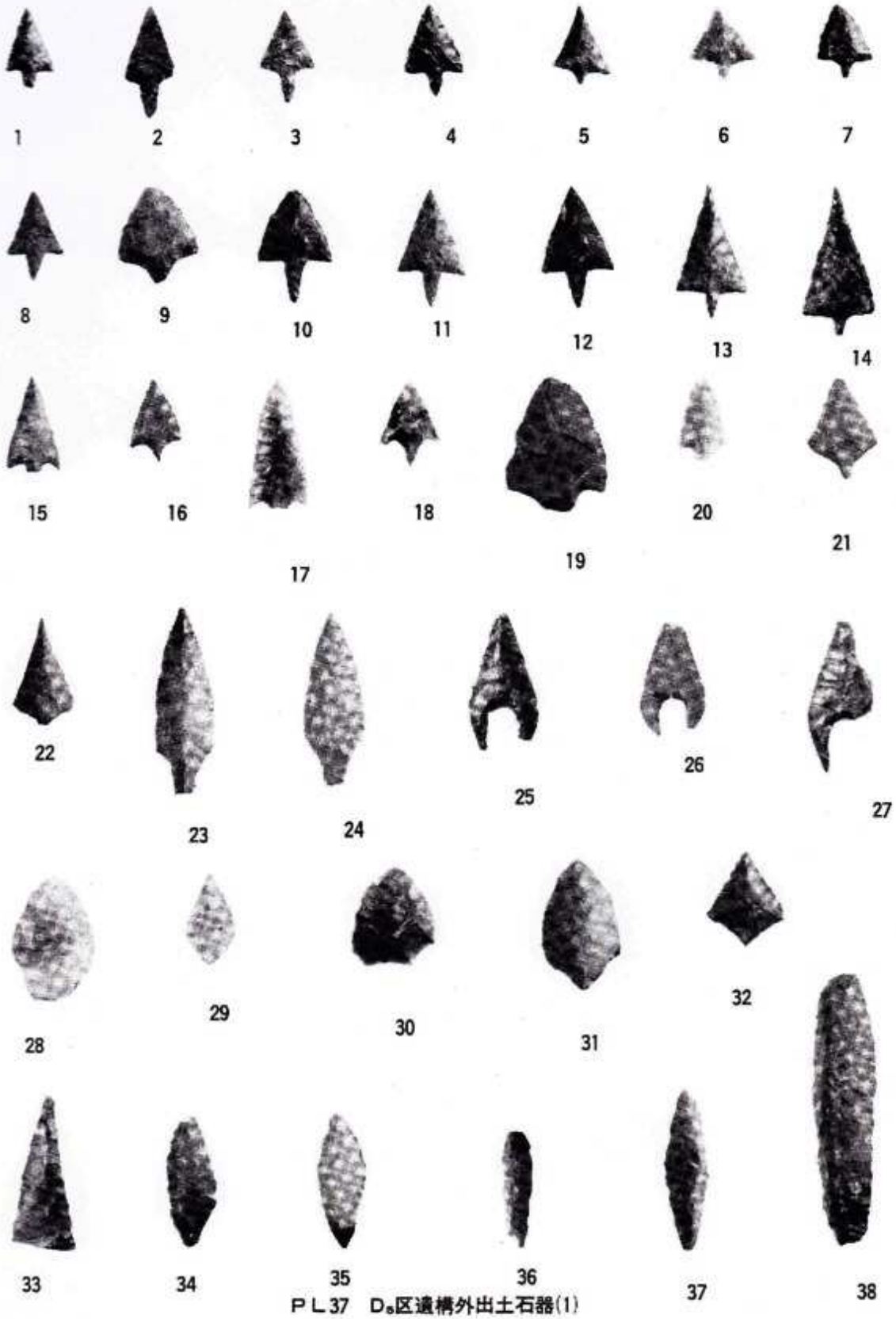
106

107

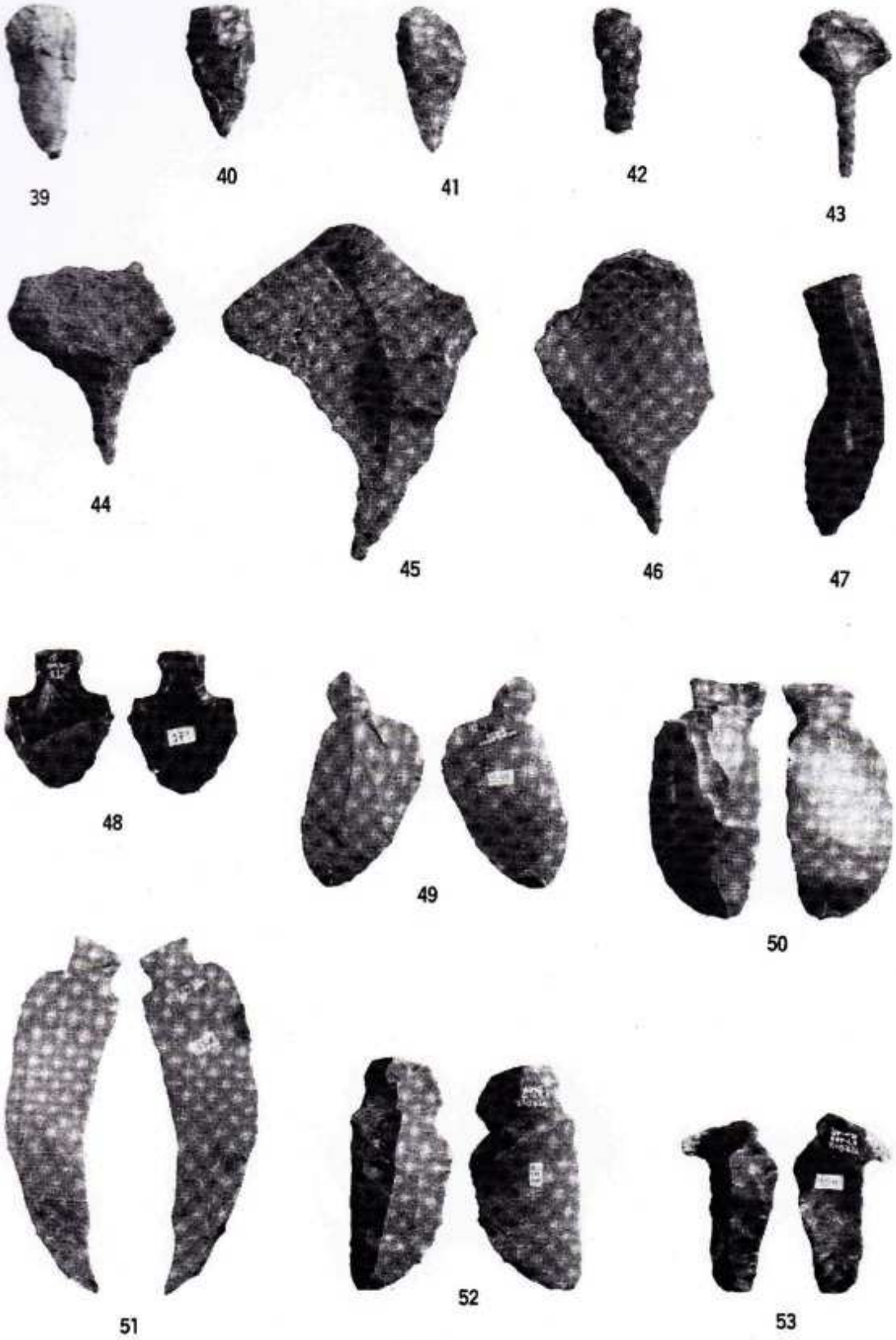


108

PL36　D_8遺構外出土土器(10)



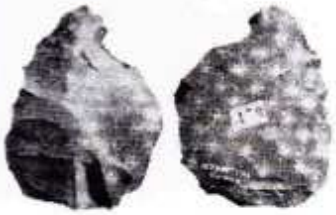
PL37　D_8区遺構外出土石器(1)



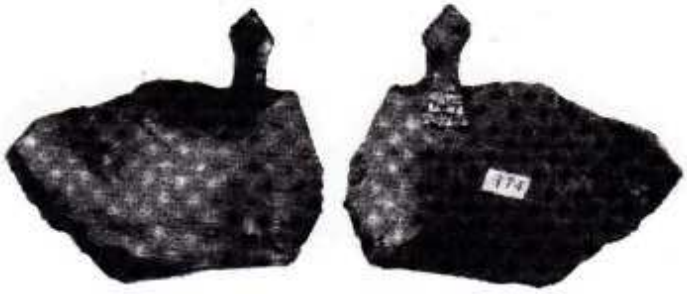
PL38　D_6区遺構外出土石器(2)

54

55

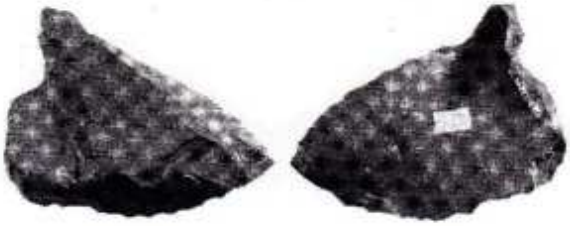


56

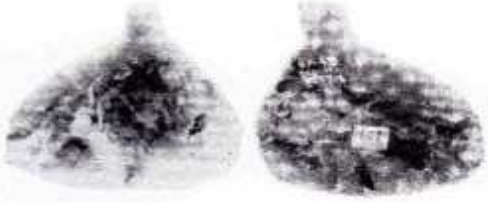


57

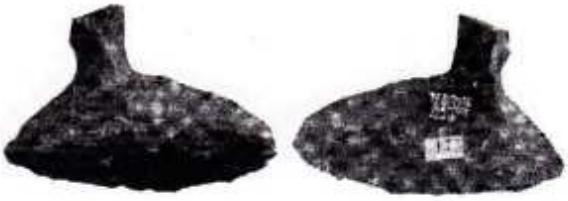
58



59



60



61

PL39　D_5区遺構外出土石器(3)

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

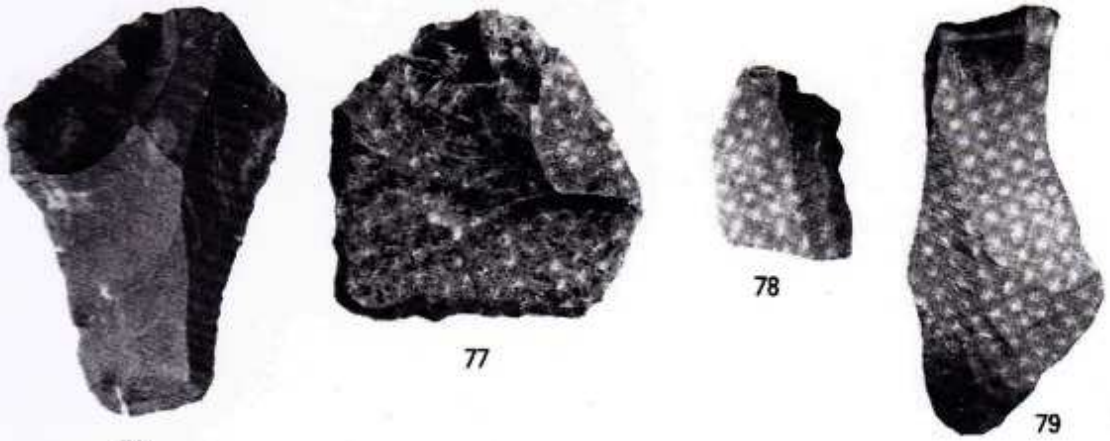
72

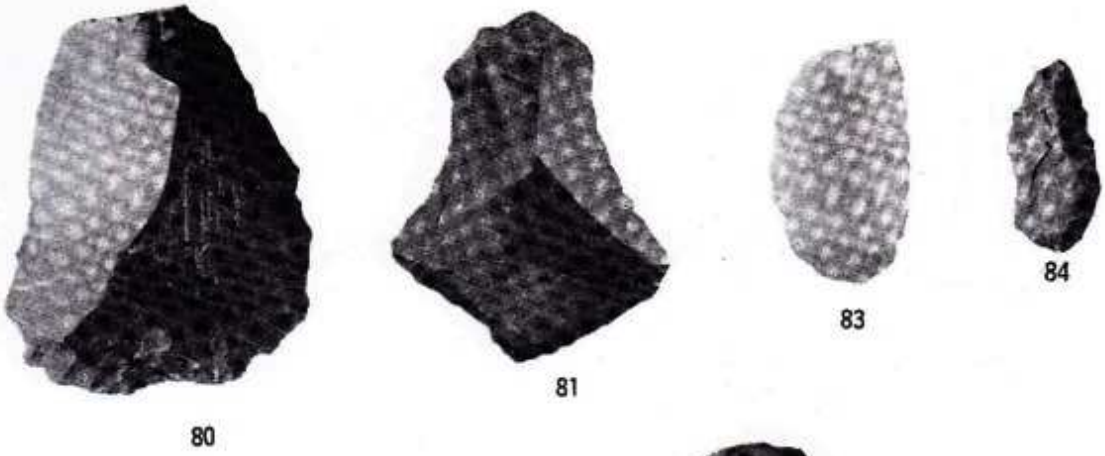
73

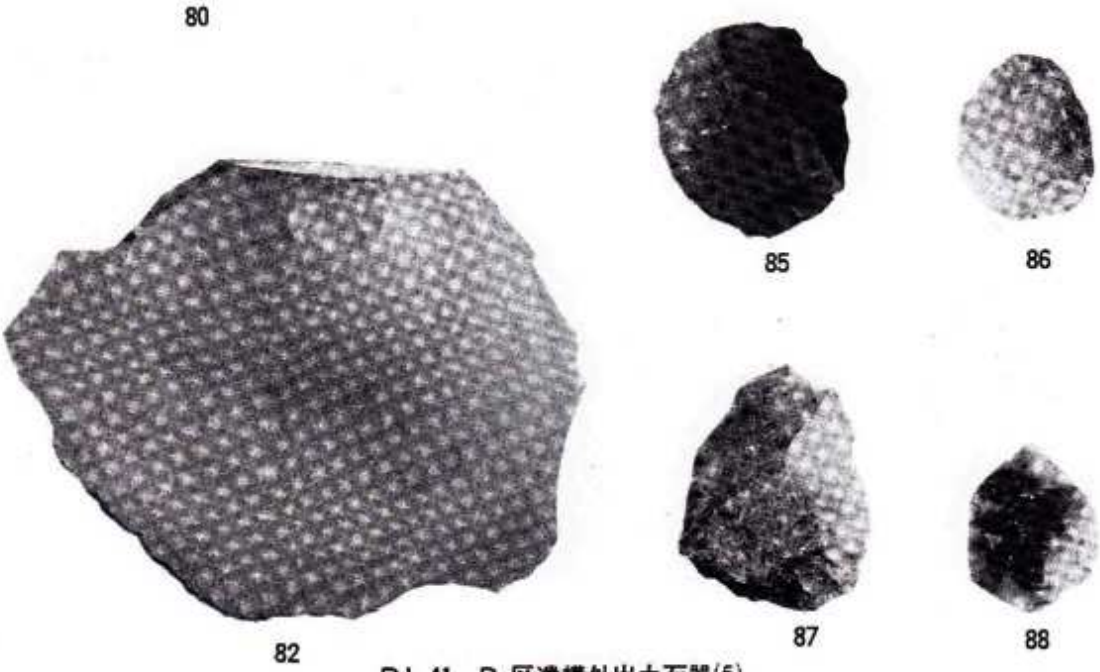
74

75

PL40　D_8区遺構外出土石器(4)







PL41　D_5区遺構外出土石器(5)

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

PL42　D_6区遺構外出土石器(6)

99

100

101

102

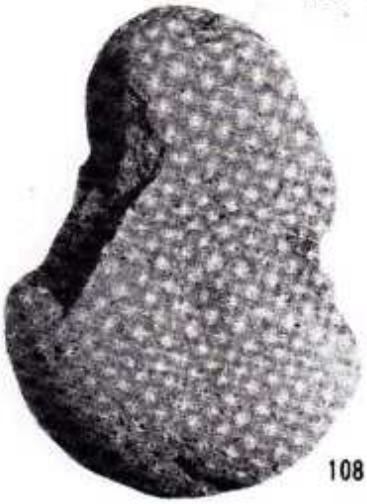
103

104

105

106

107


108

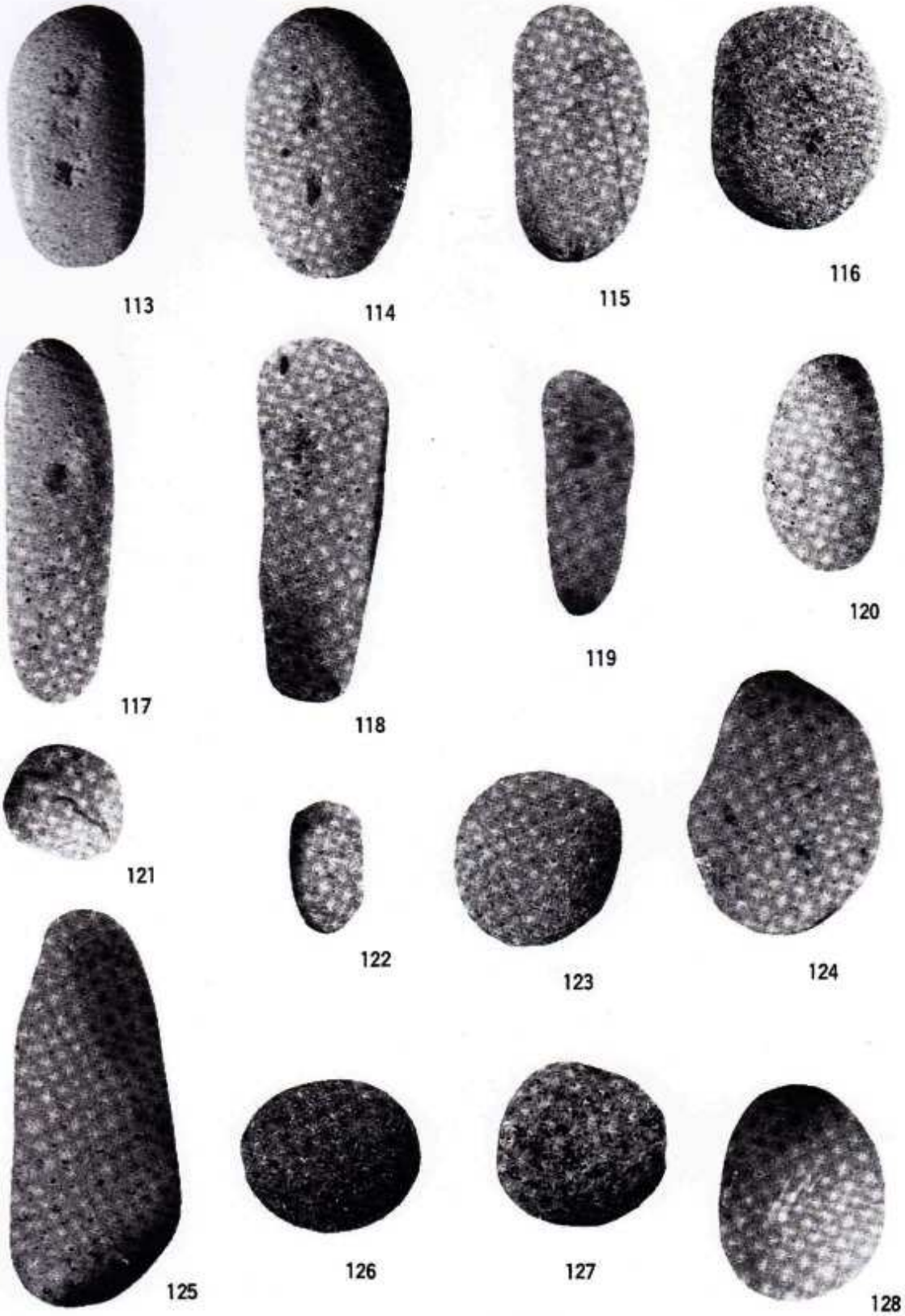
109

110

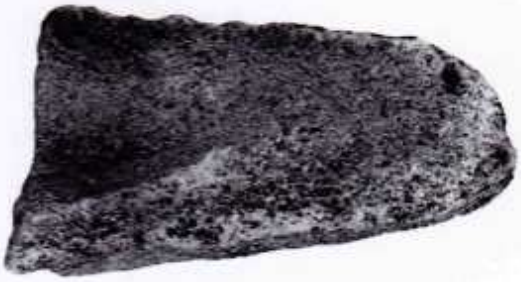
111

112

PL43　D_6区遺構外出土石器(7)



PL44　D_8 区遺構外出土石器(8)



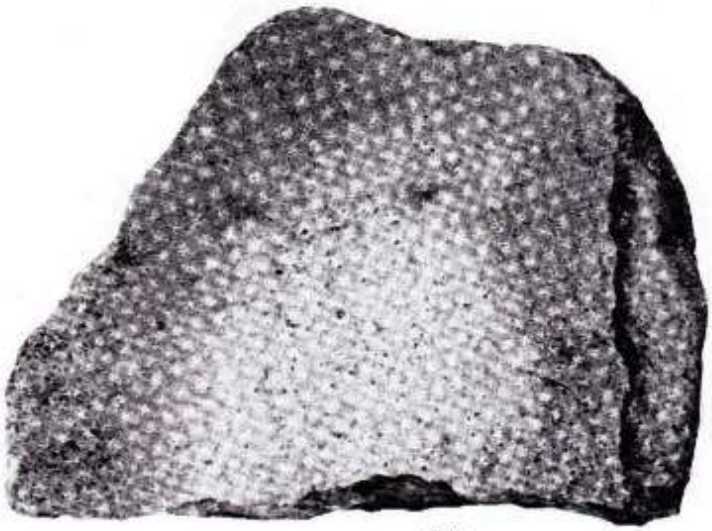
129

130

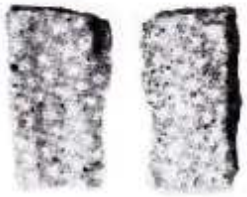
131

132

134

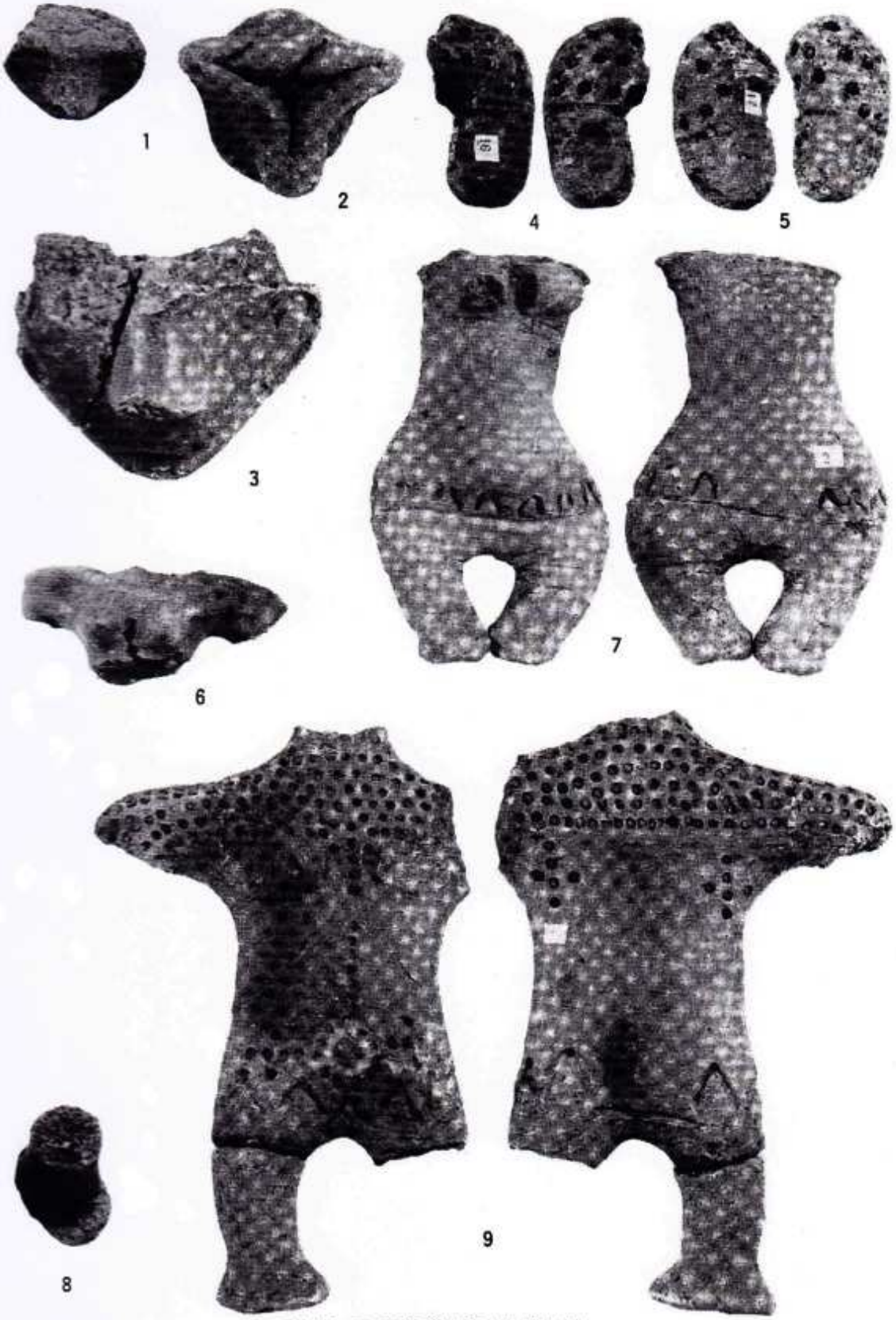


133

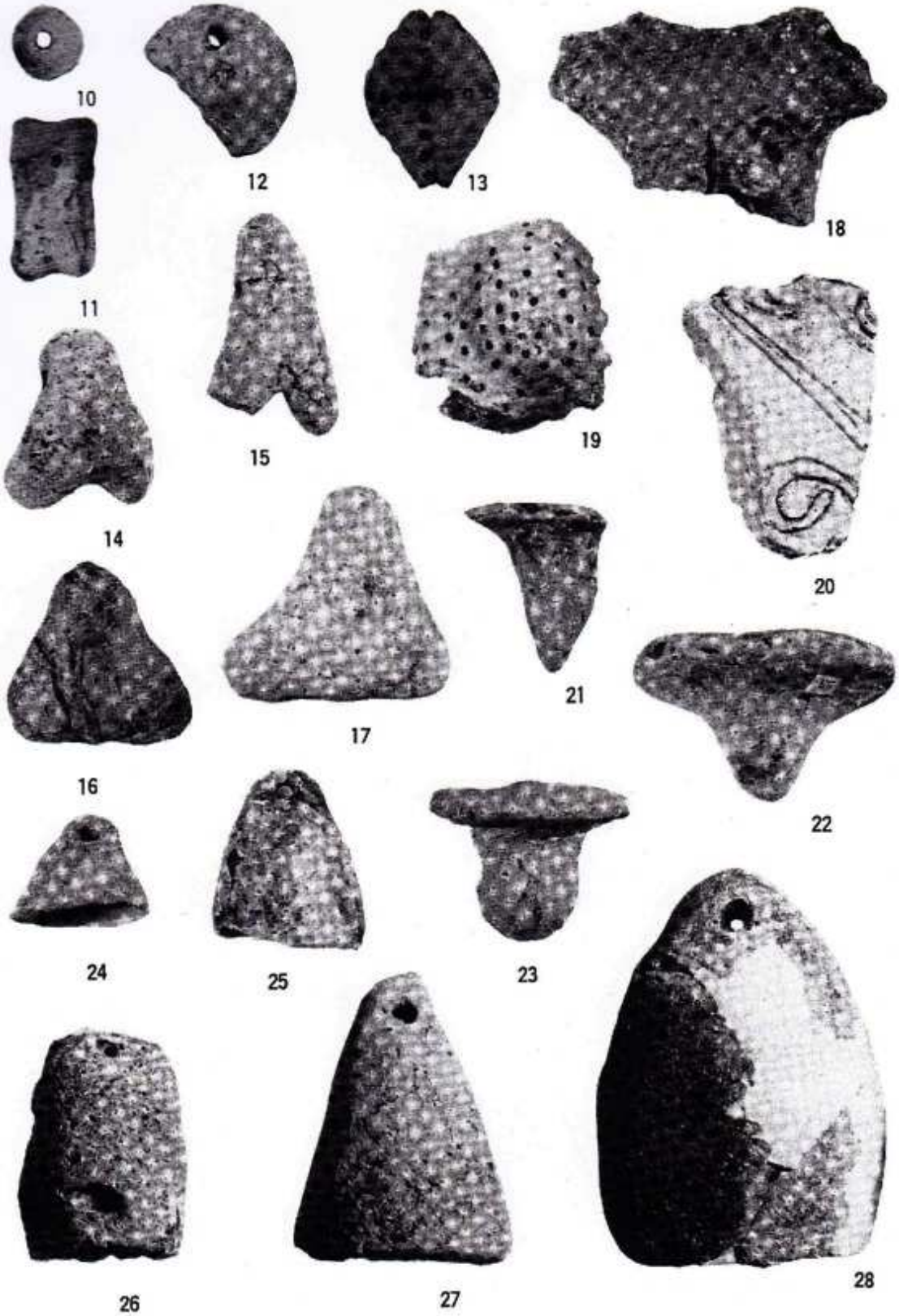


135

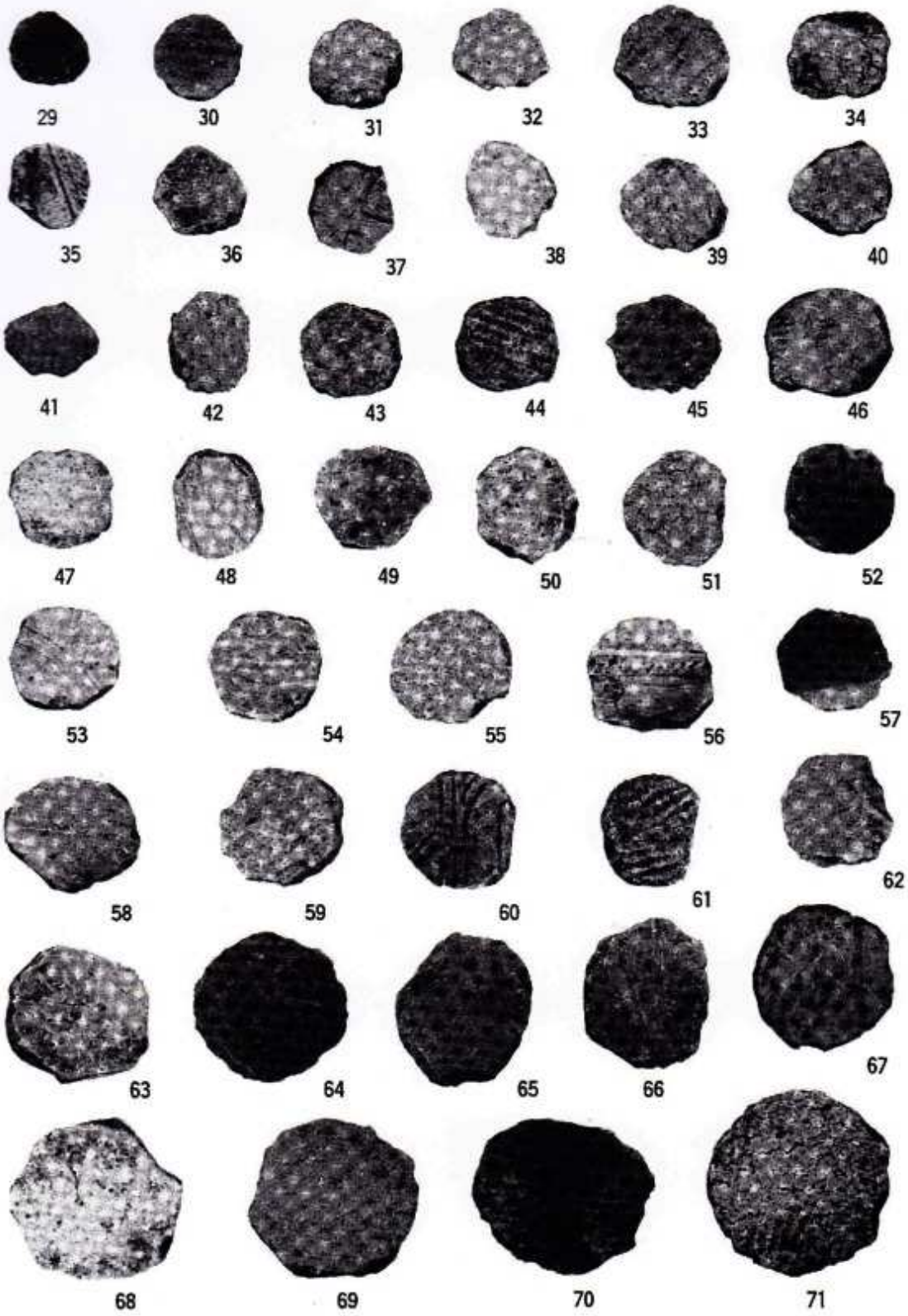
PL45　D_6区遺構外出土石器(9)



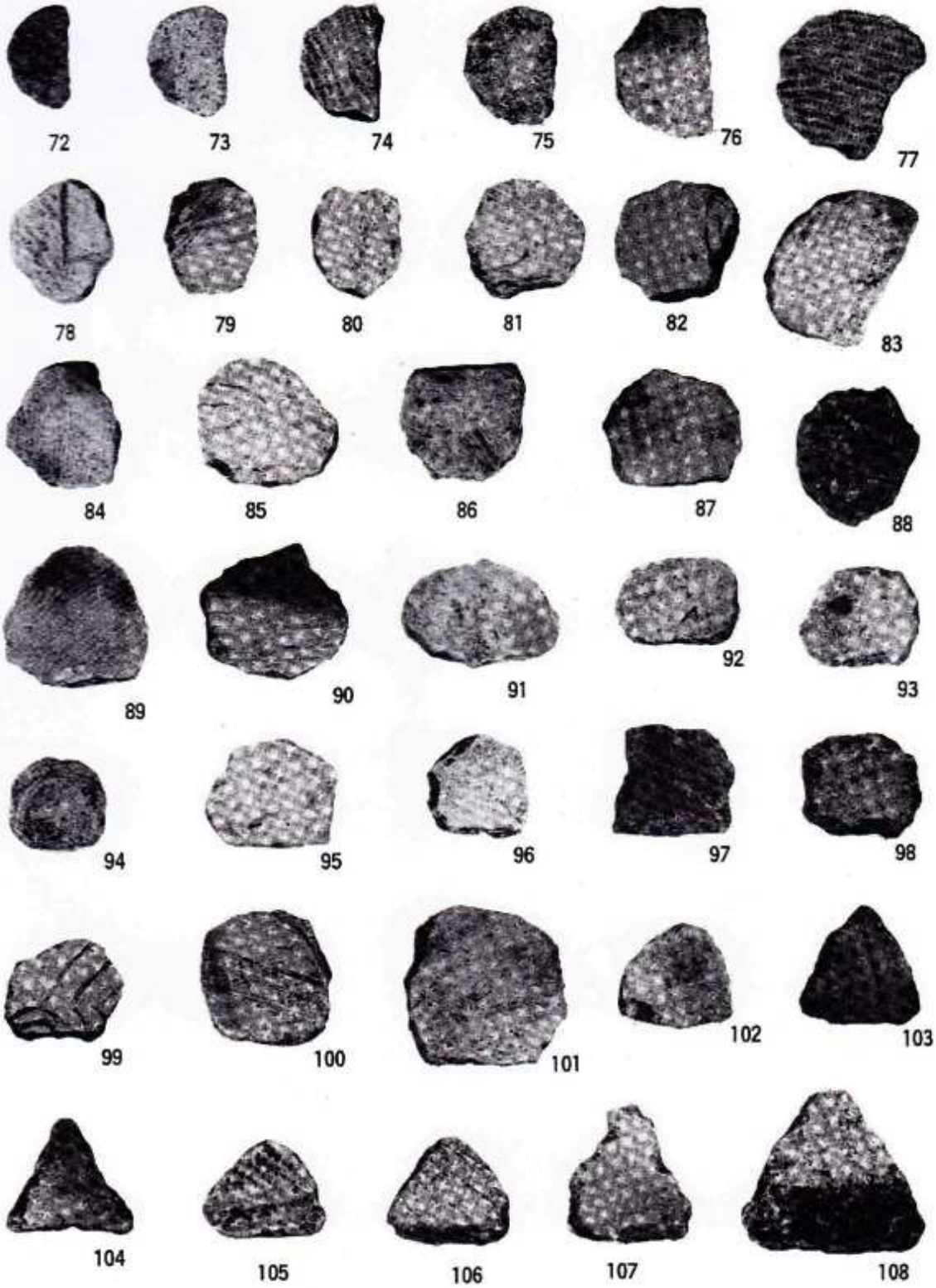
PL46　D₈区遺構外出土土製品(1)



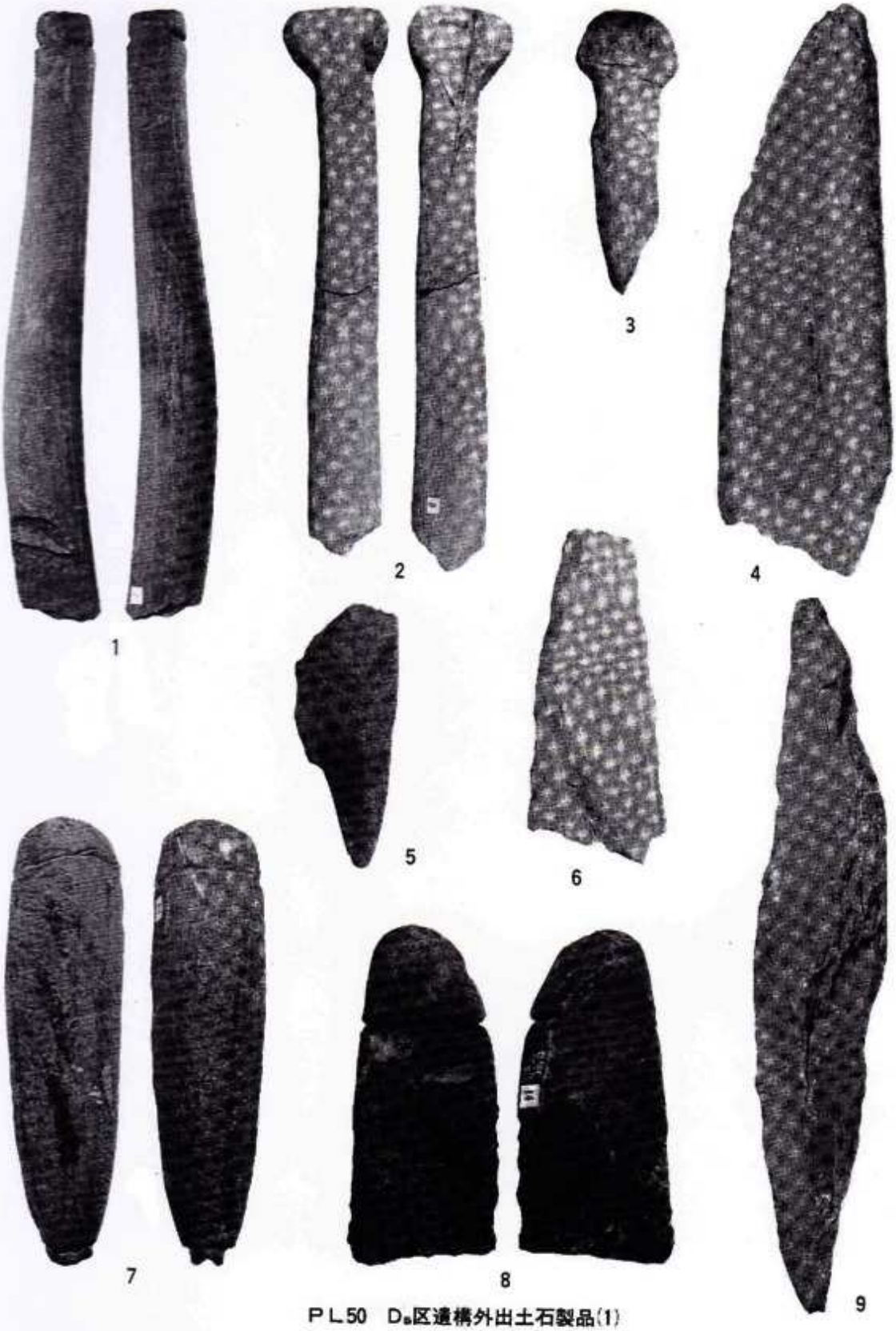
PL47　D_5区遺構外出土土製品(2)



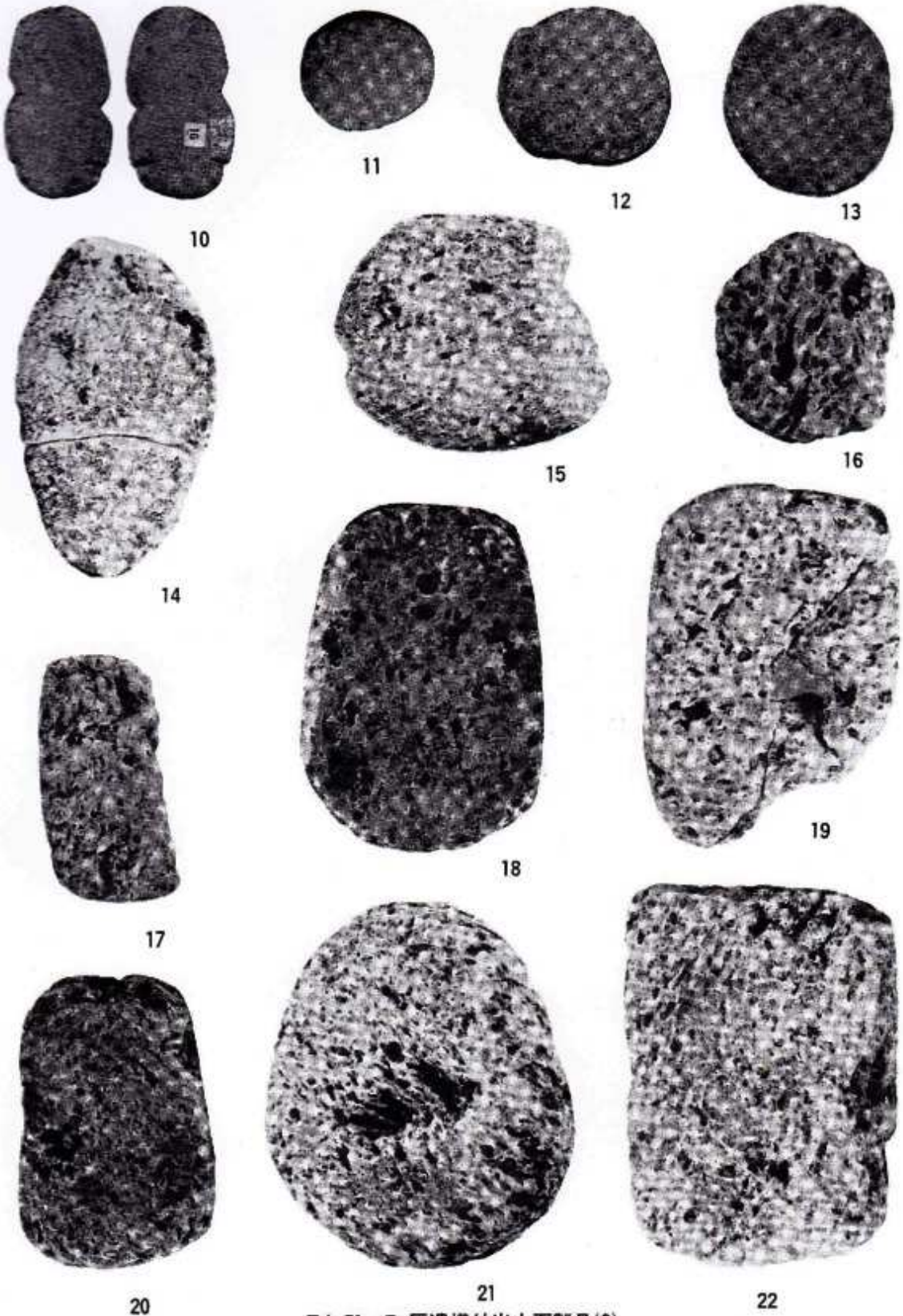
PL48　D_6区遺構外出土土製品(3)



PL49　D_8区遺構外出土土製品(4)



PL50　D_8区遺構外出土石製品(1)



PL51　D_5区遺構外出土石製品(2)

鹿角市文化財調査資料 45

特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(9)

発行年月日　平成5年3月31日
発　行　者　鹿角市教育委員会
〒018−52
秋田県鹿角市花輪字荒田4−1
TEL 0186−23−5111

印　刷　所　(有)大館孔版社
〒017
秋田県大館市谷地町後60